恵庭市

西島松2遺跡

―柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第1分冊　遺構編（1）

平成21年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調査状況

口絵 2

P623

P1261

P710

P1195

P1196

P1206

P1275

口絵 4

調査状況　SW→

P335　SE→

P15　E→

P205　SW→

P1150　NE→

例　　言

1．本書は、柏木川基幹河川改修工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成17年度から平成19年度にかけて発掘調査を実施した、恵庭市西島松２遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本書には、平成17・18・19年度に同遺跡から検出された遺構（住居跡60軒、土坑1,406基、Ｔピット６基、焼土454ヵ所・小ピット266基、）および出土遺物を掲載する。

2．平成17・18年度の発掘調査と整理作業は第１調査部第２調査課が、平成19年度の発掘調査と整理作業は第２調査部第１調査課が、平成20年度の整理作業は第２調査部第３調査課が、平成21年度の整理作業は第２調査部第２調査課が行った。

3．本書の執筆は佐藤和雄・土肥研晶・柳瀬由佳が担当した。Ⅰ・Ⅱ章については、これまでに刊行された発掘調査報告書『西島松５遺跡、同（２）、同（３）、同（４）、西島松３遺跡・西島松５遺跡（５）、西島松５遺跡（６）、西島松９遺跡』の記載に基づいた。

4．遺物の分類は土器を土肥研晶が、石器ほかを柳瀬由佳が担当した。木・金属製品の保存処理は第１調査部第１調査課の田口　尚が担当し、写真の撮影は、各遺構担当の調査員が、遺物の写真撮影は吉田裕吏洋が行った。

5．分析・同定について、下記に依頼・委託した。

動物遺存体	金子浩昌
人骨	札幌医科大学第２解剖学準教授　松村博文
金属製品	岩手県立博物館　赤沼英男
石材鑑定	（株）アースサイエンス
黒曜石原材産地分析	（有）遺物材料研究所
放射性炭素年代測定	（株）加速器分析研究所
炭化種子同定	（株）古環境研究所
炭化樹種同定	パリノ・サーヴェイ（株）

6．調査にあたっては、下記の諸機関および人々のご協力、ご助言をいただいた（順不同、敬称略）。

文化庁、北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課、恵庭市郷土資料館、千歳市教育委員会、北海道開拓記念館、北海学園大学、札幌大学、北翔大学、國學院大學
土肥　孝、田嶋弘美、上屋真一、長町章弘、大林千春、下野直章、仙庭伸久、秋山洋司、石井　淳、藤井誠二、田村俊之、高橋　理、豊田宏良、松田淳子、石代啓視、鈴木琢也、山田悟郎、乾　哲也、奈良智法、天方直仁、山田和史、森岡健治、長田佳宏、赤石慎三、菅野修広、松田宏介、大島直行、青野友哉、杉浦重信、澤田　健、小野哲也、石井淳平、斉藤那典、山田　央、嶋影壮憲、木村英明、水野一夫、長谷川徹、大島秀俊、野村　崇、大沼忠春、和泉田毅、遠藤龍畝、羽賀憲二、松谷純一、藤岡智子、鈴木克彦、佐藤紀子、高橋直孝

記号等の説明

1．遺構の表記は、本文および図表中では次の略号を使用した。また、グリッド番号と区別するため、「Ｐ１」「Ｆ１」、のように、アルファベットとアラビア数字の間にはハイフンは入れていない。

Ｈ：住居址　Ｐ：土坑および土坑墓　ＴＰ：Ｔピット　Ｆ：焼土　ＳＰ：小ピット

2．実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構図（平面図・断面図・エレベーション図）―１：４０

遺物出土状況詳細図―遺構ごとの出土状況に合わせたため、縮尺は異なる。

土器実測図・土器拓影図―１：３　土製品―１：２（土偶１：１・フイゴ羽口１：３）

石製品―１：２　いかり石―１：３石斧・剥片石器―１：２　礫石器―１：３

木製品―１：２　鉄製品・脇差―１：２

なお、　写真のスケールはおおむね次のとおりである。

復元土器―任意　拓本―１：４　剥片石器―１：２　石鏃―２：３　玉類―１：１

礫石器―任意　土・石製品―任意

3．遺構図中の数字は標高（単位ｍ）を示し、平面図、断面図、エレベーション図は40分の１で、平面図の真北方向をページの真上に統一している。表中での遺構の規模は単位ｃｍで表記した。なお、推定事項については、（　）で示し、不明の部分は―で示した。セクション図中の遺物のうち、礫にはＳ、土器にはＰ、石斧、石棒などの製品にはその名称を記している。

4．遺物出土状況詳細図中の番号は、遺物掲載番号と統一した。

5．図中のベンガラ層等については、その濃淡を次の３段階のパターンで表現した。

6．土層の色調は、『新版標準土色帖』（小山・竹原１９６７年版）を使用し、カラーチャートの番号を記し土色を記した。

目　次

[第1分冊]
口　絵
例　言
記号等の説明

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査要項 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査にいたる経緯 …… 2
　4　調査結果の概要 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 6
　1　遺跡の位置と環境 …… 6
　2　周辺の遺跡 …… 6
Ⅲ　調査の方法 …… 12
　1　調査区の設定 …… 12
　2　掘削 …… 12
　3　土層 …… 12
　4　整理の方法 …… 13
　5　遺物の記録と保管 …… 13
　6　遺物の分類 …… 15
　7　土坑の分類 …… 17
Ⅳ　西島松2遺跡 …… 51
　1　近世幕 …… 51
　2　擦文時代の遺構 …… 52
　3　続縄文時代の遺構 …… 61
　4　縄文時代の遺構 …… 62

Ⅴ　遺物
　1　土器 …… 65
　2　石器 …… 68
　3　土製品 …… 82
　4　石製品 …… 82
　5　ガラス製品 …… 83
　6　金属製品 …… 83
　7　木製品 …… 84
挿図目次
表目次
抄　録

挿図目次

図Ⅰ－1　年度別調査範囲 …… 2
図Ⅱ－1　遺跡位置図 …… 8
図Ⅱ－2　西島松2遺跡と周辺の遺跡 …… 9
図Ⅲ－1　基本土層模式図 …… 12
図Ⅲ－2　グリット設定図 …… 14
図Ⅲ－3　土坑の分類 …… 17
図Ⅲ－4　トレンチ設定図 …… 18
図Ⅲ－5　土層図Ⅰ …… 19
図Ⅲ－6　土層図Ⅱ …… 21
図Ⅲ－7　土層図Ⅲ …… 23
図Ⅲ－8　遺構位置全体図 …… 25
図Ⅲ－9　遺構位置分割図 …… 27
図Ⅲ－10　分割図A …… 29
図Ⅲ－11　分割図B …… 30
図Ⅲ－12　分割図C …… 31
図Ⅲ－13　分割図D …… 32
図Ⅲ－14　分割図E …… 33
図Ⅲ－15　分割図F …… 34
図Ⅲ－16　分割図G …… 35
図Ⅲ－17　分割図H …… 36
図Ⅲ－18　分割図Ⅰ …… 37
図Ⅲ－19　分割図J …… 38
図Ⅲ－20　分割図K …… 39
図Ⅲ－21　分割図L …… 40
図Ⅲ－22　分割図M …… 41
図Ⅲ－23　分割図N …… 42
図Ⅲ－24　分割図O …… 43
図Ⅲ－25　分割図P …… 44
図Ⅲ－26　分割図Q …… 45
図Ⅲ－27　分割図R …… 46
図Ⅲ－28　分割図S …… 47
図Ⅲ－29　分割図T …… 48
図Ⅲ－30　分割図U …… 49
図Ⅲ－31　分割図V …… 50
図Ⅳ－1　時代別　竪穴住居分布図 …… 85
図Ⅳ－2　H1平面図・断面図 …… 86
図Ⅳ－3　H1遺物出土状況図
　H2平面図・断面図 …… 87
図Ⅳ－4　H3平面図・断面図 …… 88
図Ⅳ－5　H4平面図・断面図 …… 89
図Ⅳ－6　H5平面図・断面図 …… 90
図Ⅳ－7　H6平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 91
図Ⅳ－8　H7平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 92
図Ⅳ－9　H8平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 93
図Ⅳ－10　H9平面図・断面図 …… 94
図Ⅳ－11　H9断面図
　H10平面図・断面図 …… 95
図Ⅳ－12　H11平面図・断面図 …… 96
図Ⅳ－13　H11遺物出土状況図 …… 97
図Ⅳ－14　H12平面図・断面図 …… 98
図Ⅳ－15　H13・H14平面図・断面図 …… 99
図Ⅳ－16　H15平面図・断面図 …… 100
図Ⅳ－17　H16平面図・断面図 …… 101
図Ⅳ－18　H17平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 102
図Ⅳ－19　H18平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 103
図Ⅳ－20　H19平面図・断面図 …… 104
図Ⅳ－21　H19断面図・遺物出土状況図 …… 105
図Ⅳ－22　H20平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 106
図Ⅳ－23　H21平面図・遺物出土状況図 …… 107
図Ⅳ－24　H21断面図
　H22平面図・断面図 …… 108
図Ⅳ－25　H23平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 109
図Ⅳ－26　H24・H25平面図・断面図
　H25遺物出土状況図 …… 110
図Ⅳ－27　H26平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 111
図Ⅳ－28　H27・H28平面図・断面図
　H28遺物出土状況図 …… 112
図Ⅳ－29　H29平面図・断面図
　遺物出土状況図 …… 113
図Ⅳ－30　H30・H31平面図・断面図 …… 114
図Ⅳ－31　H30遺物出土状況図 …… 115
図Ⅳ－32　H32平面図・断面図 …… 116

図Ⅳ－33　H32遺物出土状況図 …… 117
図Ⅳ－34　H33平面図・断面図
H34断面図 …… 118
図Ⅳ－35　H34平面図・断面図 …… 119
図Ⅳ－36　H34遺物出土状況図 …… 120
図Ⅳ－37　H35・H36平面図・断面図 …… 121
図Ⅳ－38　H36遺物出土状況図 …… 122
図Ⅳ－39　H37平面図・断面図 …… 123
図Ⅳ－40　H37遺物出土状況図 …… 124
図Ⅳ－41　H38平面図・断面図 …… 125
図Ⅳ－42　H38断面図 …… 126
図Ⅳ－43　H38堀上げ土
平面図・断面図 …… 127
図Ⅳ－44　H38遺物出土状況図 …… 128
図Ⅳ－45　H39平面図・断面図 …… 129
図Ⅳ－46　H39遺物出土状況図 …… 130
図Ⅳ－47　H40平面図・断面図 …… 131
図Ⅳ－48　H40遺物出土状況図 …… 132
図Ⅳ－49　H41平面図・断面図 …… 133
図Ⅳ－50　H41遺物出土状況図 …… 134
図Ⅳ－51　H42平面図・断面図
H43平面図 …… 135
図Ⅳ－52　H43断面図
遺物出土状況図 …… 136
図Ⅳ－53　H44平面図・断面図
遺物出土状況図 …… 137
図Ⅳ－54　H45平面図・断面図
遺物出土状況図 …… 138
図Ⅳ－55　H46平面図・断面図
遺物出土状況図 …… 139
図Ⅳ－56　H47平面図・断面図
遺物出土状況図 …… 140
図Ⅳ－57　H48平面図・断面図 …… 141
図Ⅳ－58　H48堀上げ土 平面図・断面図
遺物出土状況図 …… 142
図Ⅳ－59　H49・H50平面図・断面図 …… 143
図Ⅳ－60　H46・49・50遺物出土状況図 … 144
図Ⅳ－61　H51平面図・断面図 …… 145
図Ⅳ－62　H51遺物出土状況図 …… 146
図Ⅳ－63　H52平面図 …… 147
図Ⅳ－64　H52断面図 …… 148
図Ⅳ－65　H52遺物出土状況図 …… 149
図Ⅳ－66　H53平面図・断面図 …… 150
図Ⅳ－67　H54平面図・断面図 …… 151
図Ⅳ－68　H54断面図・遺物出土状況図 … 152
図Ⅳ－69　H54煙道部 礫出土状況図 …… 153
図Ⅳ－70　H54土器出土状況図 …… 154
図Ⅳ－71　H55平面図・断面図 …… 155
図Ⅳ－72　H56・H57平面図・断面図 …… 156
図Ⅳ－73　H58平面図・断面図 …… 157
図Ⅳ－74　H58遺物出土状況図 …… 158
図Ⅳ－75　H59平面図・断面図 …… 159
図Ⅳ－76　H59断面図
H60平面図・断面図 …… 160
図Ⅳ－77　Tピット分布図 …… 161
図Ⅳ－78　TP 1 ～ 4 平面図・断面図 …… 162
図Ⅳ－79　TP 5 ・TP 6 平面図・断面図 …… 163
図Ⅳ－80　焼土分布図 …… 164
図Ⅳ－81　F1～10平面図・断面図 …… 165
図Ⅳ－82　F11～21平面図・断面図 …… 166
図Ⅳ－83　F22～32平面図・断面図 …… 167
図Ⅳ－84　F33～43平面図・断面図 …… 168
図Ⅳ－85　F44～53平面図・断面図 …… 169
図Ⅳ－86　F54～63平面図・断面図 …… 170
図Ⅳ－87　F64～73平面図・断面図 …… 171
図Ⅳ－88　F74～84平面図・断面図 …… 172
図Ⅳ－89　F85～95平面図・断面図 …… 173
図Ⅳ－90　F96～105平面図・断面図 …… 174
図Ⅳ－91　F106～115平面図・断面図 …… 175
図Ⅳ－92　F116～125平面図・断面図 …… 176
図Ⅳ－93　F126～135平面図・断面図 …… 177
図Ⅳ－94　F136～145平面図・断面図 …… 178
図Ⅳ－95　F146～150平面図・
F146～149断面図 …… 179
図Ⅳ－96　F151～159平面図・
F151～156・F158・F159断面図 … 180
図Ⅳ－97　F160～169平面図・断面図 …… 181
図Ⅳ－98　F170～179平面図・断面図 …… 182
図Ⅳ－99　F180～189平面図・断面図 …… 183
図Ⅳ－100　F190～199平面図・断面図 …… 184
図Ⅳ－101　F200～209平面図・断面図 …… 185
図Ⅳ－102　F210～220平面図・断面図 …… 186
図Ⅳ－103　F221～227・F229・
F235・F236平面図・断面図 …… 187
図Ⅳ－104　F228・F230・F231 平面図 …… 188
図Ⅳ－105　F228・F230・F231 断面図 …… 189

図Ⅳ－106 F232・F233・F234 平面図
F237平面図・断面図 …… 190
図Ⅳ－107 F238～247 平面図・断面図 …… 191
図Ⅳ－108 F248～254 平面図・断面図 …… 192
図Ⅳ－109 F255～263 平面図・断面図 …… 193
図Ⅳ－110 F264～268 平面図・断面図 …… 194
図Ⅳ－111 F269～278 平面図・断面図 …… 195
図Ⅳ－112 F279～288 平面図・断面図 …… 196
図Ⅳ－113 F289～298 平面図・断面図 …… 197
図Ⅳ－114 F299～308 平面図・断面図 …… 198
図Ⅳ－115 F309～318 平面図・断面図 …… 199
図Ⅳ－116 F319～328 平面図・断面図 …… 200
図Ⅳ－117 F329～332・F335
平面図・断面図 …… 201
図Ⅳ－118 F333・F334・F336～342
平面図・断面図 …… 202
図Ⅳ－119 F343～349 平面図・断面図 …… 203
図Ⅳ－120 F350～359 平面図・断面図 …… 204
図Ⅳ－121 F360～369 平面図・断面図 …… 205
図Ⅳ－122 F370～377 平面図・断面図 …… 206
図Ⅳ－123 F378・F379平面図・断面図 …… 207
図Ⅳ－124 F380～382 平面図・断面図 …… 208
図Ⅳ－125 F383・F384平面図・断面図 …… 209
図Ⅳ－126 F385～387 平面図・断面図 …… 210
図Ⅳ－127 F388～391 平面図・断面図 …… 211
図Ⅳ－128 F392～400 平面図・断面図 …… 212
図Ⅳ－129 F401～407 平面図・断面図 …… 213
図Ⅳ－130 F408～419 平面図・断面図 …… 214
図Ⅳ－131 F420～425 平面図・断面図 …… 215
図Ⅳ－132 F426～431 平面図・断面図 …… 216
図Ⅳ－133 F432～441 平面図・断面図 …… 217
図Ⅳ－134 F442～446 平面図・断面図 …… 218
図Ⅳ－135 F447～454 平面図・断面図 …… 219
図Ⅳ－136 SP 1～25 平面図・断面図 …… 220
図Ⅳ－137 SP26～49 平面図・断面図 …… 221
図Ⅳ－138 SP50～73 平面図・
SP51～61・SP63～73断面図 …… 222
図Ⅳ－139 SP74～97 平面図・断面図 …… 223
図Ⅳ－140 SP98～121 平面図・断面図 …… 224
図Ⅳ－141 SP122～144平面図・断面図 …… 225
図Ⅳ－142 SP145～167平面図・断面図 …… 226
図Ⅳ－143 SP168～191平面図・断面図 …… 227
図Ⅳ－144 SP192～215平面図・断面図 …… 228
図Ⅳ－145 SP216～238 平面図・断面図 …… 229
図Ⅳ－146 SP239～262 平面図・断面図 …… 230
図Ⅳ－147 SP263～266 平面図・断面図
SP50・SP62・SP147
出土遺物状況図 …… 231
図Ⅳ－148 SP182・205・256
出土遺物状況図 …… 232

表 目 次

表Ⅰ－1　遺物一覧表 …… 5
表Ⅰ－2　時期別遺構一覧表 …… 5
表Ⅰ－3　分類別集計表（土器） …… 5
表Ⅰ－4　分類別集計表（石器） …… 5
表Ⅱ－1　周辺遺跡一覧表 …… 10
表Ⅴ－1　西島松２遺跡　遺跡出土掲載土器一覧表 …… 233
表Ⅴ－2　西島松２遺跡　遺構掲載石器一覧表 …… 262
表Ⅴ－3　西島松２遺跡　包含層掲載石器一覧表 …… 269
表Ⅴ－4　西島松２遺跡　遺跡出土掲載土製品一覧表 …… 272
表Ⅴ－5　西島松２遺跡　遺跡出土掲載石製品一覧表 …… 272
表Ⅴ－6　西島松２遺跡　遺跡出土掲載金属製品一覧表 …… 274
表Ⅴ－7　西島松２遺跡　遺跡出土掲載木製品一覧表 …… 274
表Ⅴ－8　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（住居） …… 275
表Ⅴ－9　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（土坑） …… 276
表Ⅴ－10　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（TP） …… 297
表Ⅴ－11　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（焼土） …… 298
表Ⅴ－12　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（SP） …… 305
表Ⅴ－13　西島松２遺跡　出土遺物一覧表（包含層） …… 309
表Ⅴ－14　西島松２遺跡　土器出土分布表 …… 325
表Ⅴ－15　西島松２遺跡　石器出土分布表 …… 329

分 冊 項 目

第１分冊　遺構編（１）
口　絵
例言・凡例
目　次・挿図目次・表目次
分冊項目
本　文
第Ⅰ章　調査の概要
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第Ⅲ章　調査の方法
第Ⅳ章　遺　構
第Ⅴ章　遺　物
遺構図版（１）住居址・Ｔピット・焼土・小ピット
一覧表

第２分冊　遺構編（２）
挿図目次
遺構図版（２）土坑

第３分冊　遺物図版編
挿図目次
遺物図版

第４分冊　分析・カラー写真図版編
目　次・図版目次
第Ⅵ章　自然科学的分析
カラー写真図版

第５分冊　写真図版編
図版目次
写真図版

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事 業 名：柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道石狩支庁（札幌土木現業所）
遺 跡 名：西島松２遺跡（北海道教育委員会登載番号 A－04－35）
所 在 地：恵庭市西島松306番、501番地先河川敷地
調査面積：西島松２遺跡　19,904㎡
発掘期間：平成17年４月１日～平成19年10月30日
整理期間：平成17年11月１日～平成21年３月31日

2　調査体制

平成17年度

理 事 長　森重　楯一	第１調査部長　千葉　英一
専務理事　宮崎　　勝	第２調査課長　佐藤　和雄
常務理事　佐藤　俊和	主　　任　土肥　研晶
	主　　任　吉田裕吏洋

平成18年度

理 事 長　森重　楯一	第１調査部長　千葉　英一
専務理事　佐藤　俊和	第２調査課長　佐藤　和雄
常務理事　専務理事兼務	主　　査　土肥　研晶

平成19年度

理 事 長　森重　楯一	第２調査部長　西田　　茂
専務理事　佐藤　俊和	第１調査課長　佐藤　和雄
常務理事　畑　　宏明	主　　査　谷島　由貴
	主　　査　土肥　研晶
	主　　任　吉田裕吏洋

平成20年度

理 事 長　森重　楯一（平成20年５月31日まで）	第２調査部長　西田　　茂
理 事 長　坂本　　均（平成20年６月１日から）	第３調査課長　佐藤　和雄
専務理事　佐藤　俊和	主　　査　土肥　研晶
常務理事　畑　　宏明	主　　任　柳瀬　由佳

平成21年度

理 事 長　坂本　　均	第２調査部長　西田　　茂
専務理事　佐藤　俊和（平成21年５月31日まで）	第２調査課長　佐藤　和雄
専務理事　松本　昭一（平成21年６月１日から）	主　　査　土肥　研晶
常務理事　畑　　宏明	主　　任　柳瀬　由佳

3．調査に至る経緯

恵庭市内を流れる柏木川は、陸上自衛隊島松演習場内に源を発し、千歳川に流入する長さ約11kmの小河川である。この流域には多くの遺跡が点在し、 恵庭市内で最も遺跡分布密度の濃いところの1つである。ところで、千歳川本流およびそこに流入する小河川流域は過去に幾度となく洪水に見舞われてきた。柏木川もその例外ではなく、とくにその下流の左岸一帯はたびたび洪水被害をこうむってきた。このため、昭和58（1983）年、柏木川改修計画が策定された。昭和61（1986）年から現河川拡幅の改修工事が実施され、下流域側から上流側（市道西六線～道々江別・恵庭大通付近）へ進められてきた。その後平成7年（1995）年、柏木川改修工事の延長と遊水池が計画され、平成9（1997）年4月、柏木川改修計画増の区間（道々江別・恵庭線～道央自動車道）と第1・第2遊水池建設が決定された。工事主体である北海道札幌土木現業所から北海道教育委員会に第2遊水池建設について埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。これを受けて北海道教育委員会は平成10（1998）年10月に西島松5遺跡、平成12（2000）年7月に西島松3遺跡、同年10月に西島松2・9遺跡の範囲確認調査を実施した。関係者間での協議の結果、工事の性格上、計画変更はきわめて困難であることから、記録保存のための発掘調査の実施となった。

調査は平成12（1990）年4月から当センターで実施することとなり、西島松9遺跡は、平成13年7月で予定範囲を、西島松5遺跡は平成16年10月で基線南23号より南側の範囲を、西島松3遺跡、西島松2遺跡は、平成9年10月でその包蔵地範囲すべての調査を終えた。途中遺跡範囲の変更があったが、最終的な調査面積は西島松2遺跡19,904㎡、西島松3遺跡7,180㎡、西島松5遺跡21,210㎡、西島松9遺跡1,800㎡である。

図Ⅰ-1　年度別調査範囲

4　調査結果の概要

西島松２遺跡は平成17年度から３ヵ年発掘調査を行った。その結果、住居跡60軒・土坑1,406基（墓を含む）Tピット６基、焼土454ヵ所、小ピット266ヵ所などの遺構が検出され、約52万点の遺物が出土した。発見された遺構・遺物総数は表Ⅰ－１～４に記す。土地の削平で失われた遺構も多いが、調査区東側では柏木川の侵食で９世紀の住居半分が削られ、東側では縄文時代晩期末の土坑が半分削られる例がある。台地の形は河川の氾濫で変化し、多数の遺構が失われているとみられる。

竪穴住居は、擦文時代16軒、続縄文時代１軒、縄文時代42軒（不明９軒含む）が検出された。

縄文時代の竪穴は43軒検出されている。その内訳は早期１軒、前期12軒、中期７軒、後期13軒、不明９軒である。早期は中茶路式相当の竪穴がキトウシュメンナイ川沿いに検出された。前期は植苗式・大麻Ⅴ式相当の竪穴が12軒検出されている。前期の住居址は、約300m下流側の西島松５遺跡でも20軒以上が調査されたが、時期的には前半期の静内中野式相当のもので、西島松２・３・５遺跡をとおしてみると上流側に前期後半期の遺構や遺物が、下流側に前期前半期の遺構や遺物が分布する。

大きなもので約８m×５mの小判型の平面形である。竪穴の壁際に土坑を掘るものがみられ、調査段階で土坑と竪穴を別扱いにしたものもあるが、竪穴と土坑は同時期に埋まっていることから住居に伴う遺構とみられる。竪穴部分が削平され、土坑のみが楕円形に並ぶ場所もあり、これらも同時期の竪穴であったとみられる。

縄文時代中期の竪穴は７軒検出されている。時期の決定には検出状況から判断したものが多いが、その分布は調査区北側のキトウシュメンナイ川沿いに集中している。時期は中葉の萩ヶ岡２式から天神山式相当のものとみられる。

縄文時代後期は余市式～ホッケマ式期相当の竪穴が14軒検出されている。タプコプ式相当のものは土器片囲い炉と柱穴のみの確認である。後期中葉の竪穴には出入り口の跡とみられる柱穴や床面の高まりなどを確認できたものが４軒ある。また、儀礼的な行いか、後期中葉の竪穴壁際から口縁部が打ち欠かれた小型土器が出土した例が２軒みられた。

続縄文時代の竪穴は、縄文時代晩期の土坑や墓を切る状況で確認された（H35）。深さは約40cmで、全般に黒色の土で埋まる。覆土上位は包含層が落ち込むが、火山灰の堆積はみられない。床面付近から後北A式相当の破片が出土していることから続縄文時代の前半期の遺構とみられる。床面はⅣ層に達したところで平らに作り出すため、包含層を下げると検出困難な遺構である。炉や柱穴が検出されなかったことや、付近では類似する特徴の大型土坑も見つかっていることから、遺構の規模以外は住居址である根拠は弱い。

擦文時代の竪穴は、出土した土器からみて、８世紀末から９世紀中葉のものとみられ、調査区の縁、柏木川やキトウシュメンナイ川に沿った分布をする。16軒のうち３軒は竪穴内に４本の主柱穴をもつもので、それ以外は、竪穴外側の角に主柱穴をもついわゆる「カリンパ型」とよばれるものと考えられる。竈は造りつけである。煙道ほとんどがトンネル式で、石組みの煙道をもつもの（H54）もあり、竪穴の東から南側壁に造られている。竪穴の覆土下位に多量の火山灰・焼土粒・炭化物を含む層が堆積している。これらは屋根の土葺き材の崩落したものと推定される。焼失住居が多く、焼土層に埋もれた床面付近から、炭化材が出土している。９軒の住居跡から灰白色粘土が入った土坑が検出されている。竈の補修材を備蓄した施設とみられる。遺物ではH34から曲物状の木製品、H38から鉄製の紡錘車の軸が出土した。最近の研究から、関東以北では９世紀から鉄製の軸が増えてくるデータがある。当遺跡の住居跡の時期と一致する。

土坑（墓を含む）は1,406基が検出された。時期別では縄文時代早期が17基、前期が54基、中期12

基、後期111基、晩期853基、続縄文時代76基、擦文時代１基、近世３基、不明279基である。

早期の土坑は17基である。前半期の遺構は確認されていない。後半期の土坑には竪穴の可能性があるものも含まれるが、覆土は全般にⅢ、Ⅳ層で埋まっている。

前期の土坑は後半期の植苗式・大麻Ⅴ式相当の土坑が54基検出されている。遺物が無くても竪穴の壁際に並んで掘られていたとみられる土坑はすべて前期の土坑とした。墓とみられるのは735号土坑で、覆土からは大麻Ⅴ式相当の破片（未掲載）や石器類が検出されている。

中期の土坑は、出土した土器や遺構の切り合いから推測したもので、12基を確認している。まとまった遺物が伴うなどの、中期の確実な土坑は見つかっていない。

後期の土坑は111基確認された。このうち墓とみられるのは９基で、なかでも後期後葉の堂林式期の墓が２基ずつ並んで３ヵ所で検出されている。後期後葉～末葉の墓は、約200m下流で周堤墓をはじめ、それ以降の墓が下流側に分布している。これらの墓は周堤墓よりも古いものとみられ、平面形が長楕円形であることなどから千歳市のキウス４遺跡の盛土遺構の下位や外側に分布する、周堤墓より古い時期の墓と性格が似るものとみられる。後期中葉では、白板３式相当から手稲式相当の土坑で、平面が長径２m前後の楕円形を呈し、覆土下位にⅢ層やⅣ層混じりの暗褐色土が、上位には包含層の黒色土が落ち込む堆積をする土坑13基が見つかっている。

晩期の土坑は854基が検出された。このうち墓は39基で815基が土坑である。墓の形は楕円形から小判型で、確認できた埋葬姿勢は屈葬で、頭位はおおよそ南である。坑底長軸端に柱穴らしき浅い窪みがあるものが多く、1206号土坑では、穴が検出面まで達する。副葬品は墓の上部と、坑底付近から検出した。坑底付近からは、赤彩された土器・玉類・石鏃・ナイフ類・剥片・石斧・砥石類・いかり石などが、上部からは、副葬用の小型土器や石鏃などが出土した。坑底面から土器が出土した70号土坑は最終末期とみられ、坑底に副葬用土器を安置するのは続縄文時代の墓制につながる行為とみられる。上部は削平を受ける例が多く、副葬品の多くはが失われたとみられる。

本遺跡で最も目立った遺構が晩期の土坑である。時期は、後葉から末葉にかけてのものがほとんどで、重なりあうほど密集分布するが、分布から離れた土坑に中葉の破片が検出されたものもあり、掘られた期間は数百年あるとみられる。残りの良い土坑の断面を観察すると、坑底面付近に掘ってまもなく埋まった土が入るが、上部は壁面の崩落などによる自然埋没で、埋め戻されていない土坑とみられる。分布は、晩期の墓域を囲む状況がみられ、墓を意識して掘られたもの、つまり墓と関係あるる遺構とみられるが、性格は不明である。遺物が出土するものあるが、深鉢などの日常的な器種がほとんどで、口縁部や底部が打ち欠かれている例が多い。

続縄文時代の土坑は73基検出された。墓と見られるものは２基で、ひとつは続縄文時代初頭期の合葬墓（46号土坑）である。ベンガラの敷かれた坑底面付近から石斧や小形の鉢などが出土した。もう１基は後北C_2・D式の墓（806号土坑）で、坑底面から遺体の痕跡と小型の鉢が出土した。覆土下位には別に深鉢１個体が入っていた。続縄文時代の墓は全般に削平の著しい場所で検出された。

残りの71基は土坑であるが、状況としては晩期の土坑と特徴は似ており、覆土上部は包含層による自然埋没である。

擦文時代の土坑は1121号土坑１基である。Ⅲ層付近で甕の破片が検出され、遺構を確認した。９世紀前半頃の甕２固体が出土した。

近世墓は３基検出された。平面は長方形や長円形で、板状の材で木郭が作られていたとみられる小ピットが坑底面の縁を廻るもの（1359号土坑）がある。それぞれの墓は離れて位置するが、段丘縁の突出した地形の根元付近に墓をつくる傾向がみられる。小刀、刀子、マレックなどが副葬される。

表Ⅰ－1　遺物一覧

遺構	土器	土製品	石器	石製品	金属製品	漆製品	木製品	骨角器	アスファルト	合計
住居	11,929	26	11,330	4	15	1	1	2		23,308
土坑	74,106	44	79,425	98	20	1		39		153,733
Tピット	35		5							40
焼土	7,010	57	12,833	1				18		19,919
小ピット	158		238							396
集石遺構			187	1						188
包含層	252,464	88	74,481	22				7	4	327,066
計	345,702	215	178,499	126	35	2	1	66	4	524,650

表Ⅰ－2　時期別遺構一覧

遺構			縄文時代					続縄文時代	擦文時代	近世	不明	計
			早期	前期	中期	後期	晩期					
住居	1号～60号	60　基	1	12	7	14		1	16		9	60
土坑	1号～1406号	1406　基	17	54	12	111	854	75	1	3	279	1,406
Tピット	1号～6号	6　基			6							6
焼土	1号～454号	454　ヵ所	3	11	24	79	159	40	3		135	454
小ピット	1号～266号	266　ヵ所		3	3	22	10				228	266
集石遺構	1号～3号	3　基						1	1	1		3
計		2195	21	80	52	226	1,023	117	21	4	651	2,195

表Ⅰ－3　分類別集計表（土器）

	Ⅰ群		Ⅱ群		Ⅲ群			Ⅳ群			Ⅴ群			Ⅵ群		Ⅶ群			合計
	Ⅰa類	Ⅰb類	Ⅱa類	Ⅱb類	Ⅲa類	Ⅲb類	Ⅲ	Ⅳa類	Ⅳb類	Ⅳc類	Ⅴa類	Ⅴb類	Ⅴc類	Ⅵ群	後北C2D	Ⅶ群	須恵器	土師器	
H	1	334	19	2,452	3	1,335		377	755	2,220	1	11	2,703	69		1,341	32	278	11,929
P	4	417	10	1,783	4	1,999	818	394	1,915	8,685	22	402	57,813	331	1,488	40	1		74,106
F		55	3	415		216		7	58	1,467	2	129	4,393	257	4	1	3		7,010
SP			1	19		5		3	64	35		5	28						158
TP 他		2		9		13			2	9									35
包含層	16	2,991	703	10,527	54	14,449	955	1,082	9,745	49,456	541	5,112	149,891	3,947	2,558	646	23	68	252,464
合計	21	3,499	736	15,205	61	18,017	1,773	1,863	12,539	59,872	566	5,059	214,828	4,604	4,030	2,028	59	344	345,702
群合計	3,520		15,941		19,851			74,274			221,051			8,634		2,431			345,702

表Ⅰ－4　分類別集計表（石器）

	石鏃	石槍先端ナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	ナイフ	楔型工石器	磨製石斧	スクレイパー	敲石	石ブレイク	ブレイク	剥片	石核	石斧	模倣剥片	たたき石	すり石	砥石	石皿	石臼	石臼・台石	加工痕のある礫	原石	礫	カマド構造材	合計
H	101	7	22	31		4		99	11	30	5	9,125	28	67		21	61	25	7	1	54	2	9	985	634	11,330
P	417	30	43	92	8	12	3	702	44	273	107	76,032	176	691	1	109	107	110	2	2	95	6	26	1,769		79,425
F	54	2	3	5				49	15	31	4	12,521	8	15		5	11	5		1	1		3	100		12,833
SP	3			1				2		3		37		7		4	29	2		1	12			137		238
TP・集石 他								3		2		11					1	1			1			173		192
包含層	1,252	172	191	392	6	41	13	2,857	578	1,748	806	58,442	675	1,014	16	405	596	412	19	12	165	51	148	13,318		74,481
小計	1,827	219	259	521	14	57	16	3,972	598	2,087	925	147,169	887	1,294	16	544	805	555	28	17	328	59	186	16,482	634	178,499
合計	157,551													1,310				2,277					16,727		634	178,499

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡

1　遺跡の位置と環境

遺跡のある恵庭市は、石狩低地帯のほぼ中央に位置し、東部の標高約８ｍの水田・畑地帯と西部の山地で成り立っている。

遺跡は恵庭市の西方、ＪＲ恵み野駅から北西約700ｍに所在する。東を柏木川、西をキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約28ｍの沖積低地に立地する。柏木川の支流であるキトウシュメンナイ川は、柏木川とキトウシュメンナイ川は、本遺跡より500ｍほど下流で合流する。西島松５遺跡より約500ｍ上流の湧水池を源流にもつ。

遺跡の所在する西島松の「島松」はアイヌ語でシュマオマプ（shuma-oma-p）「石が・ある・もの（川）」の意味である。柏木川はペケレペッ（pekere-pet）「明るい・川」の意味で、キトウシュメンナイは（kitu-ushi-mem-nay）［行者大蒜の群生している湧泉池］の意味である。

キトウシュメンナイ川の源流湧泉池は木立がなく開けているが、遺跡内及び周辺のキトウシュメンナイ川の両岸や柏木川の対岸に位置する西島松９遺跡周辺には木立が多い。自然植生とみなされる樹種はオニグルミ・ミズナラ・ヤチダモ・イタヤカエデ・アカシデなどの大木やアカシデ・アズキナシ・ヤマモミジ・エゾニワトコ・イヌコリヤナギなどの中低木である。

2　周辺の遺跡

恵庭市内の遺跡は小河川の流域に遺跡が集中することが知られている。なかでも柏木川流域には遺跡が多く、現在恵庭市内で周知されている125ヵ所の遺跡（2008年５月時点）のうち、約半数の60ヵ所が柏木川流域に分布する。（図Ⅱ－２参照）以下柏木川流域の遺跡を中心に時期毎に概観する。

『旧石器時代』

茂漁４遺跡がある。En－a層から細石刃核・掻器等が出土した。ユカンボシE10遺跡からは、細石刃・細石核が出土している。ユカンボシE５遺跡では細石核が出土している。中島松６遺跡からは細石核・彫器が出土している。

『縄文時代』

「早期」

前半期の遺構では柏木川13遺跡でアルトリ式期の竪穴住居跡が１軒検出され、床面壁際から土器や円盤状土製品、蛇紋岩製の石斧などが出土した。西島松５遺跡からは同時期の捨て場が検出され、多数の土器・石器が出土しているほか、島松仲町遺跡でも土器が検出されている。後半期では東釧路Ⅲ～中茶路式期の住居跡が西島松５遺跡で５軒、カリンバ２遺跡第Ⅶ地点で東釧路Ⅲ～中茶路式期の住居跡が18軒検出されている。遺物では柏木川11遺跡から、東釧路Ⅱ式土器が出土している。

「前期」

前半期は西島松５遺跡で静内中野式相当の住居址が21軒検出されている。遺物ではユカンボシE２遺跡で美沢３式、美々７式土器が、西島松５遺跡で綱文式から加茂川式、西島松１遺跡で、静内中野式、柏木川８遺跡・西島松３遺跡で加茂川式土器が出土している。また、西島松３遺跡から静内中野式期相当の漆塗りの繊維製品が出土している。後半期では柏木B遺跡で植苗式土器・大麻Ⅴ式土器を伴う住居跡が24軒検出され、柏木川７遺跡では、大麻Ⅴ式期の住居跡が18軒検出されている。

「中期」

柏木川１遺跡がある。柏木川式土器の標識遺跡である。竪穴住居跡が６軒調査され、標識資料の深

鉢２個体と、石器類が出土している。西島松14遺跡からは、終末期の大木10式土器を伴う土坑が１基検出されている。西島松15遺跡からは、柏木川式期の竪穴住居跡が17軒検出されている。B地点でも同時期の住居跡が４軒検出されている。遺物では土製円盤や三角形の土器片加工品が多数検出されている。カリンバ２遺跡第Ⅶ地点からは、円筒土器上層式期２軒、柏木川式期７軒、北筒式期11軒の住居跡が検出されている。北筒式の住居跡のうち長軸12ｍを超える大型住居跡が２軒ある。カリンバ１遺跡C・E地点からは、円筒土器上層D式～柏木川式期にかけての住居跡が22軒検出されている。このうち長軸が約17ｍと約30ｍの大型住居跡が２軒ある。

「後期」

柏木川４遺跡では後葉期の旧河道の泥炭層から編み布が出土している。周囲からは船形容器や槌状木製品なども出土した。史跡カリンバ遺跡（旧カリンバ３遺跡）では終末期の墓から漆塗り装身具や玉類が大量に発見されている。なかでも縦櫛は58点検出されている。これらの出土品は平成18年に重要文化財に指定された。西島松５遺跡では周堤墓から終末期にかけての墓が検出され、縦櫛39点ほか漆塗り装身具や玉・勾玉が発見されている。柏木B遺跡では後葉期の周提墓が３基調査され、石棒・玉類等の副葬品が出土している。また、終末期の墓から縦櫛７点が出土している。縄文時代後期の後葉の墓が、市内のカリンバ遺跡、柏木B遺跡、西島松５遺跡であわせて約300基の墓が調査され、多数の漆製品が出土している、中でも櫛の出土量は全国的にも恵庭市が突出した出土量である。

「晩期」

晩期初頭期の大洞B式相当の墓や盛土遺構が西島松５遺跡で検出されたほか、ユカンボシE２遺跡では前葉の土器が、カリンバ３遺跡では前葉から中葉にかけての遺物が出土した。柏木川４遺跡の後葉の墓から、乳幼児の手形・足形付土製品が出土している。土製品と一緒に出土した５個体の土器に双口土器が含まれていたが、対岸の柏木川遺跡との出土例を合わせるとこの付近では４点の双口土器が出土している。後葉から末葉では、恵庭公園遺跡では覆土にTa－cの堆積がみられる土坑や、舟形土器などが出土している。

『続縄文時代』

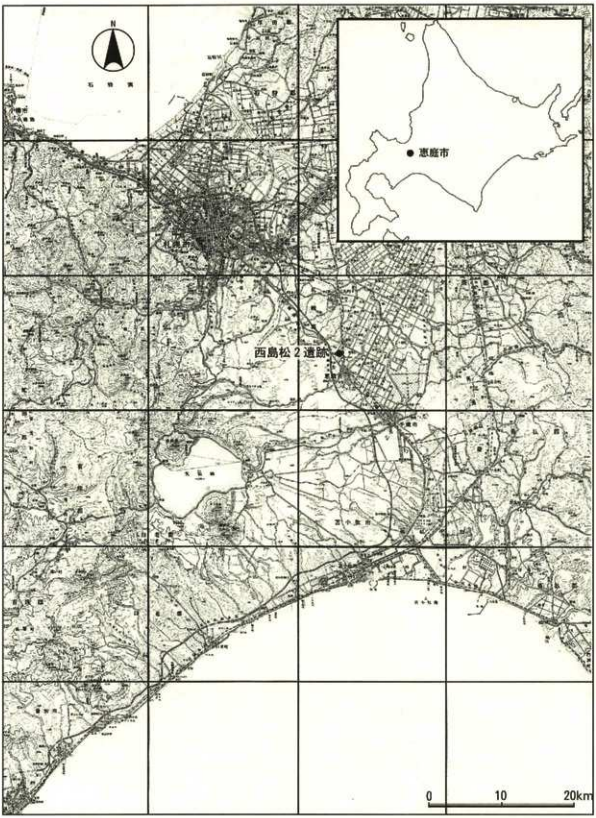
前半期の土器が西島松15遺跡で復元されている。柏木B遺跡では、北大Ⅰ式期や後北B式期のものを少量含むが、後北C_2・D式期の土坑223基が検出され、ガラス玉30個が連なって出土した土坑が見つかっている。カリンバ２遺跡では、北大Ⅱ式相当の土坑（土坑墓）42基が確認され、注口土器や片口などが出土した。

『擦文時代』

柏木川１遺跡がある。前半期の墳墓が１基調査され、甕・坏・刀子・鎌・鍬などが出土している。柏木東遺跡（茂漁古墳群）は、昭和９年の調査で北海道式古墳が14基確認された。柏木川11遺跡は、竪穴住居跡が３軒調査された。いずれも焼失住居である。茂漁４遺跡は、７軒の竪穴住居跡が調査され、住居内から琥珀玉・須恵器蓋が出土している。柏木川13遺跡は、竪穴住居跡が４軒検出された。このうち２軒は外側四隅に柱穴をもついわゆる「カリンバ型」の住居である。西島松５遺跡では、竪穴住居跡10軒と、前半期の土坑墓・周溝のある墓など145基が検出され、金属製品多数が出土した。

『アイヌ文化期』

茂漁チャシ跡がある。茂漁川左岸の段丘上に立地している。面崖式のチャシで２本の壕が確認されている。カリンバ１遺跡C・E地点、カリンバ２遺跡第Ⅳ地点からは、近世アイヌ期の集落跡が検出され、カリンバ２遺跡第Ⅵ地点では中国製の白磁小皿やガラス玉、足金具、ニンカリ、漆器など多種の副葬品を伴う土坑墓がみつかっている。



図Ⅱ－１　遺跡位置図

図中央の黒色部分が西島松2遺跡

図Ⅱ－2　西島松2遺跡と周辺の遺跡

表Ⅱ－１　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時期	文献（多数ある場合は新しいもの）
9	柏木A	遺物包含地	縄文	
10	柏木B	集落跡、墳墓	縄文(早～晩)、続縄(北大)	1981『北海道恵庭市　柏木B遺跡発掘調査報告書』
11	柏木C	遺物包含地	縄文	
12	柏木沢	遺物包含地	縄文(晩期)	
13	茂漁チャシ	チャシ跡	アイヌ	1980『T日本城郭大系Ⅰ』北海道
14	柏木東(茂漁古墳群)	墳墓	縄文	1966『恵庭遺跡』
15	茂漁1	遺物包含地	縄文(晩期)、続縄(後北)、、擦文(北大)	1979『続千歳遺跡』
16	茂漁2	遺物包含地	擦文	
17	柏木水源地	墳墓	縄文(中・後期)、続縄、擦文	
18	柏木川1	集落跡、墳墓	縄文(中・晩期)、擦文	1971『柏木川』
19	柏木川2	遺物包含地	縄文(中・晩期)	
20	柏木川3	遺物包含地	縄文(中・晩期)	
21	柏木川4	遺物包含地	縄文(後期)	2004『柏木川4・柏木川13遺跡(2)』北埋調報211　2006『柏木川4(2)』北埋調報229　2007『柏木川4(3)』北埋調報249　2010『柏木川4(4)』北埋調報264
22	柏木川5	遺物包含地	縄文(早・中・後期)	
23	柏木川6	遺物包含地		
24	柏木川7	集落跡	縄文(早・前・中期)	2009『柏木川7遺跡』
25	柏木川8	遺物包含地	縄文(中期)	1988『「柏木川8遺跡」「柏木川13遺跡」』
26	柏木川9	遺物包含地	縄文(中期)	
27	柏木川10	遺物包含地	縄文(中期)	
28	柏木川11	遺物包含地	縄文(中期)	1994『柏木川11遺跡(Ⅱ)』
29	柏木川12	遺物包含地		
30	柏木工業団地1	集落跡	縄文(中・後・晩期)	
31	柏木工業団地2	集落跡	縄文(後期)、続縄、擦文	
32	柏木工業団地3	集落跡	縄文	
33	柏木工業団地4	遺物包含地	縄文	
34	西島松1	遺物包含地	縄文(前期)	
35	西島松2	墳墓・住居跡	縄文(晩期)、擦文	2010『西島松2遺跡』北埋調報265
36	西島松3	集落跡	縄文(前～晩期)、擦文	1966『恵庭遺跡』　2007『西島松3・西島松5遺跡(5)』北埋調報248
37	西島松4	遺物包含地	縄文(後期)	
38	西島松5	集落跡	縄文(早～晩期)、続縄、擦文	1966『恵庭遺跡』『西島松5遺跡』(2)・(3)・(4)・(5)・(6)
39	西島松6	遺物包含地	縄文(前～晩期)、擦文	
40	西島松7	遺物包含地	縄文(早・中・後期)、擦文	
41	西島松8	遺物包含地	縄文	
42	西島松9	遺物包含地	縄文(早・中・後期)、続縄	2002『西島松遺跡』　2002『西島松9遺跡』179集
43	西島松10	集落跡	縄文(晩期)、擦文	
44	西島松11	遺物包含地	縄文	
45	西島松12	遺物包含地	縄文(中期)	
46	西島松13	遺物包含地	縄文	
47	西島松14	遺物包含地	縄文(中・後・晩期)	1993『T西島松14遺跡』「西島松15遺跡」』
48	西島松15	遺物包含地	縄文(中期)	1994『T島松仲町遺跡』「西島松15遺跡B地点」』
49	西島松16	遺物包含地	擦文	
50	西島松17	遺物包含地	縄文(中期)	1992『西島松17遺跡・西島松18遺跡』
51	西島松18	遺物包含地	縄文(中期)	1992『西島松17遺跡・西島松18遺跡』
52	島松寿町1	遺物包含地	縄文(後期)	
53	島松寿町2	遺物包含地	縄文(後・晩期)、擦文	1966『恵庭遺跡』
54	島松仲町	遺物包含地	縄文(中期)、擦文	1994『島松仲町遺跡・西島松15遺跡B地点』
55	島松東町	遺物包含地	縄文	
56	島松旭町1	遺物包含地		
57	島松旭町2	集落跡	擦文	1966『恵庭遺跡』
58	島松旭町3	遺物包含地		

番号	遺跡名	種別	時期	文献（多数ある場合は新しいもの）
59	南島松1	遺物包含地	縄文(早・中期)	1991『南島松1遺跡・南島松4遺跡』
60	南島松2	遺物包含地	縄文(早・中・後期)、擦文	1992『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
61	南島松3	遺物包含地	縄文(中・後期)、擦文	1992『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
62	南島松4	集落跡	縄文、擦文	1992『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
63	南島松5	遺物包含地	縄文、擦文	
64	中島松1	遺物包含地	縄文(早・中・後期)、擦文	1992『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
65	中島松2	遺物包含地	縄文	
66	中島松3	遺物包含地	縄文	
67	中島松4	遺物包含地		
68	中島松5	集落跡	縄文(中期)、擦文	1990『中島松5遺跡B地点・中島松7遺跡C地点』　1989 A地点
69	中島松6	集落跡	縄文(中・後・晩期)、擦文	1988『中島松6・7遺跡』
70	中島松7	集落跡	縄文(早・後期)、続縄、擦文	1990『中島松5遺跡B地点・中島松7遺跡C地点』
71	下島松1	遺物包含地	縄文	
72	下島松2	遺物包含地	縄文、擦文	
73	下島松3	遺物包含地	縄文	
74	下島松4	遺物包含地	縄文	
76	ルルマップ川1	遺物包含地	縄文	
77	ルルマップ川2	遺物包含地	縄文	
78	ルルマップ川3	遺物包含地	縄文	
79	ルルマップ川4	遺物包含地	縄文	
80	ルルマップ川5	遺物包含地	縄文	
81	ルルマップ川6	遺物包含地	縄文	
82	ルルマップ川7	遺物包含地	縄文	
83	ルルマップ川8	遺物包含地	縄文	
84	ルルマップ川9	遺物包含地	縄文	
85	ルルマップ川10	遺物包含地	縄文、続縄	
86	ルルマップ川11	遺物包含地		
87	ルルマップ川12	遺物包含地	縄文	
88	ルルマップ川13	遺物包含地	縄文	
89	ルルマップ川14	集落跡	縄文	
90	ルルマップ川15	遺物包含地	縄文	
91	下島松5	遺物包含地	縄文	
92	下島松6	遺物包含地	縄文、続縄、擦文	
93	島松チャシB	チャシ跡		
94	島松チャシC	チャシ跡		
95	漁川1	遺物包含地	縄文、擦文	
96	カリンパ3	墳墓・集落跡	縄文(後・晩期)、擦文、近世	2003『カリンパ3遺跡(1)』
104	カリンパ1	遺物包含地	縄文(中期)、近世（アイヌ期）	カリンパ1遺跡A・B・C・D・E地点
105	カリンパ2	遺物包含地	縄文(早・中・後期)	カリンパ2遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ　A・B・C・D・E地点
106	カリンパ4	遺物包含地	縄文(後・晩期)、擦文、アイヌ	2001　1999　1997　1979　「カリンパ4遺跡」
107	柏木川13	遺物包含地	縄文(早・中・晩期)、続縄、擦文	2005『柏木川13遺跡(Ⅲ)』　2003『柏木川13遺跡(3)』北埋調報203
111	茂漁3	集落跡	縄文(中期)、続縄(後北C2・D)、擦文（前期）	
112	茂漁4	遺物包含地	先土器、縄文(前・晩期)、続縄(土大)、擦文(前期)	1977『茂漁4遺跡』
113	茂漁5	遺物包含地	擦文(北大Ⅲ)	1997『茂漁5遺跡』
114	ルルマップ15	遺物包含地	縄文	1996『ルルマップ15遺跡』北埋調報118
116	茂漁6	遺物包含地	続縄、アイヌ	
119	茂漁7			
120	茂漁8			
	史跡カリンパ遺跡	墳墓・住居跡	縄文(後・晩期)、続縄、擦文、近世	2004『カリンパ3遺跡(3)』

Ⅲ　調査の方法

1　調査区の設定

柏木川基幹河川改修工事におけるUSPラインを基軸に設定した。真北に対して26°51′1″東偏するUSPラインをRラインとし、北西から南東方向に5ｍごとにアルファベットを付し、同様にUSP0を0とし、北東から南西方向に5ｍごとにアラビア数字を付した。5ｍ×5ｍの区画（グリッド）の名称は、北東側交点をその名称とし、「B－25」のようにアルファベットとアラビア数字の間にハイフォンをもうけ、遺構名と区別した。したがって、USP100はR－20、USP200がR－40となる（図Ⅲ－2グリッド設定図参照）。一連の遺跡である西島松2・3遺跡と柏木川の右岸にある西島松9遺跡もそのままこの調査区を用いているが、アルファベットのZを超える地域は、小文字のアルファベットを使用している。なお、基準杭の平面直角座標系第Ⅱ系による座標値は以下のとおりである。

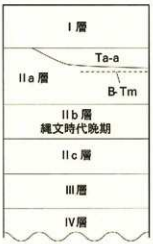
USP0	（R－0）	：X＝－121292.638	Y＝－55345.279
USP100	（R－20）	：X＝－121381.857	Y＝－55390.445

2　掘削

西島松2遺跡の調査区は、用地買収が終了した時点から放置されており、調査開始時には林になりつつあった。後の調査の効率をはかるため、耕作土の大半は初年度に重機で除去した。この時点で遺物や遺構が一部検出されたが、調査範囲にかかるまでは掘え置くこととなった。調査区内は全般に耕作や建物などの撹乱を受けるが、低い土地を埋めるため、段丘縁を著しく削る所も見られた。そのような場所では墓のような深い遺構も完全に失われたもようである。一方、生活道路の下や、斜面部、低地部などは削平を免れており、遺物も大量に散らばっていたことから、掘り下げはすべて人力で行った。また、低地部や斜面などの極端に遺物の少ない層は、スコップなどで取り除いた。包含層から出土した遺物はグリッド、層位ごとに取り上げ、遺構の遺物は、出土状況や遺物の性格により、記録したものと、遺構内の層位でまとめて取り上げたものがある。

3　土層

基本土層は、平成12年度の西島松5遺跡の調査における観察結果と基本的に同じであり、観察項目、観察手順とも前報告書（北埋調報178　Ⅲ、調査の方法　3．土層）に準拠している。調査区内の竪穴住居の窪みや、調査区縁斜面には、Ta－aが残っている箇所がみられた。また、遺物包含層のⅡ層は、良好な堆積箇所で観察し、上層からⅡa層、Ⅱb層、Ⅱc層と3層に区分し調査した。なお、土層の観察には『標準土色帖』（小山・竹原1967）および『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会1984）を用いている。



図Ⅲ－1基本土層模式図

Ⅰ層：耕作土　　地表土、Ta－a、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層が耕作などで混ぜられた攪乱層。

Ⅱ層：黒色腐植土

Ⅱa層　：黒色土層で乾燥すると白っぽくなる。本層の上面には樽前a降下軽石層（Ta－a A. D. 1739年降下）が堆積し、層中の窪みや斜面ではB－Tm苫小牧火山灰層が微量に堆積するのが観察された。また、樽前a降下軽石層直下に黒色土を挟んで堆積する微量の火山灰が確認できた。分析は出来なかったが、樽前b降下軽石層（Ta－b A. D. 1667年降下）とみられる。主に続縄文時代～擦文時代の遺物が含まれる層。

Ⅱb層　：暗褐色土層で、土坑の窪みなどにはTa－c（樽前C降下軽石。BP2,300～2,500年降下　分析の結果Ta－c3に対比される可能性が高い）が堆積するのがみられた。縄文時代晩期後葉～末葉の包含層で、同時期の遺構が集中する場所では、パミスやⅣ層・焼土などのほか遺物の混入が著しく、盛土遺構のように人為的な堆積土層の様相を呈する。

Ⅱc層　：黒褐色土層で、粒子が細かく、軟質土である。縄文時代早期～晩期の遺物包含層である。縄文時代の竪穴住居が分布する周辺ではローム粒やパミスを含んでおり、少なからず動いている層である。

Ⅲ層：暗褐色～暗黄褐色土　Ⅱ層とⅣ層の間の漸移層

Ⅳ層：支笏軽石（約32,000年前降下）が、恵庭a降下軽石（En－a15,000～17,000年前降下）を取り込んで二次堆積し、土壌化した層。場所により砂質・ローム質などさまざまな土質である。

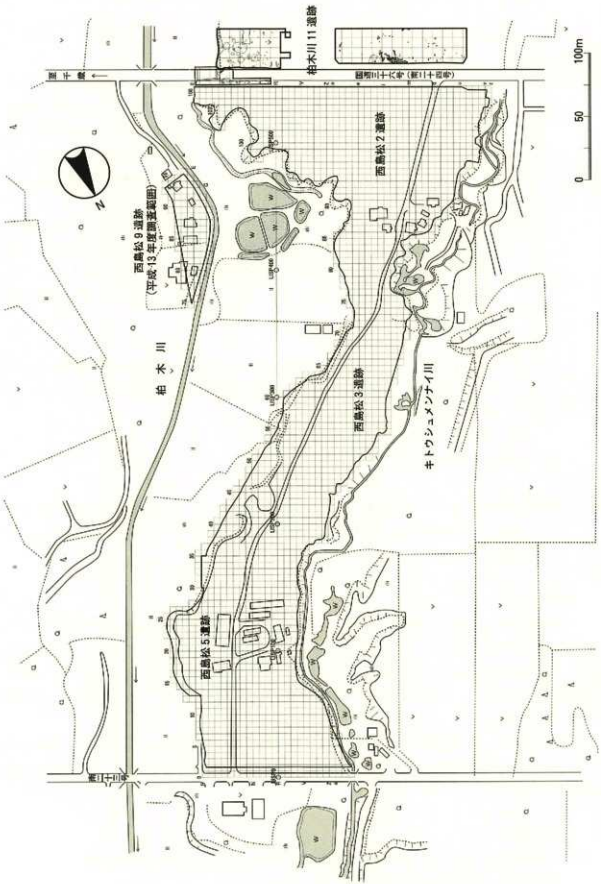
4　整理の方法

取り上げた遺物は、現地では原則として以下の作業工程で整理を行った。遺構・包含層それぞれの「遺物取り上げ台帳」、および「土壌水洗サンプル取り上げ台帳」を作成し、これをもとに水洗、乾燥、分類、注記、点数集計等の作業を進めた。注記の内容は、西島松２遺跡を「西２」と略記し、その後に遺構名あるいはグリッド名、層位、遺物番号の順に記した。注記するスペースのない、小さな遺物については省略した。

遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ、収納した。カードの情報は遺構ごと、分類ごとの情報を集計し、最終的な遺物台帳を作成した。

5　記録と保管

現地での実測図・土器・石器などの実測図、写真などの記録は当センターにおいて保管する。遺物は報告書刊行の後、恵庭市教育委員会が保管予定である。


柏木川11遺跡
西島松2遺跡
西島松9遺跡
（平成13年度調査範囲）
柏木川
西島松3遺跡
キトウシュメンナイ川
西島松5遺跡
N
0
50
100m

図Ⅲ－2　グリット設定図

6　遺物の分類

（1）土　器

土器は大きな区分である時期ごとの特徴から、便宜的に縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順に前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代相当のものをⅦ群、その他土製品とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）、あるいは前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。また、必要に応じて細分類（例　a－1類など）を行っている。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器

a類：貝殻条痕文、貝殻文などが施される。本遺跡ではアルトリ式に相当するものが少数出土

b類：撚糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文、縄文等の施されるもの

Ⅰ群b類は、b－1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式、b－2類：コッタロ式、b－3類：中茶路式、b－4類：東釧路Ⅳ式に相当するものに細分

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器

a類：厚みがあり、縄文原体（0段多縄が多い）は条の幅が広く、地文の縄文が器面に深く施文される、丸底、尖底を特色とするもの。本遺跡では静内中野式前後に相当するものが出土

b類：円筒上器下層式に相当する土器で、植苗式・大麻Ⅴ式に相当するものが出土

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器（中葉前後の破片が多く、分類はⅢb群で行っているものが多い）

a類：貼付文及び沈線文で文様帯が構成される、円筒上器上層式に相当、もしくはその系譜を引くと考えられるもの、および萩ヶ岡1・2式に相当するもの

b類：天神山式、柏木川式、北筒式（トコロ6類）、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器

a類：余市式、タプコプ式、入江式に相当するもの　白坂3式相当期はb類に、

b類：ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの

c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器

a類：大洞B式、大洞BC式、及び主に半截竹管状工具による器表面への垂直な刺突（爪形文と呼称）が施される上ノ国式に相当するもの。

b類：大洞C_1式、大洞C_2式に相当するもの

c類：大洞A式、大洞A´式に相当するもので、本遺跡出土の晩期資料の大半は本分類（緑ヶ岡式相当）にあたる

Ⅵ群　続縄文時代に属する土器群で、本遺跡では、後北C_2・D式相当のものと、それ以前のものを分けて分類集計した。

Ⅶ群　擦文時代に属する土器群で、甕、土師器、須恵器に分類した

（2）石器等

石器等は以下の器種に分類した。

各器種における細分類については、器種ごとの記載の項で記述した。

石鏃：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈する5cm未満のもの。

石槍またはナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈する5cm以上のもの。

石錐：端部に錐状の突出部が作り出されたもの。

つまみ付きナイフ：端部にノッチ状の加工によるつまみが作り出されたもの。

ナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有するもの。

両面加工石器：両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有しないもの。

スクレイパー：素材の側縁・端部に連続的な剥離によって刃部が作り出されるもの。

箆状石器：主に両面加工で左右対称形に整形され、端部に刃部が作り出されるもの。

Rフレイク：剥片に散漫な剥離が施されるもの。

Uフレイク：剥片に、使用によると思われる微細な剥離痕が認められるもの。

楔形石器：素材の両端部に、対向する剥離や潰れが認められるもの。

石核：剥片を剥離した痕跡が認められる、剥片石器と共通する石材のもの。

石斧：研磨で整形された斧状の刃部を有するもの。

擦り切り残片：石斧製作時の擦り切り作業により発生した、擦り切り痕のある残片。

たたき石：礫にたたき痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの。

すり石：礫にすり痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの。

砥石：礫にすり痕が認められるもののうち、研磨作業に使用されたと想定されるもの。

石鋸：板状の礫などの素材の縁辺に、断面がV・U字形を呈するすり痕が認められ、石斧製作時の擦り切り作業に使用されたと想定されるもの。

石錘：扁平な礫の縁辺に、対向する打ち欠きが認められるもの。

台石：礫にたたき痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの。

石皿：礫にすり痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの。

加工痕のある礫：礫に散漫・不規則な加工が認められるもの。

剥片：石核・石器などから剥離されたもので、二次加工・使用痕が認められないもの。

原石：石器に使用される石材の礫で、使用痕・加工痕の認められないもの。

（3）土製品

土偶、土玉、垂飾、耳栓、スタンプ形土製品、環状土製品、オロシガネ状土製品、紡錘車、フイゴの羽口、ミニチュア土器、土製円盤、焼成粘土、その他土製品に分類した

（4）石製品

玉・垂飾類、異形石器、オロシガネ状石製品、石棒、いかり石、軽石製品などが出土している。

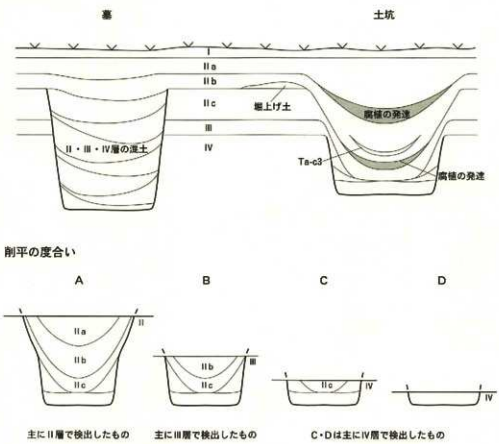
（5）金属製品

刀類・角釘・鏃先・釣針・鉤状製品（マレク）・紡錘の軸・耳飾りなどが出土している。

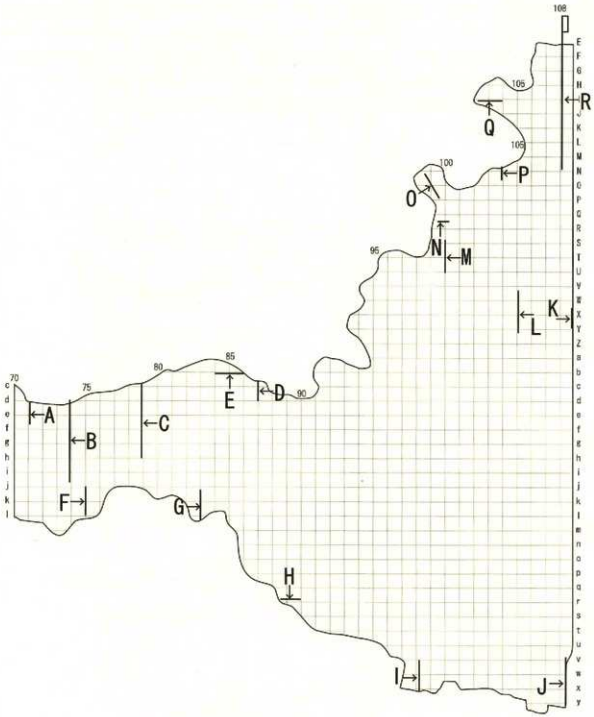
（6）木製品　曲げ物様の容器が1点出土している。

7　土坑の分類

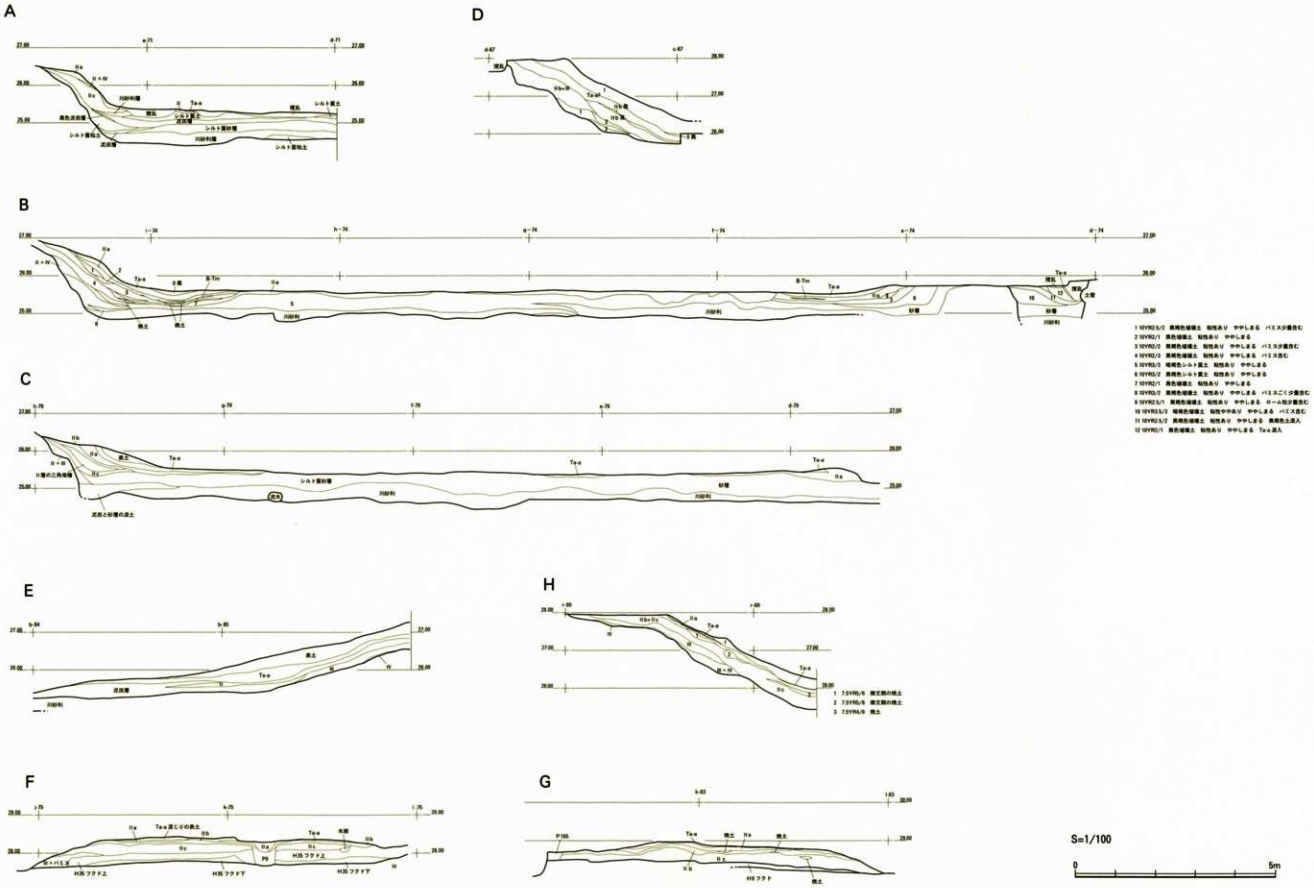
西島松２遺跡からは2,000基をこえる遺構が検出された。遺構一覧表には、検出された遺構の時期を出土遺物や遺構の特徴から判断し、縄文時代の各期（早期、前期、中期と表記）と続縄文（後北C_2・D式とわかるものは後北C_2・Dとした）、擦文、近世、不明（縄文時代の遺構だが、決め手となる特徴や遺物が無かったもの）と分け、さらに土坑については、遺体の痕跡やベンガラ散布の有無、埋め戻し土層のものを墓と考え、（図Ⅲ－３上段左が墓のモデル）時期は縄文時代晩期のものは「晩期墓」不明のものは「不明墓」と表記した。晩期・続縄文期の土坑（図Ⅲ－３上段左が晩期の土坑のモデル）については、さらに削平の度合いからA～Dの４段階に分け、その項目を表記した。



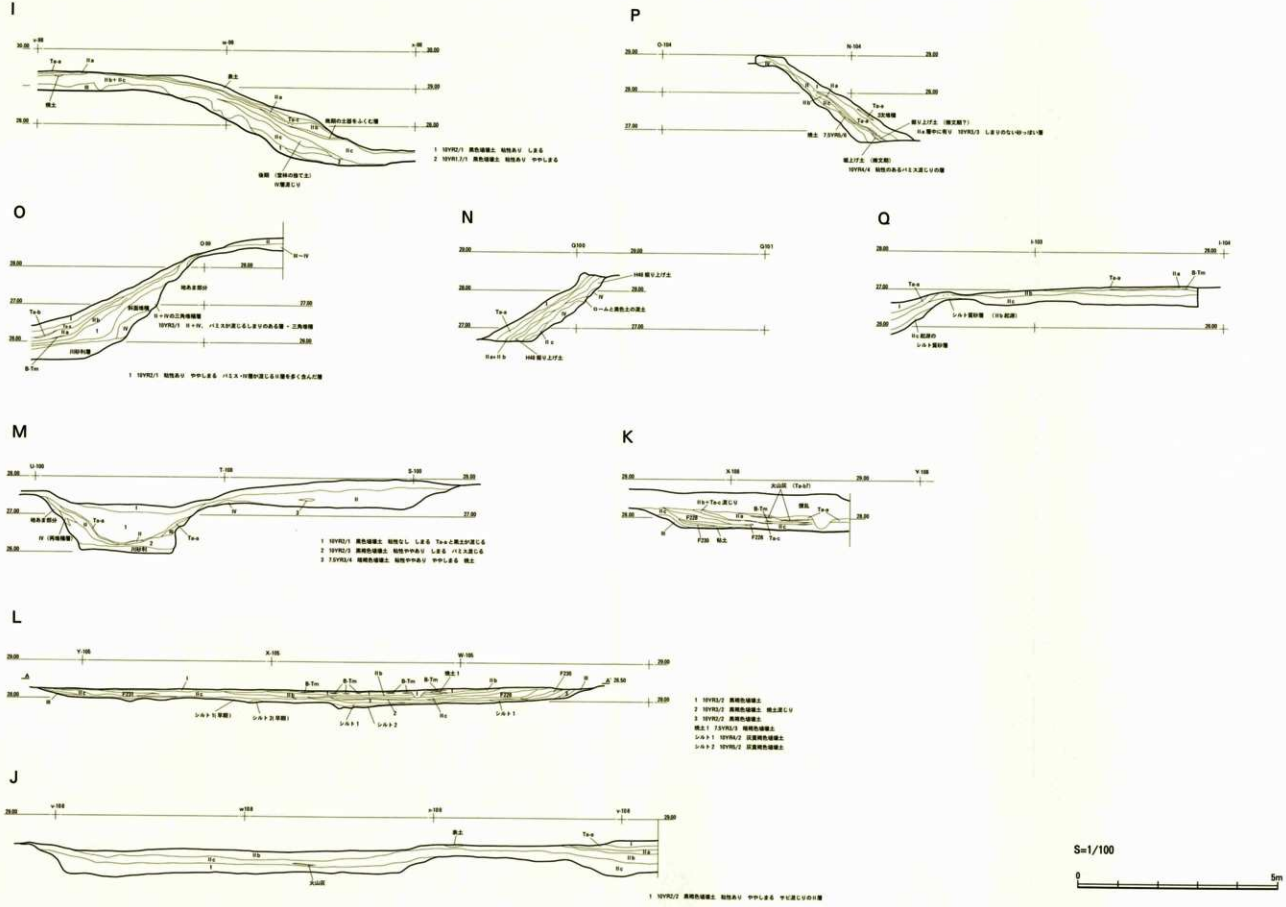
図Ⅲ－３　土坑の分類



図Ⅲ－4　トレンチ設定図

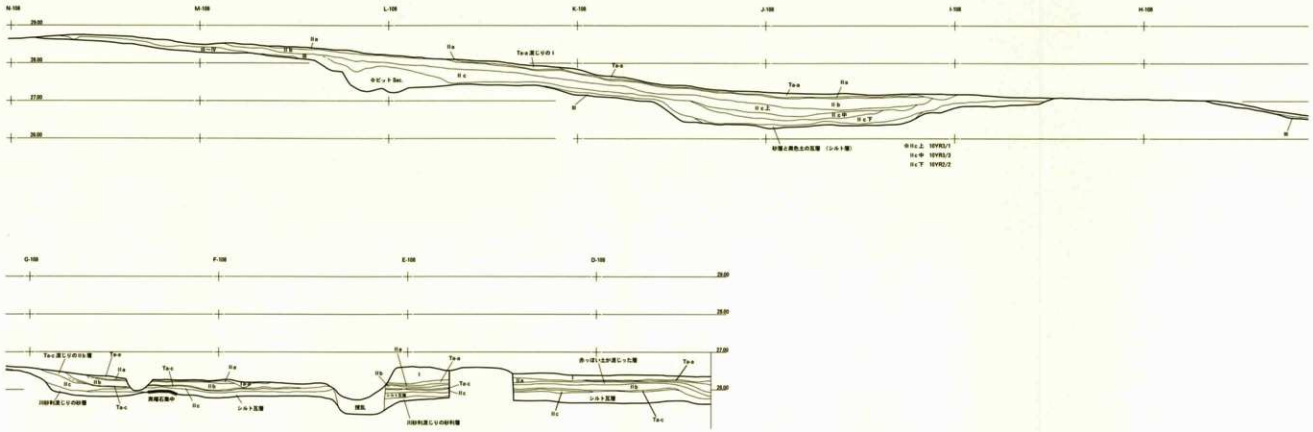


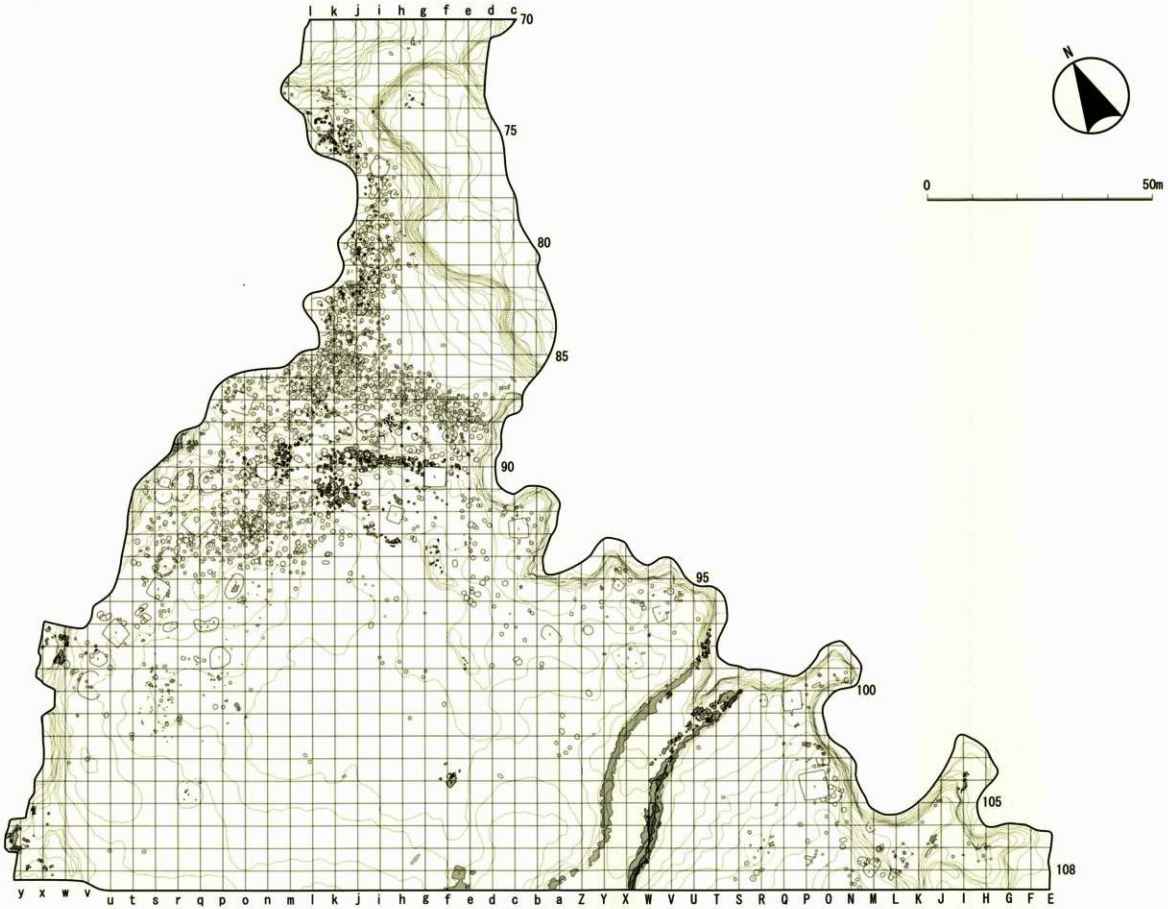
図Ⅲ－5　土層図Ⅰ



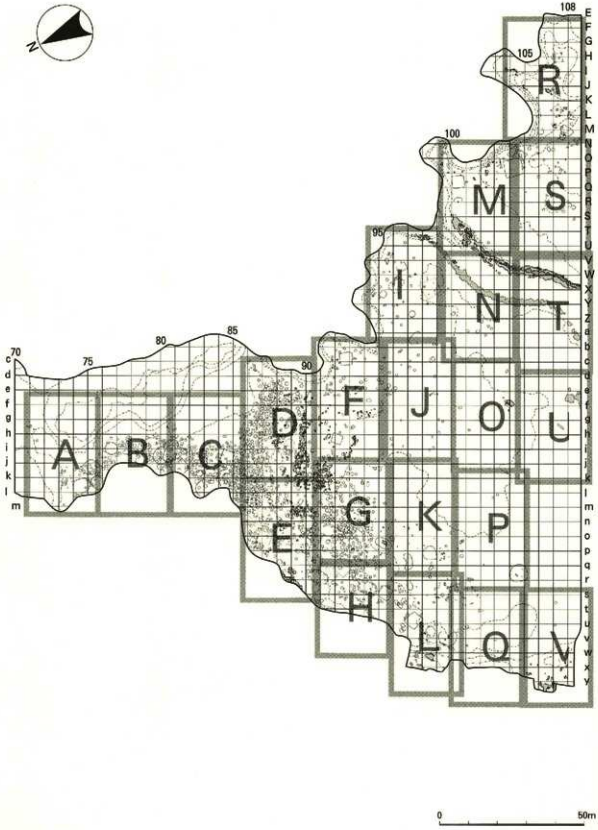
図Ⅲ－6　土層図Ⅱ

R

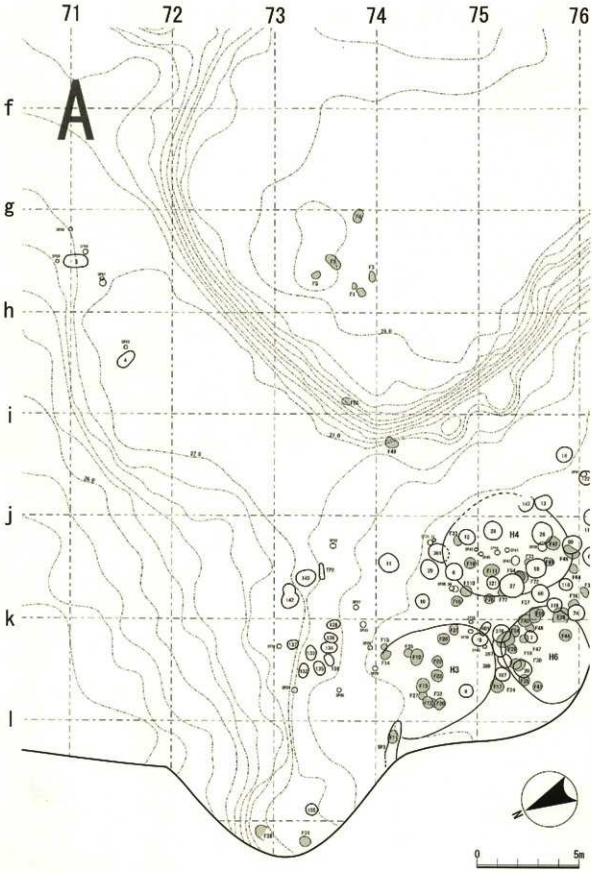

N-109
M-109
L-109
K-109
J-109
I-109
H-109
29.00
28.00
27.00
26.00
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅲ-Ⅳ
Ⅳ
Ⅳ-Ⅴ
Ⅴ
Ⅴ-Ⅵ
Ⅵ
Ⅵ-Ⅶ
Ⅶ
Ⅶ-Ⅷ
Ⅷ
Ⅷ-Ⅸ
Ⅸ
Ⅸ-Ⅹ
Ⅹ
Ⅹ-Ⅺ
Ⅺ
Ⅺ-Ⅻ
Ⅻ
Ⅻ-Ⅻ
Ⅻ
Ⅻ-Ⅻ
Ⅻ
Ⅻ


l k j i h g f e d c
70
75
80
85
90
95
100
105
108
y x w v u t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a Z Y X W V U T S R Q P O N M L K J I H G F E
N
0
50m

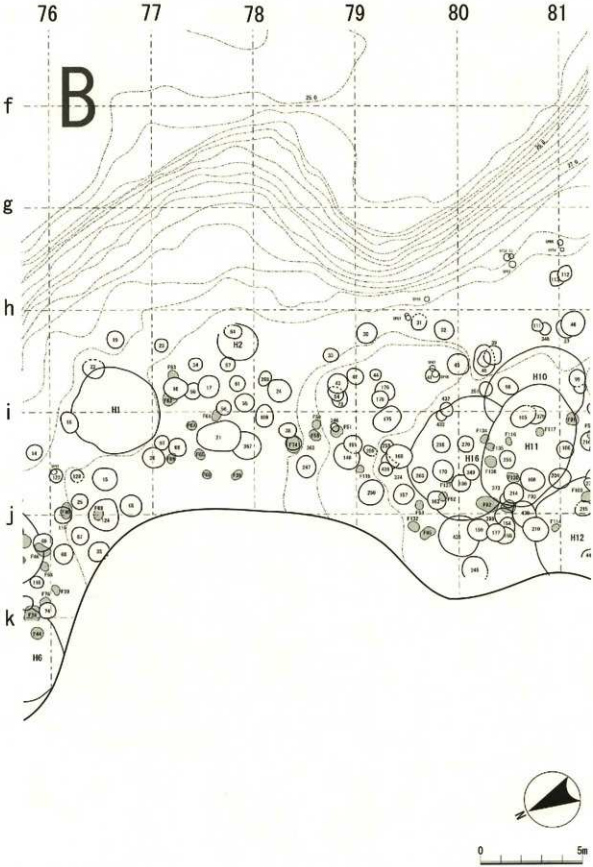
図Ⅲ－8　遺構位置全体図



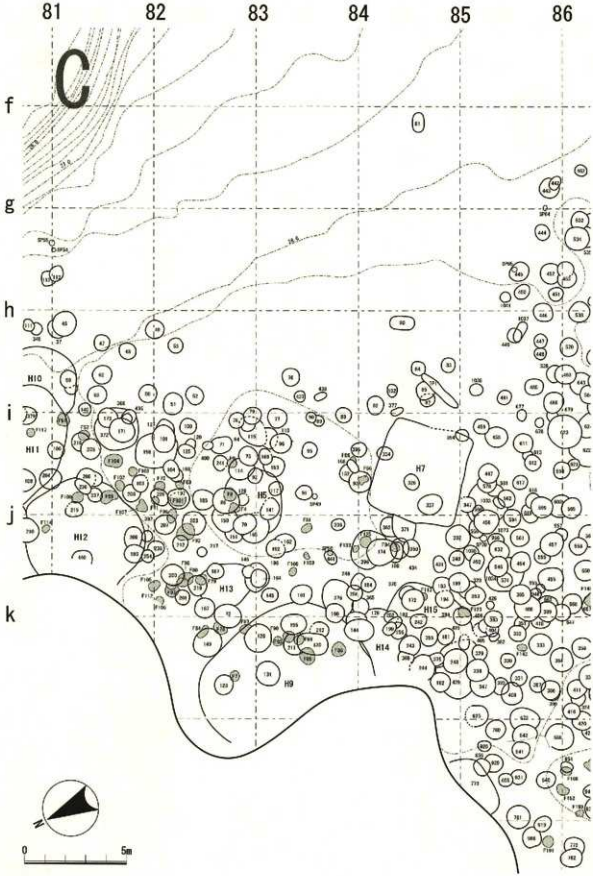
図Ⅲ－９　遺構位置分割図



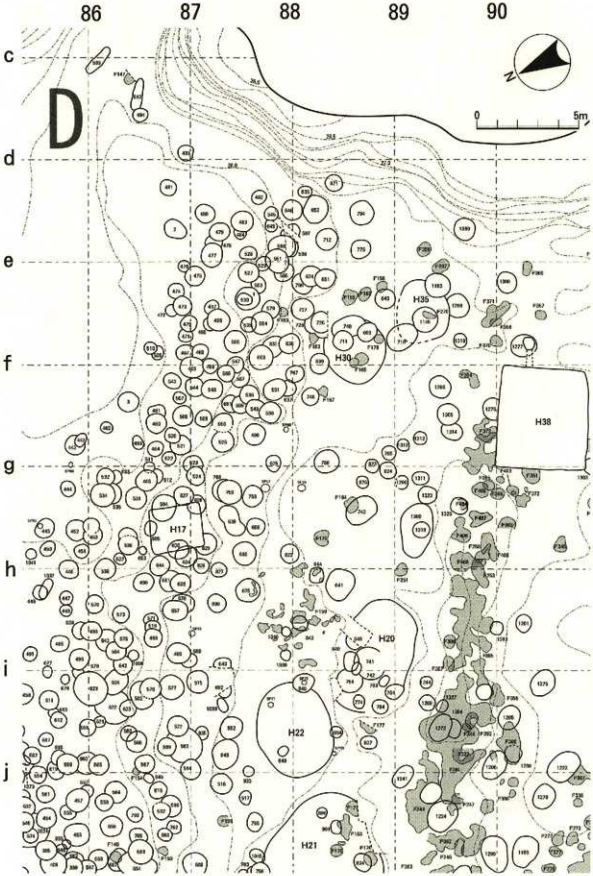
図Ⅲ－10　分割図A



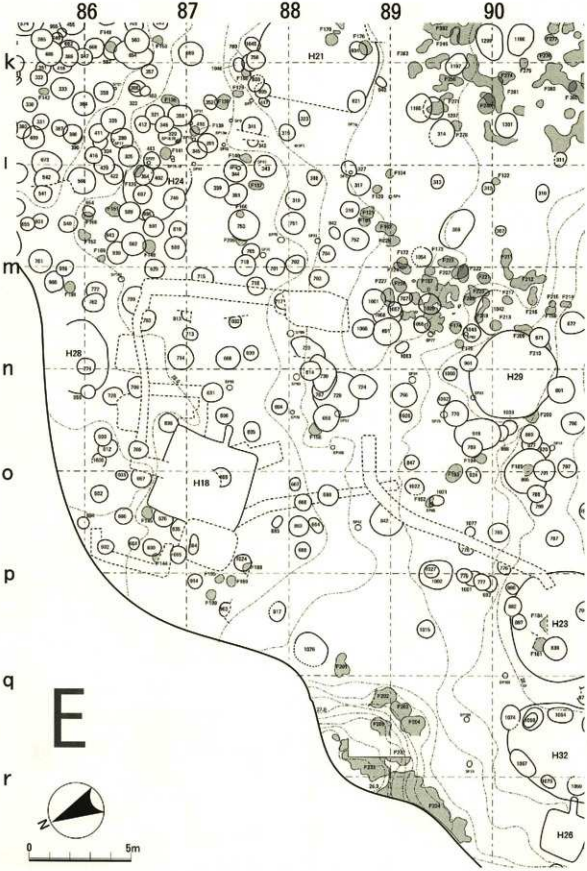
図Ⅲ－11　分割図B



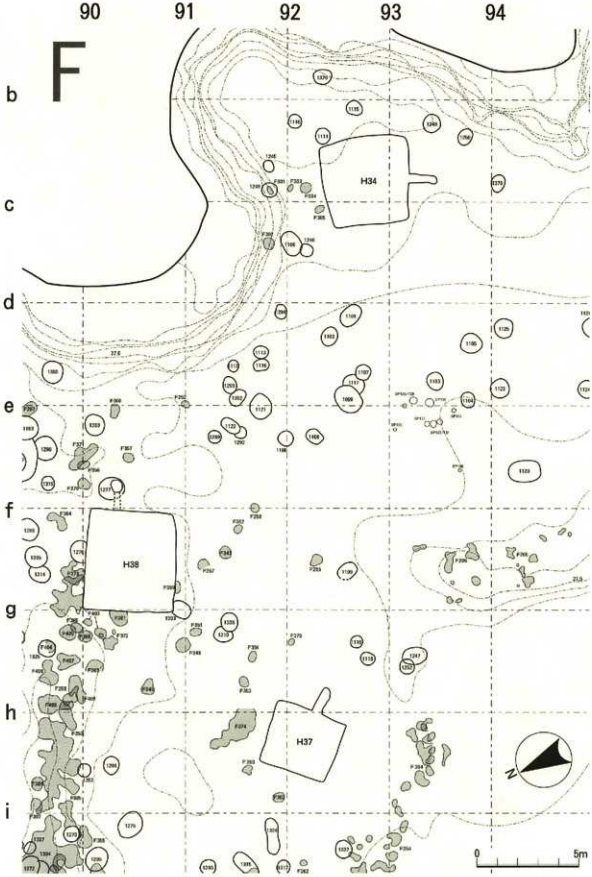
図Ⅲ－12　分割図C



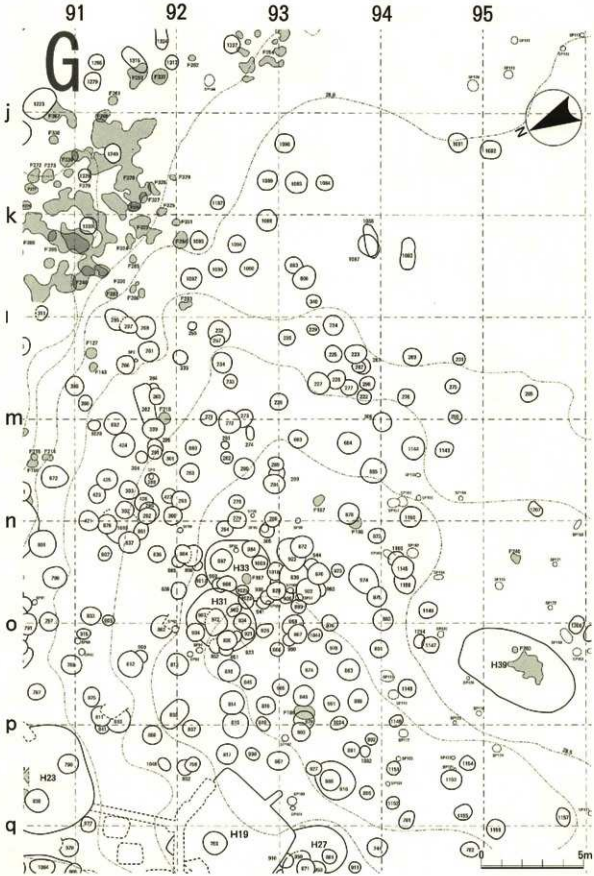
図Ⅲ－13　分割図D



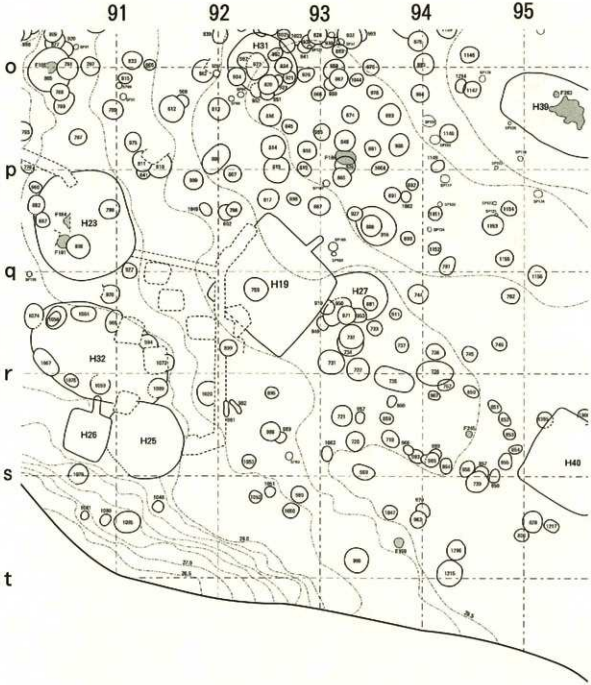
図Ⅲ－14　分割図E



図Ⅲ－15　分割図F

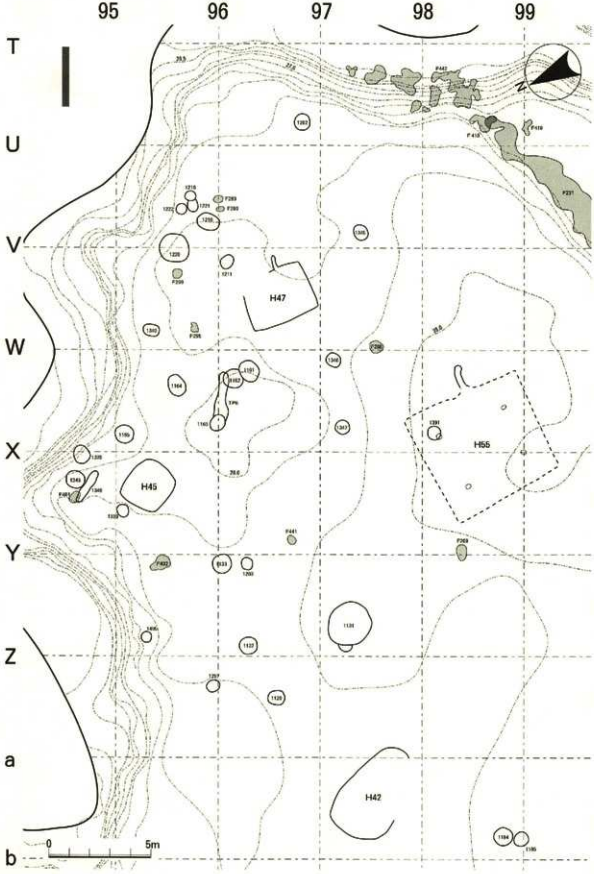


図Ⅲ－16　分割図G

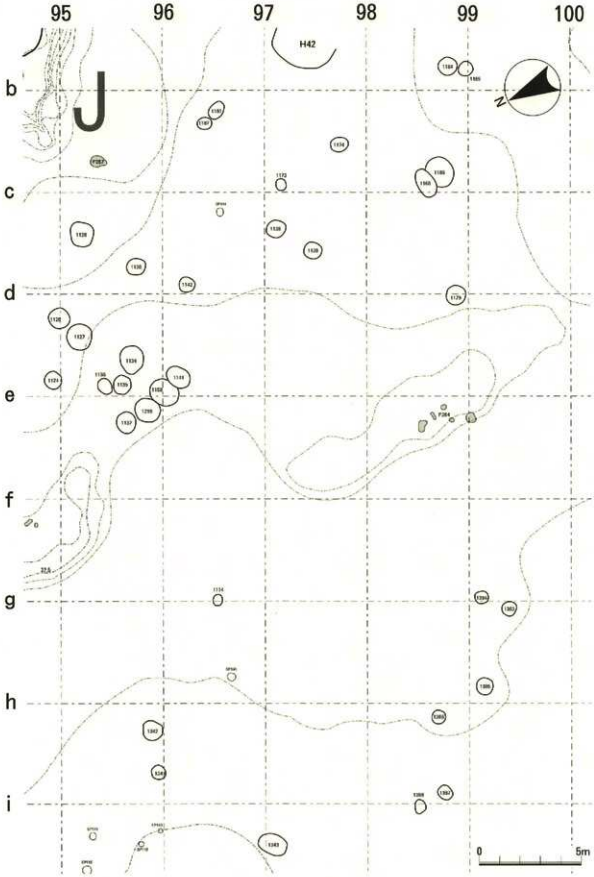


H

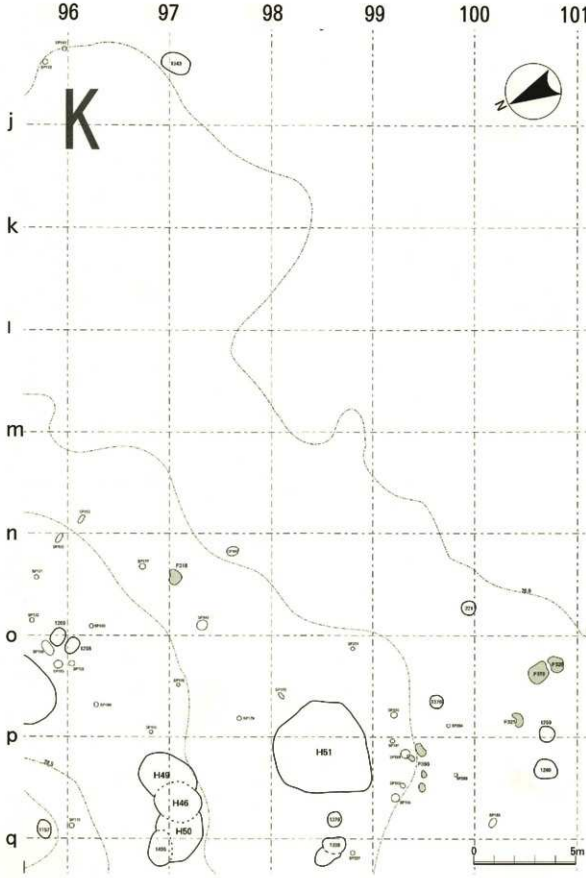
図Ⅲ－17　分割図H



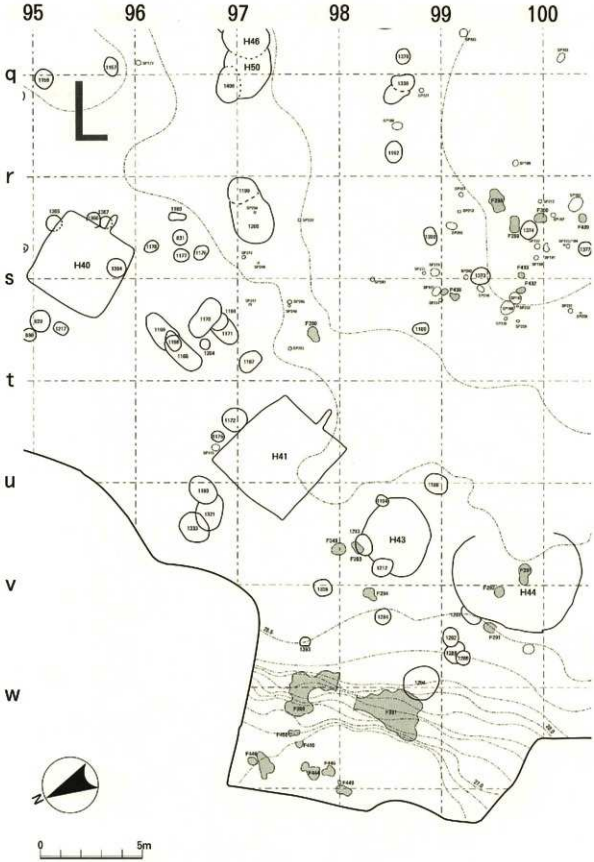
図Ⅲ－18　分割図Ⅰ



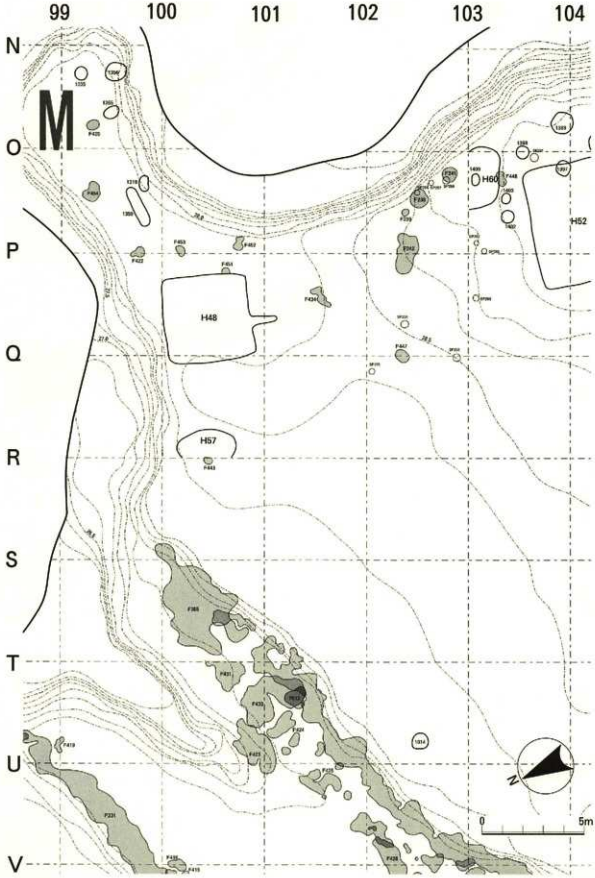
図Ⅲ－19　分割図Ｊ



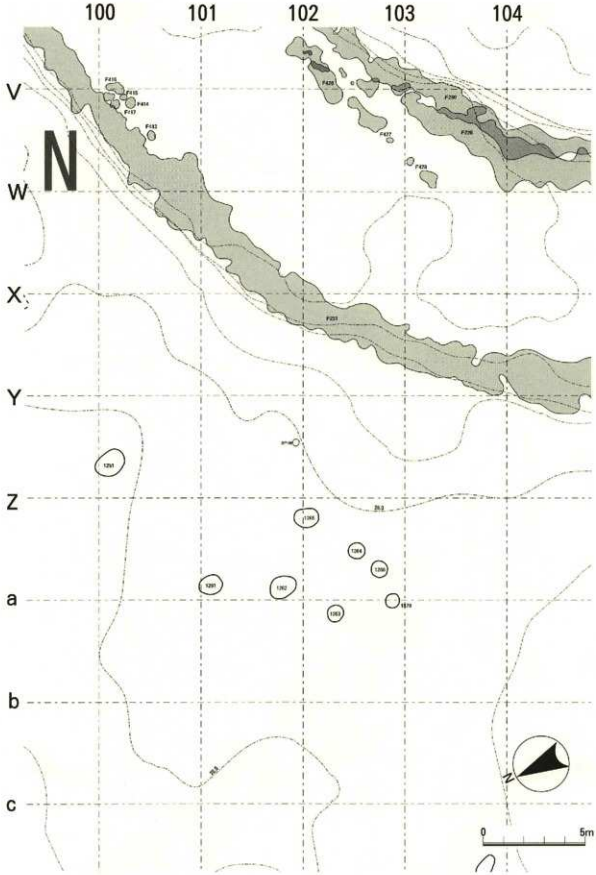
図Ⅲ－20　分割図K



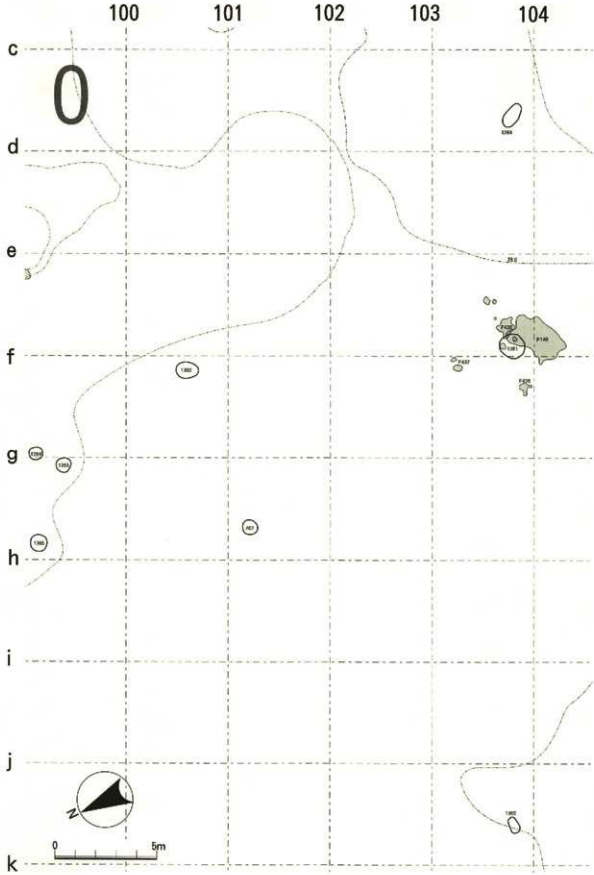
図Ⅲ－21　分割図L



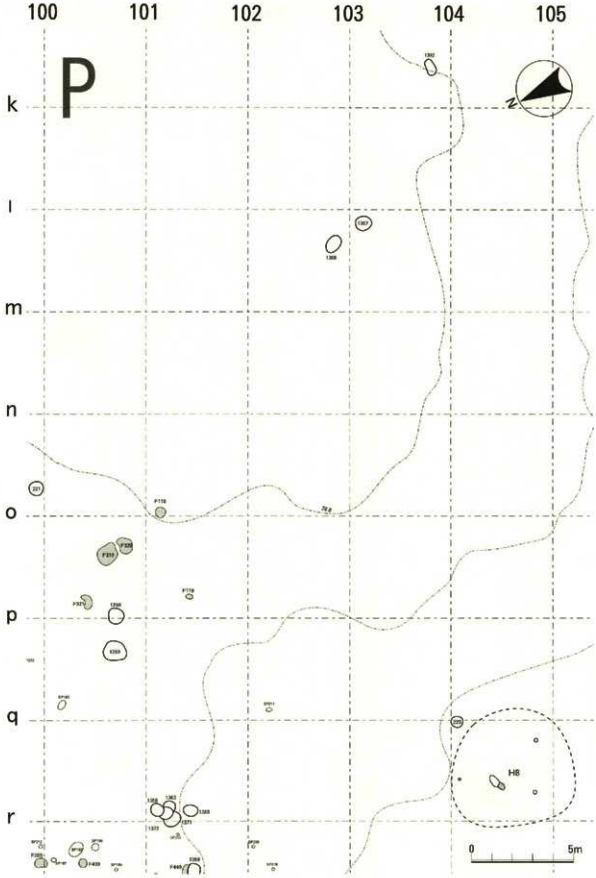
図Ⅲ－22　分割図M



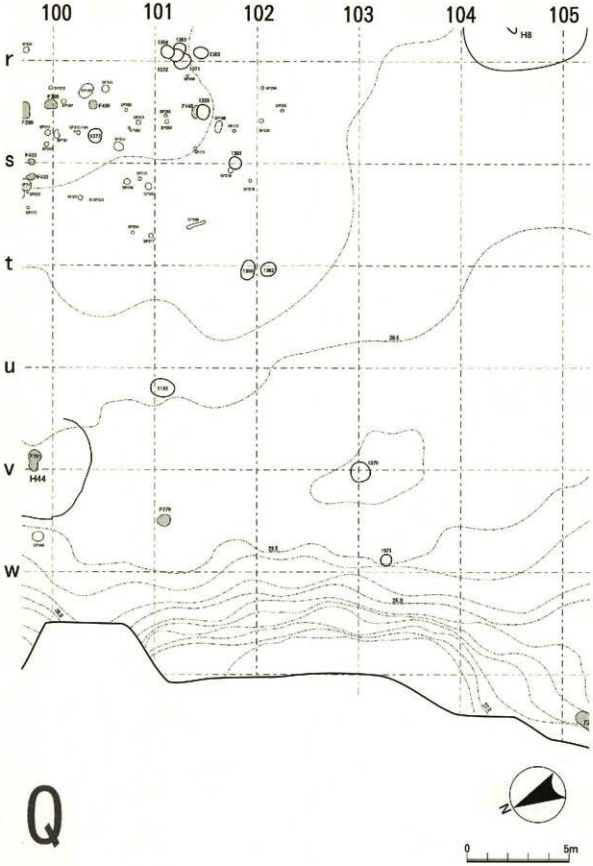
図Ⅲ－23　分割図N



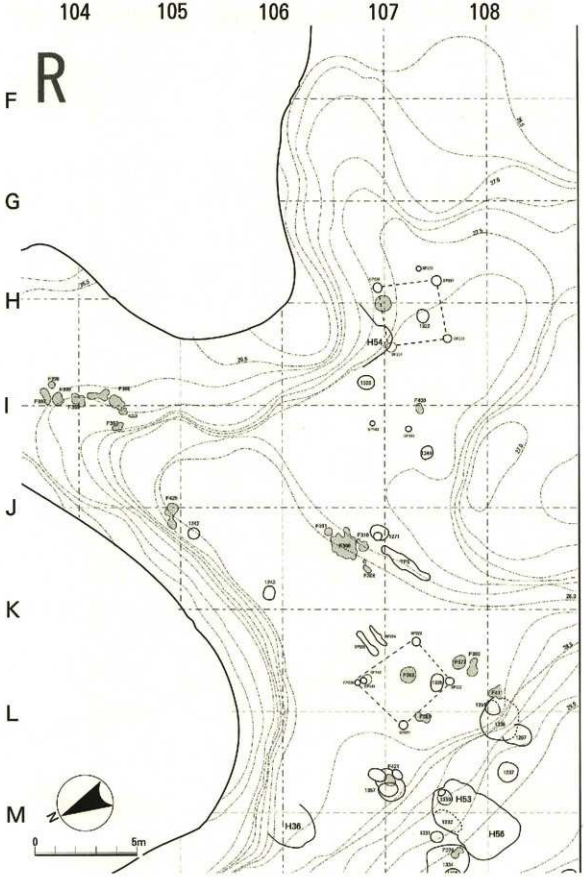
図Ⅲ－24　分割図O



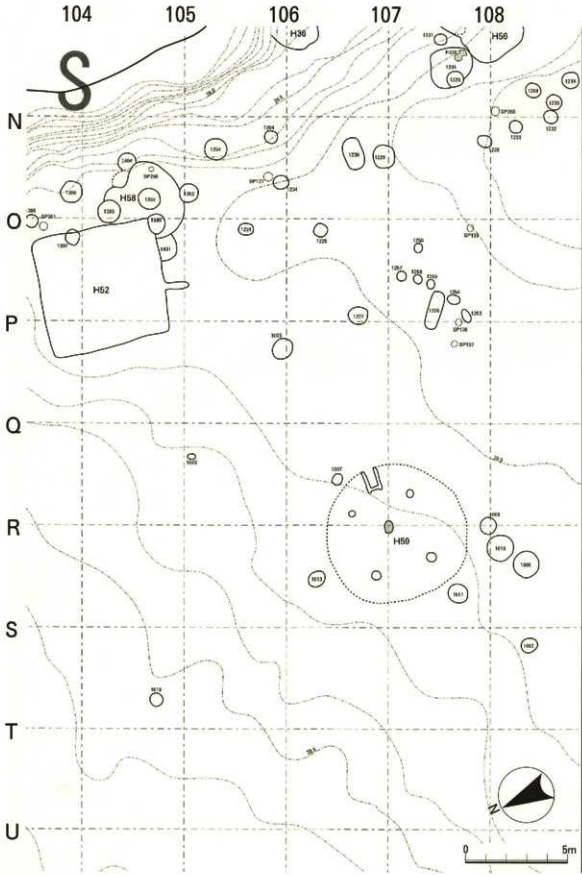
図Ⅲ－25　分割図P



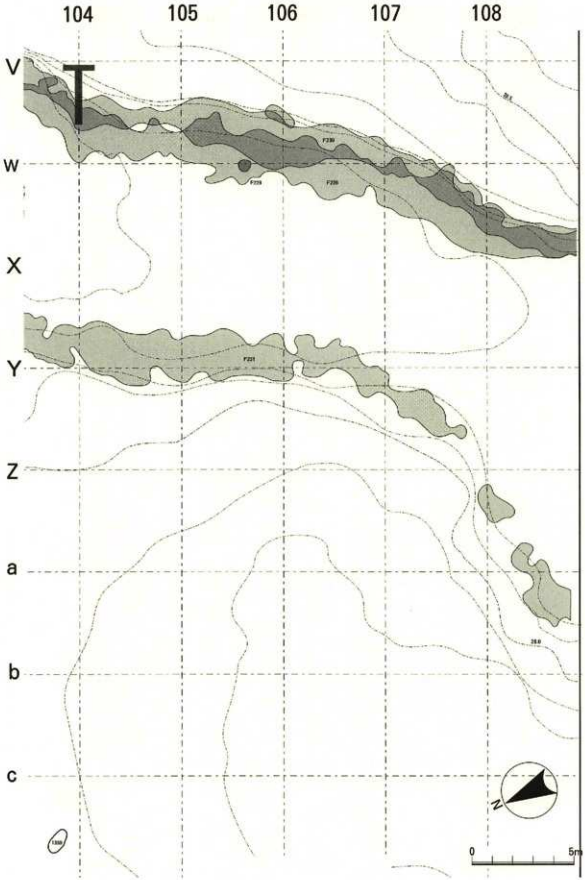
図Ⅲ－26　分割図Q



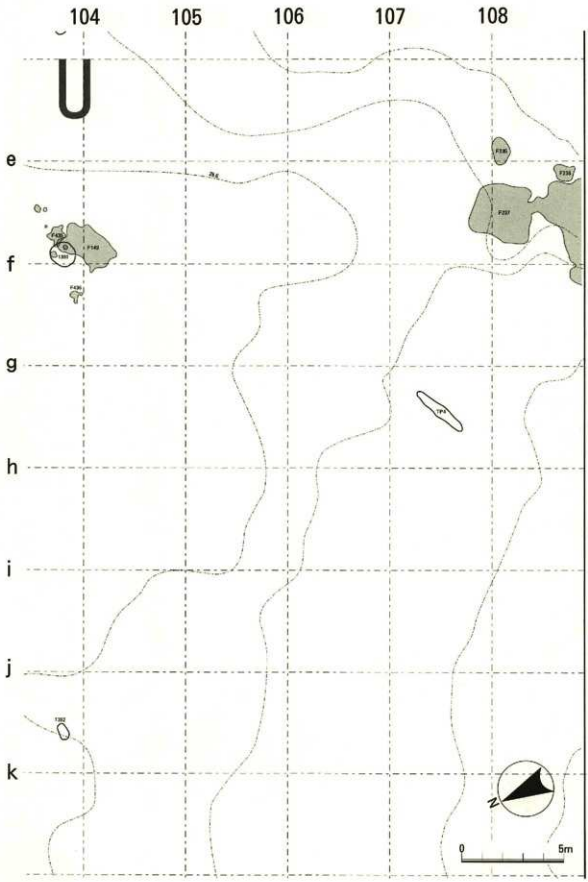
図Ⅲ－27　分割図R



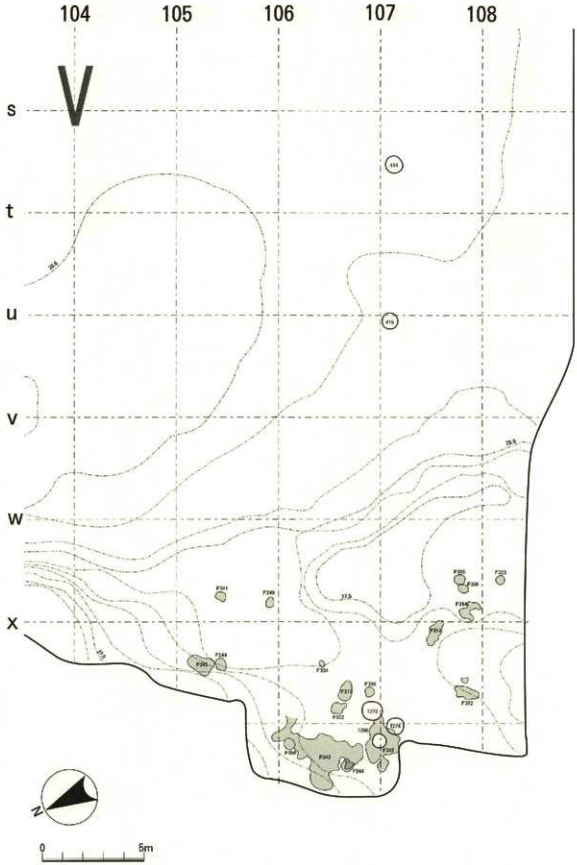
図Ⅲ－28　分割図S



図Ⅲ－29　分割図T


104
105
106
107
108
U
e
f
g
h
i
j
k
F236
F237
F238
F140
F139
F430
TP7
TP2
N
0
5m

図Ⅲ－30　分割図U



図Ⅲ－31　分割図Ⅴ

Ⅳ 遺 構

平成17・18・19年度の調査で検出し、本報告に掲載した遺構は住居址60軒、土坑1,406基、Tピット6基、焼土454ヵ所、小ピット266基である。調査では、このほかに集石3ヵ所、土器集中30ヵ所（少数の個体がつぶれて出土したものと、多数の土器片を特定の場所に捨てたものをさす）、フレイク集中2ヵ所などを調査・記録したが、本報告では未掲載である。出土した遺物は包含層のものと合わせて集計し、一部の出土状況は写真図版に掲載（カラー図版66、67）した。

西島松2遺跡の調査区は東西を河川に挟まれ、たえずその侵食を受けているため、時代の古い遺構ほど調査区縁で一部が失われるものが多かった。近世の墓や擦文時代の住居址は、調査区の地形に沿った分布をしていることから、遺跡の外形が現状に近い時点で造られたものとみられる。しかし、調査区の最も東の柏木川に近い位置で検出された9世紀前半期の54号住居（標高27.5m）は、床面の3分の2が河川の浸食で失われていた。遺構下の斜面にはTa－aの堆積がみられることから、この住居は遅くとも18世紀前半には、浸食されたようである。昭和23年代の空撮で、付近は蛇行する柏木川と隣接しており、斜面下に堆積するシルト層と砂層の互層から遺物は検出されなかった。

調査区縁で最も深く浸食されたとみられるところは、南北73～85のキトウシュメンナイ川に面する調査区西側縁である。その地域は住居址や土坑が密集して分布するが、縁は急勾配で、Ta－aの堆積は無い。斜面下の湿原まで地表は柔らかい腐植土に覆われ、樹木が斜めに生える環境である。遺跡から約200m上流に水源のあるキトウシュメンナイ川が氾濫するとは考えにくいが、調査中の倒木で遺構の半分が崩れた経験から、倒木が斜面を徐々に侵食している可能性はある。付近で検出された遺構には、縄文時代晩期後葉の土坑で一部が欠けるもの（35・245号土坑）や、縄文時代後期中葉の住居址だったとみられるが、大半が無いため土坑としたもの（773号土坑）などがある。縄文時代の遺構で完全に無くなったものもあった可能性がある場所である。同様に斜面付近から検出された土坑で、覆土の一部が斜面に浸食されているものにN－90のP1356や、Y－95のP1405、W・X－94のP1375、a－92のP1370、d－89のP1380、d－86のP971がある。また、調査区内は造成・耕作などでさらに多くの遺構が失われているとみられる。c～h－81～86付近は、本来住居址や土坑の分布密度が最も濃かったと予測されるエリアだが、地形の段差を緩和するためかⅣ層深くまで削平され、土坑の分布が削平で途切れた先に坑底付近のみの墓が2基あり、そのほかはすべて削平されたもようである。西島松3遺跡との境界の南北70～72付近も造成を受けており、浅く残った墓と小ピットしか検出しなかった。調査区南側は台地の縁や複雑な凹凸を除いてⅣ層に達する深さで広く耕作を受けていた。そのために浅い住居址ではH55（擦文時代 標高約28m）とH59（縄文時代後期 標高約29m）が床面以下まで削平され、柱穴などの深い部分が残る状況であった。P719、P757、P850～860、P964～966は楕円形に並ぶ土坑であるが、前期の住居址が床面付近まで削平され壁際の土坑だけが残ったものとみられる。

1 近世墓

近世アイヌ期とみられる墓が3基検出されている。**P262**（図Ⅳ－206 カラー図版41・42・43 図版129）と**P1349**（図Ⅳ－440 カラー図版41・42・43 図版316）、**P1359**（図Ⅳ－443 カラー図版42・43 図版318）である。P262は成人の墓で、平面は約220×80cmの長方形で横幅は足先ほど狭く、伸展葬で頭位は東である。胸上に刀、頭上に刀と刀子、マレックなどが置かれ、足元からは漆器とみられる漆の塗膜片（未掲載）が検出されている。P1349は子供の墓である。規模は約175×36cmの長円形で、伸展葬とみられる。胸上に刀、左脇に刀子と鉤が副葬されている。頭部下面からはニンカリが

検出された。周辺はⅡ層から包含層が残っていたが、火山灰の落ち込みは無く、Ⅲ層面で確認した。当初は小型のTピットと考えていたものである。P1359の規模は約200×55cmの長円形で、坑底面縁に板状の材を打ち込み、木郭とした痕跡の小ピットが並ぶ。伸展葬の左右脇に、刀、マレック、刀子などが副葬される。刀の切先は折られ、足元から出土した。これら3基の墓のうち、後者の2基は調査区縁の半島状に突出した地形付近にある（図Ⅳ－2）ことから、地形を意識して掘られた墓とみられる。

2　撚文時代の遺構

H7（図Ⅳ－8　図版8・9）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

土層：上位（1・2層）は自然堆積層で、下位（3・4・5層）は多量の焼土粒や炭化物を含む層が床面まで堆積している。

床面・壁：床はやや凹凸があり、被熱を受けている。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：南東側の壁やや南よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道は造成により削平されている。

北西側の壁際で杭状の小ピットが2基検出された（HP2・3）。土留めに関連するものと思われる。南東側で浅い土坑が検出された（HP1）。壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。

遺物出土状況：西側で礫・土器片がまとまって出土している。南東隅から土器片・須恵器片・礫が比較的まとまって出土した。縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は南壁から北西側にかけてまとまりがみられる。放射状や井桁状に出土しており、屋根材の一部と考えられる。樹種同定の結果、材質はトネリコとコナラである。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

出土遺物：全てⅦ群土器。1270は甕の胴部破片。外面は斜位に、内面は横位にハケメ調整される。1309は坏の口縁部。内外面ともナデ調整される。1300～1302・1308は須恵器。1308は坏の底部。回転ヘラ切り未調整。1300～1302は甕の破片。外面に叩き目、内面に当て具痕がつく。　（佐藤）

H17（図Ⅳ－18　図版22・23）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。落ち込みのほぼ中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

土層：上位（1層）は自然堆積層で、下位（2・3層）は焼土粒や炭化物を含む層が床面まで堆積している。2層（支笏パミス）は 被熱を受けない土賃きが崩落したものと考えられる。

床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：東側の壁南よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状

態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式で上部は耕作により削平を受けている。中央部で土坑が2基並んで検出された（HP１・２）。いずれも坑底・壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。

構築物ではないが南側の壁際の床面から、灰白色粘土の塊が検出された。HP１・２同様、竈の補修材を備蓄したものと思われる。

遺物出土状況：竈の火床直上から甕が出土した。底面が上を向いた逆さの状態で確認された。

縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は中央部から東側にみられる。樹種同定の結果、材質はハシドイ・トネリコ・ハンノキである。

重複・新旧関係：縄文時代の土坑P564・595・627・628・629・630・634の壁を壊して床・壁が構築されている。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、８世紀後半～９世紀初頭と考えられる。

出土遺物：全てⅦ群土器。1241は甕。口縁部は欠失している。頸部上部が外反し、肩部に段をもつ。体部上位やや張らみをもつ。頸部に多条の横走沈線をもつ。外面は頸部がナデ、体部がハケメ後ヘラ磨き調整される。底部はヘラ切り。1273は甕の胴部破片。外面はヘラケズリ後ハケメ、内面は横位にハケメ調整される。1297は坏の破片。口縁部内傾する。内外面ともヘラミガキ調整される。内面は黒色処理される。（佐藤）

H18（図Ⅳ－19　図版24・25）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。

土層：上位（１層）は自然堆積層で、下位（３・４層）は多量のローム粒や火山灰を含む層が床面まで堆積している。 床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。現代の家屋の土台で床・壁の一部が壊されている。

付属構築物：南西側で浅い土坑が検出された（HP１）。壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。

遺物出土状況：北西側の床面から坏の破片と礫が出土した。

縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は竈の近くで、少量出土したのみである。

重複・新旧関係：縄文時代の土坑P635・676・696・698の壁を壊して壁が構築されている。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、８世紀後半～９世紀初頭と考えられる。

出土遺物：1281はⅦ群土器。坏である。体部下位に稜をもつ。体部はやや内彎する。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。（佐藤）

H19（図Ⅳ－20・21　カラー図版19　図版26・27）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。土層：上位（１層）は自然堆積層で、下位（３・４・５層）は多量の火山

灰や焼土を含む層が床面まで堆積している。
床面・壁：床は凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。北側の床・壁は現代の家屋の土台構築の際に壊されている。
付属構築物：南側の壁西よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙だしの底面に板状の凝灰岩が置かれている。床面で4基の柱穴が確認された。

南西側と北東側で浅い土坑が検出された。南西側のもの（HP６）は壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。北東側のもの（HP５）は性格が不明である。
遺物出土状況：竈の右袖から甕が出土した。東側床面から甕が出土した。遺物は東側から多く出土している。竈の火床から出土した甕の口縁部片がH38住居跡の煙だしから出土した甕と接合した。

縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。

炭化材は攪乱を受けている北側を除き、ほぼ全面にみられる。井桁状に出土しており、屋根材と考えられる。材質は樹種同定の結果、トネリコとカエデである。
重複・新旧関係：縄文時代の遺構H27・P750・910と重複する。
時期：出土したⅦ群の土器からみて、８世紀後半～９世紀初頭と考えられる。
出土遺物：1242～1245・1303・1313はⅦ群土器。１～３は鉄製品である。1242～1245は甕。1242は口縁部と底部が欠失する。頸部くびれ、体部上半膨らむ。内外面とも、頸部ナデ、体部ハケメ調整。頸部に横走沈線が付く。内外面に炭化物付着。1243は口縁部が外反し、体部上半が張らむ。底部は張り出す。外面は体部がヘラミガキ、口縁部がナデ。内面はハケメ調整される。口唇部に刻み目、頸部から口縁部にかけて横走沈線が付く。内面に炭化物付着。1244・1245は底部。1244は内外面ともハケメ調整される。1245はやや張り出す。内外面ともハケメ調整される。1303・1313は須恵器。1303は甕の胴部。外面に叩き目、内面に当て具痕がつく。1313は高台付の坏。１・２は刀子。３は棟に区がある。２は中心が欠失している。３は鉈。（佐藤）

H26（図Ⅳ－26　図版35）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。
土層：上位の層は耕作によって削平されている。下位は多量の焼土・ローム粒・火山灰を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はほぼ平坦である。東側に向かってやや傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。北側の壁の上部は造成時に削平されている。
付属構築物：南東側の壁南よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、つぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙だしに向かって傾斜している。
遺物出土状況：床面から鉄製品と楕円形の礫が出土した。覆土からはⅦ群の土器片が出土した。

縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は床面のほぼ中央から、まとまって出土した。材質は樹種同定の結果、トネリコ・ハシドイ・キハダ・オニグルミである。
重複・新旧関係：縄文時代のH25・32と重複する。

時期：周辺のⅦ群土器期の竪穴住居からみて、8世紀後半～9世中葉と考えられる。
出土遺物：1は鉄製品。棒状の素材と考えられる。（佐藤）

H34（図Ⅳ－35・36　カラー図版16　図版44・45）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。
土層：上位（1・1′・2層）は自然堆積層で、下位（3・4・5層）は多量のローム粒や火山灰を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。
付属構築物：南東側の壁やや南に造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。北東隅の外側で内傾する柱穴が検出された。残りの三隅では木根などの攪乱により検出できなかった。南側の床面で杭状の小ピットが検出された（HP2）。性格は不明である。南東側で浅い土坑が検出された（HP1）。坑底に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。
遺物出土状況：竈周辺から甕・坏・曲げ物が出土した。東側の壁際から甕が2個体まとまって出土した。この2個体の甕（1249・1250）はP1121出土の破片と接合した。北側の床面から紡錘車が出土した。縄文時代の包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は床面から、まばらに出土した。材質は樹種同定の結果、トネリコである。
時期：出土したⅦ群の土器からみて、9世紀初頭～9世紀中葉と考えられる。
出土遺物：1246～1283・1310はⅦ群土器。1246～1250は甕。1246は口縁部が外反し、体部上位が張らむ。底部は張り出す。口端部は凹む。外面は体部から底部にかけてヘケメ後ヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。内面は底部ハケメ、体部から頸部にかけてハケメ後ヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。肩部から頸部にかけて段が付く。口縁部に「U」の字状の圧痕が付く。1247は口縁部が外反し、肩部に段をもつ。口端部は凹む。内外面ともに体部ハケメ、口縁部ナデ調整される。1248は口縁部が外反し、体部上位がやや張らむ。肩部に段をもち、口端部は凹む。内外面ともに体部はハケメ後ヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。口唇部に刻み目が付く。底面に笹の圧痕がある。補修孔が3対ある。1249は口縁部が外反し、体部上位が張らむ。口端部は凹む。外面は体部中位から底部にかけてヘラミガキ、体部上位はハケメ、口縁部はナデ調整される。内面は底部ヘラミガキ、体部ハケメ、口縁部ナデ調整される。頸部から口縁部にかけて横走沈線が付く。内外面に炭化物が付着。1250は口縁部が外反し、体部上位が張らむ。外面は体部ハケメ、口縁部ナデ調整される。内面はハケメ調整される。頸部から口縁部にかけて浅い横走沈線が付く。内外面に炭化物が付着。1282は口縁部が内彎し、体部中位に稜をもつ。平底。内外面伴にヘラミガキされる。内面は黒色処理される。1283は口縁部が内彎する。内外面ともにヘラミガキされる。1310は坏の底部。回転糸切り11・14は土製品。1～9は金属製品。11は紡錘車。断面形は台形。周縁部は肥厚する。14は鞴羽口。先端部は欠失している。体部は筒形で、基部は張り出す。体部上位は被熱により変色している。1～3は刀子。1は切先部。2は茎部。3は切先片・茎片・中心片。4は環状のもので、一部欠失している。5は釣り針とみられるもの。6・7は鉄片。8はカスガイ。断面形が扁平で、小型のものである。9は鋤。1は曲げ物。薄板製で、接着には漆が添付されている。大きさ等から柄杓の可能性がある。（佐藤）

H37（図Ⅳ－39・40　カラー図版17・18　図版47・48・49）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

土層：上位（1・2・3・4層）は自然堆積層で、下位（5・6・7層）は多量の焼土や火山灰・炭化材を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：南側の壁に造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがない。煙道はトンネル式である。東側の床面で小ピットが検出された（HP1）。性格は不明である。西側で浅い土坑が検出された（HP2）。坑底に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。

遺物出土状況：竈周辺から甕・坏がまとまって出土した。北東壁近くで出土した甕の破片はH38出土の底部と接合した（図Ⅴ－155－1254）。須恵器の甕片もH38のものと接合した（図Ⅴ－161－1306）。

縄文時代の包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は竈周辺を除く、ほぼ全面にみられた。井桁状に出土したものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、全てトネリコである。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

出土遺物：全てⅦ群土器。1251～1254は甕。1284・1285は坏。1251は口縁部が外反し、体部中位が脹らむ。肩部に稜をもち、底部は張り出す。内外面ともに体部はヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。1252は口縁部が外反し、体部中位が脹らむ。内外面ともに体部はハケメ、口縁部はナデ調整される。頸部に横走沈線が付く。1253は口縁部が外反し、体部上位が脹らむ。肩部に稜が付く。口端部は凹む。内外面ともに体部はハケメ、口縁部はナデ調整される。頸部から口縁部にかけて横走沈線が付く。1254は頸部が外反し、体部上位が脹らむ。外面は体部上位と下位がハケメ、中位がハケメ後ヘラミガキ、頸部はナデ調整される。内面は体部がハケメ後ヘラミガキ、頸部はナデ調整される。1284は体部下位に浅い沈線による稜が作出されている。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1285は口縁部が内彎し、体部下位に稜をもつ。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1306は須恵器の甕片。（佐藤）

H38（図Ⅳ－41～44　図版50・51・51）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、凹みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定を行った。

土層：上位（1・2・3・4層）は自然堆積層で、下位（5・6・7層）は多量の焼土や火山灰・炭化材を含む層が床面まで堆積している。

堀上げ土：耕作による削平で全体の状況は不明である。南東側は堆積がみられない。

床面・壁：床はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：南側の壁に造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがない。煙道はトンネル式である。

西南北隅の外側で、内傾する柱穴が3基検出された（HP1・2・3）。東側では確認できなかったが外側に4本の柱穴をもつものと考えられる。

北側の床面で、杭状の小ピットが2個検出された（HP４・５）。
遺物出土状況：閉塞された煙だしの中から、甕の破片がまとまって出土した。この土器はH19出土の土器片と接合した（図Ⅴ－154－1253）。北側の床面から出土した甕の底部はH37から出土した体部破片と接合した（図Ⅴ－155－1254）。須恵器片もH37出土のものと接合した（図Ⅴ－161－1306）。
縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は南壁付近の床面から少量出土したのみである。
重複・新旧関係：縄文時代の土坑P1276・1303と重複する。
時期：出土したⅦ群の土器からみて、８世紀後半～９世紀初頭と考えられる。
出土遺物：全てⅦ群土器。1254～1258・1271・1272は甕。1286・1287は坏。1254は口縁部が欠失している。頸部が外反し、体部中位が脹らむ。頸部に横走沈線をもつ。内外面ともに体部はハケメ、口縁部はナデ調整される。1255は口縁部が強く外反する。口端部は凹む。体部は内外面ともハケメ、口縁部は外面がナデ、内面がハケメ調整される。頸部から口縁部にかけて横走沈線が付く。外面に炭化物が厚く付着している。1256は口縁部が外反する。肩部に沈線による段が作出されている。外面は体部がヘラケズリ後ハケメ、口縁部がナデ調整される。内面は体部がハケメ、口縁部がナデ調整される。1257は口縁部が外反する。肩部に綾をもつ。内外面ともに体部はヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。1271は小型の甕の破片。肩部に段をもつ。頸部上位外反する。内外面とも体部ヘラミガキ、頸部ナデ調整される。頸部に横走沈線が付く。1272は頸部が外反し、体部上位が脹らむ。外面は体部上位と下位がハケメ、中位がハケメ後ヘラミガキ、頸部はナデ調整される。内面は体部がハケメ後ヘラミガキ、頸部はナデ調整される。1258は底部。底面に砂粒の圧痕がある。1286は口縁部がやや内彎し、体部下位に沈線による稜が作出されている。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1287は口縁部がやや外反し、体部に沈線による稜が作出されている。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1304～1306は須恵器の甕。外面に叩き目、内面に当て具痕がつく。１は紡錘車の軸。鉄製の角棒である。（佐藤）

H40（図Ⅳ－47・48　カラー図版19　図版54・55）
確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。
土層：上位（１層）は自然堆積層で、下位（２・３層）は多量の焼土や火山灰・炭化材を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。壁の上部は耕作により削平されている。付属構築物：北東側で浅い土坑が検出された（HP１）。壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。遺物出土状況：小型の甕が竈の端から出土した。
縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。
炭化材は床面のほぼ全面にみられる。放射状や井桁状に出土したものは、屋根材の一部と考えられる。北側の床面に炭化した「むしろ」状のものがみられる。材質は樹種同定の結果、全てトネリコである。重複・新旧関係：縄文時代の土坑P1364・1365・1366・1367と重複する。
時期：出土したⅦ群の土器からみて、９世紀初頭～９世紀中葉と考えられる。
出土遺物：全てⅦ群土器。1259は小型の甕。頸部がくびれ、口縁部が垂直気味に立ち上がる。体部はヘラミガキ、頸部はナデ調整される。内面は体部がハケメ、頸部はナデ調整される。1298は坏の口縁部。口縁部がやや内彎する。内外面ともにヘラミガキ調整される。体部に沈線が付く。内面黒色処理される。（佐藤）

H41（図Ⅳ－49・50　図版55・56）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

土層：：上位（1・2・3・4層）は自然堆積層で、下位（5・6・7層）は多量の焼土粒を含む層が堆積している。床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：東側南よりで浅い土坑が検出された（HP1）。坑底に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。遺物出土状況：東側の竈袖付近から、坏が一個体出土した。南側の床面から甕が伏せた状態で出土した。縄文時代の包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。

炭化材は東側と西側にまとまってみられる。材質は樹種同定の結果、全てトネリコである。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

出土遺物：全てⅦ群土器。1260は小型の甕。口縁部は外反し、底部は張り出す。口端部は凹む。内外面とも、体部はヘラミガキ、口縁部はナデ調整される。1288は坏である。口縁部がほぼ垂直にたちあがり、体部中位に沈線による稜が作出されている。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1274は甕の口縁部。口唇部が凹み、肩部に段をもおつ。内外面体部がハケメ、口縁部ナデ調整される。頚部に横走沈線沈線が付く。1275は甕の頚部。体部はやや脹らむ。頚部に横走沈線が付く。内外面ともに体部がハケメ、頚部がナデ調整される。1276は甕の胴部。内外面ともにハケメ調整される。1は刀子の茎。　（佐藤）

H45（図Ⅳ－54　図版60）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。土層：上位（1・2・3層）は自然堆積層で、下位（4・5・6層）は多量の焼土粒を含む層が堆積している。床面・壁：やや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

付属構築物：床面中央やや東側に浅い掘り込みを持つ炉跡が検出された。遺物出土状況：東側床面から甕と坏が出土した。甕は潰れた状態で、坏は完形で出土した。　縄文時代の包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。

炭化材は中央部でまばらにみられる。材質は樹種同定の結果、全てトネリコである。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、8世紀後半～9世紀初頭と考えられる

出土遺物：全てⅦ群土器。1261は甕。口縁部は外反する。肩部に段を持つ。外面の体部はハケメ、口縁部はナデ調整される。内面の体部はハケメ、口縁部はハケメ後にヘラミガキされる。内外面に炭化物付着。1289は坏。口縁部やや外反する。体部上位に段をもつ。平底。外面は体部がハケメ後ヘラミガキ、口縁部と内面はヘラミガキ調整される。内面は黒色処理される。　（佐藤）

H47（図Ⅳ－56　図版64・65）

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みと焚口の焼土を確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確

認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。土層：上位（1・2層）は自然堆積層で、下位（3・4・5層）は多量の焼土粒を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はやや凹凸があり、南側に向かい緩く傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。北東側の壁・床は耕作によって削平されている。
付属構築物：東側の壁南よりに造りつけの竈がある。袖は灰白色の粘土で造られている。煙道の上部は耕作によって削平されている。南側で土坑が検出された（HP 1）。坑底・壁に灰白色粘土が残っており、竈の補修材を備蓄した施設の可能性がある。構築物ではないが北側の壁際の床面から、灰白色粘土の塊が検出された。HP 1 同様、竈の補修材を備蓄したものと思われる。遺物出土状況：煙道基部から、土器片が床面やや南西側から礫が出土した。　縄文時代の包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が出土した。　炭化材は東側にまとまってみられる。井桁状のものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、ハシドイ・トネリコ・コナラ・ハンノキである。時期：出土したⅦ群の土器の時期からみて、8 世紀後半～ 9 世紀初頭と考えられる
出土遺物：1278はⅦ群土器。小型甕の胴部。外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメ調整される。

（佐藤）

H48（図Ⅳ－57・58　図版66・67）
確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。土層：上位（1・2・3・4・5層）は自然堆積層で、下位（6・7・8・9・10・11・12・13層）は多量の焼土粒を含む層が床面まで堆積している。床面・壁：床はやや凹凸があり、北側に向かい緩く傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。
付属構築物：南側の壁西よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがない。煙道はトンネル式である。煙だしに向かって傾斜している。
　構築物ではないが南側と南東側の壁際の床面から、灰白色粘土の塊が検出された。竈の補修材を備蓄したものと思われる。遺物出土状況：北西側の床面から紡錘車が出土した。
　縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は東側を除きほぼ全面にみられる。井桁状のものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、トネリコ・ハシドイ・オニグルミである。
重複・新旧関係：縄文時代の焼土F451と重複する。
時期：出土したⅦ群の土器からみて、8 世紀後半～ 9 世紀初頭と考えられる。
出土遺物：1279はⅦ群土器。甕の口縁部。内外面ナデ調整される。横走沈線と口唇部に短刻文が付く。12は紡錘車。断面形は台形。軸孔周辺と周縁部は肥厚する。　（佐藤）

H52（図Ⅳ－63～65　図版69～71）
確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、Ta－a火山灰と黒色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。竈と床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。土層：上位（1・2層）は自然堆積層で、下位（3・4・5・6・7・8・9層）は多量の焼土粒・火山灰を含む層が床面まで堆積している。

床面・壁：床はやや凹凸があり、北西側に向かい傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。
付属構築物：南側の壁西よりに造りつけの竈がある。灰白色の粘土を用いており、つぶされた状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙だしに向かい傾斜している。

床面で4基の柱穴が確認された（HP1・2・3・4）。

構築物ではないが南東側の壁際の床面から、灰白色粘土の塊が検出された。竈の補修材を備蓄したものと思われる。遺物出土状況：竈の左袖から甕が一個体出土した。南壁際・東側覆土・北側覆土から坏が一個ずつ出土した。南壁西よりの床面から紡錘車が出土した。

縄文時代の遺構・包含層を壊して竪穴が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。炭化材は東側を除きほぼ全面にみられる。井桁状のものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、全てトネリコである。
重複・新旧関係：縄文時代の土坑P1396・1397・1401と重複する。時期：出土したⅦ群の土器からみて、9世紀初頭～9世紀中葉と考えられる。
出土遺物：1264・1290～1292はⅦ群土器。1264は甕。1290～1292は坏。1264は口縁部が外反する。肩部に沈線による稜を持つ。外面の体部はハケメ後ヘラミガキ、口縁部はハケメ後ナデ調整される。内面の体部はハケメ、口縁部はハケメ後にナデ調整される。頸部に横走沈線が付く。1290は底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部はやや内彎する。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1291は底部から口縁部にかけて直線的に拡がる。平底。内外面ともにヘラミガキ調整される。内面は黒色処理されている。1292は体部がやや内彎する。回転糸切り。ロクロ整形。内面は黒色処理されている。13は紡錘車。断面形は台形。軸孔周辺と周縁部は肥厚する。片面には刺突文がつく。ヘラミガキ調整される。（佐藤）

H54（図Ⅳ－67～70　図版74～76）

調査区内の未着手地域の状況を広くつかむ目的で、平成18年10月からグリッド単位で飛び地の調査をした際、H－107杭の表土直下のⅡ層面ら直径約70cmの円形の焼土が検出された。調査を進めると、直下から礫や土器片を検出、これを取り上げたところ、下に焼土層・灰白色粘土層・その混土層が続くことが確認され、この時点で土坑とし、調査を続けた。下位からは大型の凝灰岩複数が現れ、断面実測後に完掘を試みたところ、凝灰岩は側板・天板状に組まれた状態で、斜面に向かい続くことが確認された。平成18年の調査は終盤であったため、この時点で越冬し、翌年6月12日から調査を再開した。まず、斜面の表土を除去し広く精査すると、斜面からも焼土の広がりやまとまった土器片が検出される。断面に天板状の礫が入る位置で十字にセクションを設定し調査を進めると、河川に浸食された擦文時代の住居址とわかりH54とする。覆土上位には樽前a降下軽石層が堆積し、斜面にも続くことから、18世紀前半には浸食を受けていたと考えられるが、斜面下に堆積する黒色土層中にB－Tm（詳細不明）とみられる堆積もみられることから、より古い時期に浸食されていた可能性がある。床面はⅣ層をわずかに掘り下げ、煙道は溝状に掘られている。煙道の側壁に板状礫を2点立て、その上に大型の板状礫を重ね、白色粘土と土器片で隙間を充填し、そのまま竈まで作りだしたものとみられる。煙道の上部は強く被熱し、焼土が広がり、土器片も変色している。

方形だったとみられる住居址は竈右側の角しか残っていなかったが、そこから推測すると1辺が4m以下の小規模なカリンバ形の住居址であったとみられる。また、住居の角付近には炭化材が検出されており、焼失家屋だったとみられる。

遺物は甕6点、坏4点が検出されたが、出土状況から、1265の甕が、唯一住居址内の竈左側壁際か

ら出土したもので、残りはすべて煙道構築の際に使われた土器だったとみられる。坏4点のうち3点がロクロ成形で、1280の甕口縁部には×字に沈線が刻まれている。

遺物から、本住居址は9世紀前半期のものとみられる。 (土肥)

H55（図Ⅳ－71　図版77）

グリッド東西方向に深く入るプラウの耕作跡を除去しているところ煙道の下部と火床の痕跡がみつかり、確認された。床面以下まで削平されているが、火床の焼土や、床面の汚れがわずかに残っている所があることから、比較的床面のレベルに近い削平を受けたとみられる。付近を精査すると東西240・280cm、南北320・340cmの間隔で方形に並ぶ柱穴を検出した。柱穴の平面は隅丸方形で、30～40cmの深さが残っていた。破線で示した平面の大きさは、柱穴から壁面が1m離れた状態を推定したものである。煙道の断面火床寄りには灰白色の粘土が入り、竈は粘土で作られていた模様である。

擦文期の遺物は出土していないが、付近の住居址との比較から9世紀代とみられる。 (土肥)

P1121（図Ⅳ－385　図版275）

Ⅲ層まで包含層を下げたところ、残る黒色土中に擦文期の破片が見えていることから付近を精査し検出した。遺存する深さは10cm以下と浅いが、比較的まとまった2点の甕（図Ⅴ－154　1249、1250）の破片が検出され、いずれもH34出土の破片と接合した。1249はH34から34点、本土坑から9点、包含層から1点が接合している。1250はH34から1点、本土坑から9点が接合している。いずれも9世紀前半期とみられる。

焼土　調査区は全般に削平され、平坦面には擦文時代と考えられる焼土は少なかった。454カ所検出された焼土のうち、擦文期とみられるものはわずか3カ所のF94、F205、F233である。このうちF205・233はトレンチ調査で分割され、もともと同じ焼土であった可能性がある。

3　縄文時代の遺構

確認できた縄文期の遺構は住居址1軒、土坑76基、焼土40カ所などである。

H35（図Ⅳ－37　カラー図版14）は平成18年度と19年度の調査区境に位置し、18年度の調査区端で見つかった縄文時代晩期末の墓P710を次年度範囲に食い込んで調査した際、周囲に遺構があることがわかり、19年度の調査で検出したものである。掘り込みはⅣ層が出た時点で止め、平坦面を作り出している。覆土は自然堆積で上位には黒褐色や黒色のⅡa層が落ち込むが、火山灰の落ち込みは一切認められない。また、プランの中央付近で縄文時代晩期後葉の土坑P1140を切ることが判明した。覆土下位からは図Ⅴ－145－1182の破片が出土、縄文前半期の竪穴とみられるが、規模を除けば住居址であった可能性は低い。H35付近には縄文とみられる土坑が3基検出されているが、これもH35と関連する遺構であった可能性もある。同様の遺構に**P1309**（図Ⅳ－431　カラー図版15　図版308・309）がある。平面は長円形で、自然堆積の覆土には黒褐色や黒色のⅡa層が落ち込むが、火山灰の落ち込みは一切認められず、プランの中央付近で縄文時代晩期後葉の土坑P1318を切る。覆土中位からは後北C_2・D式や赤穴式相当の破片が出土している。規模が小さいことから土坑としたが、H35と特徴が似ていることから同時期の遺構と考える。

墓はP46（図Ⅳ－159　カラー図版40　図版92）とP806（図Ⅳ－321　カラー図版41　図版221）がある。前者は縄文前半期の2体合葬墓で、抗底部付近まで削平を受ける。頭位は東で、抗底面には

ベンガラが散布され、石斧2点、礫石器、礫（図Ⅴ－169、170）小型の土器（図Ⅴ－40－1110）が副葬されていた。後者は後北C_2・D式期相当の墓で、やはり坑底部付近まで削平され、覆土から深鉢（図Ⅴ－150－1206）坑底面からは口縁部を打ち欠いた小型の鉢（図Ⅴ－148－1200）が出土した。続縄文期の土坑の覆土上部は自然堆積の土層で、Ⅱb層の落ち込みが無いことから確認がむずかしく、縄文時代の遺構を調査中に、それを切る遺構として検出したP129、1207や、坑底部に入っていた土器が出土したことから確認したP1054などがある。礫が入る例も多く、このような土坑で土器は出土していないが、礫があることから後北C_2・D式期相当の土坑と考えたものも多い。

4　縄文時代の遺構

確認できた縄文時代の遺構は住居址43軒、土坑1,326基、Tピット6カ所、焼土411カ所、小ピット266カ所である。

住居址で多く検出されたものに、縄文時代前期後半期のものが、12軒ある。いずれもⅣ層をあまり深く掘り込まず、覆土のほとんどが黒褐色土層である。その分布は調査区を東西に横切るゆるやかな谷地形に沿って並ぶH20～22、H24・29・30、のほか、やや西側に離れて位置する長円形のH32・39とこれと同様の住居址だったとみられる長円形に並ぶ土坑群P719、P757、P850～860、調査区の東側で単独で見つかったH36、調査区西側縁で見つかったH９・12などである。時期はH36が大麻Ⅴ式相当で、残りは植苗式相当のものとみられるが、その分布や住居の形態差から時期差があるものとみられる。

縄文時代後期の住居址は14軒が検出されている。時期別では手稲式相当のものが８軒、ホッケマ式相当のものが２軒、調査区西側縁に沿った分布をする。調査区東側からはウサクマイC式相当の住居址が１軒検出された。手稲式の住居としたH46・49・50は複雑に重なる楕円形の大型土坑３基と土坑１基ともみえるが、規模から住居址としたものである。小規模ながら似た例で、手稲式相当の土坑P723・730・767がある。これらの土坑には遺物を伴うが、外形から複雑な土坑の切り合いと考えた。後期の住居址には出入口の構造の痕跡が見つかったものが５軒見あり、その時期も、ウサクマイC式からホッケマ式の間にみられる。

中期の住居址は７軒確認され、いずれも中期中葉のものとみられる。分布は調査区北側に集中する。

土坑は時期不明のものも合わせて1,326基が検出されている。このうち最も多く検出されたものが縄文時代晩期のもので、853基が検出された。これらの中には墓と土坑が含まれるが、形態から墓と土坑を次のようにふけた（図Ⅲ－７参照）。

墓は平面形が楕円形（小判型）で、その覆土は包含層の混土で、埋め戻されたものである。また、被葬者の痕跡が残っているものも多く、副葬品はその上部と坑底面に分かれて検出されるものもあった。墓と分類したものは39基あり、頭位はおおむね南向きである。残りが良く上部の副葬品が残っていたものに、P144・1196・1223がある。P144は調査中に上部から小型の浅鉢が検出され、記録したが、後の整理で、上部から回収した細かい土器片から小型の舟形土器２点と浅鉢１点が復元され、上部に４点の土器が副葬されていたことが判明した。P1196の上部からは石鏃20点と小型の浅鉢２点が検出されている。P1223の上部は13,000点を超える土器片で覆われており、その土器片を取り除くと、下から口縁部を下向きに置かれている小型の台付鉢が並んで検出され、その下には薄くベンガラの散布も確認された。後の整理で、付近から台付鉢７点、浅鉢２点、舟形土器１点が復元された。坑底面出土の副葬品で装身具はP1223の被葬者頭部付近からヒスイの丸玉が１点、P1251から首飾りの臼玉69点が検出された２例である。

坑底面には石斧、石器類、砥石類、薄片類、錘石、土器などが副葬されていた。

石斧はP1195から8点、P1196から5点とまとまって検出されている。P1196の被葬者脇からは袋詰めされたとみられる薄片144点がまとまって検出され、これとは別に被葬者下に散布されたとみられる薄片がみつかっている。産地分析では、袋詰めのものほとんどが白滝産で、接合はしないことから良い剥片を選んだものなのに対し、散布されたものには赤井川産の黒曜石が混じっていた。遺体下に薄片を散布する例はP624でもみられ、出土した薄片は接合したことから、遺体を安置する直前に細かく割って散布した模様である。P624の遺体脇には軽石製の砥石4点と矢柄研磨器2点が割られた状態で積まれていた。4点の砥石は石質と厚みが極めて類似することから、もともと一つの石を4分割して作った可能性が高い。まとまった剥片石器が検出されたものに、P2とP623がある。P2の坑底部からは石斧2点、ナイフ、スクレイパー類8点が被葬者の胸部付近から検出され、P623は本遺跡の晩期の墓では唯一の合葬墓で、向かって右側の被葬者の胸部付近に頁岩製と黒曜石性の大型ナイフが2点、石鏃2点などが副葬されていた。

錘石は本遺跡から6点検出されているが、そのうちの4点が墓の副葬品でみつかっている。P710・1261（P1261は遺体が残っていないため推測である）は足元に1点、P623は被葬者の頭側と足元に1点ずつの錘石が置かれていた。また、墓の坑底面長軸端に小ピットが確認されたものにP743・1195・1196・1206がある。

P70の坑底面からは石斧と赤彩された土器が検出されているが、この土器は形態から晩期の最末期とみられる。晩期末の墓で坑底面に土器が副葬される例が少ない中、このような出土例は、後の続縄文期の葬送儀礼につながるものとみられる。

晩期の土坑は814基検出された。その時期は、中葉の破片が検出されたP1174や古手の破片がまとまって検出されたP1354など、時期幅はあるようであるが、大半は後葉から末葉にかけての緑ケ岡式併行期のものとみられる。遺跡は耕作などの削平を受けているため削平の度合いと覆土の関係で、さらにA～Dの4段階に分類し、これを表記した。晩期の土坑には掘り具の当たりの痕跡が、坑底面や壁面のⅣ層部分に残っているものが多く、D分類の土坑では遺物が検出されないものがあるが、このような痕跡がみられるものは晩期の土坑としている。

模式図では、土坑の上部は自然堆積により埋まっている例を用いたが、切りあうほど密集して掘られた土坑群なので、実際は覆土に人為的な土砂が流入した例も少なくない。（P21・347・749・753・1297など）そもそもⅡb層自体が人為的な土層で土器片を多量に含む盛土状となっているところもあり、そういった場所に掘られた土坑は完全にⅡb層起源の土砂で埋まっている場合がある。（P169・170など）土坑からは多数の遺物が出土するが、これらの遺物をどう解釈するかを模式的に表したものが図Ⅲ－7の下段である。覆土上位のⅡa層に遺物が入っている例では、P564の上部に入る礫群や、P542の上層からは図Ⅴ－140－1109の続縄文期の壷の口縁部が出土している。

土坑に流れ込んだとみられる遺物には比較的まとまっているものがある。P145からは図Ⅴ－34－245の深鉢と、図Ⅴ－234－99の錘石が出土している。P235からは図Ⅴ－37－252の深鉢が、P420からは図Ⅴ－88－580の壷形土器が検出されている。P540からは図Ⅴ－49－312の深鉢が、P760からは図Ⅴ－85－569の壷形土器の大型片が、P863からは図Ⅴ－56－390の深鉢が検出されている。出土した土器は復元されたが、口縁部が完全に無いものや口縁部～底まであっても全体の半分が欠けているものなど、流れ込みの遺物がある程度まとまっていた様相を呈する。

坑底部の土層に入っていた遺物では、P257から図Ⅴ－46－307の深鉢と図Ⅴ－85－570の壷が供伴して出土。P290からは図Ⅴ－116－923の浅鉢、P380からは図Ⅴ－71－465の深鉢、P493からは（図Ⅳ－

104参照）253と467の深鉢が出土。P651からは図Ⅴ－48－310の深鉢、P749からは図Ⅴ－70－463と図Ⅴ－80－532の深鉢、P803からは図Ⅴ－45－305の深鉢と図Ⅴ－129－981浅鉢片、P1114からは図Ⅴ－58－394の深鉢と、図Ⅴ－87－579の壺形土器が出土している。坑底部から出土した土器には、完形に復元されたものや、口縁部あるいは底部を打ち欠いた状況の深鉢など、意図して壊したものが入れられる傾向ある。土坑から出土する土器は日常的な器形がほとんどだが、墓の副葬品からは、副葬用に作られた小型の土器が出土する。

また、特殊な例で、P1399の覆土上部には大量の焼骨を含む焼土層と土器片が入っていた。土器は図Ⅴ－57－391と図Ⅴ－70－464の深鉢で、焼骨を回収するため土壌水洗を行ったところ図Ⅴ－229－77～80の４点の琥珀玉が検出された。玉はいずれも琥珀の原石に穿孔を加えたものである。土坑の上部に焼骨を含む焼土が重なる例はあるが、大量の焼骨と土器、琥珀玉の出土状況はきわめて祭司的で、下位の土坑と関連する遺構かは不明である。

これらの土坑の分布には、同時期の墓域を避けている傾向がみられる。それは、これらの土坑が墓を意識した場所に掘られていることで、墓と関連する遺構とみることが出来そうである。土坑の覆土には火山灰の堆積がみられるもの多くあり、墓の周辺には窪んだ状態の穴が同時に幾つもあったことを示している。数的には墓の20倍はある土坑群が何の目的のため掘られたのかは不明である。

縄文時代後期では、堂林期とみられる墓が、２基１組で分布する状況がみられた（図Ⅳ－２）。

坑底面にはベンガラが敷かれ、P1315（図Ⅳ－284）の覆土中位には大型の礫が９点敷き詰められており、その中には石皿が含まれていた（図Ⅴ－209－P1315－１・２）。

Tピットは６基が検出された。本遺跡は集落として利用されていたため、Tピットの検出数は少ない。その分布もまばらで、それぞれが100m以上離れた分布である。

焼土はその場で焼かれたものと、調査区内の緩斜面に大量の焼土の廃棄が確認された。これら廃棄焼土中には被熱した前期の土器片が混じることから、同時期のものとみられるが、住居址は削平のため失われているものとみられる。

Ⅴ 遺 物

1 土 器（図Ⅴ－1～ 図Ⅴ－161 第3分冊）

土器は345,702点出土した。内訳は縄文時代早期3,520点、前期15,941点、中期19,851点、後期74,274点、晩期221,051点、続縄文8,634点、擦文時代2,431点である。出土している土器の約3分の2が縄文時代晩期の破片である。

縄文時代早期 1、2は前半期のアルトリ式相当の破片である。早期前半期の遺物はアルトリ式が最も古いものだが、出土量は総量でも21点と少ない。3～11は東釧路Ⅱ式からⅢ式の破片である。器面には縄文、縄線文が施され、10の底部周辺にはツメによる圧痕がめぐる。9は絡縄帯圧痕文が施される東釧路Ⅲ式の底部片である。12、13はコッタロ式の復元個体で、H6の床面から出土したもので、13は口縁部内側に縄線文が施される。14～16は中茶路式相当の同一個体片である。いずれも調査区東側を東西方向に横切る沢底のシルト層からまとまって検出されたもの。17～19は東釧路Ⅳ式相当の破片である。17は中茶路式と同じシルト層から出土したもの。

縄文時代前期 20は綱文式相当の破片である。西島松2・3・5遺跡を通じて綱文式相当の出土量は少ない。21～29は静内中野式相当の破片である。26は尖底の底部片。27～29は同一個体片で調査区東端の南側の低地部の落ち込みから検出された。内面の口縁部付近にも縄文が施される。30～93は縄文時代前期後半の破片である。おおむね30～49と底部片の86～93が植苗式相当、50～85が大麻Ⅴ式相当の破片である。30～31は植苗式相当の破片である。器面は縄文を施した後に磨かれる。32～44は口縁部に貼付帯が施されるもので、32はH21の床面から一括で検出されたもので、内面底まで縄文が施される。34・35と38・39はそれぞれ同一個体で、38・39は内外面に撚糸文が施される。40・41は横に施文された羽状縄文が施されることから、大麻Ⅴ式相当の破片とみられる。45は器面に絡縄帯回転文が施されることから前期の破片と考えたが、後期前葉にも類似する文様がみられる。46は表面のほとんどが剥離しているが、口唇部に1条の縄線文、口縁部に鋸歯状の縄線文、内面には縄文が施されるのがわかる。47～75は口縁部に縄線文が施されるもので、48・49はH32の床面付近からまとまって出土したもの。50はP115から、51はH36からまとまって出土したもの。H36からはこのほかに73・75・82が出土している。54・74・79・84はH30の床面付近から、93はP986から一括で出土したものである。植苗式は縄文の施文の方向が定まらない傾向があるが、大麻Ⅴ式では、横位の羽状縄文が施されるものが現れ、口縁部の角を肥厚させ、内面が無紋のものが現れる傾向がみられる。

94～130は縄文時代中期の破片である。94～101は円筒上層式相当の破片で、ほとんどが調査区北側の川砂利層から出土したものである。102～107は萩ヶ岡2式相当、106～113は天神山式相当で、112と113は同一固体である。114、115、123は柏木川式相当の破片、116～122は北筒式相当である。

125はミニチュア土器で、前期の住居址H21の覆土から検出された。中期後半の土器とみられるが、具体的な時期は不明である。126はH13と周辺の包含層から出土したもので、北筒式に相当する。127は内面に磨きが施されることから円筒上層式相当の底部片とみられる。129はH1の覆土下位から検出された底部片で、中期後半期のものとみられる。

131～202は縄文時代後期の資料である。131・134・135は余市式である。132・133はH8の土器片囲い炉から検出されたタプコプ式相当の破片で、133の内面には縄文が施される。炉からはやや浮いて143の破片が検出されている。136は手稲砂山式相当の破片である。137～144・160は白坂3式相当の破片である。138はP654の覆土に倒れて入っていたもの。145～159・161～163はウサクマイC式相当の破片である。146はH58の床面とそれを切る晩期の土坑P1353から検出された。148はH5の破片

とSP50の破片が接合したもの。149はSP256に口縁部の一部を打ち欠いた状態で入っていたもの。159はP396に入っていた底部片である。164～186は手稲式相当の破片である。164・173はP730坑底部に石皿とともにはいっていた（図Ⅳ－155）。166は底部を欠くがP1210の坑底付近でまとまって出土した破片である。167は調査区縁で切られるH28の覆土から出土した。口縁部は打ちかかれ、肩部に1ヵ所の補修孔がある。171はSP62の検出面上で倒れて検出、172はP1299内の多量に出土した破片の中で復元されたもので、同じ土坑から177・178の破片も出土している。174・175はP1065の覆土上位から175と石皿片が、坑底面から174が出土したものである（図Ⅳ－224）。179と183はH44の床面と炉から出土、覆土からは194の破片も出土している。181はH51の覆土から出土。187・188・193・194はホッケマ式相当の破片である。187はH23の床面から、193は同じ住居の壁よりのやや浮いた位置から出土、口縁部が打ちかかれた単孔式土器である。188はH43の床面から出土した注口土器の口縁部片である。189～192はエリモB式相当の破片で、調査区西側の斜面から検出された。195は調査区東側のO－102の包含層から一括で出土したもので、堂林式としたが、底部が平らなことや器壁が厚いことなどエリモB式相当の特徴がみられる（カラー図版67）。図Ⅴ－31は堂林式相当の破片である。晩期の土坑が集中する調査区北側から出土しているため、さまざまな遺構の遺物が含まれるが、包含層の遺物の流れ込みとみられる。これらは堂林式の中段階から新段階のものである。

図Ⅴ－32～図Ⅴ－138には縄文時代晩期の資料を掲載した。縄文時代晩期の土器の出土分布図を表Ⅳ－16に示したが、その出土状況からも土器捨て場とみられるブロックが確認できる。

1つはR・S－100のグリッドで、付近に晩期の遺構は無いが、25,000点にのぼる土器片が検出されている。上器の集中する場所では焼骨も多量に出土する傾向があり、R－100からは焼骨1609.4gが回収されている。その一方で石器類の出土量が500点と少ない傾向がある。

もう1つは、i－78・79付近を中心にした範囲で、付近から4万点近い土器と、3359.5グラムの焼骨片が回収されている。この付近は晩期の土坑群の分布域とも重なり、堀上げ土と土器捨て場が重なり、盛土遺構のように人為的な土層の堆積となっていた。

分布図にはi－90にも突出して土器が出土しているが、これはこのグリッドに位置する晩期の墓P1223上に置かれた土器片約13,000点が突出しているからである。なお、墓の上からも焼骨3788.1gが回収されている。

図Ⅴ－32・33には、古手の破片を掲載している。203～205は晩期中葉の浜中大曲式相当の破片である。203・204はP1174から出土したもの。206～242は中葉の在地の土器であるが、P1354から出土した239～242は比較的新しい資料である。

図Ⅴ－34～43には器面に縄文のみが施された（無文も含む）深鉢を掲載した。245はP145に流れ込んだとみられるもので、246～248はP101覆土出土の深鉢3点。249～251、254、256、264、279、281の8個体は墓P1223上に副葬されていた土器を埋めていた上器片で、このほかに、586の壺形土器が出土している。254は無文である。252はP235に流れ込んだとみられるもの。253は467とともにP493から出土した。図Ⅴ－44～55には口縁部に横走する沈線文が施された深鉢を掲載した。

302はP146から破片が出土しているが、P146からはこのほか418、498、508、588、665、782、859などの深鉢、壺、鉢、舟形土器などの破片が多数出土しており、いずれの破片も包含層の流れ込みとみられる。303は306、308と858の船形土器とともに包含層の一括土器。304はP1165に流れ込んだ破片とみられる。305は浅鉢981とともにP803から出土したもの（図Ⅳ－171参照）307は570の壺とP257で供伴して出土（図Ⅳ－56参照）。309はP86の坑底付近にまとまっていたもの（図Ⅳ－19参照）。310はP651の坑底面につぶれた状態で出土したもので、深く抉った突起が4ヵ所施され底部を打ち欠い

ている。312はP540に流れ込んだ破片で５条の沈線文上に刺突文が施される。なお、破片で出土したものは流れ込みの可能性がたかい。図Ⅴ－56～68には沈線文に文様を加えたものを掲載した。389から391は沈線文に刺突を加えたもので、389は464とともにP1399の覆土上位から出土したもの。390はP863坑底部から出土、391はP820の坑底部より589の壷肩部片とともの出土（図Ⅳ－175参照）。392は５つの突起に貼付文が施される。P86に流れ込んだもの。393は沈線文の上下に刺突文を施し、394は凹帯の上下に刺突文を施す。394はP1114で579の壷と供伴する。395は突起の間を波状の沈線文でつなぐ。P86の覆土から出土している。396は５条の沈線文の間に無文帯を施す。397は口縁部に大型の突起が１ヵ所付いていたとみられる。P590の上位に流れ込んだものとみられる。

398、399は口縁部に大小の突起が施され、無文帯を挟んだ上下に沈線文、貼瘤文を施す。400～421は沈線文に刺突文や貼瘤文を施したもの。422～438は凹帯に沈線文、刺突文を加えたもの。447は45グリッド離れた西島松５遺跡の捨て場出土の大型片に西島松２遺跡の破片が接合したもの。448～455は鋸歯状沈線文が施されるもの。456・457は浮文状の加工を加えているもの。459・460は沈線文の間に２条の鋸歯状の沈線文を施したもの。461は突起のある口縁部に沈線文に貼瘤文を施す。

図Ⅴ－69～75には沈線文に縦の区画文を加えたものを掲載した。462は沈線文上に３条の鋸歯文を加えたもの。P140から出土。463は鋸歯文で沈線文を区切る。P749の坑底面から532とともに出土。

覆土からは733が出土している（図Ⅳ－160参照）。464は縦の沈線文で区切ったもの。465は５つの突起下に鋸歯状文を施し沈線文を区切る。P380からつぶれて出土（図Ⅳ－80参照）。466・467は横走する沈線文が菱形になった状態。

図Ⅴ－76～79は波状文が施されたもの。499はP589の覆土から出土。波状の沈線文は途切れ円弧文を交互に繰り返したものになっている。500は胴部中央で縄文が横向きに施文されることや、底部が平らで無文であることなど、新しい要素が多くみられる。

図Ⅴ－80～84は底部・胴部片である。底部片が土坑の坑底部から出土する例は多くみられ、極力ここで取り上げている。底部は占いものほど丸い底で、新しくなると、上げ底気味な加工や平らな加工を施している。

図Ⅴ－85～96は壷形土器である。569～577は遺跡内ではやや古手の壷で、胴部に縄文、頸部との境に沈線文や貼瘤文を施し、頸部は無文で、口縁部の内側に蓋受けのような突帯が施されるものがある。

図Ⅴ－87～90には、鉢形土器から変容して壷形土器となったとみられるものを掲載した。特徴は、口径が比較的大きく、口縁部に対で大きな突起を有する点である、胴部には比較的文様が刻まれているものが多い特徴があり、晩期末葉に現れる器形とみられる。これに対し、本来の壷形土器も変化を続け、591・592のような肩部に文様が集中するものに変化するものとみられる。図Ⅴ－92～96には壷の破片を掲載したが、破片から壷の系譜を判断するのは難しい。

穿孔のある突起片600・605・621・622・627・632・633・643は鉢形土器から変容したものとみられ、654・655・662などは壷形土器の流れを汲む破片と考えられる。

図Ⅴ－97～105には鉢形土器を掲載した。鉢形土器には、頸部がくびれ口縁部が広がる器形（694・700・705など）があり、それらと壷形土器の区分は、本来計測値から割り出すべきものと考えられるが、今回は主観的に分けた状態である。また、晩期の中葉から後葉にかけて、はっきりと分離していた浅鉢、深鉢、鉢の器種の区分も晩期の終わりが近づくと、法則が乱れ、結果として鉢形としたものには様々な器形を含む結果となった。新旧の要素を整理し、改めて器形の区分を考える必要があるよ

うに思われる。口縁部に対の穿孔が施され、左右対称の器形のものに、694・696・702・705・750・751などがあり、これらは壺形だけではなく次に掲載している舟形土器との区分も考える必要がある。また、口縁部の1か所に1～2カ所の穿孔が加えられるものに、695・697・704・706・774・775・810・811があるが、このような特徴は本来浅鉢的なものとみられる。台付きの器形もこの時期多くなるようである。断片的な破片では全体の特徴が捕らえ切れず、鉢に区分しているものも多い。

図Ⅴ－106～115には舟形土器を掲載した。これらの器形は楕円形の口縁部の長軸上に穿孔された突起を対で有するものだが、底部が円く、口縁部も楕円形ではないもの（848・849・850・851・853・854）などを舟形とするのには問題が残る。865・866はおなじ墓から出土した晩期最末期の土器と考えている。これは舟形土器が鉢形に変化していく過程の器形とみられる。晩期末に発達した舟形土器も、続縄文期には器形が変わるようで、細かい時期差で器形の変化をとらえる必要もありそうである。

図Ⅴ－116～138には浅鉢を掲載した。掲載したものには949の注口土器や、1103～1105の内外面全面に縄文が施されたものや、1106のロート形土器とみられるものなど、特殊な器形も合わせて掲載している。時期的には中葉から後葉のもの（928・950・963～971）などが混じり、共通の特徴をとらえづらいが、晩期末から続縄文期にかけて浅鉢形土器は鉢形に変化していくようである（942～944など）。器面に貼付帯が施される974や、文様が施されるもの994・995・1041～1043なども新しい要素である。

図Ⅴ－139～152には続縄文時代の土器を掲載した。1107・1108は続縄文初頭期のものとみられ、1107・1114は舟形土器から変化した鉢の系譜を引くものである。1109は壺形土器、1111・1113・1114・1128・1171には撚糸文が施され、1112・1165は無文である。1170は砂沢式相当のものとみられる。1141～1144は恵山式相当の破片とみられる。1180と1181は同一個体である。1183～1186は後北A式相当、1187・1188は後北B式相当である。

図Ⅴ－146～152には後北C_2・D式を掲載した。1189は縄文時代後期の住居址と晩期の墓P86を切って検出されたP129の遺物。1190はP492から出土、1191は晩期の墓P1195を切って検出されたP1207出土の土器。1192はP314から出土した。1193はP1269の坑底面より検出された。1194は赤穴式相当の壺で、遺構や包含層に散らばって分布するが、1195と破片の分布が似ており、両者は近い時期の土器とみられる。1196～1199・1201は包含層から復元されたもので、1198は赤穴式相当である。1200は1206とともに同時期の墓であるP806から検出された。1202は、P1054に入っていたとみられる注口浅鉢である。

図Ⅴ－153～161は擦文時代の土器を掲載した。1241～1280には甕の実測図を出土した住居址の番号順に掲載した。1281～1299には土師器、1300～1315には須恵器を掲載した。

2 石 器

石器等は、遺構から104,018点、包含層から74,481点、合計178,499点出土した（表Ⅰ－1）。

内訳は、剥片を除く剥片石器類は、遺構2,498点、包含層7,884点、合計10,382点、剥片は、遺構96,727点、包含層50,442点、合計147,169点、礫などを除く礫石器類は、遺構957点、包含層2,689点、合計3,646点、礫・原石・カマド構造材は、遺構3,836点、包含層13,466点、合計17,302点である（表Ⅰ－4）。器種による明らかな分布の偏りなどは見られない（表Ⅳ－15）。

石材

石材は、剥片石器では黒曜石が85%と大部分を占め、他には頁岩が15%でやや多く、メノウ、ガラス質安山岩、チャート、片岩、流紋岩、泥岩、ジャスパー、珪化岩が少数見られる。礫石器では、安山岩が47%と多数を占め、他には砂岩が30%、玢岩が10%とやや多く、泥岩、凝灰岩、頁岩（特に縞頁岩）、チャート、玄武岩、粗粒玄武岩、デイサイト、閃緑岩、花崗岩、流紋岩、メノウ、石英岩、珪化岩、片岩、片麻岩、礫岩、カンラン岩、トロニエム岩、軽石、スコリアなどが少数見られる。特に礫石器で器種ごとに石材に偏りが見られる。詳細は後述する。

特徴的な石材として、緑色に変質した粗粒玄武岩、緑灰色に変質した玢岩・安山岩、緑灰～青灰色の砂岩、白色と褐色の縞状を呈する頁岩（縞頁岩）、泥岩に石英脈が貫入したと考えられるもの（石英脈貫入泥岩）がある（カラー写真図版79）。緑色に変質した粗粒玄武岩は、石斧のうち、大形のばち形を呈し、敲打主体に加工されるものに特徴的に使用されるほか、石斧・たたき石・すり石に少数使用されている。緑灰色に変質した玢岩・安山岩は、すり石の北海道式石冠に多用されている。玢岩の８割程度、安山岩の１割程度がこれにあたる。緑灰～青灰色の砂岩は、たたき石の細分類dとしたものに使用され、dに使用される砂岩はこのタイプに限定される。

縞頁岩は、以前から近隣河川の上流で採取可能なことが指摘されている（『ユカンボシE４遺跡』北埋調報75）。まれに、木の葉・魚椎骨などの化石を含むもの（カラー写真図版84）がある。剥片石器に少数用いられ、たたき石の細分類dとしたものに特徴的に用いられる。剥片石器の各器種における縞頁岩の使用割合は、石核で17.8%、石核以外では０～3.5%、石核を除く剥片石器の平均は1.0%である。また原石中の縞頁岩の割合は24.3%である。石核と原石において縞頁岩の割合が高く、このことは、原石の入手が容易なために石器製作を試みるが、加工は困難であることを示している。

石英脈貫入泥岩はたたき石に使用されている。近隣の西島松５遺跡では集石の主体となる例が見られた（『西島松５遺跡（６）』北埋調報260、図304）。

黒色を呈する緻密で斑晶の少ない安山岩を「ガラス質安山岩」と呼称した。剥片石器に少数用いられている。

１点のみであるが、トロニエム岩のたたき石が出土している。トロニエム岩の主な産出地は、道内では深川市多度志や空知川中流域などが知られている。

使用痕

剥片石器において、光沢・磨耗・擦痕などの使用痕が認められた。

光沢：主に、頁岩製のつまみ付きナイフ・スクレイパー・掻状石器などの腹面に認められる。石斧に見られる例もある。図ではスクリーントーンで示した。使用による痕跡と推定される。石斧の例は着柄の痕跡の可能性がある。剥片石器の光沢については『野田生２遺跡』（北埋調報167）に詳しい。

磨耗・擦痕：主に、黒曜石製の石槍またはナイフ・スクレイパーに認められ、楔形石器や石核などにも少数見られる。摩耗は、剥離稜線の稜の角がとれて丸みを帯び、黒曜石の光沢が無く白濁したように見えるものを呼称した。刃部加工面の剥離稜線、主剥離面のバルバースカーの稜線に特徴的に見ら

れる。擦痕は、方向性のある明瞭な擦痕のほか、光沢が無くなり白濁したように見える部分、表面が荒れて微小な凹凸のある部分を呼称した。リングに沿った相対的に高い(素材の厚い)部分や、主剥離面の狭い範囲に部分的に見られる。図では網掛けで示した。

付着物

主に黒曜石製の剥片やスクレイパーで、灰白色や褐色の付着物が見られるものがあった（写真図版370)。付着状態は、薄いものでは幕を張って曇っているように見え、厚いものでは明瞭な凹凸がある。集中して重なって出土したものに顕著で（P1196や包含層i－82のフレイク集中)、出土状況で下になっていた面に付着していることが多い。そのため、使用による影響ではなく、埋没中の環境の影響の可能性が高いとみなされるが、由来は不明である。

その他由来不明の黒色・暗褐色の付着物が見られたが、アスファルトと判断できるものはなかった。

すり面

すり面の表現は、擦痕が確認できるものは実線で、擦痕が確認できないものは、形状からすり方向が想定できるものは破線で表現した。明瞭にすり減っているが擦痕が確認できず、かつすり方向も想定できない場合は白抜きとした。

以下、特徴的な遺構の出土状況を遺構ごとに、遺構・包含層を総合した出土傾向などを器種ごとに記述する。

P2：図Ⅴ－167－1～10は副葬品である。1は石錐、2は石槍またはナイフ、3・4は両面加工石器、5～8はスクレイパー。9は石斧、緑灰色に変質した粗粒玄武岩製。10は石斧未成品。

P46：図Ⅴ－169・170－P46－1・3～5は副葬品。1は全体に、3は部分的に坑底のベンガラが付着する。2は覆土から出土しているが、全体にベンガラが付着していることから副葬品の可能性が高い。1はたたき石、2は軽石製の砥石、3はメノウの円礫。4・5は石斧。4は敲打調整主体のぼち形のもので、緑色に変質した粗粒玄武岩製。5は緑色系の濃淡のあるロジン岩製。

P70：図Ⅴ－171－P70－3は副葬品の石斧。

P144：図Ⅴ－175－P144－1は副葬品のナイフ。

P623：図Ⅴ－186－1～6は副葬品。1・2は石鏃。3は頁岩製、4は黒曜石製のナイフ。5は石斧。ぼち形で敲打主体に調整されるもの。6は縞頁岩製のたたき石。

P624：図Ⅴ－187－1～9は副葬品。1は石鏃。2・3は剥片の接合資料。2は遺体の下位から出土したもの9点と、覆土から出土したもの14点、計23点が接合している。他に接合しなかった同一個体の剥片が17点ある。大きく5段階の剥離工程が確認でき、幅0.3～2.0cmほどの小さな剥片を多数剥離している。3は覆土から出土した7点が接合した。他に接合しなかった同一石材の剥片が、遺体層から4点、覆土から5点出土している。棒状原石を素材としている。4～9は軽石製の砥石。主に遺体の頭部付近から出土した多数の破片が接合し6個体となった。9はP623の覆土から出土した破片1点も接合している。

P735：Ⅱ群b類土器52などとともに出土した。図Ⅴ－189－P735－1は石鏃としたが、石錐の可能性もある。2はつまみ付きナイフ、3は石斧、4はすり石・北海道式石冠の破片、5は砥石。

P821：図Ⅴ－191－P821－1は副葬品の石槍またはナイフ。

P1120：図Ⅴ－192－P1120－1は副葬品。大形のラウンドスクレイパー。

P1195：図Ⅴ－194－1～9は副葬品。1は縞頁岩製のRフレイク。2～9は石斧。

P1196：図Ⅴ－195～206－1～20・26～184は副葬品である。

1～20・26・27は検出面付近で出土したもの。1～20は石鏃。すべて長身のもので、19・20のみ有茎。26はたたき石。27は砥石。

28～184は、坑底付近から出土したもの。28はナイフ。29～33は石斧、30・32は玄武岩製。34は砥石。坑底のベンガラが付着する。35は加工痕のある礫。36～50は主に遺体層付近から出土した剥片類。36はスクレイパー、45はUフレイク、他は剥片である。全て黒曜石製で、36～38・40～50について黒曜石の原材産地分析を行ったところ、36が赤石山、他は全て赤井川産と同定された（Ⅵ章2節）。51～184はまとまって出土した剥片類。全て黒曜石製である。袋状のものに収められていたと考えられる。143点出土したうち136点・134個体を図示した。スクレイパーが1点、Rフレイクが38点、Uフレイクが47点、剥片が48点である。磨耗や擦痕が認められるもの、白色の付着物が見られるものも多い。これらのうち67点について黒曜石の原材産地分析を行ったところ、162は赤井川産、他は全て赤石山産と同定された（Ⅵ章2節）。36～50、51～184の剥片類についてはそれぞれ接合作業を行ったが、70と138が剥離面で接合した以外は数点が折れ面で接合したのみであり、これらは石器の素材として選別された剥片と考えられる。

P1206：図Ⅴ－207－P1206－2・3は副葬品である。2はUフレイク。3は擦切痕のある石斧。

P1251：図Ⅴ－208－P1251－1・2は副葬品。1は黒曜石の剥片。2はばち形で長身の石斧。

P1275：図Ⅴ－208－P1275－1は副葬品。敲打調整主体のばち形の石斧。坑底のベンガラが付着する。緑色の粗粒玄武岩製。

P1393：図Ⅴ－210－P1393－1はたたき石としたが、台石の可能性もある。黒曜石製の多数のRフレイク・Uフレイク・剥片とともに出土した。

SP147：礫片25点、砥石片1点（図Ⅴ－221－SP147－4）、すり石片1点、北海道式石冠片17点（1～3）が出土した。1は10点が接合、3は6点が接合したもの。2は破片を再加工したもの。

SP205：礫8点7個体、石皿7点2個体、たたき石1点（図Ⅴ－212－SP205－1）、北海道式石冠5点2個体（2・3）が出土した。3は4点が接合したもの。

土器に伴う可能性のあるもの

P424（Ⅰ群b類土器）、P764（Ⅱ群b類土器）、P654（Ⅳ群a類土器138）、P730（Ⅳ群b類土器164・173）、P1065（Ⅳ群b類土器174・175）、P314（Ⅵ群土器1192）、P492（Ⅵ群土器1190）。

Ⅴ群c類土器に伴う可能性のあるもの

P71－2～5・7～9（土器282・839）、P72（398）、P86（392・395）、P162（588）、P165（413）、P181（431）、P237（492）、P521（986・987）、P540（312・461）、P651（310）、P1183（464）、P1223（35・36・38～41など）、P761－2（Ⅴ群c類土器）。

石鏃（図Ⅴ－214－1～27）

遺構から575点、包含層から1252点、計1,827点出土した。a～fに細分類した。

a：柳葉形のもの。遺構13点、包含層18点、計31点。1・2。H6－1

b：木葉形のもの。遺構19点、包含層59点、計78点。3。H4－1、H32－1

c：ひし形のもの。遺構15点、包含層25点、計40点。4～6。H43－1

d：五角形のもの。包含層12点。7。

e：三角形のもの。遺構165点、包含層311点、計476点。

e－1：明瞭な凹基。遺構17点、包含層8点、計25点。10。P1223－1・2。

e－2：弱い凹基～平基。遺構144点、包含層302点、計446点。

8・9・11～16。H21－1、P71－1、P623－1・2、P689－1、P1196－1～18、F228－1・2

e－3 ：凸基。遺構4点、包含層1点、計5点。

長身のもの（長幅比2：1以上）：遺構42点（凹基3点、平基39点）。包含層29点（平基）、計71点。15・16。P209－1、P623－2、P1196－1～18。

f ：有茎のもの。遺構167点、包含層514点、計680点。

f－1 ：凹基。遺構2点、包含層2点、計4点。18。

f－2 ：平基。遺構141点、包含層458点、計599点。

17・19・22～27。H24－1、H28－1、P1196－19。

f－3 ：凸基。遺構24点、包含層54点、計78点。20・21。P1196－20。

長身のもの（長幅比2：1以上）：遺構6点（凸基2点、平基4点）、包含層2点（凸基）。

27。P1196－20。

石材は、黒曜石1,753点、頁岩65点（うち縞頁岩5点）、メノウ3点、流紋岩2点、珪質頁岩・チャート・片岩・泥岩各1点である。

25は、刃部の中ほどに抉りが加えられるもの。26はカエシ部分が2段に整形されるものである。

石槍またはナイフ（図V－214・215－28～48）

遺構から47点、包含層から172点、計219点出土した。a～hに細分類した。

a ：茎が不明瞭なもの。遺構10点、包含層10点、計20点。

28～31。H1－1、H9－1、P88－1、P591－1。

b ：茎が明瞭で、カエシが明瞭なもののうち、茎がI字状を呈するもの。包含層15点。32～34。

c ：茎が明瞭で、カエシが明瞭なもののうち、茎がV字状を呈するもの。

遺構1点、包含層18点、計19点。35～37。P538－1、

d ：茎が明瞭で、カエシに丸みがありやや不明瞭なもののうち、茎がI字状を呈するもの。

遺構1点、包含層4点、計5点。38。

e ：茎が明瞭で、カエシに丸みがありやや不明瞭なもののうち、茎がV字状を呈するもの。

包含層2点。

f ：茎が明瞭で、カエシは不明瞭で、最大幅から強く湾曲し、I字状の茎をなすもの。

遺構2点、包含層2点、計4点。39。

g ：茎が明瞭で、カエシは不明瞭、最大幅から弱く湾曲し、V字状の茎をなすもの。

包含層10点。40～43。

h ：茎が明瞭で、カエシは不明瞭、茎の上部で弱く屈曲し、幅広のI字状の茎をなすもの。

遺構9点、包含層20点、計29点。

44～48。P2－2、P65－1、P70－1、P120－1、P209－2、P615－1、P821－1、F103－1。

細分類hとしたものは、形態からナイフとしての用途が想定される。図は、遺構出土のものはナイフとしての形態を重視し尖頭部を下に、包含層出土のものは、他の細分類との形態の比較のために尖頭部を上にして図示した。

石材は、黒曜石163点、頁岩49点（うち縞頁岩1点）、流紋岩5点、珪質頁岩4点、ガラス質安山岩1点、メノウ1点、泥岩1点である。細分類別では、b・cで黒曜石と頁岩がほぼ同数である以外は、黒曜石が多数を占めている。

37・29・44、P538－1のように、茎の下端にノッチのあるものがある。細分類bに5点、cに8点、

f・g・hに各1点、茎部破片に9点、計25点を確認した。b・cに多い。

背腹に磨耗・擦痕が認められるものが比較的多い。中心線付近の器厚のある部分や、剥離の輪郭、大きな剥離のリングに沿った高い部分などに見られる。

30・40～43は、土坑の上部に落ち込んだ包含層からまとまって出土したものである。

31は側縁に磨耗が認められ、ナイフとしての用途が想定される。

47・48、P70－1、P615－1、P821－1、F103－1は、46、P65－1、P209－1のようなものが再加工された結果と考えられる。P120－1は加工途中で折損するが、加工が続けられている。

石錐（図V－215－49～56）

遺構から68点、包含層から191点、計259点出土した。a～dに細分類した。

a ：棒状のもの。遺構14点、包含層58点、計72点。49～51、P2－1、P72－1、P1133－1。

b ：つまみ部が作り出されるもの。

b－1 ：T字形に近く整形されるもの。機能部が長いものが多い。
遺構3点、包含層8点、計11点。52・53。P262－1。

b－2 ：つまみ部と機能部の境界が明瞭なもの。遺構8点、包含層26点、計34点。
54。P689－2、P771－2。

b－2´：機能部のごく短いもの。遺構2点、包含層5点、計7点。P604－1。

b－3 ：機能部とつまみ部の境界が不明瞭なもの。遺構12点、包含層39点、計51点。
55。P458－1。

c ：素材の形状を大きく整形しない不定形のもの。遺構9点、包含層24点、計33点。
56。H4－2、H9－2、P380－1、P443－1。

d ：他石器を転用したもの。遺構2点、包含層11点、計13点。
内訳は、石鏃・つまみ付きナイフの転用が各5点、石槍またはナイフの転用が1点（P1133－1）、楔形石器の転用が1点、石斧片の転用が1点である。

石材は、黒曜石154点、頁岩85点（うち縞頁岩7点）、メノウ9点、珪質頁岩5点（うち縞頁岩2点）、片岩2点、メノウ質頁岩・チャート・流紋岩・泥岩各1点である。

つまみ付きナイフ（図V－216－57～73）

遺構から129点、包含層から392点、計521点出土した。a～fに細分類した。a～eは縦形のもの、fは横形のものである。

a ：片面全面加工で、腹面右側縁に、背面加工前の剥離が加えられるもの。
遺構3点、包含層4点、計7点。57。

b ：片面全面加工で、腹面に剥離が加えられないもの。右側縁の刃部が急角度のものが多い。
遺構30点、包含層102点、計132点。58～64。H21－2、P181－1、P1401－1、SP141－1

c ：片面周縁加工のもの。右側縁の刃部が急角度のものが多い。
遺構41点、包含層155点、計196点。65～69。
H32－2、H36－1、H40－1、P386－1、P405－1、P604－2、P689－3、P1168－1、P1183－1

d ：粗雑な加工のもの。遺構18点、包含層31点、計49点。70。P735－2。

e ：両面加工のもの。遺構6点、包含層19点、計25点。71・72。H51－1。

f ：横形のもの。遺構2点、包含層6点、計8点。73。P1168－2。

石材は、頁岩382点（うち縞頁岩4点）、黒曜石91点、珪質頁岩28点、メノウ8点、流紋岩5点、チャー

ト・凝灰岩各3点である。細分類dでは、黒曜石が17点・35%、eでは11点・44%を占め、他の細分類より黒曜石の割合が高い。

使用痕と思われる顕著な光沢が、細分類bに8点、cに5点、破片に3点、計16点に認められた。部位は腹面、特に右半が多く、背面やつまみ部に及ぶものも見られる。

57・61は側縁に磨耗が、59は腹面に光沢が認められる。63・69のつまみは棒状、71は十字形に加工される。68は下端に掻器状の急角度の刃部が作り出される。72は石錐と兼用される。

H32－2は背腹面に明瞭な光沢が認められる。腹面の光沢を切って、つまみ部の剥離が加えられており、つまみ部の再加工が行われたと考えられる。P1401－1はつまみが2段に作り出される。

ナイフ（図Ⅴ－217－74・75）

遺構から8点6個体、包含層から6点、計14点出土した。

柄のあるものが7点5個体（P130－1、P144－1、P623－3・4、P1196－28）、明瞭な柄のないものが10点（74・75、P241－1）ある。柄のあるもののうち4個体は、Ⅴ群c類土器の時期の副葬品である。

石材は、黒曜石13点、頁岩3点、泥岩1点である。

P241－1は右側縁の刃部は磨耗している。P623－3は柄の両側縁が磨耗している。

両面加工石器（図Ⅴ－217－76～78）

楕円形（遺構1点、包含層3点、計4点）、木葉形（包含層3点）、三角形（遺構1点、包含層1点、計2点、小形）、台形（遺構1点）、半円形（遺構1点）のもの、双頭のもの（包含層1点）の他はやや不定形で、石器未成品の可能性のあるものなどを含む。

石材は、黒曜石37点、頁岩10点（うち縞頁岩2点）、泥岩2点、メノウ2点である。

78はいわゆる双頭のもので、側縁は磨耗している。

P918－1はより大きな両面加工の石器の破片を再加工したもので、図右側には折れ面が大きく残っており、未成品と考えられる。

箆状石器（図Ⅴ－217－79～82）

遺構から3点、包含層から13点、計16点出土している。

両面加工のものが5点（遺構2点、包含層3点）、周縁両面加工のもの2点（包含層）、半両面加工のもの3点（包含層）、片面加工のもの6点（遺構1点、包含層5点）である。

形態は、ばち形、三角形、台形、長方形などがある。石材は、頁岩が11点、黒曜石が5点である。

80の腹面下端には明瞭な光沢が認められる。82は背復面に擦痕が認められる。81は縄文時代早期Ⅰ群b類の遺物包含層であるシルト層から出土している。

スクレイパー（図Ⅴ－217・218－83～94）

遺構から915点、包含層から2,057点、計2,972点出土している。

比較的定型的なものとして、以下のものがある。

ラウンドスクレイパー107点、ラウンドスクレイパーに類するもので五角形を呈するもの22点・六角形を呈するもの9点・楕円形を呈するもの36点・半周以上を加工するもの64点。縦長剥片を素材とし、端部に刃部をもつもの（掻器）24点。横長剥片を素材とするもの18点。

これら以外では、縦長の剥片を素材とし、側縁・端部に刃部をもつものが多数を占める。刃部の位置や形状は様々で、代表的なものを図示した。また、全周を整形するものや、切断されてバルブをもたない剥片や不定形な剥片を素材とし、刃部の位置も不定なものも一定数見られる。

石材は、黒曜石2,564点、頁岩329点（うち縞頁岩38点）、珪質頁岩23点、ガラス質安山岩・メノウ・

流紋岩各12点、泥岩6点、チャート3点、ジャスパー・安山岩・凝灰岩・砂岩・片岩・千枚岩が各1点である。

83・85・93・94のように摩耗や擦痕が認められるものが多く、713点とスクレイパー全体の24%を占める。上記のラウンドスクレイパー類に限ると238点、41%とさらに高い割合を示す。部位は、背面の剥離輪郭の稜線に摩耗が、腹面のバルブ周辺に擦痕が認められるパターンが多い。

83～89は縦長の剥片を素材とするもの。83は側縁に刃部をもつもの。84は両側縁に刃部が作り出され、右側縁の刃部は両面加工される。85は両側縁に刃部が作り出され、左右の刃部が下端で尖頭状を呈するもの。86は側縁と端部に刃部をもち、端部の刃部が浅いV字形を呈するもの。87は下端に刃部をもつもの。88は側縁から刃部に連続する刃部をもつもの。下端が狭い逆台形を呈するものが多い。89は全周が加工されるもの。厚手のものが多い。90～92はラウンドスクレイパー、93は五角形を呈するもので、ラウンドスクレイパーに類するものと考えられる。94はバルブのない剥片を素材とするもの。刃部は側縁に作り出される。

以下に、遺構から出土したものを分類する。

縦長剥片の側縁に刃部をもつもの：H6－2、P72－2、P247－1、P540－1、P577－1、P1183－2。

縦長剥片の側縁に刃部をもち、刃部が弧を描くもの：P248－1・2、P577－3、P589－4。

縦長剥片の側縁～端部に刃部をもつもの：P2－5・7、P1196－24。

84に類似するもの：P321－1、P380－2、P577－2。

85に類似するもの：P72－3、P521－1、P589－1、P1196－21、P1227－1。

85に類似、側縁が屈曲するもの：P86－2・P1196－22はバルブのない剥片を素材とする。P563－1。

86に類似するもの：P261－1。

87に類似するもの：P424－1。

89に類似するもの：P7－1は頁岩製で腹面に光沢が認められる。P563－2、P660－2。

全周加工のもの：P42－1・2は菱形。P150－1は楕円形。P660－1は頁岩製で腹面に光沢が見られる。

バルブの無い剥片を素材とし主に側縁に刃部をもつもの：P2－6、P165－1、P538－2、P771－3。

90～92に類似するもの：P248－3、P321－2、P473－1。P521－3は半周ほどが加工される。P165－3、P589－2・3はやや不整形のもの。

93に類似するもの：P592－1はやや不整形。

93に類似し、六角形のもの：P150－4、P162－1。

94に類似するもの：P150－2・3。

横長剥片を素材とするもの：H32－3、P540－2、P563－3、P771－4、P493－1。

バルブのない横長剥片を素材とするもの：P237－1、P577－4、P1196－23。

黒曜石の棒状原石を直接加工するもの：P504－1、P1206－1。

P466－1は不定形な剥片を素材とし、内湾する刃部を複数作り出すもの。

P771－5は石核を素材とするもの。

P1304－1は、泥岩の礫を素材としたものである。粗く打ち欠き、一部に刃部様の二次加工が加えられている。粗く打ち欠かれた側縁と、二次加工された刃部は摩耗しており、辺と直行する方向の短い擦痕が認められる。掻器的な使用が想定されることから、スクレイパーに分類した。P1304と同一グリッドであるi－89Ⅱa層からも、同様の砂岩製のものが1点出土している。

楔形石器（図Ⅴ－218－95～100）

遺構から70点、包含層から528点、計598点出土している。

石材は、黒曜石551点、頁岩27点（うち縞頁岩９点）、メノウ10点、珪質頁岩７点、チャート２点、珪化岩１点である。

多くは剥片を素材としているが、棒状原石の破片を使用したものが２点（P1399－２）、石核を素材としたものが１点（100）、石鏃を転用したものが１点、石槍またはナイフを転用したものが２点ある。

摩耗や擦痕が認められる例が23点あった。背復面の素材の厚い部分に見られる例が多い。

石核（図Ⅴ－218－101～103）

遺構から212点、包含層から675点、計887点出土した。

石材は、黒曜石583点、頁岩252点（うち縞頁岩157点）、珪質頁岩19点、チャート12点、メノウ９点、泥岩６点、流紋岩２点、メノウ質縞頁岩・凝灰岩・珪化岩各１点である。石器と比較して、頁岩中の縞頁岩の比率が高い。

102のように礫面の残るやや小形のものや、103のような小形のものが多い。

摩耗や擦痕が認められるものが８点ある。101は作業面に擦痕が認められる。

Rフレイク

遺構から339点、包含層から1,748点、計2,087点出土した。

石材は、黒曜石1,822点、頁岩191点（うち縞頁岩28点）、珪質頁岩26点、メノウ11点、ガラス質安山岩・泥岩各９点、チャート・流紋岩各６点、凝灰岩３点、メノウ質頁岩・安山岩・珪化岩・石英岩各１点である。スクレイパー同様に磨耗や擦痕が認められるものがあるが、割合は低い。

Uフレイク

遺構から116点、包含層から809点、計925点出土した。

石材は、黒曜石881点、頁岩34点（うち縞頁岩１点）、泥岩３点、チャート・珪質頁岩・流紋岩各２点、メノウ１点である。スクレイパー同様に磨耗や擦痕が認められるものがあるが、割合は低い。

石斧（図Ⅴ－219・220－104～117）

遺構から280点、包含層から1,014点、計1,294点出土した。遺構から出土したもののうち22点は副葬品である。

刃部が残存するものは283点、基部が残存するものは306点ある。これらと別に、未成品は300点、再加工中のものは48点、再加工に伴うと思われる、すり面のあるフレイク状の小破片が171点ある。また、図示していないが、フレイク状の小破片の剥離面に研摩が加えられるものが２点ある。同様の例は千歳市キウス５遺跡（『キウス５遺跡（６）』北埋調報126集、図Ⅴ－３－６－123～126）・鵡川町宮戸４遺跡（『宮戸４遺跡』北埋調報168集、図Ⅳ－３－８）に見られる。

全体の形態がわかるものをa～eに細分類した。

a：ばち形のもの。遺構37点、包含層141点、計178点。104～107。H４－３、P24－１、P46－４・５、P623－５、P1195－２～７、P1196－29～32、P1251－２、P1275－１、SP200－１、SP201－１

b：短冊形のもの。遺構13点、包含層72点（うち長身のもの９点）、計76点。
108・110～112、長身のもの110・112。P70－３、P75－１、P197－２、P1195－８、P1206－３

c：素材の形状を生かした不定形のもの。遺構６点、包含層８点、計14点。
未加工の礫を素材とするもの、石斧の破片を素材とするものがある。114。P1195－９、P1206－４。

d：幅1.5cmほどの小形で、細長のもの（長幅比３：１以上）。上下両端に刃部があり、片刃のも

のが多い。包含層9点。109。

e：角柱状のもの。包含層1点。113。

刃部形態がわかるもののうち、断面形態が片刃のものは149点、両刃のものは102点である。細分類dはすべて片刃であるが、他では片刃がやや多く、両刃がやや少ない。

刃部の平面形態は、直刃71点、円刃207点で、円刃のうち特に弧の強いものが25点ある。細分類dでは直刃と弧刃がほぼ同数であるが、他では円刃が多く直刃が少ない。

石材は、緑色泥岩952点、片岩144点、泥岩81点、砂岩49点、ロジン岩15点、粗粒玄武岩13点、千枚岩・粘板岩各10点、片麻岩6点、凝灰岩4点、玄武岩3点、安山岩・頁岩（ひん）岩・閃緑岩・花崗岩・カンラン岩・緑色凝灰岩各1点である。細分類dがすべて緑色泥岩であること、ロジン岩はばち形に多いことを除くと、緑色泥岩が75%前後、片岩が11～16%前後と共通した割合である。

粗粒玄武岩は、緑色・緑灰色に変質したものが用いられている。P46－4、P1275－1のような、調整が敲打主体で、厚手のばち形を呈するものが特徴的である。いずれも副葬品とされている。

擦切痕が認められるものが22点あり、緑色泥岩製16点、泥岩製2点、ロジン岩製4点である。細分類はa6点、b3点、d1点で、刃部形態のわかる8点はすべて片刃である。

刃部付近が磨耗し、縦方向の浅い溝状の使用痕が見られるものがある（P46－4・5、P623－5、P1195－6）。P46－5は腹面により顕著である。

研磨後のたたき痕が見られるものがある（P771－6、P1195－4・5、P1196－29・30、P1206－3・4）。たたき痕は長さ数mmほどの横に細長い傷のような形状で、石斧加工の際の敲打痕とは形状が異なる。たたき石にも同様のたたき痕の例があり、たたき石として兼用された可能性がある。

墓に副葬される石斧は、細分類ではa16点、b3点、c2点で、石斧全体の傾向と比較してaの比率が高い。石材では、緑色泥岩12点、粗粒玄武岩・片岩各3点、玄武岩2点、ロジン岩1点で、緑色泥岩が少なく、代わりに粗粒玄武岩・玄武岩がやや多い。P46－4・5は石材鑑定を依頼した（VI－1）。

107は、刃部が明瞭な片刃に整形され、腹面からの研ぎ出しが加えられるもの。同様の刃部加工がなされるものがh－87・c－81から出土しており、また千歳市ママチ遺跡の第Ⅰ黒色土層にも出土例がある（『ママチ遺跡（Ⅲ）』北埋調報36、図Ⅲ－247－220）。110は刃部に縦方向の明瞭な摩耗が認められる。114は石斧の破片を再加工したもの。115は石斧の基部破片の折れ面が研磨されているもの。同様のものが他に8点あり、1点が刃部破片、7点が基部破片を加工している。113は花崗岩製で角柱状を呈するもの。VI群土器（後北C_2・D式）に伴うと考えられる。近隣の西島松5遺跡にも出土例がある（『西島松5遺跡（5）』北埋調報260、図V－88－225～227）。116は泥岩製の未成品で、表面にウニの化石が見られる。117はロジン岩の研磨石材。研摩後に剥離調整が行われている。

P2－9、P401－1は刃部が平坦に磨耗あるいは加工されている。

P623－5は敲打主体に調整されるもので、中央よりやや上に浅い溝が巡る。P1195－3は中央付近で側縁にくびれが作り出される。くびれの位置に対応して腹面に段差がある。P1195－4はやや細身で、上下両端に片刃の刃部をもつもの。

P761－2は刃部を欠損するが、折れ面の角が磨耗しており、再利用した可能性がある。

擦切残片

遺構から1点、包含層から15点、計16点出土した。石材は、緑色泥岩10点、泥岩3点、ロジン岩2点、砂岩1点で、擦切痕のある石斧の石材構成とほぼ共通している。

たたき石（図V－221－118～130）

遺構から139点、包含層から405点、計544点出土した。a～gに細分類した。

a：棒状礫・扁平礫などの端部に使用痕が見られるもの。遺構34点、包含層69点、計103点。
118。P59－1、P1196－26、SP227－1。

a´：端部と側縁の変換点付近に使用痕が見られるもの。遺構2点、包含層1点、計3点。P46－1。

b：棒状礫・扁平礫などの側縁に使用痕が見られるもの。遺構9点、包含層26点、計35点。
P1223－6

c：棒状礫・扁平礫などの平坦面に使用痕が見られるもの。
遺構38点、包含層120点、計158点。122・125。P16－1、P17－1、P86－6・7、P124－1

d：使用の結果、球状を呈するもの。遺構15点、包含層47点、計62点。
127～130。P71－7、P124－2、P400－1、P566－1。

使用痕は複合することも多く、内訳は以下のとおりである。上記の点数には含まれていない。

a+a´：遺構2点、包含層1点、計3点。119。

a´+c：遺構4点、包含層3点、7点。120。P86－4・5。

a+a´+b+c：遺構1点。P1183－4。

a+a´+c：包含層1点。123。

a+b：遺構5点、包含層9点、計14点。P184－1、P623－6、P654－1。

a+b+c：遺構1点、包含層2点、計3点。P1400－1。

a+c：遺構7点、包含層13点、計20点。124。H43－2、P184－1。

b+c：遺構8点、包含層22点、計30点。126。P563－4。

石斧を転用したものが11点あり（126）、内訳はa4点、a+b1点、b+c2点、c4点である。転用された石斧は、ぢち形4点（緑色泥岩3、粗粒玄武岩1）、短冊形1点（緑色泥岩）、未成品3点（砂岩1、粗粒玄武岩2）、破片3点（緑色泥岩）である。

石材は、安山岩224点、砂岩115点、頁岩53点（うち縞頁岩46点）、泥岩36点、石英脈貫入泥岩23点、<ruby>礫<rt>ひん</rt></ruby>岩21点、石英岩19点、凝灰岩14点、緑色泥岩11点、粗粒玄武岩・珪化岩各4点、閃緑岩・流紋岩各3点、玄武岩・メノウ・片岩各2点、カンラン岩・チャート・トロニエム岩・花崗岩・片麻岩・緑色凝灰岩・礫岩各1点である。

細分類a・b・cとdでは、石材の選択が異なっている。aでは安山岩48%・砂岩16%・<ruby>礫<rt>ひん</rt></ruby>岩9%、bでは安山岩63%・砂岩14%・泥岩11%、cでは安山岩56%・砂岩29%で、安山岩・砂岩・泥岩などが多く用いられるのに対し、dでは砂岩29%・頁岩26%（縞頁岩21%）・泥岩11%・石英岩11%であり、頁岩・石英岩が多く用いられている。また、砂岩・泥岩はa～cにも見られるが、dで使用されるものは青・緑灰色を呈する特徴的なものに限定されている。118・124・127は砂岩、119・120・123は安山岩、121・126は緑色泥岩、122は泥岩、125は<ruby>礫<rt>ひん</rt></ruby>岩、128は石英岩、129は縞頁岩、127は明青灰色の砂岩、130は暗緑灰色の砂岩である。

たたき痕には、敲打状のもののほか、121・126に見られるような、長さ数mmほどの細長い傷のようなものが認められた。泥岩・砂岩など、あるいは石斧を転用したものなど、平滑な面に見られる傾向がある。石斧にも同様のたたき痕が見られることがあり、たたき石と兼用したものと考えられる。

118・119は端部の使用痕が平坦な広い面をなしている。121は上部が尖頭形を呈する。上面の使用面は平坦な面をなしている（写真図版385）。近隣の西島松5遺跡でも類似のものが出土している（『西島松5遺跡（5）』北埋調報248、図Ⅴ－101－50・『西島松5遺跡（3）』北埋調報209、図Ⅶ－10－34）。127～130は細分類dのもの。127のように、亜角礫程度のやや角ばった礫を素材とし、角ばった部分や、破損で生じた角を主に使用し（128）、結果的に129や130のような球状を呈する過程がうか

がえる。127の背面には細長い傷状のたたき痕が、130には背面に擦痕があり、光沢が見られる。

すり石（図V－222・223－131～152）

遺構から209点、包含層から596点、計805点出土した。a～eに細分類した。

a：断面三角形の礫を素材とし、稜に使用痕が見られるもの。遺構20点、包含層75点、計95点。未成品が包含層に2点ある。131～134。H6－4、P424－2～4、P785－1・2。

b：扁平礫を素材とし、側縁に使用痕が見られるもの。遺構7点、包含層20点、計27点。
135。P65－2

c：bの長軸端に打ち欠きが加えられるもの。遺構3点、包含層4点、計7点。
未成品が包含層に1点ある。136。P592－2。

d：半円状扁平打製石器。遺構1点、包含層6点、計7点。未成品が包含層に1点ある。137。

e：扁平礫などの平坦面に使用痕が見られるもの。遺構3点。H51－2・3、P397－1。

f：北海道式石冠。遺構157点、包含層438点、計595点。
未成品が遺構に12点、包含層に30点、計42点ある。
139～152。H20－1、H22－1、H29－2、H32－5、H39－1、P259－1、P283－1・2、P1068－1

石材は、安山岩502点、玢岩206点、砂岩79点、デイサイト5点、凝灰岩4点、閃緑岩・泥岩2点・片麻岩各2点、、粗粒玄武岩・緑色泥岩・石英岩各1点である。細分類ごとでは、aで安山岩71点71％・砂岩13点14％・玢岩8点9％、bで安山岩20点74％・砂岩4点15％・玢岩1点4％、cで安山岩4点など、dで安山岩2点・砂岩3点など、eで安山岩2点・石英岩1点と、概ね安山岩が多用されている。fでは、安山岩389点58％・玢岩194点30％・砂岩55点9％と、他より玢岩の割合が高い。玢岩の多くと安山岩の一部は緑灰色に変質したものである。131・137・146は玢岩、144は砂岩、150はデイサイト、152は緑色泥岩、他は安山岩である。

145、F431－1は薄手で、加工が簡略化されているが、北海道式石冠に類するものと考えられる。

146～152、H22－1、P259－1、P283－2、SP147－2は特殊な使用痕が認められる北海道式石冠（カラー図版80）。破片が再加工されており、底面にはたたき痕や擦痕が見られ、端部で角度が変化しているものが多い。

146～148・150・151、H22－1、P259－1、P283－2、SP147－2は再加工されている。146～150、H22－1、P259－1にはベンガラが付着しており、149、P259－1は明瞭であるが、他は痕跡的である。146はi－88とj－80から出土した破片が接合したもの。割れた後に再加工されており、意図的に分割した可能性がある。双方の使用面に擦痕が認められる。148は入念に再加工され、使用面には方向・太さの異なる擦痕が認められる。149は破損している。使用面には太さの異なる擦痕が認められ、細かい擦痕の範囲とベンガラの付着する範囲が一致している。150はすり面に重ねてたたき痕があり、右端部では角度が変化して異なる面を形成している。151は底面全面にたたき痕が見られる。左端部には擦痕のあるすり面があり、底面とは角度が変化している。152はほぼ未加工のもの。底面に細い擦痕が認められる。

H22－1は底面の右端部で角度が変化して、擦痕の見えるすり面が形成される。P259－1の左は再加工、右端は欠損である。底面は右端で角度が変化し、粗く短い単位の擦痕が確認でき、ベンガラが付着している。ベンガラは握り部の頂部にも少量付着している。P283－2は底面の広範囲にたたき痕がある。左端部では角度が変化し、たたき痕が見られる。P735－4は底面の右端部に明瞭な粗い擦痕が、左側にたたき痕が見られる。

P1363－1、SP147－2は再加工している。底面の右端は角度が変化し、たたき痕が見られる。SP147－3は6点が接合したもの。底面の左半にたたき痕が見られ、左端部は角度が変化している。

砥石（図V－224－153～159）

遺構から143点、包含層から412点、計555点出土した。

礫の1～数面が使用される不定形なもののほか、4面が使用された結果、断面形が方形～長方形やひし形を呈する棒状のもの（154・155、H47－1）や、軽石製で、扁平で溝状の使用痕のある有溝砥石（158・159）が特徴的である。

遺構から出土したもののうち、P624の25点とP623の1点はP624の副葬品で、接合して6個体が得られている。

石材は、砂岩455点、軽石38点、スコリア1点、凝灰岩34点、安山岩17点、泥岩4点、砂岩・珪化岩各2点、頁岩1点である。軽石製のものは、ほとんどが有溝砥石かそれに類似するものである。

156は、石斧の擦切痕のような溝状のすり痕が見られる。157は尖頭形の特殊な形状のもの。尖頭部をなす2辺は、断面が幅広のU字形で、石鋸のような形状である（写真図版385）。

H7－1は軽石製の有溝砥石。周縁は整形される。

P624－4～9は軽石製。4・5は縦長に整形されるもの。4には明瞭な溝が、5は不明瞭な浅い溝が見られる。6～9は不整な台形もしくは長方形に整形されるもの。幅広でごく浅い溝状のくぼみが見られる。6～9の石材は非常に良く類似しており、同一母岩の可能性がある。

石鋸（図V－224－160～163）

遺構から9点、包含層から19点、計28点出土した。

板状の礫を素材とするものの他、石斧破片や剥片を素材とするもの（160）もある。使用面は幅が狭く断面V字形を呈するもの（160～162）と、幅が広く断面が半円形に近いU字形を呈するもの（163）がある。砥石と兼用されるものが10点ある（161・163、H11－3、H39－2、H44－1）。石材は、砂岩23点、安山岩2点、泥岩2点、頁岩1点である。160は泥岩、162は安山岩、他は砂岩。

162、H4－4は節理面のある板状の安山岩を素材とし、側縁を打ち欠いて鋭利に調整している。

石錘（図V－225－164・165）

遺構から5点、包含層から12点、計17点出土した。

長軸2か所に打ち欠きがあるもの（164、SP66－1、F118－1）の他、長軸・短軸の4か所に打ち欠きがあるものが2点ある。石材は、安山岩10点、泥岩3点、凝灰岩2点、砂岩・砂岩各1点である。

石皿・台石（図V－225・226－166～168）

遺構から163点、包含層から165点、計328点出土した。

使用痕がたたき痕のみで、台石としたものが49点、このうち半分以上が残存すると思われるものは18点である。使用痕にすり痕が見られ、石皿としたものは279点、このうち半分以上が残存すると思われるものは87点である。完形品あるいは完形に近いものは、b～d－80付近の、低地部の川砂利層から比較的多く出土している（167）。

未加工の礫に使用痕が見られるものの他、全体をドーム状に整形するもの（168、P730－1、P1190－1、P1333－1）、全体を方形に整形するものがある（P71－9、P1065－1、P1315－1、SP75－1）。

167、H30－1、P30－1、P486－1、P1360－1のように、すり痕の外周にたたき痕が見られるものがあり、使用面を平坦に作り出すために、使用に先行して敲打調整が行われていると考えられる。

使用面は、明瞭にすり減ってはいるが擦痕は見えないものがほとんどであるが、167・168、P30－1のような擦痕が認められるものが少数ある。また、168、P30－1、P124－3、P486－1、P1333－

1のように、たたき痕が集合し顕著なくぼみとなるものがある。

石材は安山岩319点、砂岩5点、流紋岩2点、玢岩・凝灰岩各1点である。166～188は安山岩。

166はⅠ群b類土器の包含層であるシルト層から出土したもの。

H25－1は剥離した礫表面の破片を用いている。使用面は滑らかだが凹凸がある。P30－1は上半部左側が大きくくぼむように加工され、右側には擦痕が認められる。P972－1は使用面に複数の浅くくぼんだ部分が見られる。 P165－5は台石で、礫の自然のくぼみの周辺のみたたき痕が見られる。

加工痕のある礫

遺構から8点、包含層から51点、計59点出土した。

石材は、安山岩20点、泥岩19点、凝灰岩3点、玢岩2点、片岩・緑色泥岩各1点である。

P1196－35は泥岩で、図の裏側に数か所の剥離が加えられている（写真図版365）。

原石

遺構から38点、包含層から148点、計186点出土した。

石材は、黒曜石96点、頁岩59点（うち縞頁岩42点）、珪質頁岩2点、メノウ9点、チャート5点、珪化岩2点、石英岩4点、緑色泥岩3点、泥岩2点、緑泥石岩2点、軽石・蛇紋岩？各1点である。黒曜石のうち17点は棒状原石である（P209－3、P443－3、P689－4）。

頁岩・縞頁岩は、主に剥片石器とたたき石の素材とされる。原石とした頁岩のうち2点、縞頁岩のうち21点は、割れたものである。明瞭なたたき痕が認められないため原石としたが、たたき使用の初期段階で割れたものの可能性も考えられる。

緑泥石岩の原石が2点出土している。接合して1個体となるもので、欠損した扁平な円礫である。緑泥石岩は、P1251出土の連珠や、近隣の西島松5遺跡の縄文時代後期～晩期の墓に副葬される玉類の材料として多用されている石材である。今回はⅠ層からの出土であるが、玉類の製作・流通の観点から注目される。

フレイク

遺構から96,727点、包含層から50,442点、計147,169点出土した。

主に剥片石器に関連する石材は、黒曜石138,960点、頁岩6,316点（うち縞頁岩2,404点）、メノウ274点、珪質頁岩223点（うち縞頁岩1点）、チャート119点、凝灰岩40点、ガラス質安山岩29点、流紋岩25点、珪化岩7点、メノウ質頁岩1点である。

主に石斧に関連する石材は、緑色泥岩598点、泥岩182点、片岩83点、粘板岩4点、蛇紋岩・千枚岩各3点ロジン岩2点である。

主に礫石器に関連する石材は、安山岩106点、砂岩72点、玢岩63点、石英岩54点、石英脈貫入泥岩4点、閃緑岩1点である。

特徴的な「二次使用痕」をもつ北海道式石冠について（カラー図版80）

今回の調査では北海道式石冠が595点出土した。その大部分の使用面は、ほぼ平坦で広いひとつの面をなしており、明瞭にすり減っているが、すりの方向がわかる擦痕は確認できない。仮に、この「通常」の北海道式石冠に見られる使用面・使用痕を「一次使用面（痕）」とする。

これに対し、一次使用面に重なって、たたき痕や擦痕が見られる北海道式石冠が49点確認された。この使用面・使用痕を「二次使用面（痕）」と仮称する。

二次使用痕のある北海道式石冠は、主に破片や再加工品、あるいは小形の完形品を用いている。ま

た使用面にベンガラと思われる赤色顔料が付着する例が12点ある。最も顕著な例はP259－1（図Ⅴ－178）である。二次使用によるたたき痕は、使用面の中央付近に見られるものと、端部に見られるものがある。端部のたたき痕は、一次使用面とは角度の異なる二次使用面をなすものが多い。二次使用による擦痕は、使用面の端部に認められる。たたき痕と同様、二次使用面をなすものもある。擦痕の方向は使用面の軸に対し傾く。擦痕はやや荒いものや、石斧の調整のような細かいものがある。

赤色顔料の付着は、比較的広範囲で明瞭な例もあるが、多くは石材の微細な凹みに残存する、あるいはわずかに色調の変化があるといった痕跡的なものである。擦痕の範囲と重複することがあるが、たたき痕と重複するものは見られない。P259－1の赤色顔料付着面の化学組成分析結果は、鉄分に富み、水銀は含まれていないことから、この赤色顔料はベンガラと考えられる。

「通常」の北海道式石冠と二次使用痕をもつ北海道式石冠の使用痕の違いは、作業の対象とするものや、作業時に併用される道具に起因すると推定される。すなわち、二次使用痕をもつ北海道式石冠は通常とは異なる用途に使用されたものであり、そのために分割・再加工が行われたものと思われる。用途としては、赤色顔料の付着例が確認されたことから、赤色顔料の精製に関わるものと推定される。本遺跡では北海道式石冠はⅡ群ｂ類土器に伴うものと考えられるが、この時期に赤色顔料が使用された形跡は乏しい。一方、本遺跡で赤色顔料が多用されるのは、墓が形成されたⅣ群ｃ類あるいはⅤ群ｃ類土器の時期である。このことから、二次使用痕をもつ北海道式石冠については、Ⅳ群ｃ類あるいはⅤ群ｃ類土器の時代（縄文時代後期後葉あるいは晩期後葉）に、Ⅱ群ｂ類土器の時代（縄文時代前期後半）の「遺物」である北海道式石冠を再利用したもの、との可能性を指摘しておく。

3　土製品（図Ⅴ－227～228－１～15）

１は土偶（等倍で掲載）である。両腕は無く、足は崩れている。顔には眉毛、目、口が表現され、胸部には小さな貫通穴があけられている。２は土偶の手の破片。３は土偶としたが、詳細は不明である。４は土製垂飾の破片とみられる。５はミニチュア土器の底部の可能性あり。６・７はスタンプ形土製品である。８は不明の土製品。９・10はオロシガネ状土製品である。11は後北C_2・D式期の紡錘車と考えられ、包含層から検出された。12～14は擦文時代の住居址検出の紡錘車である。15は包含層とH34から出土したフイゴの羽口である（縮尺１：３）。

4　石製品（図Ⅴ－229～235－１～73、77～104）

１～84は玉類。１～68はP1251の副葬品。出土状況から、連珠をなしていたと考えられるもの。石材は、緑泥石岩が60点、緑泥石岩と思われるもの３点、凝灰岩２点、蛇紋岩２点、滑石２点である。22・23・57・61・64と未掲載の破片１点は石材鑑定を依頼した。未掲載の破片は、破壊を伴う蛍光X線回折による分析を行った（Ⅵ章１節）。

69はネズミのかじり痕がある。77～80はP1399の覆土中焼土から出土した。コハク製で、未加工の原石に穿孔したもの。80は凝灰質珪化岩製の垂飾。石材鑑定を依頼した（Ⅵ章１節）。81は軽石製。上半に溝が横環しており、垂飾に類するものと思われる。83は凝灰岩製で、２か所の穿孔がある。表裏は研磨され、周縁は未加工である。84は泥岩の剥片に穿孔途中のもの。85はメノウの原石の表面全体に擦痕が見られるもの。

86～89は異形石器。90～93はオロシガネ状石製品。90・91は小孔の多い安山岩、92はスコリア、93は軽石製。94・95は石棒の破片。96～101はいかり石。96はP1261、97・98はP623、100はP710の副葬品で小孔の多い安山岩製、99はP145出土のもので安山岩製。101はj－82から出土した破片。

102は石斧に類似した形態であるが、刃部調整が全く行われておらず、横断面形が凹レンズ状である点で異なっている。下半に断面V字形の細い横位の溝が多数見られる。

103・104は軽石製品。104は上下端に幅の広いすり痕が認められる。回転によるくぼみがある。

5 ガラス製品（図V－229－74～76）

ガラス製品は、包含層から3点出土した。74～76はガラス製の小玉。Ⅵ群土器に伴うものと思われる。石製品とともに、成分分析を行った（Ⅵ章1節）。

6 金属製品（図V－236～242）

金属製品は、遺構から34点出土した。擦文時代の竪穴住居跡の覆土・床面から出土したものと、近世の墓の副葬品がある。

材質判断は主に肉眼で行った。以下に特に記載するもの以外は鉄製である。肉眼で鉄以外の材質と思われたもののうち、日本電子製蛍光X線分析装置JSX－3220の試料室に装填可能な大きさのものについては、化学組成分析を行った。結果は本節末に記載した。

H19－1・2は刀子。2の左端に樹皮様のものが付着する。3は、小刀の両端を切断したもので、棟・刃が潰れているため、楔などに転用したものと考えられる。

H26－1は釘。

H34－1は刀子の切先。2は刀子の茎の破片と思われる。3は小破片のため判然としないが、同一個体の刀子の茎と思われる。図右端の破片には木質が付着する。4は刀装具と思われるもの。破断面に面取り状のすり痕が見られ、再利用しようとした可能性がある。緑がかった黒色を呈し、材質は銅である。5は釣針あるいは針。6・7は不明鉄片。8は鍾あるいは鐔（はばき）と思われる、屈曲した板状製品。左端に木質が付着する。9は鍬先。断面はV字形を呈する。

H38－1は紡錘車の軸。断面は正方形で、先端は鉤状である。下端に木質が付着するが、この遺物に組み合わされるものではないと思われる。

H41－1は刀子の茎と思われるもの。

P262－1・2は刀子。2の上に1が重なって出土した。1の刃部にはわずかに鞘の木質が、茎の末端には柄の木質が残存する。茎の刃部側には、樹皮巻きの痕跡が残る。その上に、非常に薄い銀製と思われる金属片が付着しているが、2の鞘口金具の一部の可能性がある。2はわずかに鞘・柄の木質が残存する。柄には樹皮巻きの痕跡がある。銀製と思われる鞘口金具が付着する。刃部中央に付着する金属片、1に付着する金属片は、この破片と考えられる。3は釣針。チモトに糸が巻かれている。5は針。2本をまとめるように、細いひも状の樹皮で巻かれている。4は鉤銛先。軸部分に糸が巻かれている。6・7は銀色を呈する金属片。非常に薄く、2の鞘口金具に類するものの破片と思われる。材質は銀である。8は木質に薄い金属板が付着したもの。2の付近で出土しており、2の鞘金具などの可能性がある。材質は銀である。9・10は小刀。9は鍔の刃部側で折損している。刀身は平棟、平造りである。X線写真で目釘穴が2か所確認された。柄・鞘の木質が残存し、部分的に原形をとどめている。柄には黒漆塗りの樹皮ひも上に赤漆塗りの樹皮ひもが巻かれる。鍔は銅製で、銀製の覆輪がつく。柄側に切羽が付着している。鞘は全体に黒漆が塗られていたと見られる。部分的に樹皮巻きの痕跡があり、切先側に顕著である。鞘の中ほどと切先側には、黒漆の上に赤漆を重ねて文様が描かれる。鞘口に右撚りの細い紐が付着する。10は平棟、平造りで目釘穴は2か所である。柄・鞘の木質がわずかに残存する。鍔は銅製で、柄側に切羽が付着している。鞘口付近には樹皮巻きの痕跡がある。

P1349－1は刀子。鞘・柄の木質がわずかに残存する。柄に骨が付着する。2は鉤で、ヤスを再加工したもの。3はS字状を呈する耳飾り。材質は鉛・錫である。4は小刀。鞘・柄の木質が残存し、鞘は部分的に原形をとどめている。鞘の外面には樹皮が巻かれている。刀身は平棟、平造り、目釘穴は2か所である。図には表れていないが写真図版394に見られるように、棟は張り出しており、張り出しの下部には表裏とも溝が走っている。溝は幅0.7～0.8cmほどで、切先から約7cmの位置から、茎側は鞘に隠れているが、X線写真では棟区から約3cmの位置まで続く。

P1359－1は小刀。柄～刀身と切先は離れて出土しており、形態的には同一個体とみられたため、折損したものとして復元して図化したが、化学組成分析の結果からは、異個体である可能性も考えられる（Ⅵ章3節表2）。鞘・柄の木質が部分的に残存している。刀身は平棟、平造り、目釘穴は1か所である。P1349－4と同様、棟は張り出し、その下部には表裏とも溝が走っている。溝は幅0.6cmほどで、切先から約8cmの位置から棟区ぎわまで続く。2・3は刀子。2は柄の木質が残存し、刃部側のみ原形を留めている。3は柄の木質が残存する。柄の中ほどに、樹皮巻きの痕跡が残る。4は鉤銛先。軸の中央付近には長軸方向に走る浅いくぼみが表裏にあり、図の左右方向から鍛打されたことがわかり、棒状の鉄製品を再加工したものと考えられる。5は棒状製品。図上半は、木質の上から糸が巻かれている。6は環状製品。棒状製品を丸めたもので、継ぎ目はややずれている。

以下に、化学組成分析を行ったものについて、元素組成を重量比で記載する。記載にあたっては1％未満の元素は省略した。

機器は日本電子製蛍光X線分析装置JSX－3220、分析条件は管電圧30kV、管電流自動、測定時間は100秒（ライブタイム）、分析方法はバルクFP法である。

資料は洗浄・クリーニング・強化等の処理が施されている。分析は現状のまま行った。

H34－4　CuO：66.18%、Al2O3：12.62%、SiO2：10.07%、As2O3：8.85%、P2O5：1.31%

P262－6　Ag2O：85.60%、SO3：3.52%、Cl：3.27%、SiO2：2.86%、CuO：2.47%

P262－8　Ag2O：64.90%、Cl：17.44%、Fe2O3：12.42%、SiO2：2.87%

P262－9・鍔　CuO：70.71%、PbO：7.78%、SiO2：5.70%、Al2O3：5.37%、Fe2O3：4.78%
P2O5：2.53%、SnO2：1.24%、As2O3：1.19%

P262－9・鍔覆輪　Ag2O：81.27%、SiO2：7.07%、CuO：3.47%、CaO：3.02、MgO：2.31%
Al2O3：1.34%

P1349－3　PbO：64.03%、CaO：12.47%、SnO2：7.13%、SiO2：6.28%、P2O5：6.09%
Fe2O3：1.85%

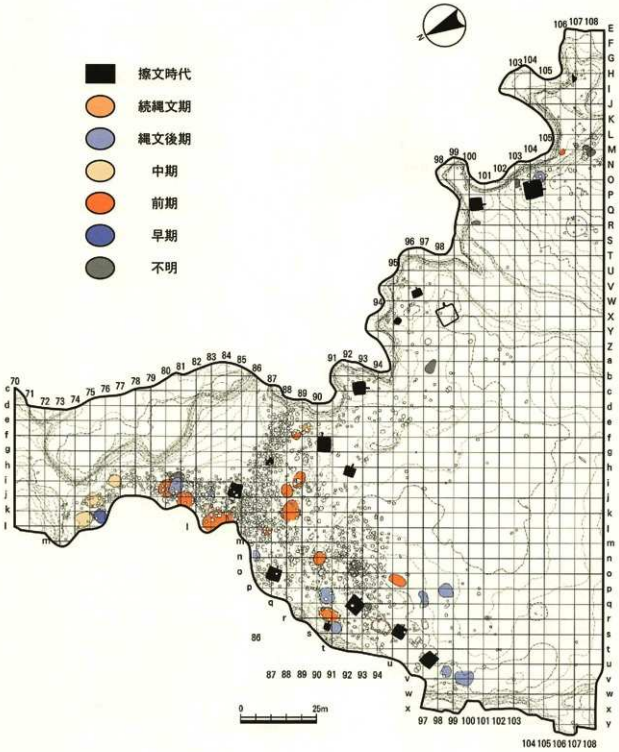
7　木製品（図Ⅴ－243）

1は曲げ物である。底板を上にして、中に土壌が詰まった状態で、カマドを構成していた粘土のやや上位から出土した。

円筒状を呈する。側板にほぼ円形の底板がはめ込まれている。

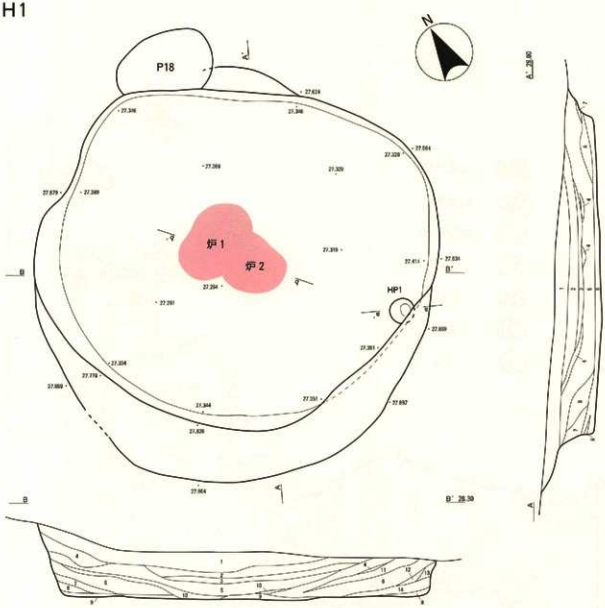
底板は柾目材である。腐朽が進んでおり、現存するのは概ね0.1cm以下であるが、部分的に0.3cmほど残存する。本来はさらに厚みがあった可能性がある。側板は柾目材で、図の左側面の部分で重なっている。重なり部分は現存で2.5cmほどである。1cm×0.2mmほどの横長の孔が開けられ、樹皮が貫通し、綴じられている。底板と側板を固定するための構造は、現存する部分からは確認できないが、側板が底板を完全に覆っていることから、底板を側板にはめ込み、木釘などで固定する「クレゾコ」の可能性がある。

素材の樹種は底板・側板で異なるが、いずれも針葉樹材である。Ⅵ章10節に同定結果を掲載した。



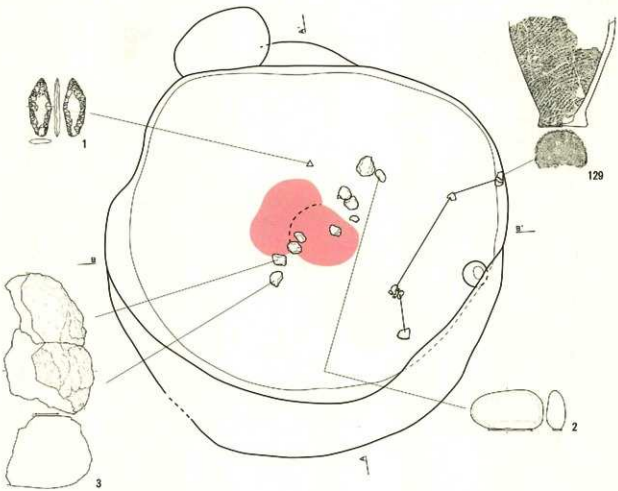
図Ⅳ－1　時代別　竪穴住居分布図

H1

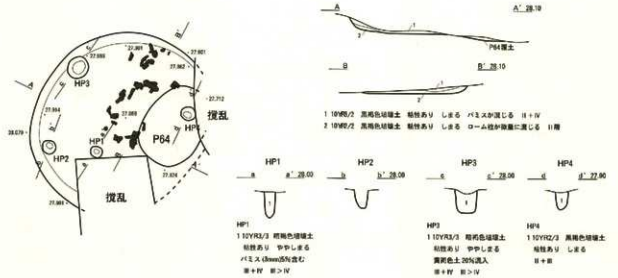


1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる パミス混じる IIb層の落ち込み
2 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり しまる パミス少量含む IIb層＋III層
3 10YR 7/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる 炭化物・焼土を含む IIb層
4 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる II＋III
5 10YR2/3 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス少量含む II＜III
6 10YR3/3 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる III＋IV
7 10YR4/6 黄褐色埴壌土 粘性あり ややしまる IV層の流れ込み
8 10YR3/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる III＋IV
9 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり しまる 生活面
10 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる II と層の流れ込み
11 10YR3/3 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる III＞IV
12 10YR3/3 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる III層の崩落土
13 10YR4/4 にぶい黄褐色埴壌土 IV層の崩落土
14 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性なし ややしまる II＋III

図IV－2 H1平面図・断面図

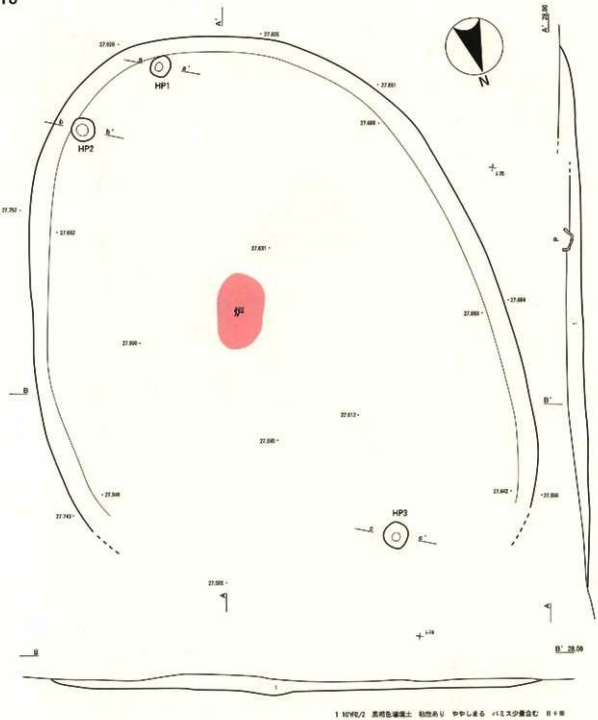


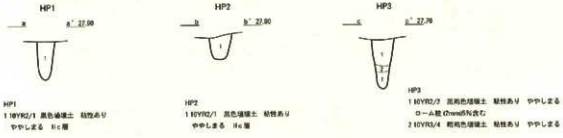
H2



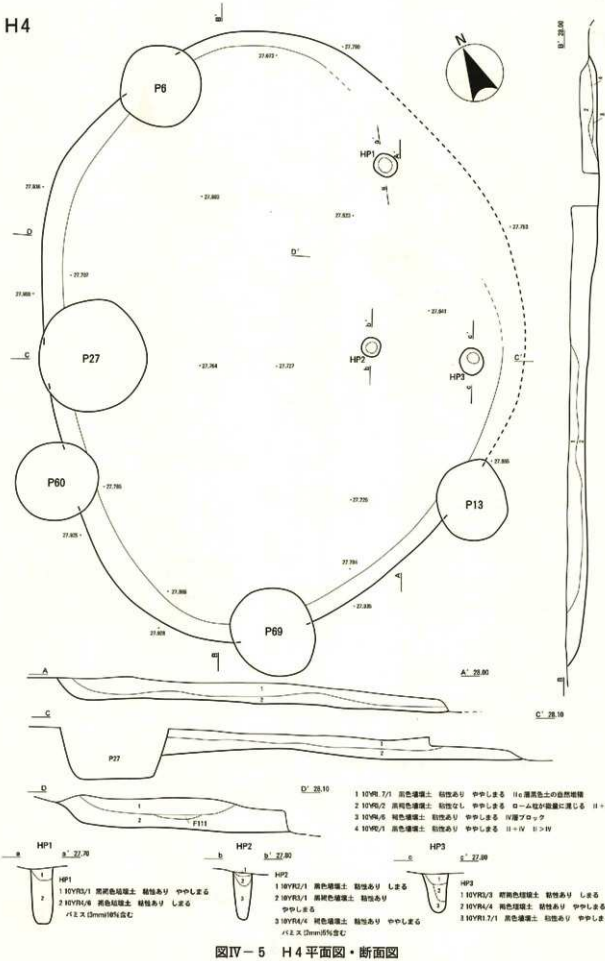
図Ⅳ－3 H1遺物出土状況図／H2平面図・断面図

H3



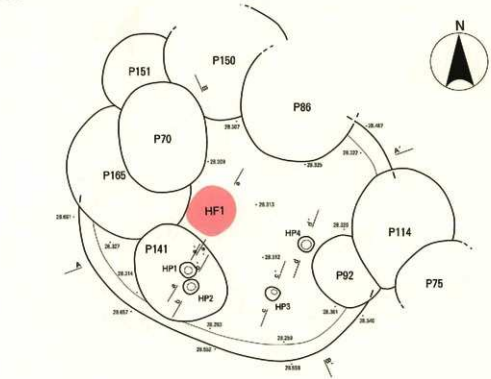


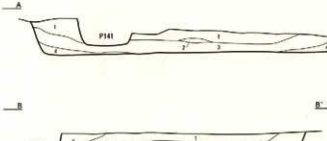
図Ⅳ－４　Ｈ３平面図・断面図



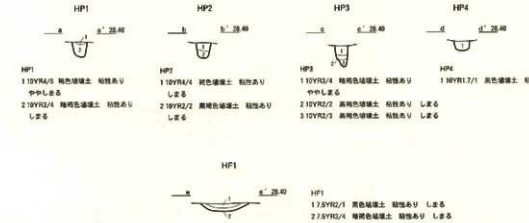
図Ⅳ－5 H4平面図・断面図

H5

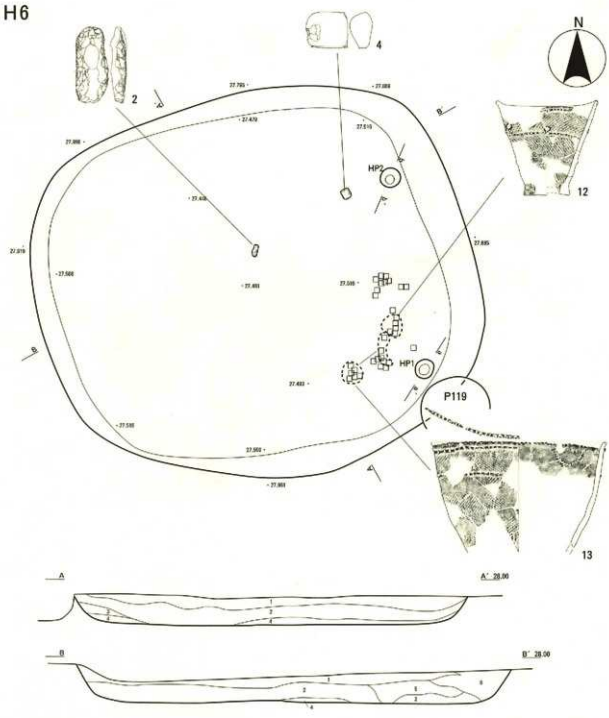




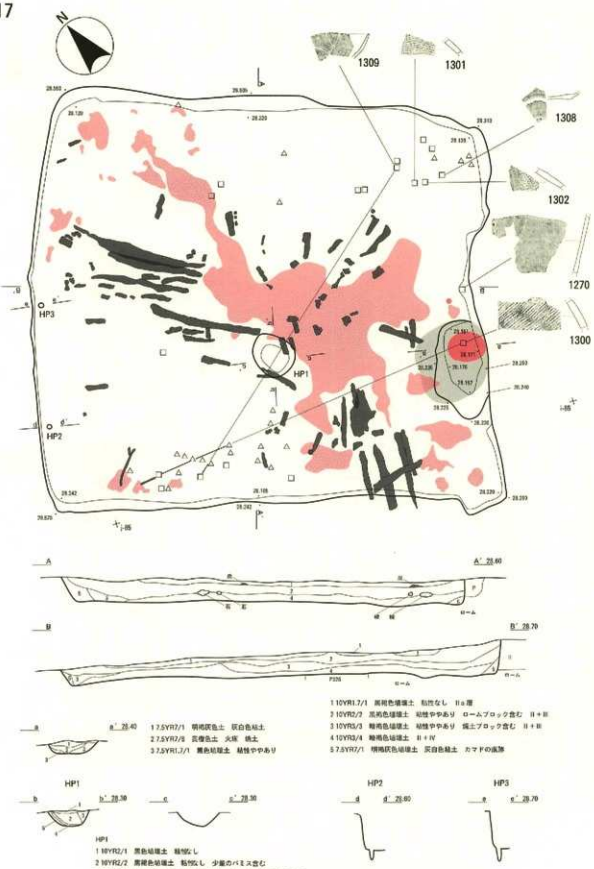
1 10YR2/2 黒褐色埋積土　粘性あり　しまる　パミス混じりのⅡc層
2 10YR1.7/1 黒色埋積土　粘性あり　ややしまる　炭化のみ入るⅡc層
3 10YR2/3 黒褐色埋積土　粘性あり　しまる　パミス混じりのⅡ＋Ⅳ層
4 10YR3/1 黒褐色埋積土　粘性あり　ややしまる　三角堆積　Ⅲ＋Ⅳ
5 10YR2/2 黒褐色埋積土　粘性あり　ややしまる　パミス混じりのⅡc層
6 10YR3/4 暗褐色埋積土　粘性あり　ややしまる　Ⅲ＋Ⅳ



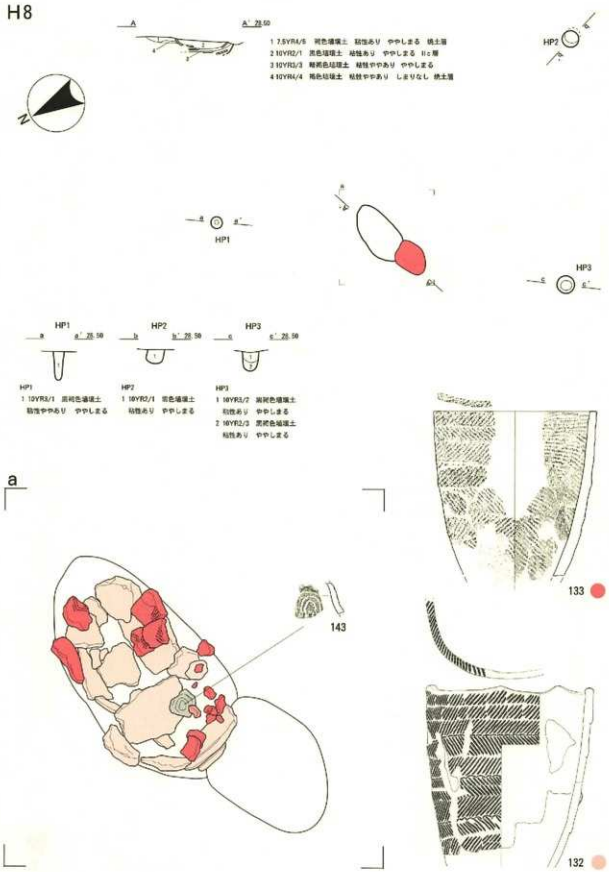
図Ⅳ－６　Ｈ５平面図・断面図



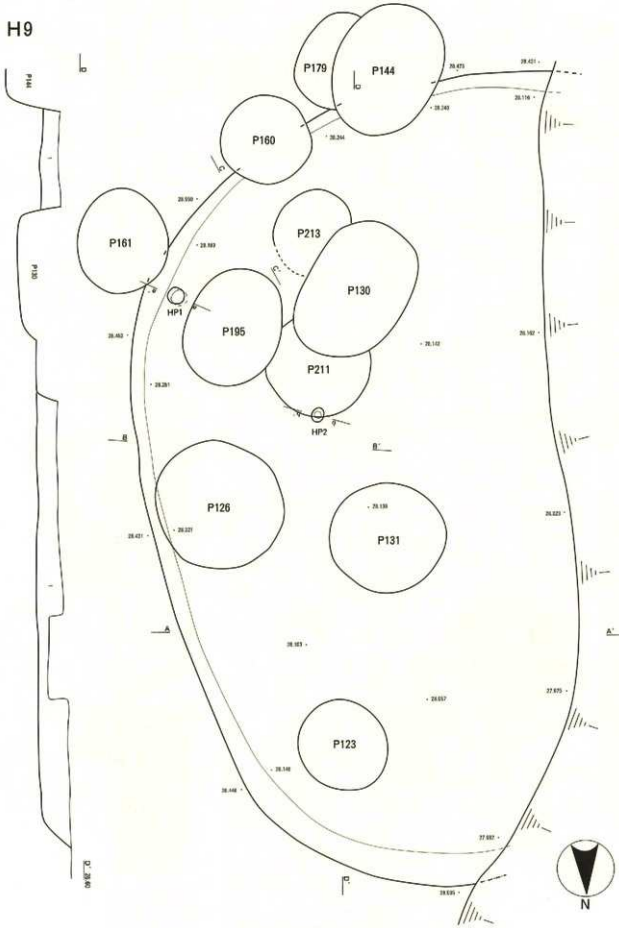
図Ⅳ－7 H6平面図・断面図・遺物出土状況図



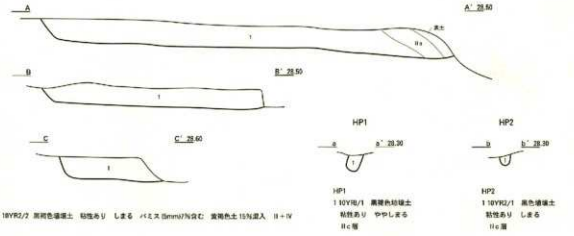
図IV－8　H７平面図・断面図・遺物出土状況図



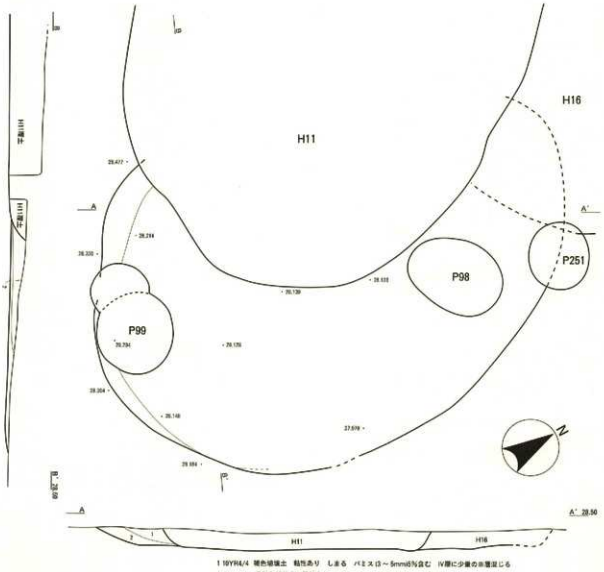
図Ⅳ－9 H8平面図・断面図・遺物出土状況図



図Ⅳ－10　H９平面図・断面図

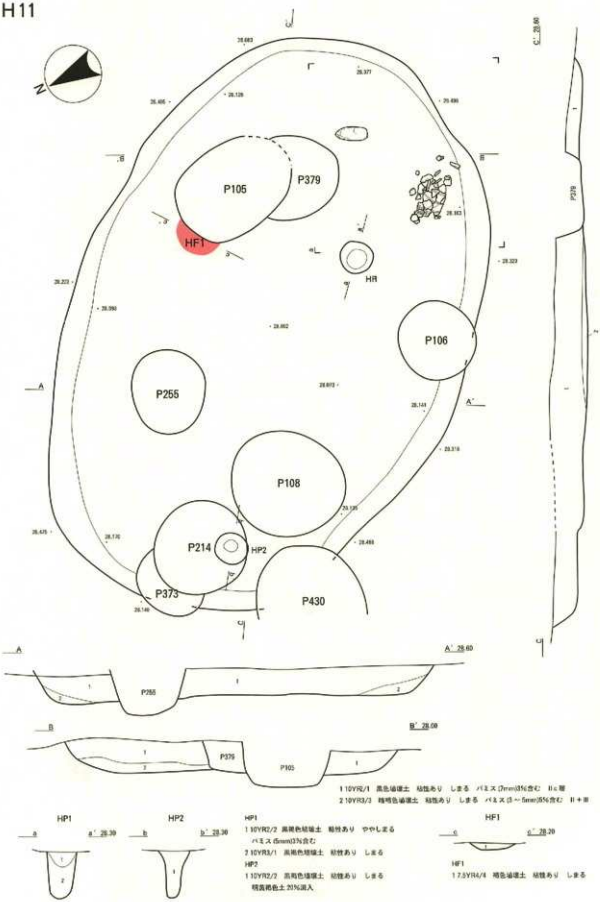


H10

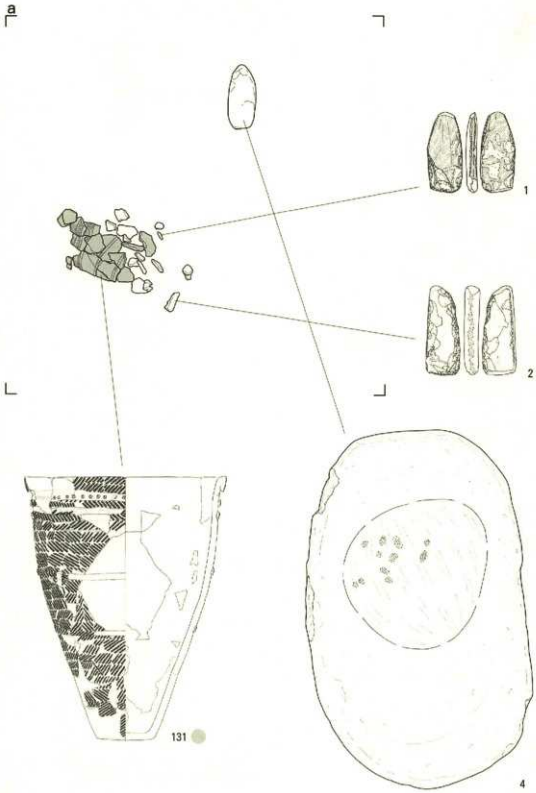


図Ⅳ－11 H 9 断面図／H10 平面図・断面図

H11

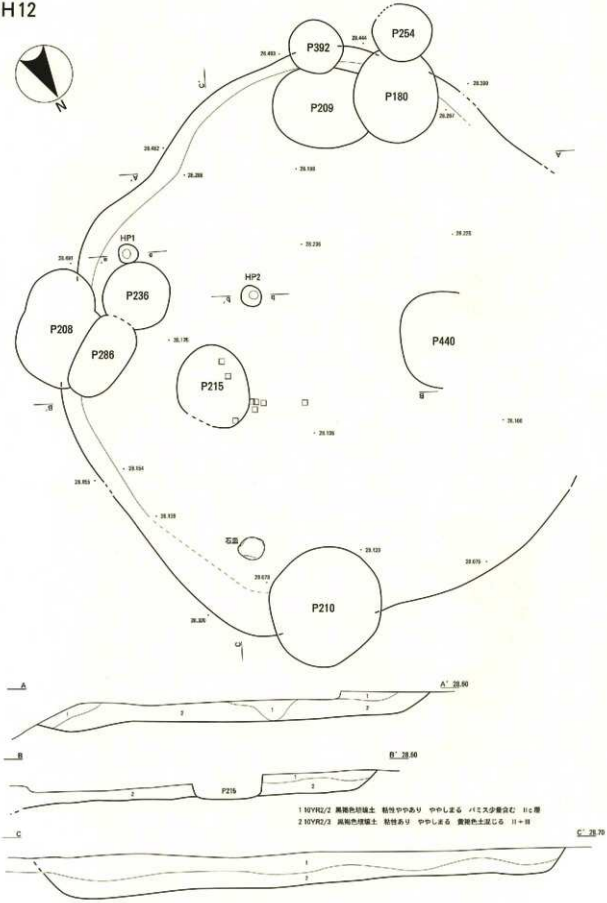


図IV－12 H11 平面図・断面図



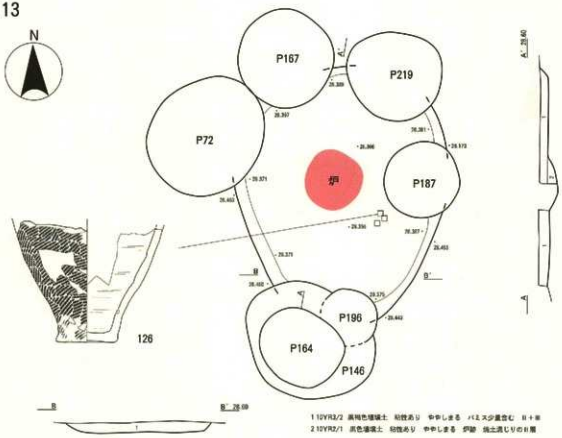
図Ⅳ－13　H11 遺物出土状況図

H12

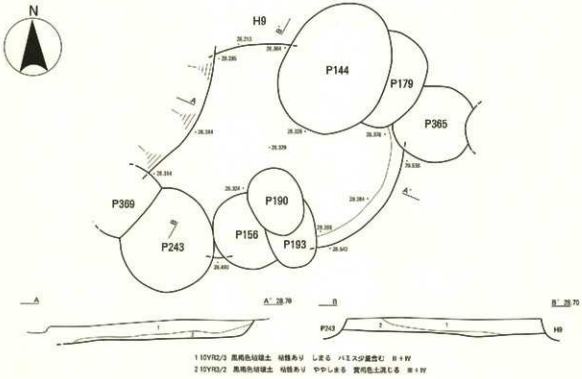


図Ⅳ－14 H12 平面図・断面図

H13

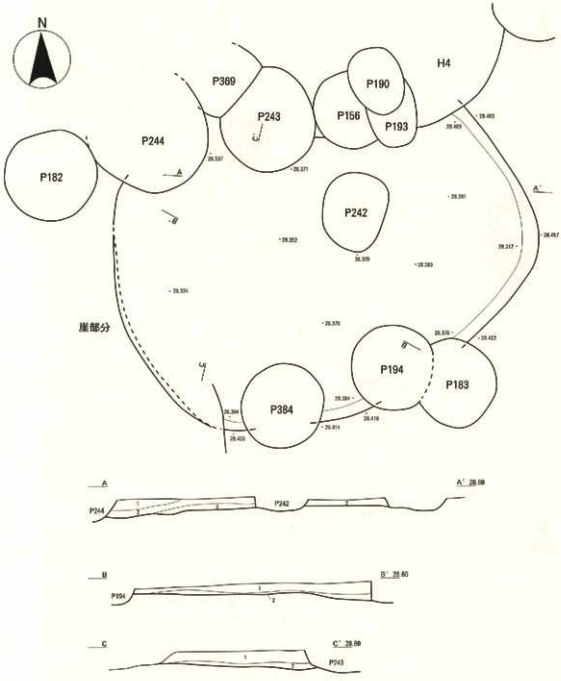


H14

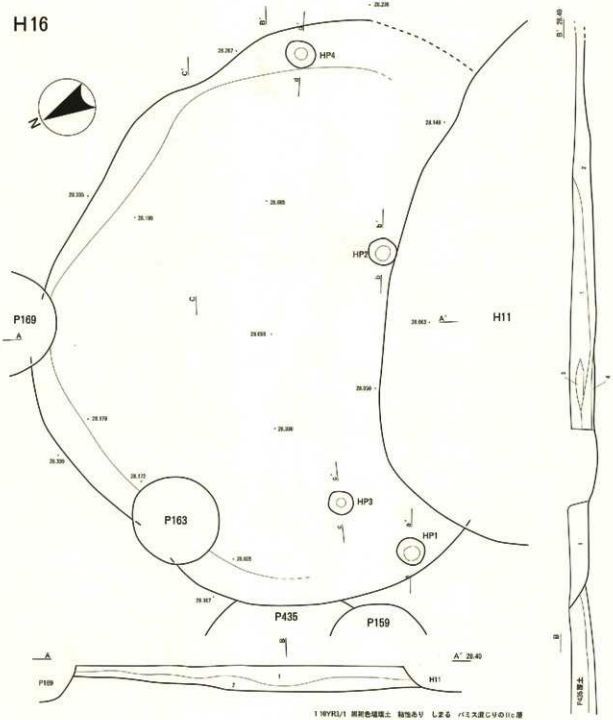


図Ⅳ－15 H13・H14 平面図・断面図

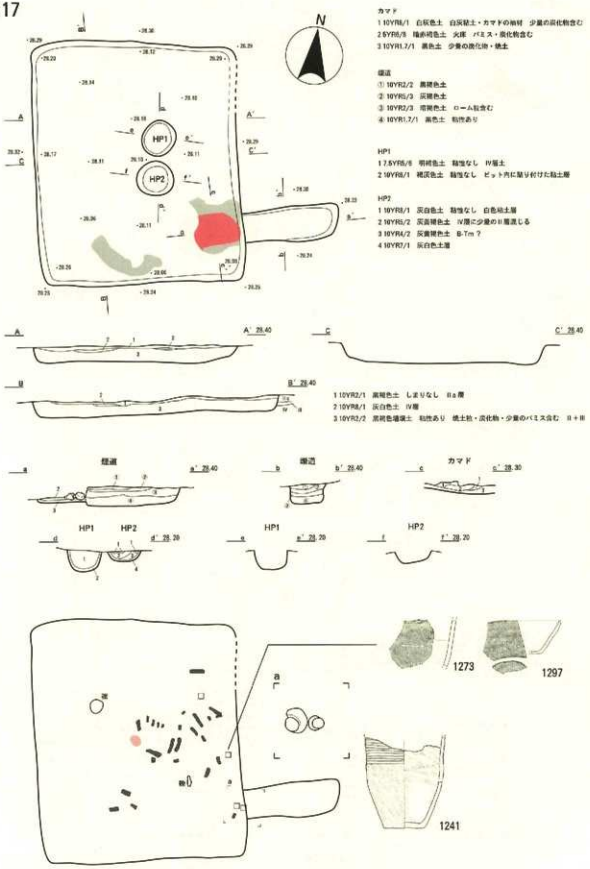
H15



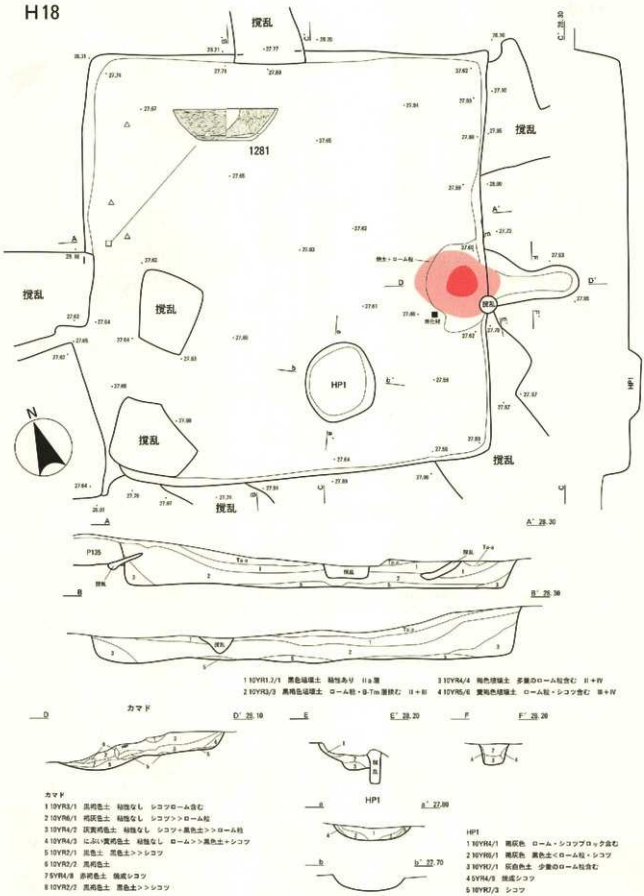
図Ⅳ－16 H15 平面図・断面図



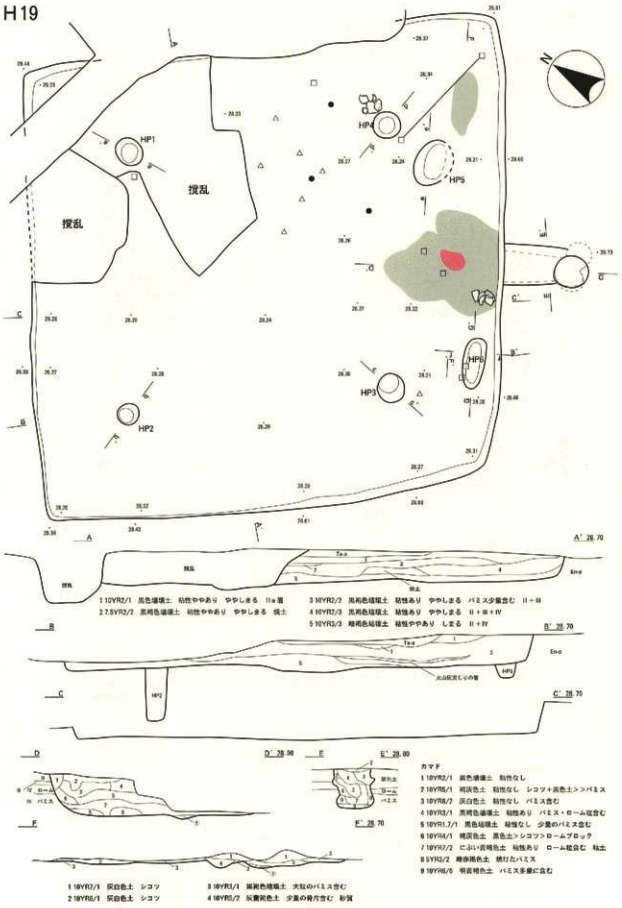
図Ⅳ－17 H16 平面図・断面図



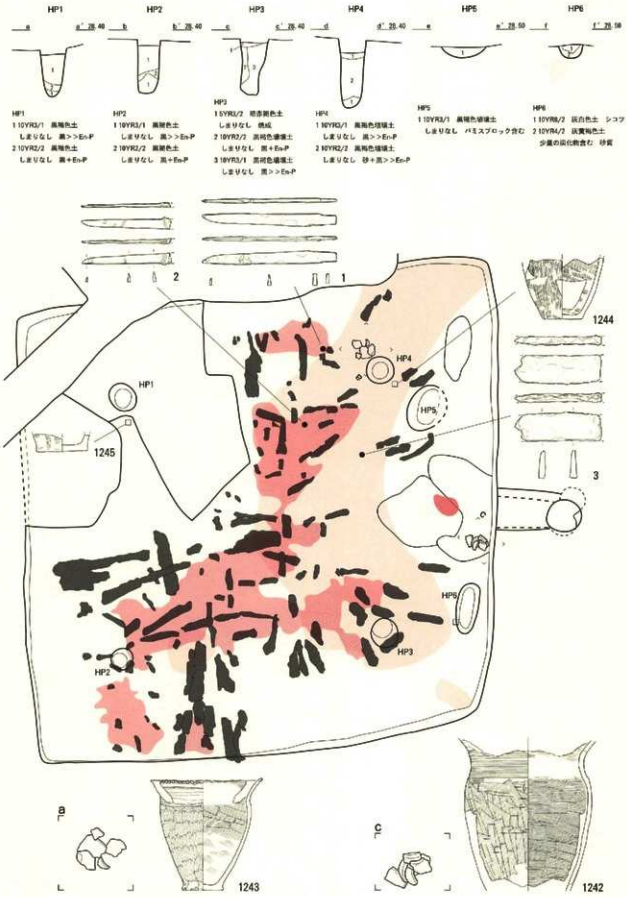
図Ⅳ－18 H17 平面図・断面図・遺物出土状況図



図Ⅳ－19 H18平面図・断面図・遺物出土状況図

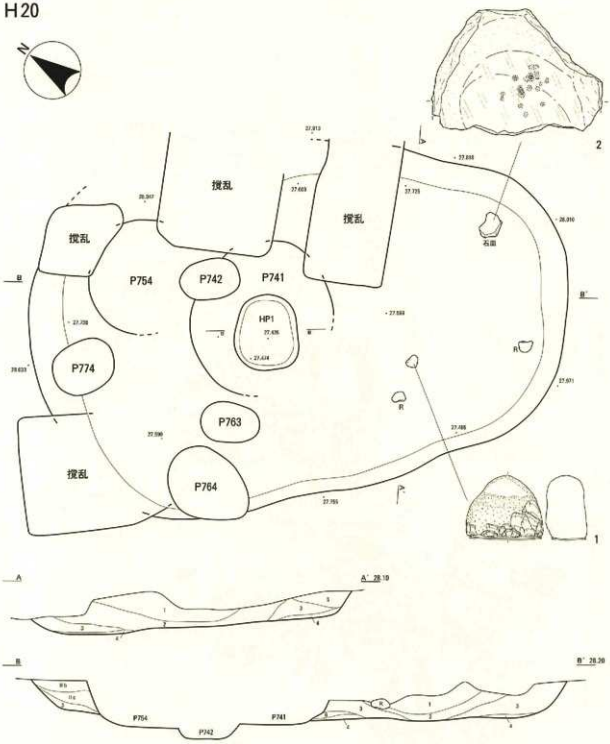


図IV－20 H19平面図・断面図



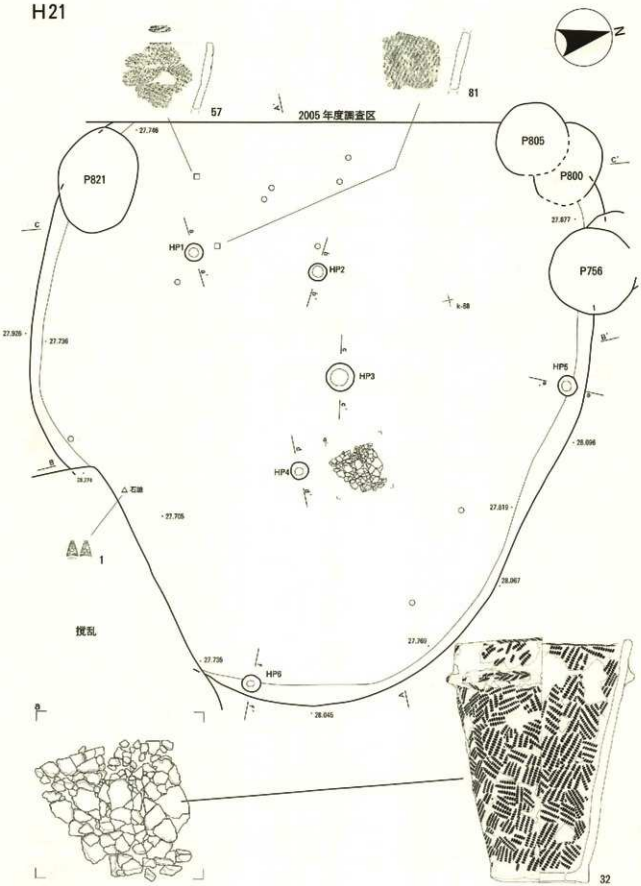
図Ⅳ－21 H19断面図・遺物出土状況図

H20

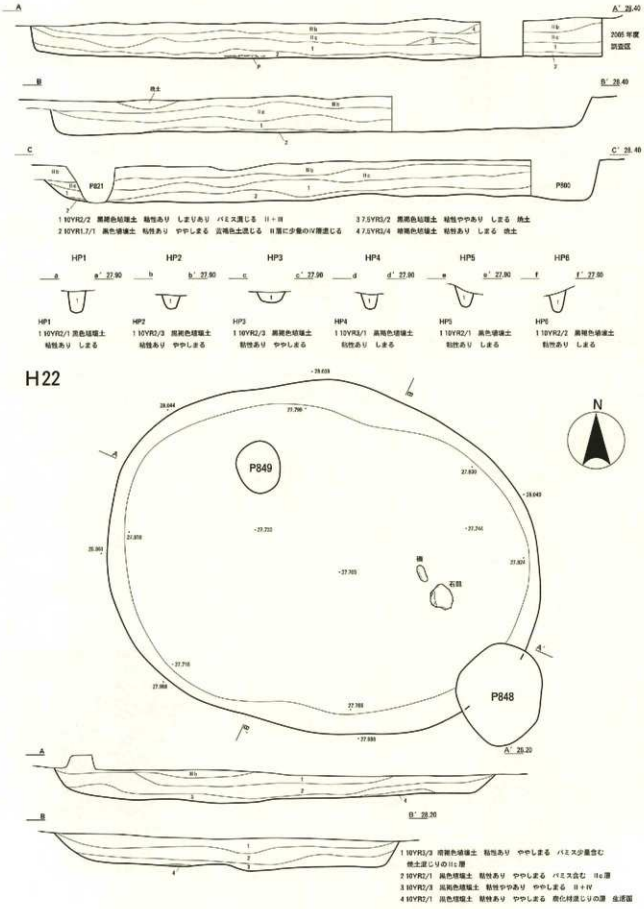


1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる Ⅱ層土
2 10YR2/3 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる パミス含む Ⅲ＋Ⅳ
3 10YR4/4 褐色粘質土 粘性あり ややしまる 暗褐色土20%混じる Ⅳ層に少量のⅢ混
4 10YR1.7/1 黒色埋土 粘性ややあり ややしまる 住居面
5 10YR2/2 黒褐色粘質土 粘性ややあり ややしまる Ⅲ＋Ⅳ層
6 10YR5/6 黄褐色粘質土 粘性あり ややしまる 暗褐色土混じる Ⅳ層土

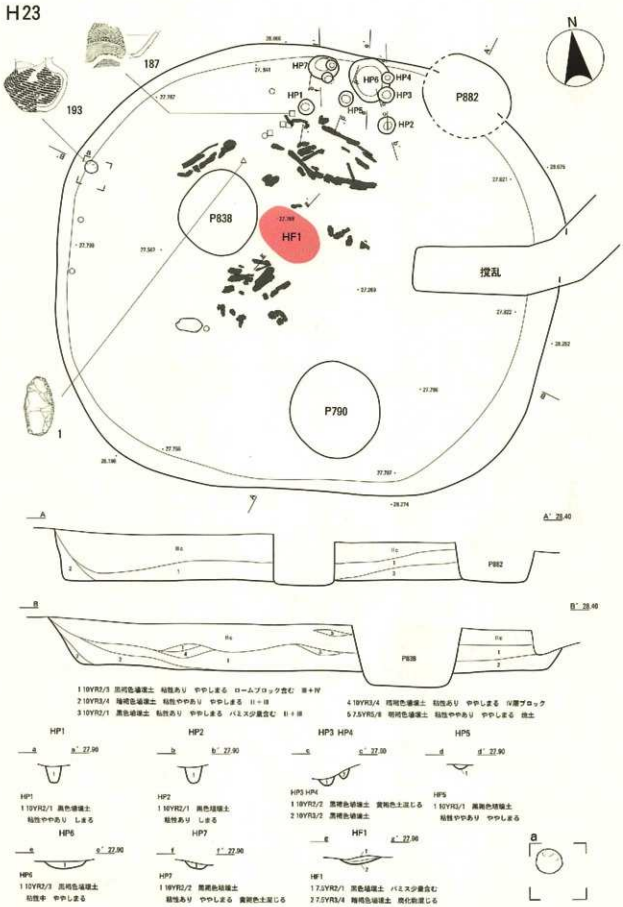
図Ⅳ－22 H20 平面図・断面図・遺物出土状況図



図Ⅳ－23 H21 平面図・遺物出土状況図

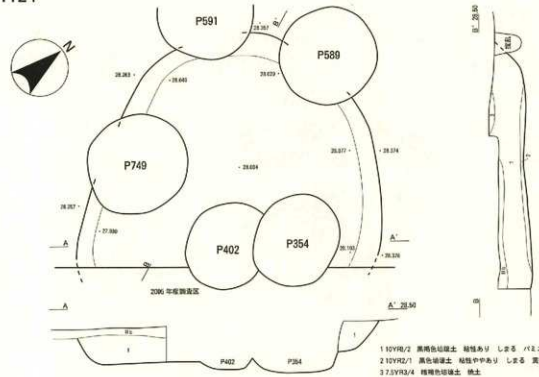


図IV－24 H21 断面図／H22 平面図・断面図

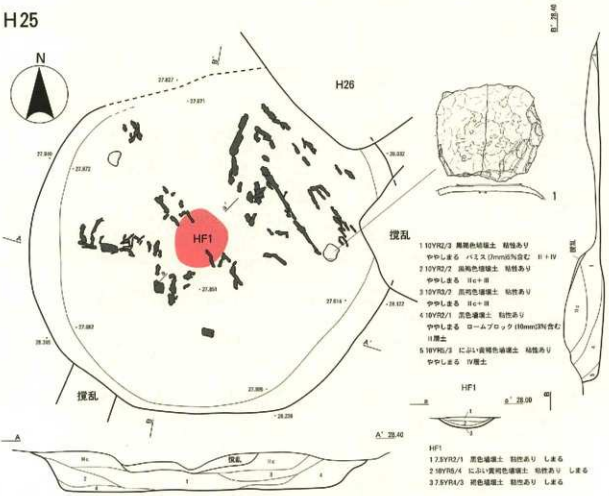


図Ⅳ－25 H23 平面図・断面図・遺物出土状況図

H24

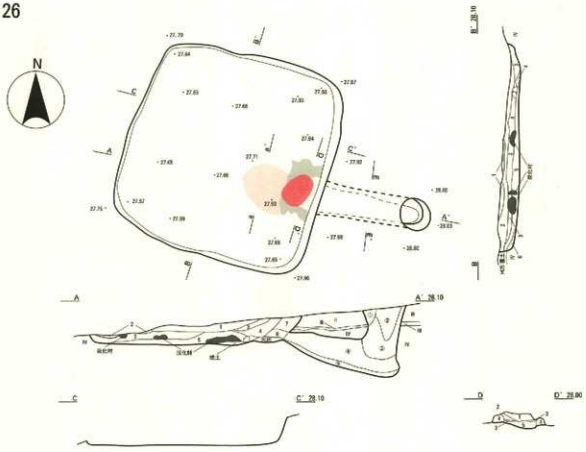


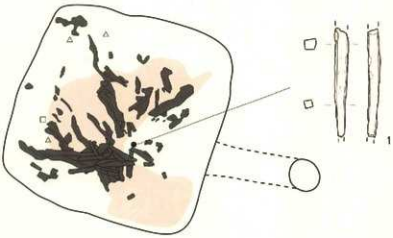
H25



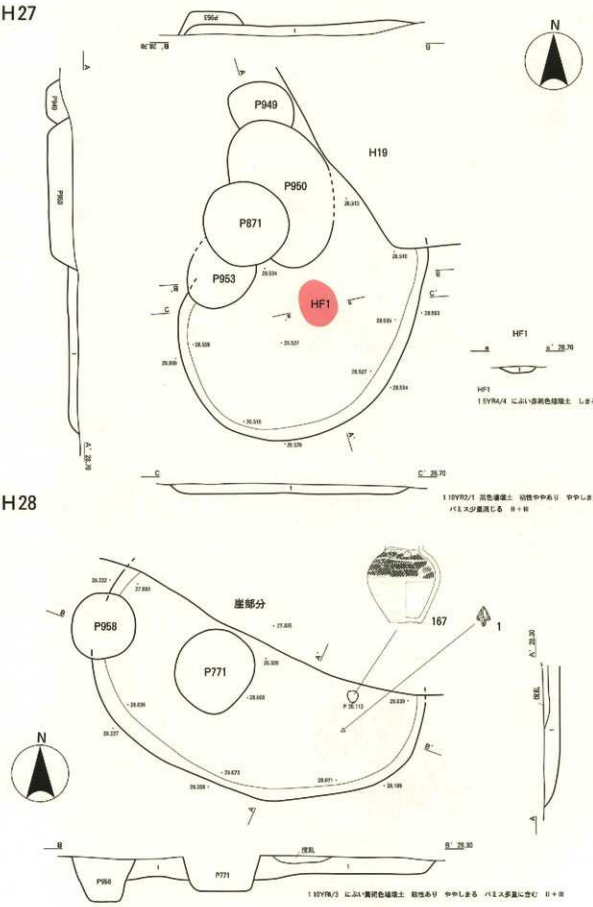
図IV－26 H24・H25平面図・断面図/H25遺物出土状況図

H26



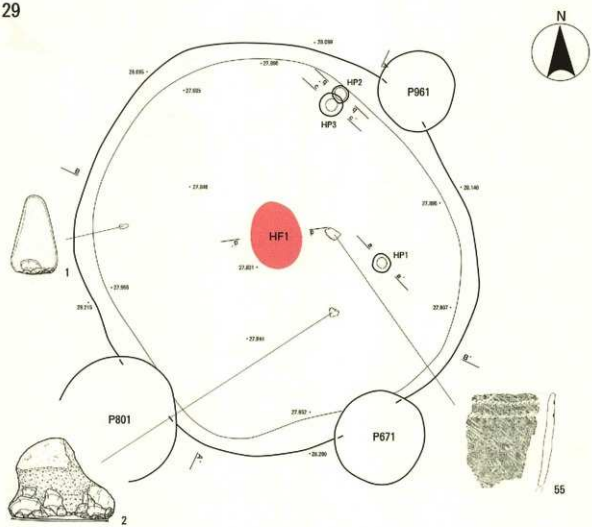


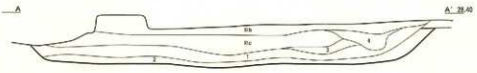
図Ⅳ－27 H26 平面図・断面図・遺物出土状況図



図Ⅳ－28　H27・H28 平面図・断面図/H28遺物出土状況図

H29





1 10YR2/3 黒褐色砂質土 粘性あり ややしまる ローム粒含む Ⅱ＋Ⅲ
2 10YR2/1 黒色砂質土 粘性あり やしまる 生活面
3 10YR3/3 褐灰色砂質土 粘性あり ややしまる Ⅲ＋Ⅳ
4 5YR5/8 明赤褐色粘質土 粘性あり ややしまる 焼土

HP1
1 10YR2/1 黒色砂質土
粘性あり しまる

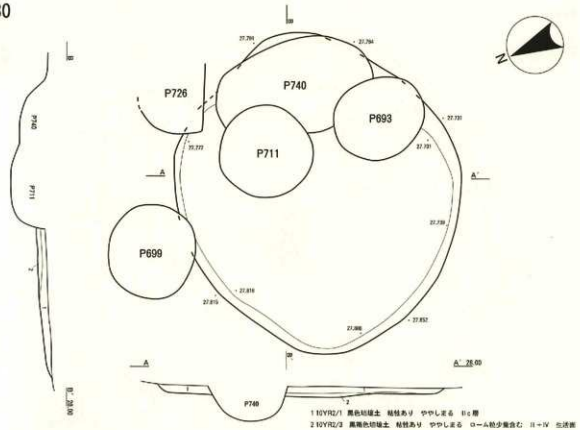
HP2
1 10YR2/2 黒褐色砂質土
粘性あり ややしまる

HP3
1 10YR3/1 黒褐色砂質土
粘性あり ややしまる

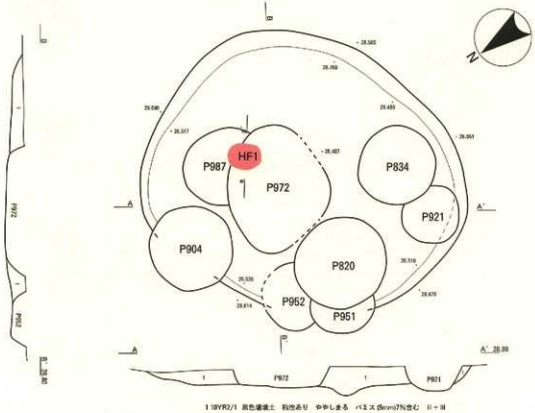
HF1
1 7.5YR2/1 黒色砂質土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－29 H29 平面図・断面図・遺物出土状況図

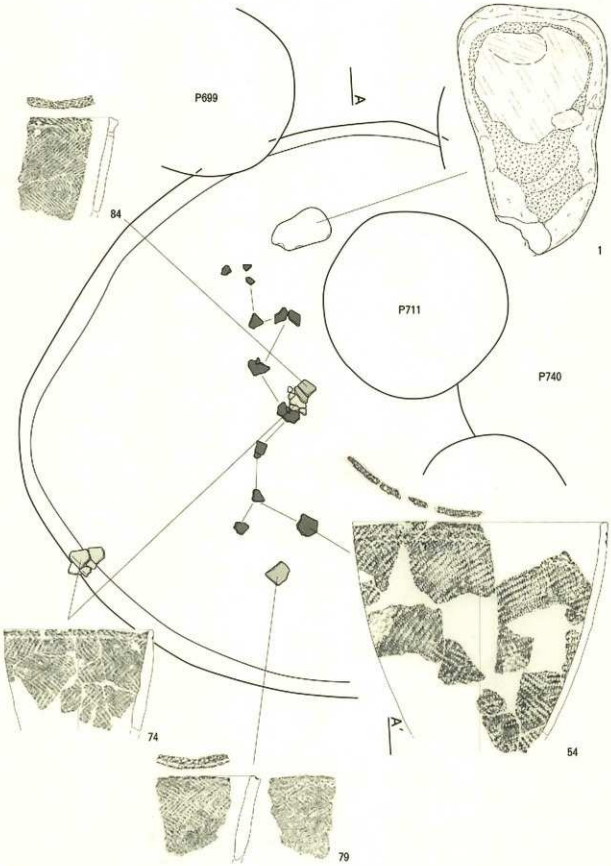
H30



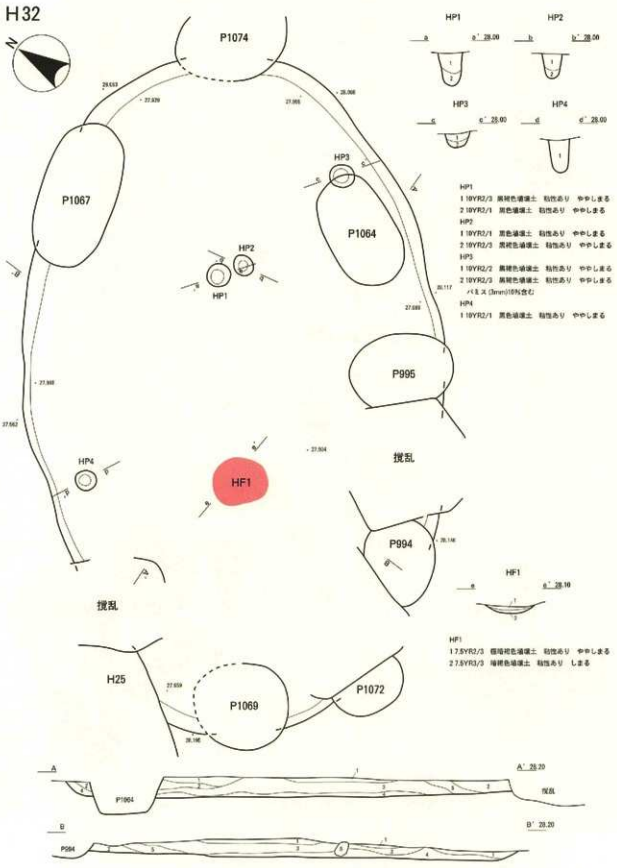
H31



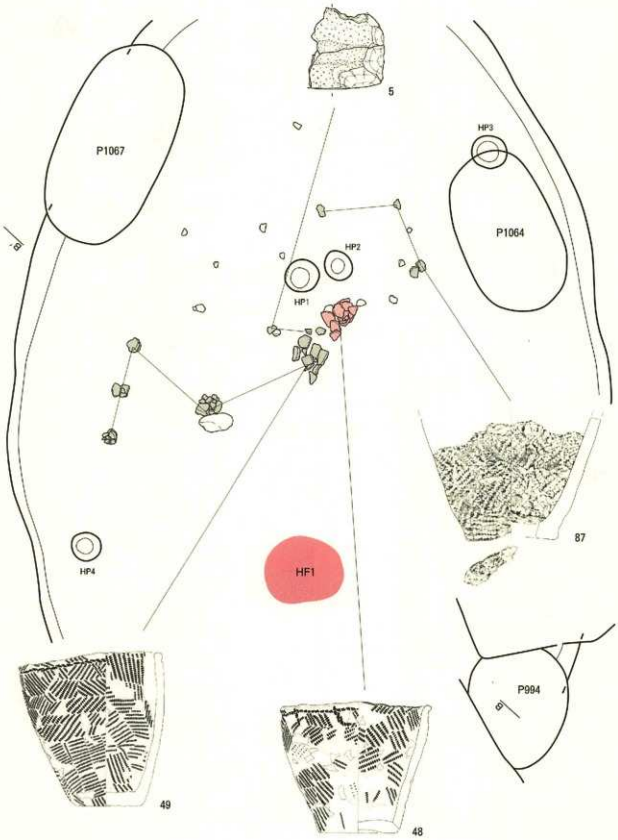
図Ⅳ－30　H30・H31 平面図・断面図



図Ⅳ－31　H30 遺物出土状況図

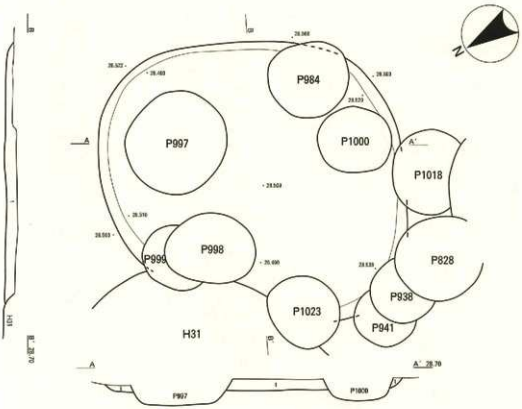


図Ⅳ－32 H32 平面図・断面図



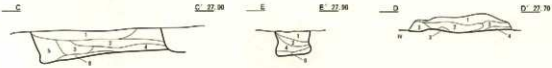
図Ⅳ－33　H32 遺物出土状況図

H33



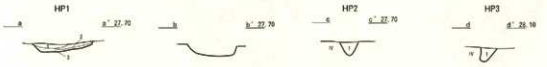
1 10YR2/1 黒色埋蔵土 粘性あり ややしまる パミス(7mm)7%含む Ⅱ＋Ⅲ

H34



1 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし Ⅳ＞Ⅱ＋白灰粘土ブロック 炭化物含む
2 10YR2/1 黒色土 しまりなし
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 焼土＞Ⅱ 炭化物含む
4 10YR5/6 黄褐色土 しまりなし 焼土＞＞黒
5 10YR3/4 暗黄色土 しまりなし Ⅱ＋焼土 炭化物・少量の白灰粘土含む
6 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし 砂粒含む

1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 白粘土＞＞Ⅱ
2 5YR5/8 明赤褐色土 しまりなし 火床 焼土
3 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし Ⅱ＋白粘土＞Ⅳ
4 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりなし Ⅳ＞Ⅱ



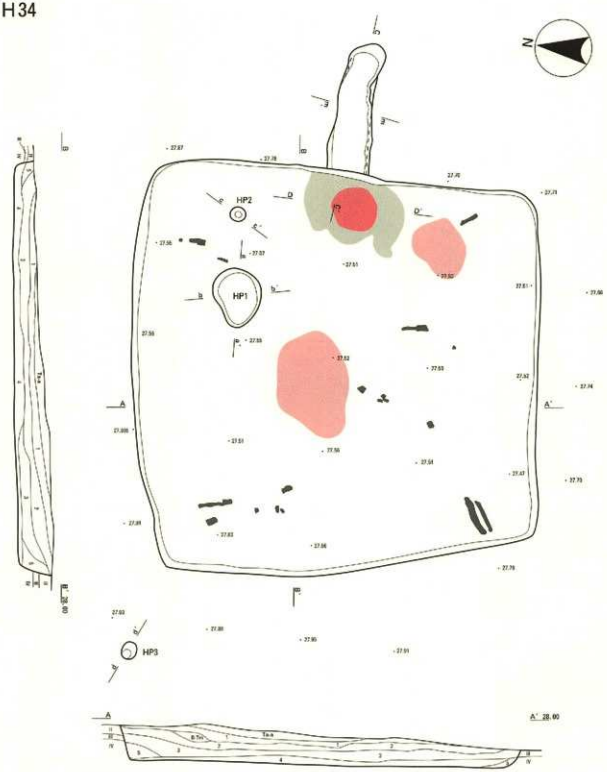
HP1
1 10YR2/1 黒褐色土 しまりなし Ⅱ＋Ⅳ
2 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし Ⅳ＋白粘土＞Ⅱ
3 10YR6/1 褐灰色土 白粘土＞＞Ⅳ

HP2
1 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし Ⅱ＞Ⅳ 炭化物含む

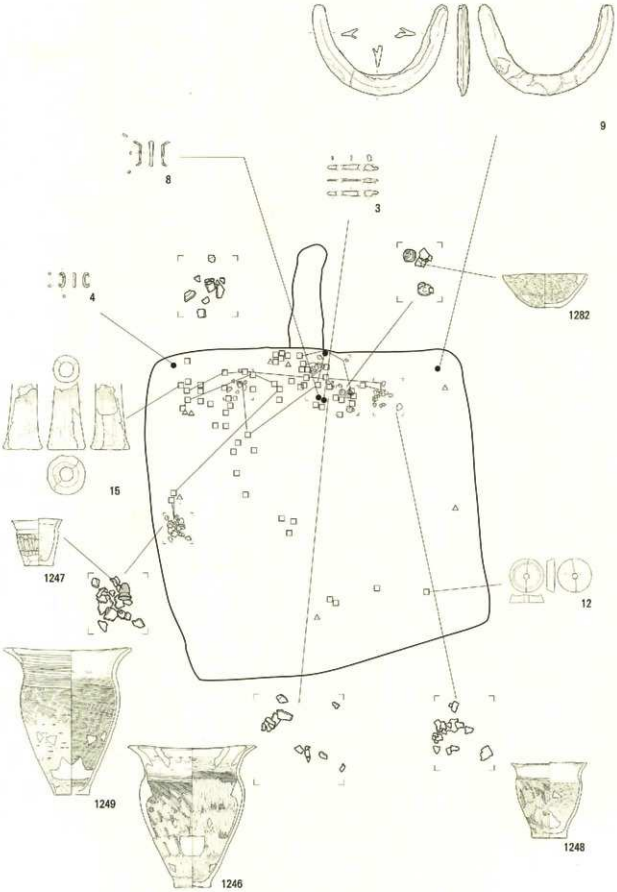
HP3
1 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし Ⅲ＞＞Ⅳ

図Ⅳ－34 H33平面図・断面図/H34断面図

H34

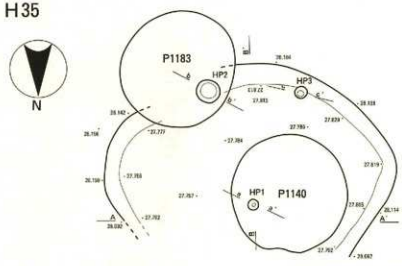


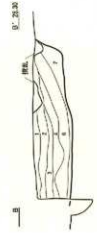
図Ⅳ－35 H34 平面図・断面図

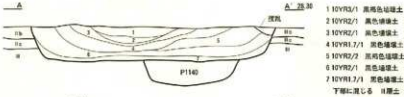


図Ⅳ－36　H34 遺物出土状況図

H35







1 10YR3/1 黒褐色砂質土 粘性あり しまる パミス(2～5mm)少量含む IIa層
2 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる 腐植の発達したIIa層
3 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり しまる パミス(1～2mm)含む IIa層
4 10YR1.7/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる パミス(1mm)含む 草根の発達したIIa層
5 10YR2/2 黒褐色埴質土 粘性あり ややしまる パミス(1～5mm)少量含む II＋III
6 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる パミス(1～3mm)含む II＝III II＞III
7 10YR1.7/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる パミス(3mm)少量、にぶい黄褐色土(4/3)下層に混じる IIb層土 生活面

HP1

HP1
1 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり しまりなし

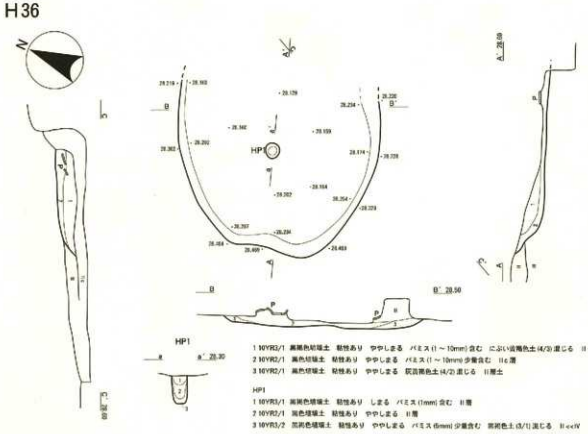
HP2

HP2
1 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる
パミス(3mm)少量含む

HP3

HP3
1 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる
明色土(4/4)混じる

H36



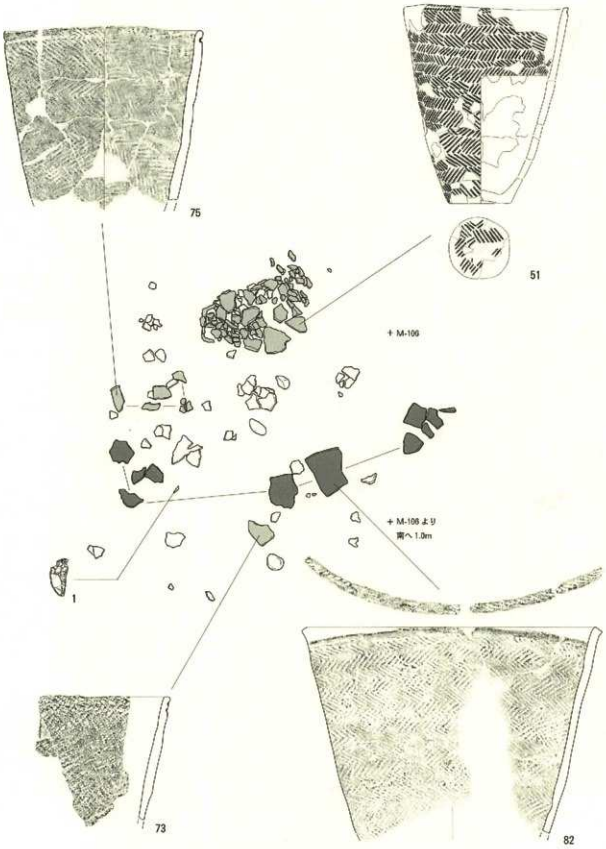
HP1

1 10YR3/1 黒褐色砂質土 粘性あり ややしまる パミス(1～10mm)含む にぶい黄褐色土(4/3)混じる II＋IV
2 10YR2/1 黒色砂質土 粘性あり ややしまる パミス(1～10mm)少量含む IIc層
3 10YR2/1 黒色砂質土 粘性あり ややしまる 灰黄褐色土(4/2)混じる IIb層土

HP1

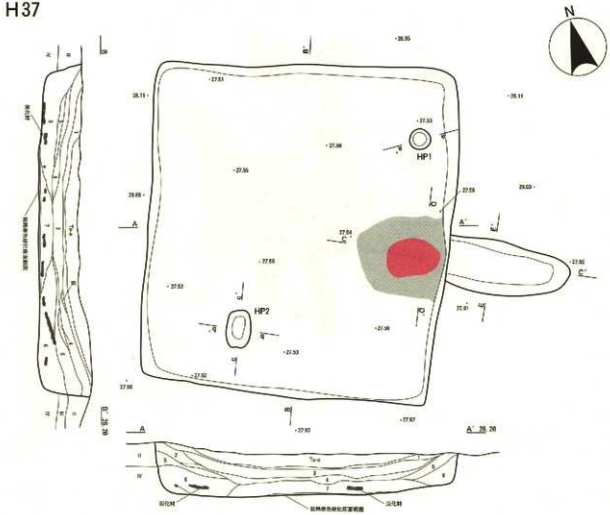
1 10YR3/1 黒褐色埴質土 粘性あり しまる パミス(1mm)含む II層
2 10YR2/1 黒色埴質土 粘性あり ややしまる II層
3 10YR1/2 黒褐色埴質土 粘性あり ややしまる パミス(5mm)少量含む 黒褐色土(3/1)混じる II＜IV

図Ⅳ－37 H35・H36 平面図・断面図

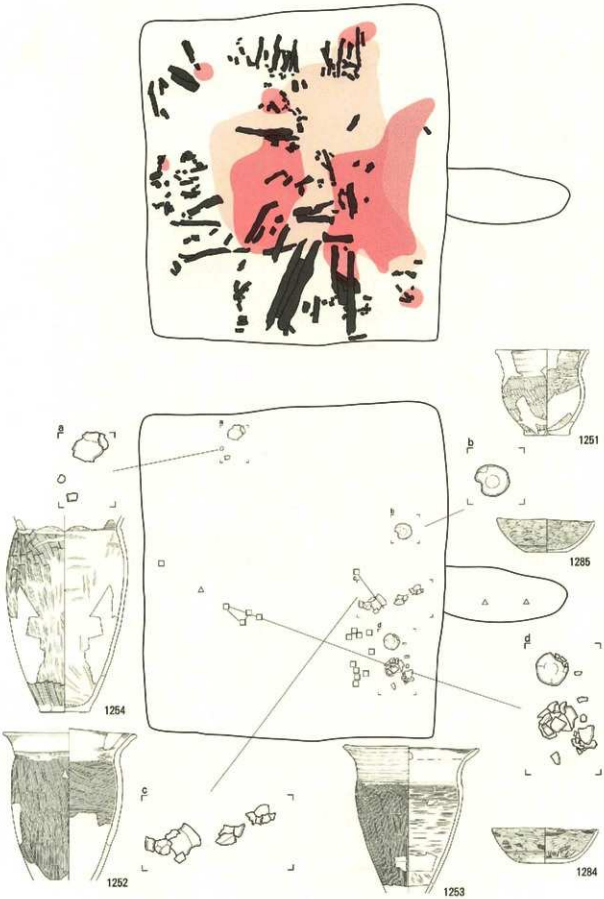


図Ⅳ－38　H36 遺物出土状況図

H37

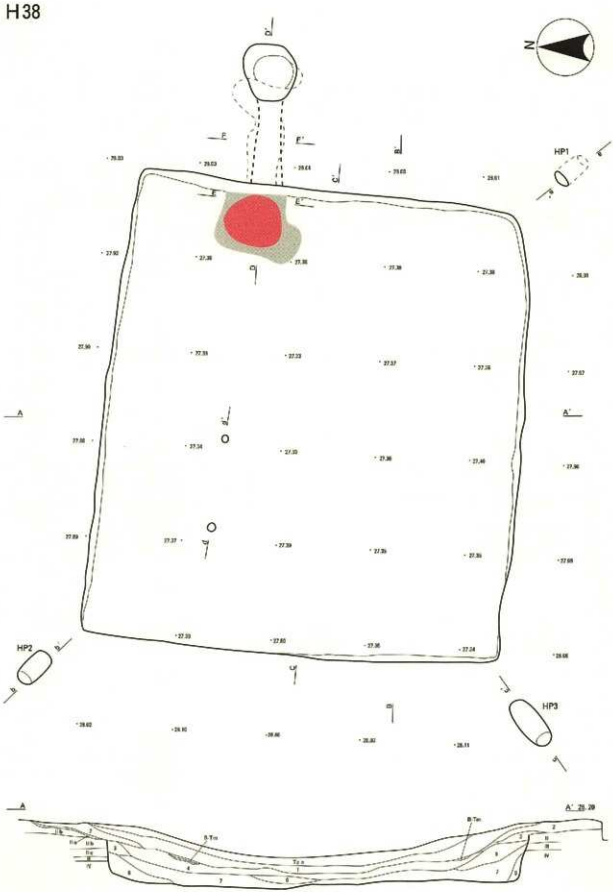


図Ⅳ－39 H37平面図・断面図

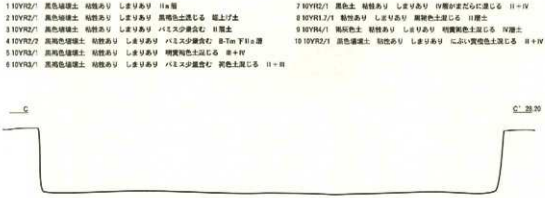


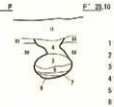
図Ⅳ－40　H37 遺物出土状況図

H38



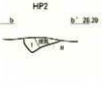
図Ⅳ－41　H38 平面図・断面図





1 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし II>灰・炭化物
2 10YR2/1 黒色土 しまりなし II>>IV
3 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし
4 10YR4/2 灰黄褐色土 II＋IV よごれたII層流れ込み
5 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりなし IV>>II(炭化物含む)
6 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし
7 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし
8 5YR2/2 黒褐色土 しまりなし 炭土

1 10YR5/2 にぶい黄褐色土 カマド白粘土
2 10YR5/1 黒褐色土 II>白粘土・焼土粒
3 7.5YR4/4 褐色土 焼土（火床）

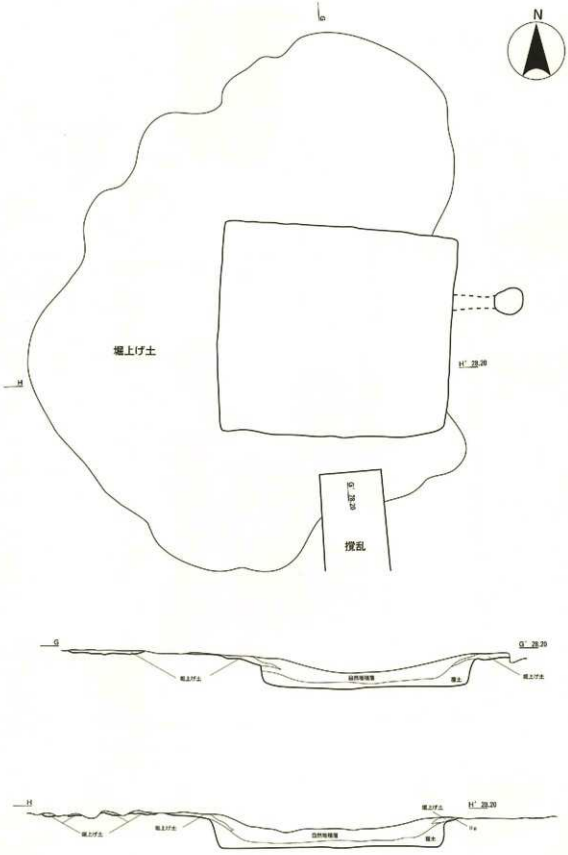


HP1
1 10YR7/4 にぶい黄橙色土 固くしまる IV>>II
2 10YR2/1 黒色土 しまりなし II>>III

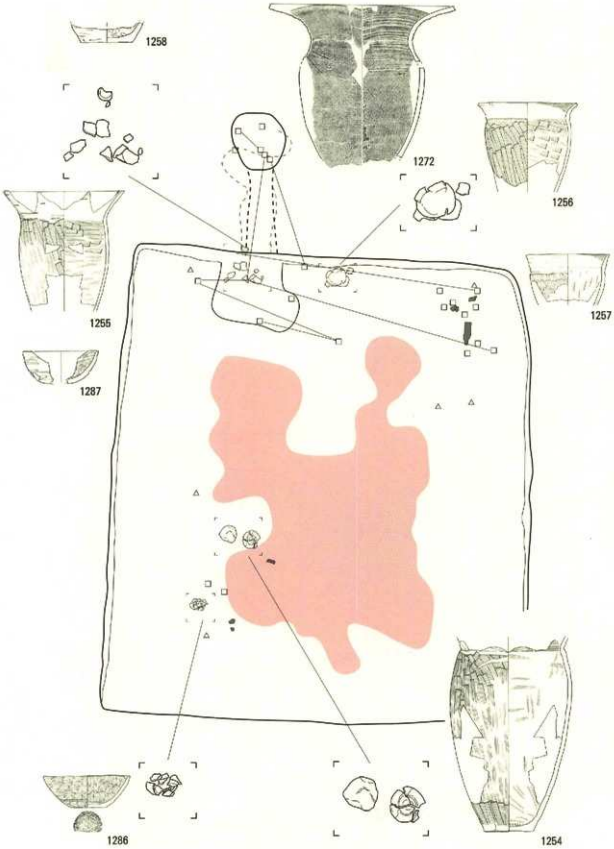
HP2
1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 固くしまる III＋IV>II混入

HP3
1 10YR4/1 褐灰色土 固くしまる
II＋IV IV層パミスブロック含む
2 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし II>>IV

図IV－42 H38 断面図

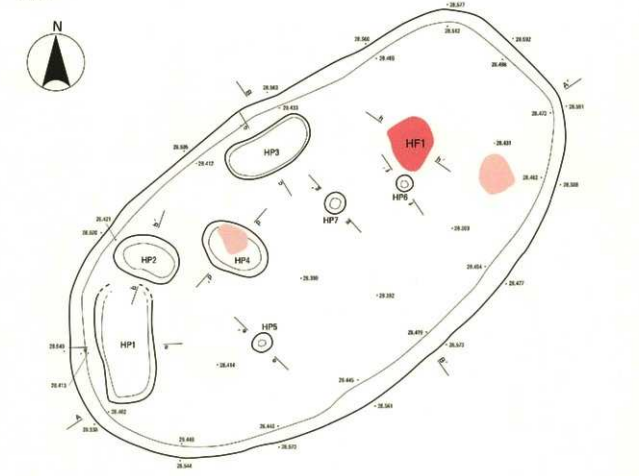


図Ⅳ－43　H38 堀上げ土　平面図・断面図



図Ⅳ－44　H38 遺物出土状況図

H39



1 10YR3/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる パミス(1～20mm)含む 炭化物含む Ⅱ>>Ⅳ
2 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(2～30mm)多く含む 炭化物含む Ⅱ>Ⅳ
3 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(15mm)含む Ⅱ>>Ⅳ
4 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～20mm)含む Ⅱ＋Ⅳ
5 10YR3/2 黒褐色埴壌土 しまりあり パミス(1～20mm)多く含む 灰黄褐色土(4/2)混じる Ⅱ<<Ⅳ
6 10YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまりあり パミス(2mm)少量含む Ⅱ＋Ⅳ

HF1
1 7.5YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり しまる 炭化物含む

HP1
1 10YR2/1 黒色埴壌土 ややしまる
粘性あり パミス含む

HP2
1 10YR2/1 黒色埴壌土 ややしまる
粘性あり パミス含む

HP3
1 10YR3/1 黒褐色埴壌土 しまる
粘性あり パミス少量含む

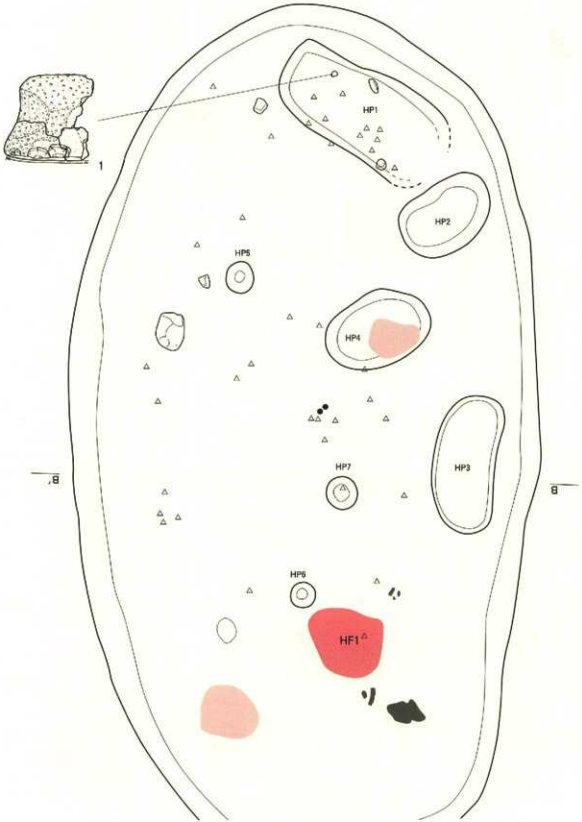
HP4
1 10YR3/2 黒褐色埴壌土 ややしまる
粘性あり パミス含む
2 10YR2/1 黒色埴壌土 ややしまる
粘性あり パミス多く含む
3 7.5YR4/6 黄色埴壌土 ややしまる
ややあり パミス少量含む 焼土

HP5
1 10YR2/1 黒色埴壌土 ややしまる
粘性あり

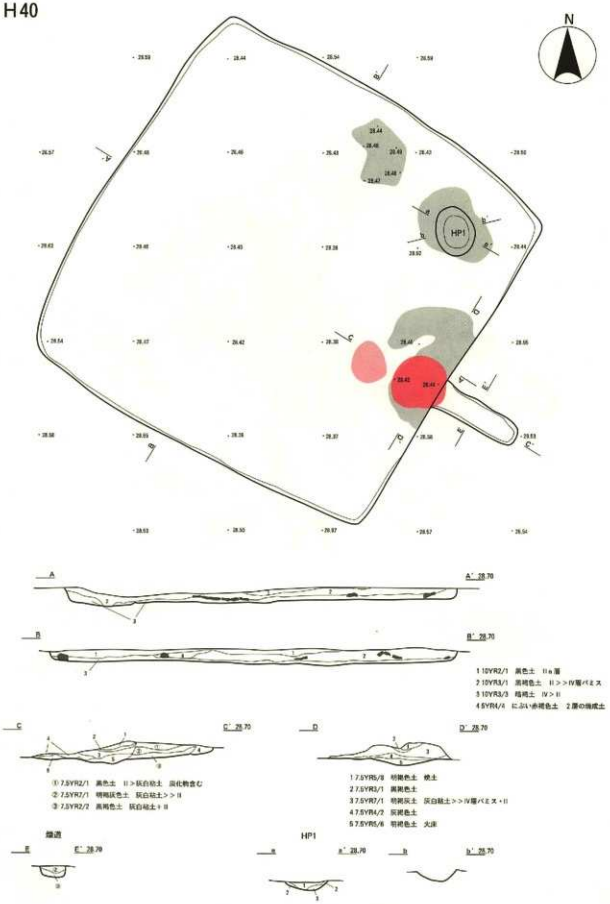
HP6
1 10YR3/1 黒褐色埴壌土 ややしまる
粘性あり 明色土(Ⅳ/4)混じる

HP7
1 10YR2/1 黒色埴壌土 しまる
粘性あり

図Ⅳ－45 H39 平面図・断面図

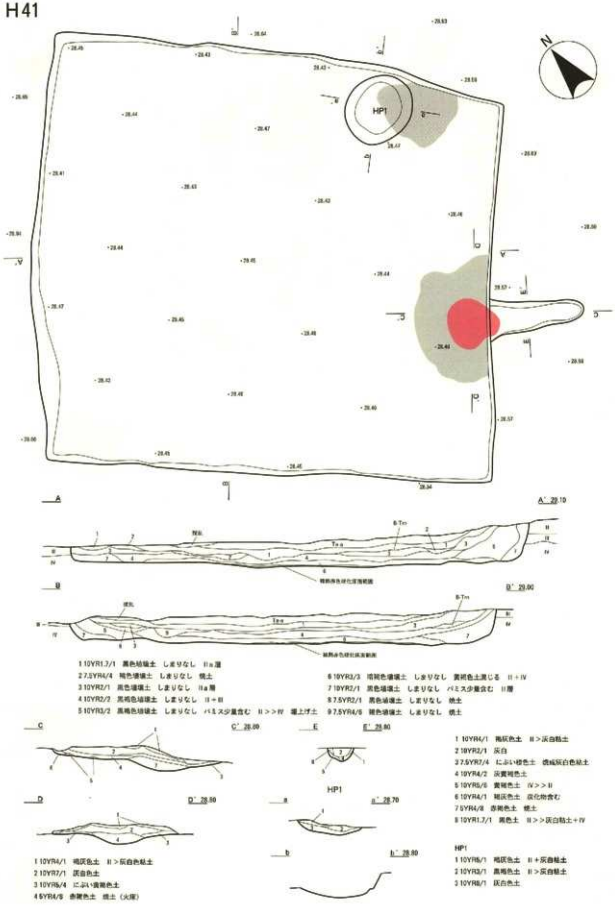


図Ⅳ－46　H39 遺物出土状況図

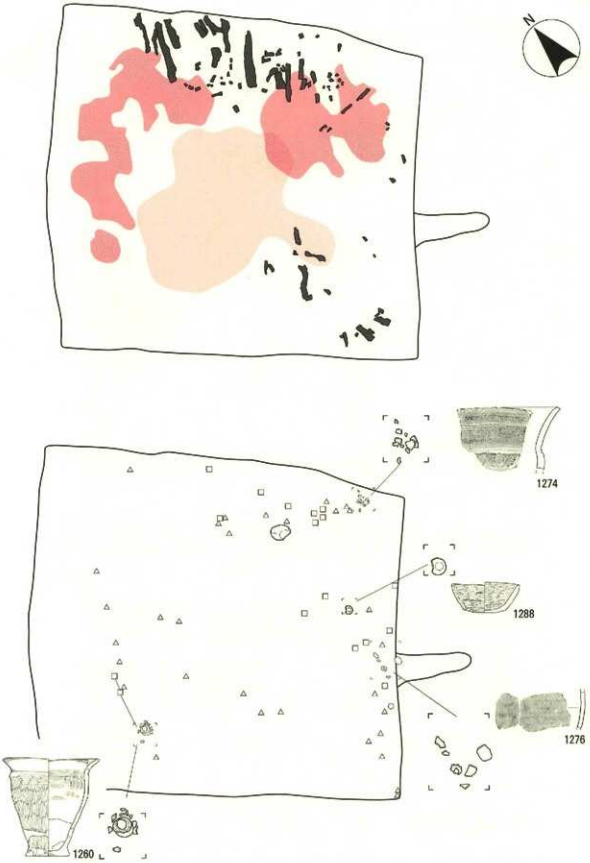


図Ⅳ－47 H40 平面図・断面図

図Ⅳ－48　H40 遺物出土状況図

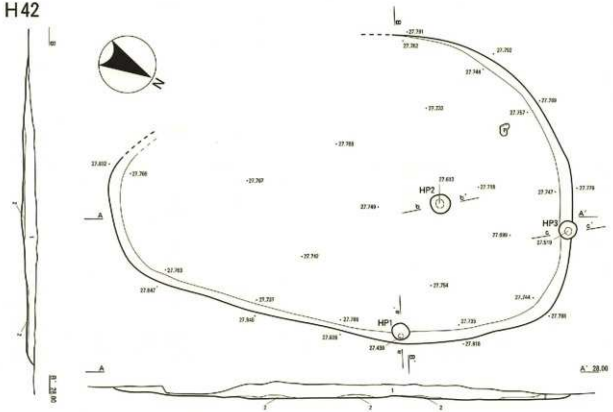


図Ⅳ－49 H41 平面図・断面図

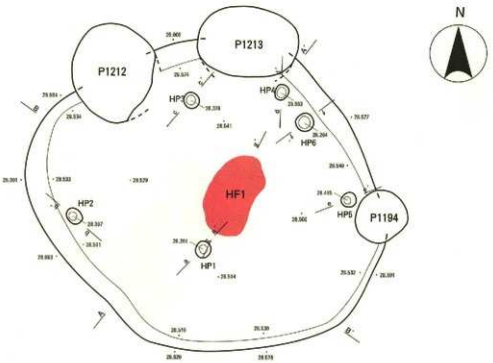


図Ⅳ－50　H41 遺物出土状況図

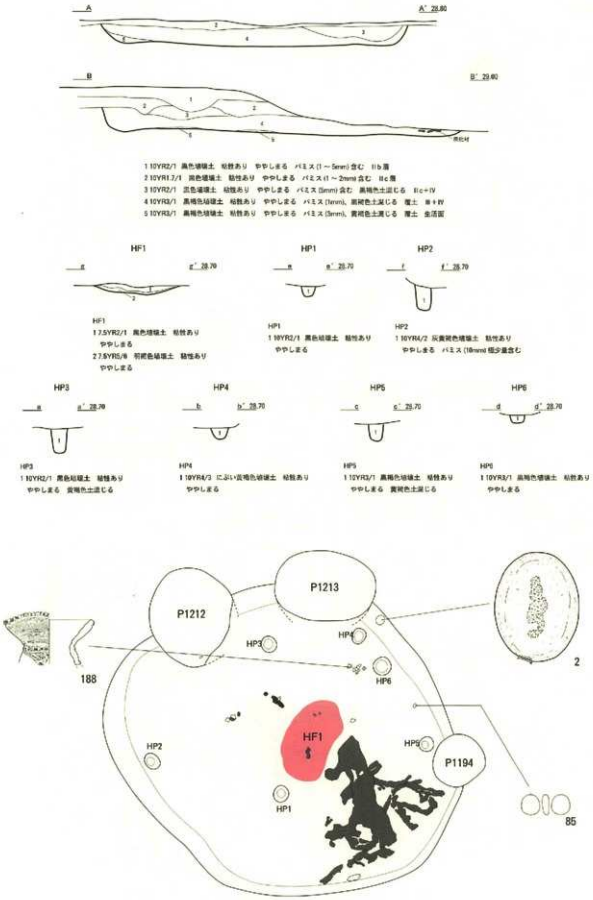
H42



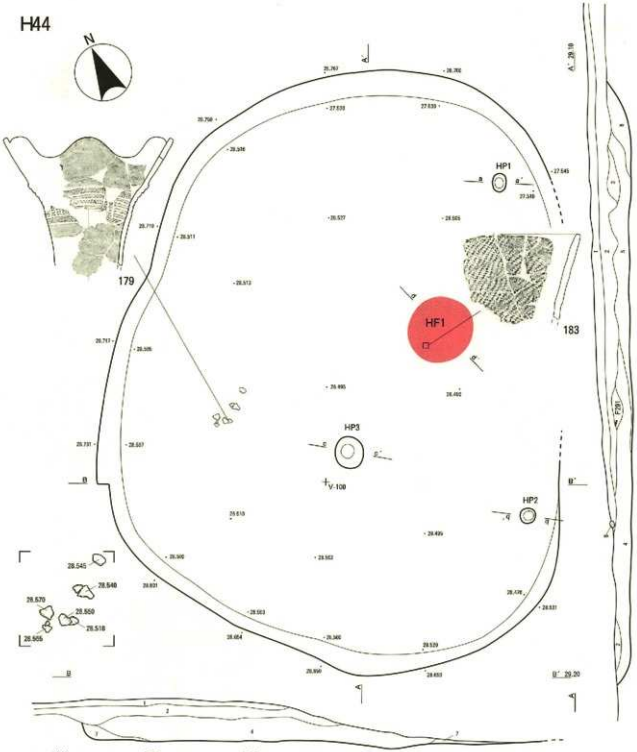
H43



図Ⅳ－51 H42 平面図・断面図/H43 平面図



図Ⅳ－52　H43 断面図・遺物出土状況図



HP1

1 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 下部にパミス(10mm)含む

HP2

1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる

HP3

1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(10mm)少量含む

2 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～10mm)含む

1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる パミス(5mm)含む Ⅱa層

2 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～20mm)含む Ⅱb層

3 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(5mm)少量含む Ⅱ＋Ⅲ

4 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～10mm)やや多く含む Ⅲ＋Ⅳ

5 10YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～20mm)含む 黄褐色土混じる Ⅲ＋Ⅲ

6 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1mm)少量含む Ⅱ層土

7 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1mm)少量含む 黒褐色土混じる Ⅱ層土

HF1

1 7.5YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 炭化粒含む

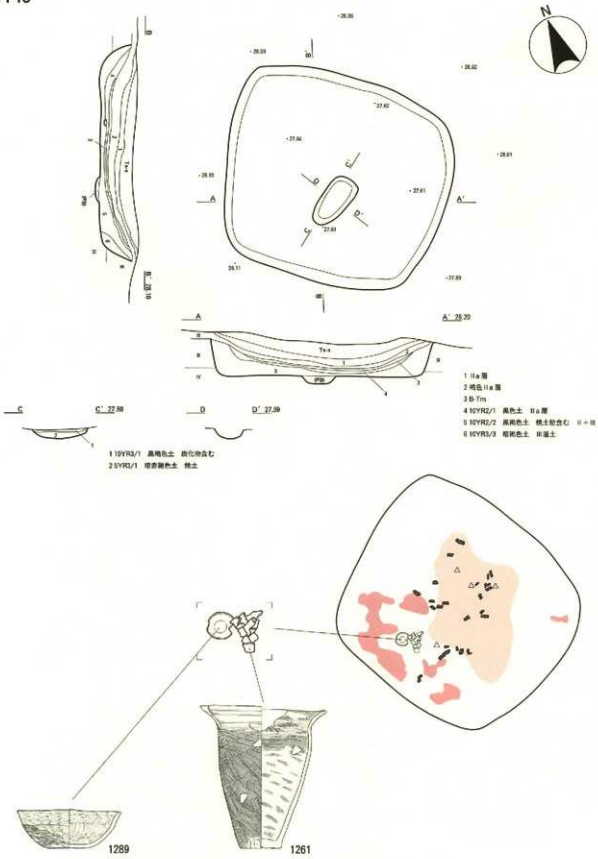
2 7.5YR6/6 橙色土 粘性強 ややしまる

3 5YR4/8 赤褐色土 粘性弱 ややしまる パミス(10mm)含む

非常によく焼熟している

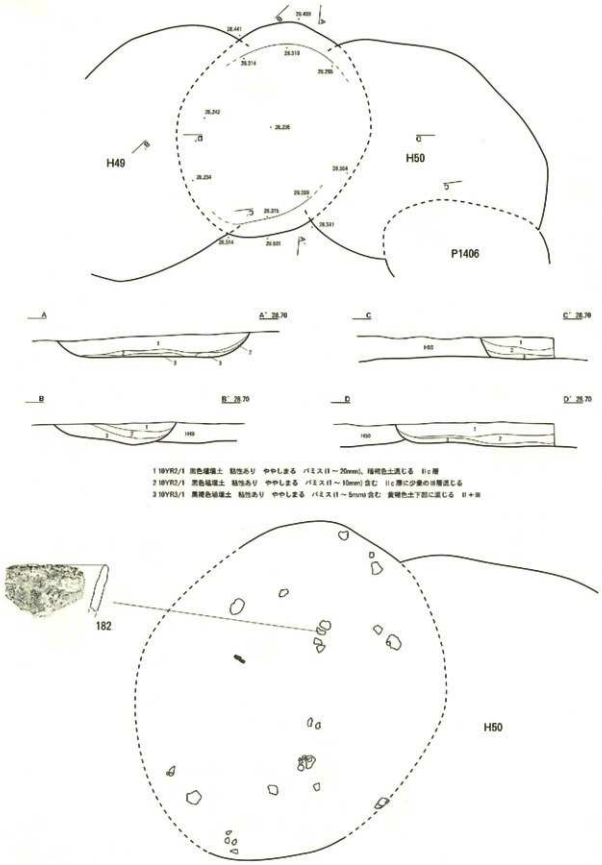
図Ⅳ－53 H44 平面図・断面図・遺物出土状況図

H45



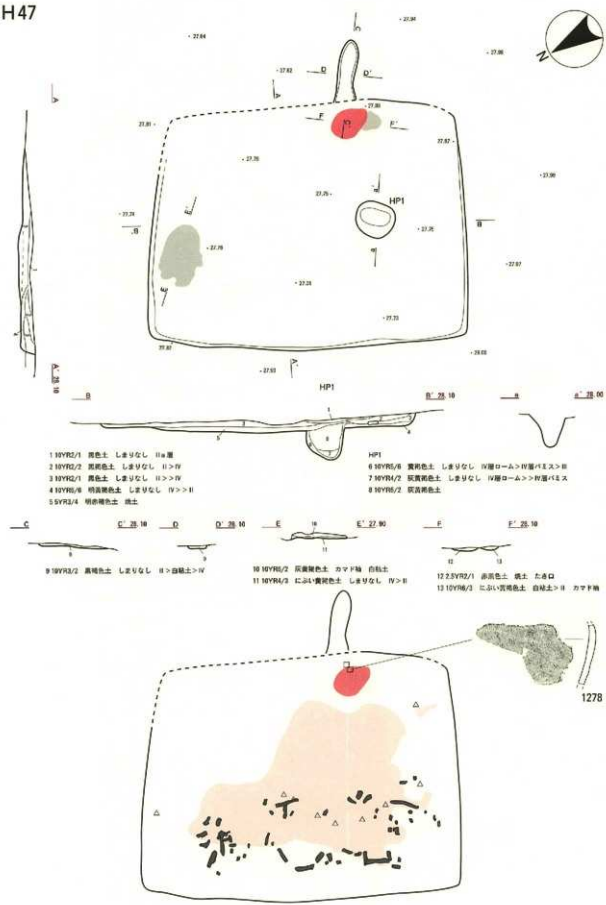
図Ⅳ－54　H45 平面図・断面図・遺物出土状況図

H46

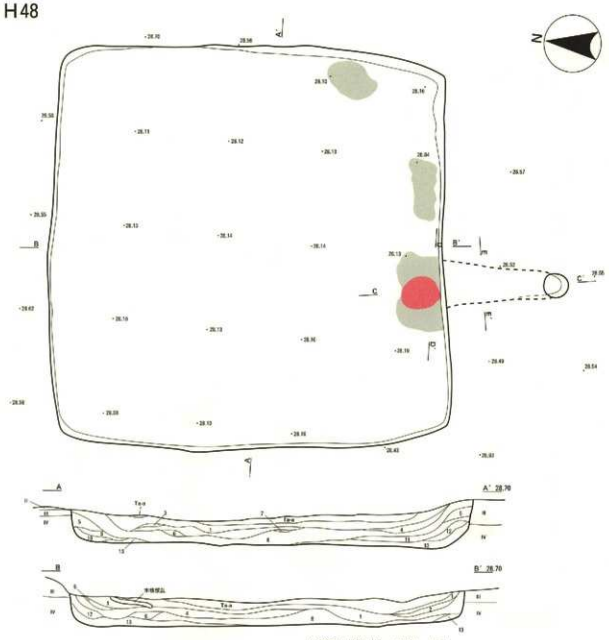


図Ⅳ－55 H46 平面図・断面図・遺物出土状況図

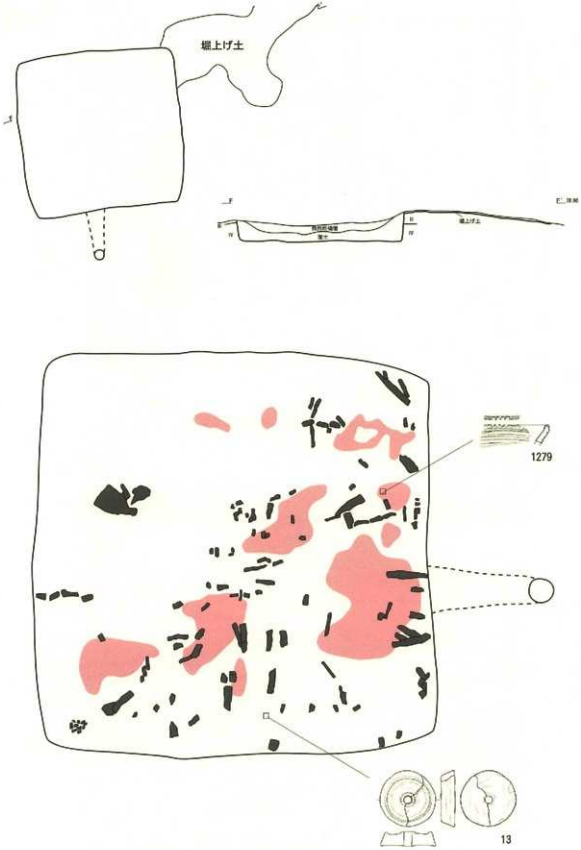
H47



図IV－56 H47 平面図・断面図・遺物出土状況図

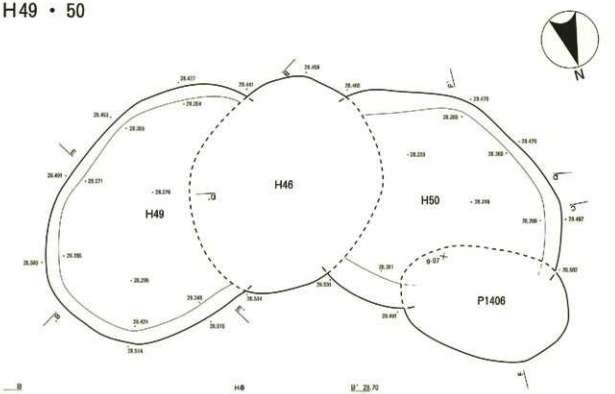


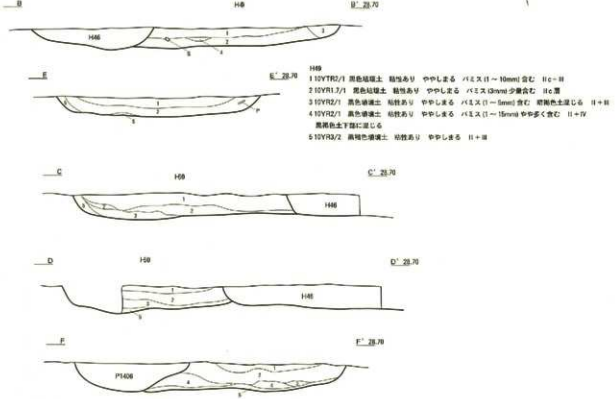
図Ⅳ－57 H48 平面図・断面図



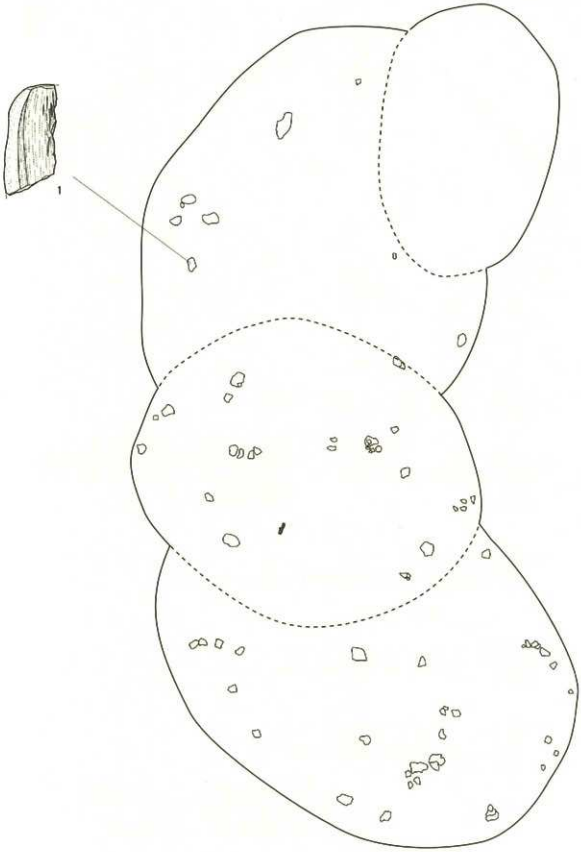
図Ⅳ－58　H48 掘上げ土・平面図・断面図・遺物出土状況図

H49・50

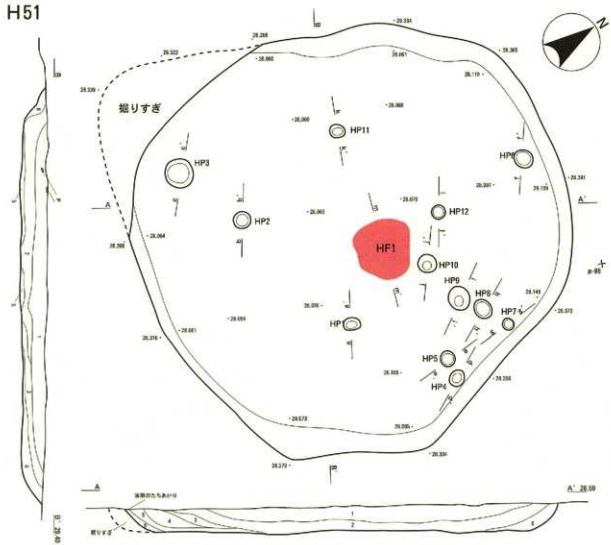




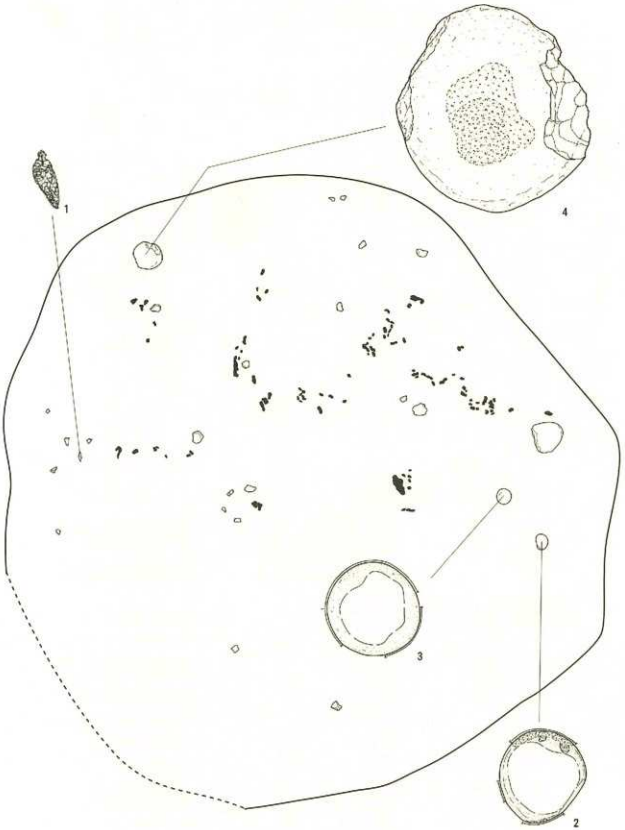
図Ⅳ－59 H49・H50平面図・断面図



図Ⅳ－60　H46・H49・H50 遺物出土状況図

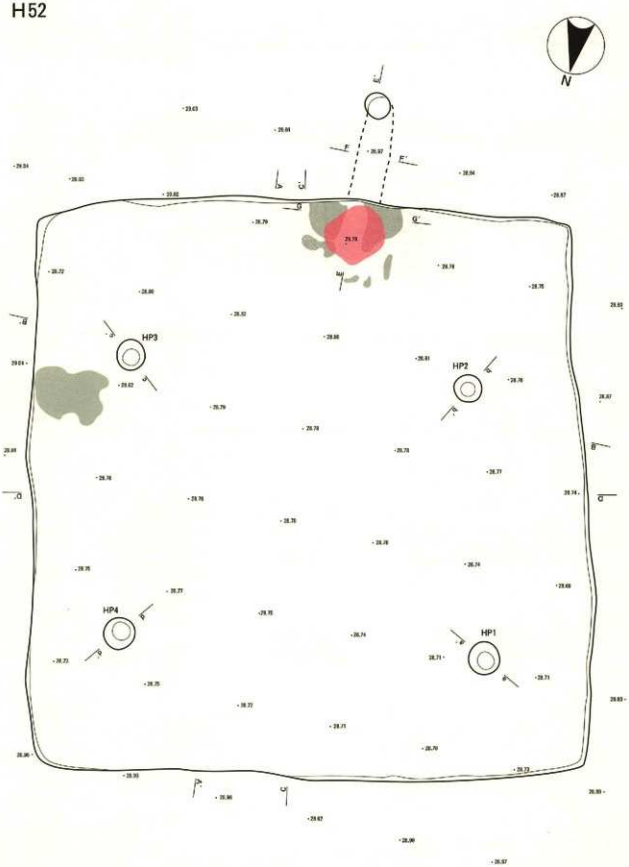


図Ⅳ－61 H51 平面図・断面図

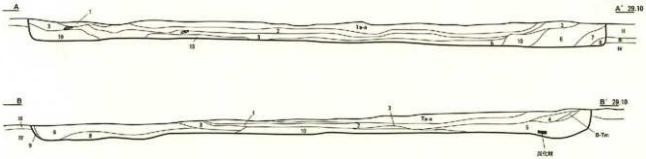


図Ⅳ－62　H51 遺物出土状況図

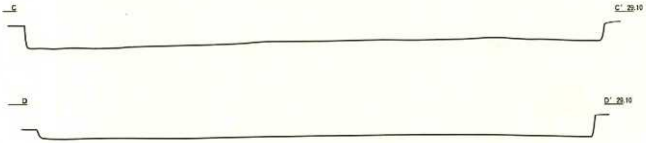
H52

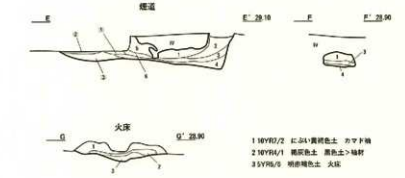


図Ⅳ－63　H52 平面図



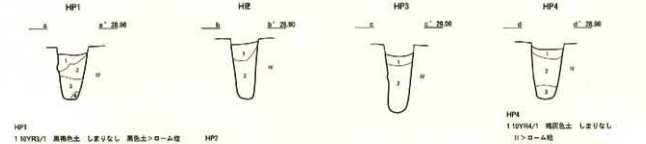
1 10YR3/1　黒褐色埴壌土　粘性あり　しまる　IIa層
2 10YR2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　炭化材を含む IIa層
3 10YR3/1　黒褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　パミスごく少量含む層土　焼土＋II
4 10YR2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　パミスごく少量含む　IIa層
5 10YR3/1　黒褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　パミス少量含む　明黄褐色土混じる　II＋IV
6 10YR3/1　黒褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　パミス多く含む　明黄褐色ブロック状に混じる　II＋IV
7 10YR2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　明黄褐色土混じる　II＋IV
8 10YR2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　明黄褐色土まだら状に混じる　II＋IV
9 10YR2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　明黄褐色土少量混じる　II層
10 7.5YR4/6　明赤埴壌土　しまりなし　焼土





① 10YR6/1　灰白色土
② 10YR6/1　褐灰色土
③ 10YR4/6　赤褐色土　火床
1 10YR4/1　黒灰色土　黒色土＞灰白
2 10YR5/1　灰白砂土＞黄色土
3 10YR6/6　明黄褐色土　IV層＞＞黄色土
4 10YR2/1　黒色土　黒色土＞灰白粘土ブロック
5 10YR3/1　黒色土＞＞灰白粘土
6 5YR5/6　明赤褐色土　焼土

1 10YR2/2　にぶい黄褐色土　カマド袖
2 10YR4/1　褐灰色土　黒色土＞袖材
3 5YR5/6　明赤褐色土　火床



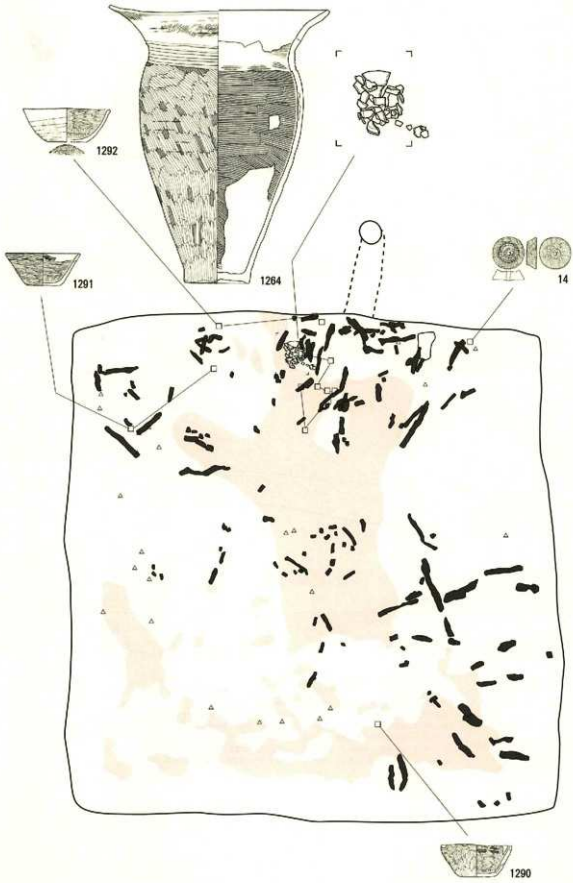
HP1
1 10YR3/1　黒褐色土　しまりなし　黒色土＞ローム粒
炭化物含む
2 10YR4/4　褐色土　しまりなし　ローム粒＞＞黒色土
3 10YR2/1　黒色土　しまりなし　黒色土＞＞ローム粒
4 10YR6/4　にぶい黄褐色土　しまりなし　IV層崩落土

HP2
1 10YR3/1　黒褐色土　しまりなし
黒色土＞＞ローム粒
2 10YR3/3　暗褐色土　しまりなし
ローム粒＞黒色土

HP3
1 10YR3/1　黒褐色土　黒色土に炭化物含む
2 10YR4/2　灰黄褐色土　しまりなし
黒色土＋ローム粒・パミス

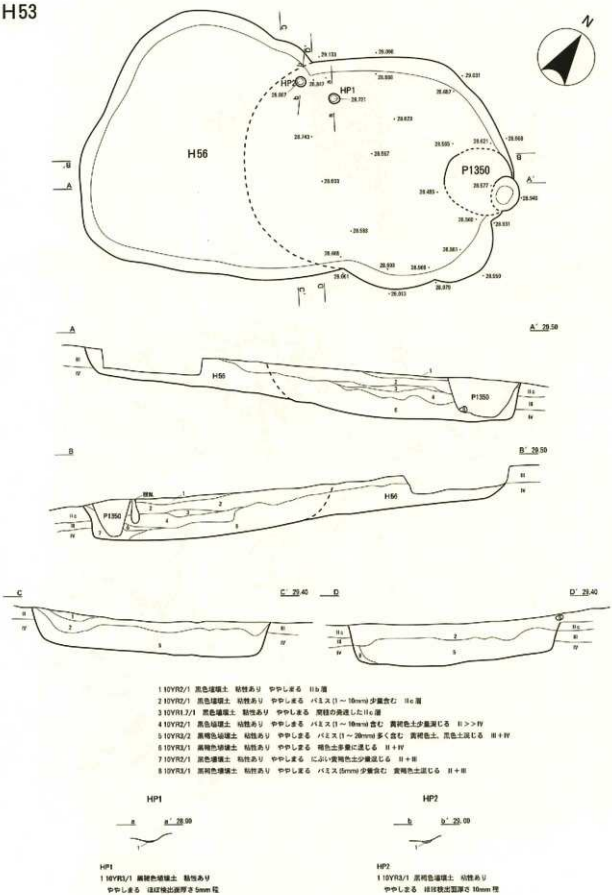
HP4
1 10YR4/1　褐灰色土　しまりなし
II＞ローム粒
2 10YR4/2　灰黄褐色土　しまりなし
II＋ローム粒
3 10YR3/1　黒褐色土　しまりなし
II＞＞ローム粒

図IV－64　H52 断面図



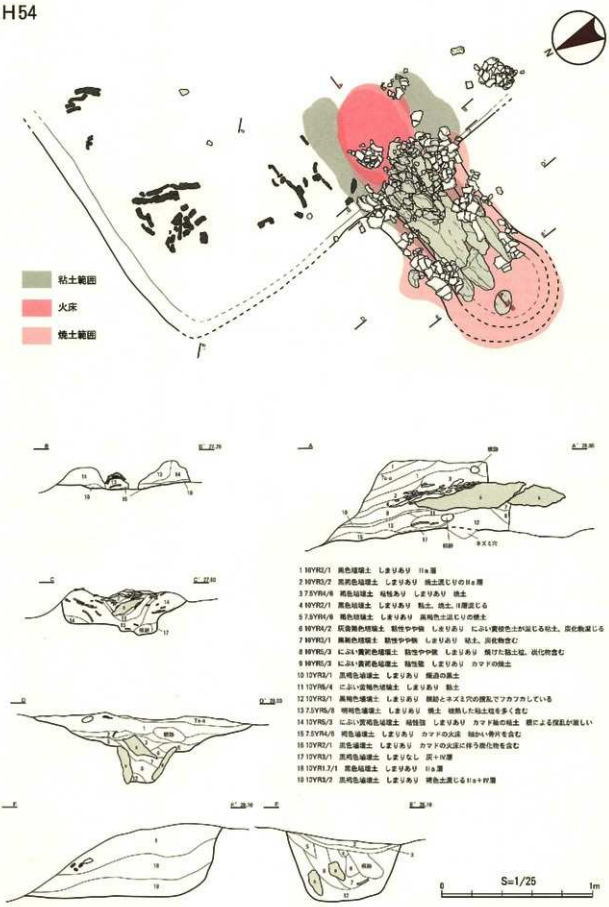
図Ⅳ－65　H52 遺物出土状況図

H53

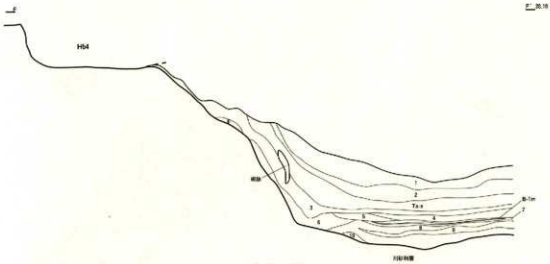


図IV－66 H53 平面図・断面図

H54

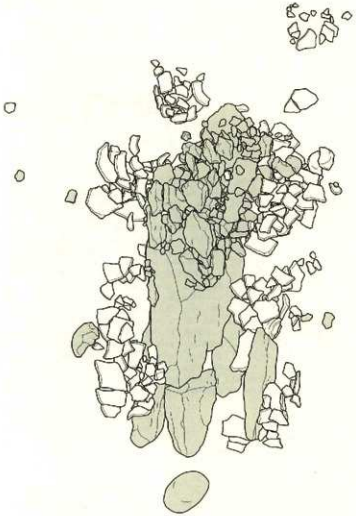


図Ⅳ－67 H54 平面図・断面図



1 10YR2/1　黒色粘質土　粘性中　しまりあり　にぶい黄色土ブロック混じる　II層　根による攪乱が多い
2 10YR3/1　黒褐色粘質土　粘性中　しまりあり　II層　6黒褐に相当する（千歳）
3 10YR1.7/1　黒色粘質土　粘性中　しまりあり　パミス少量含む　IIa層
4 10YR3/1　黒褐色粘質土　粘性中　しまりあり　シルト質の層
5 10YR3/1　黒褐色粘質土　粘性中　しまりあり　細かい川砂利を含んでいる
6 10YR3/1　黒褐色粘質土　粘性やや弱　しまりあり　細かい川砂利を含み、砂質
7 7.5YR3/2　黒褐色粘質土　粘性中　しまりあり　シルト質でやや赤みがかっている　層の中央に灰白褐色土(4/2)のB-Tmがみられる
8 10YR6/3　にぶい黄橙色粘質土　粘性弱　しまりあり　シルト質
9 10YR2/1　黒褐色粘質土　粘性中　しまりあり　シルト質
10 N9YR2/1　黒色粘質土　粘性中　しまりあり
} 互層になっている

S=1/40

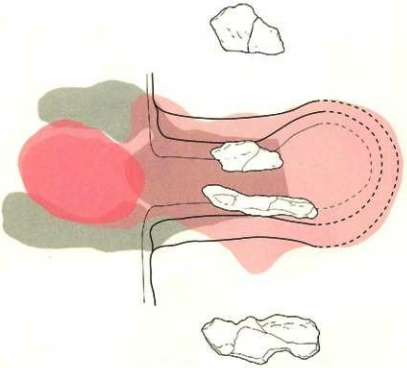


礫
土器

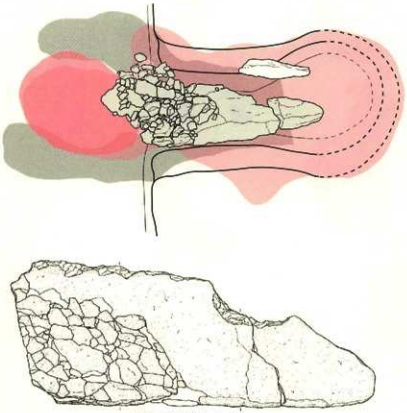
S=1/12.5
0　50cm

図Ⅳ－68　H54 断面図・遺物出土状況図

煙道壁面の礫

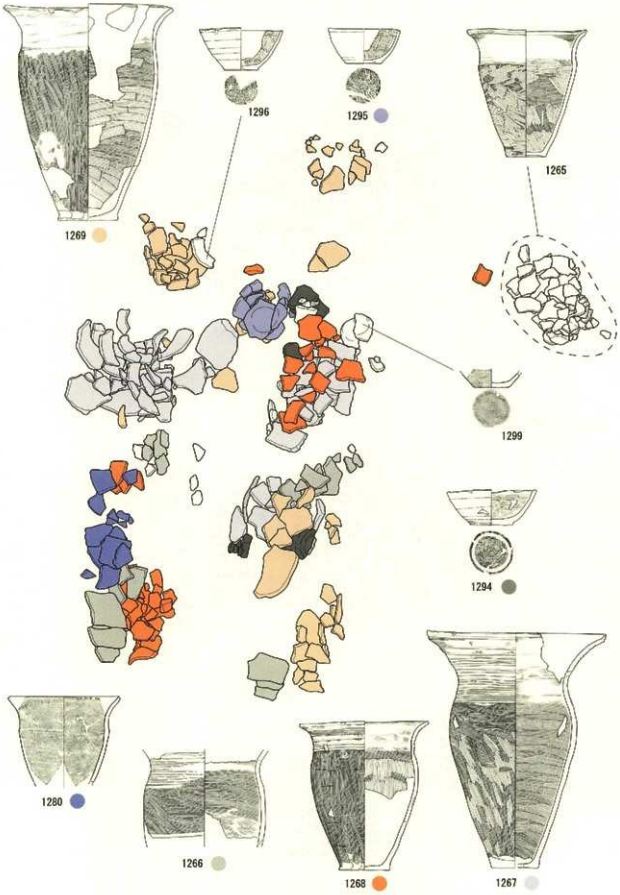


煙道天板の礫



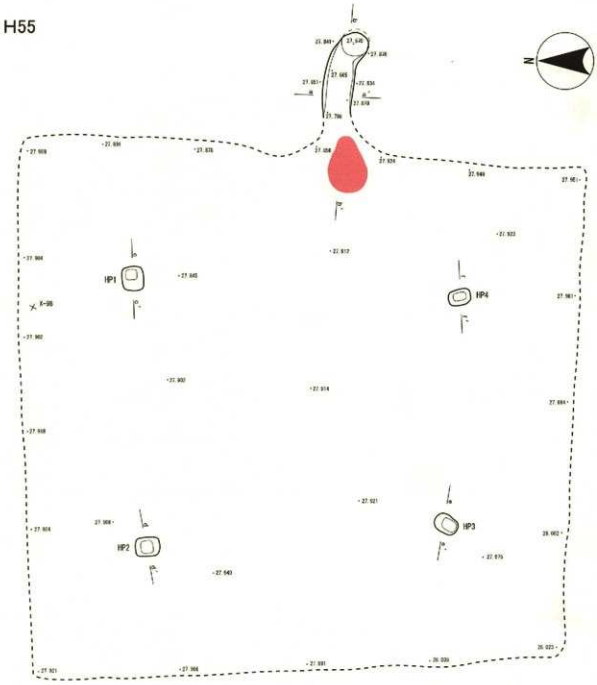
天板の礫実測図　S=1/8

図Ⅳ－69　H54 煙道部　礫出土状況図



図Ⅳ－70　H54 土器出土状況図

H55



HP1
1 10YR2/1 黒色砂壌土 粘性あり ややしまる
2 10YR2/1 粘性あり 黒色壌土 しまる
明黄褐色土の粘土をブロック状に含む

HP2
1 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり ややしまる
明黄色土、パミス少量含む
2 10YR3/2 黒褐色壌土 粘性あり ややしまる
明黄褐色土の粘土がブロック状に混じる

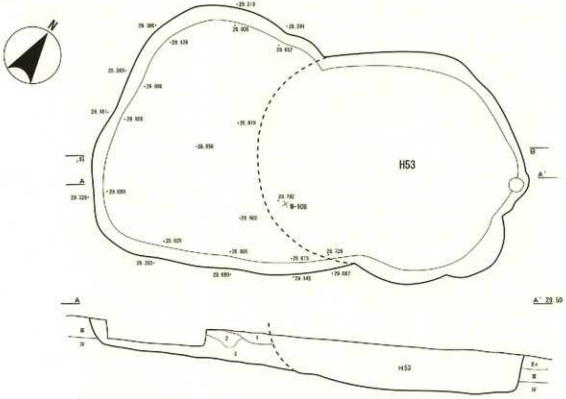
HP3
1 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり ややしまる
明黄褐色土ごく少量混じる
2 10YR3/2 黒褐色壌土 粘性あり ややしまる
褐色土あざらに混じる

HP4
1 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり ややしまる
2 10YR4/4 褐色壌土 粘性あり ややしまる
暗褐色土混じる

1 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり ややしまる Ⅱ a 層
2 10YR6/3 にぶい黄橙色壌土 粘性強 しまる 白色粘土層
3 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり ややしまる 黄褐色土、褐色土、Ⅳ層混じりの砂質土
4 10YR2/1 黒色壌土 粘性あり しまりあり パミス少量含む Ⅱ層土
5 10YR2/1 黒褐色壌土 粘性あり しまる 粘土、焼土、炭化物を含んでいる
6 10YR4/3 にぶい黄褐色壌土 粘性あり ややしまる
パミスやや多く含む 黒褐色土含む

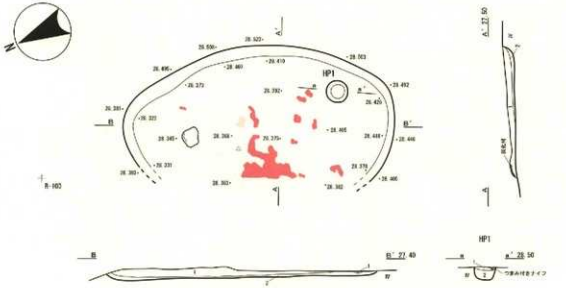
図Ⅳ－71 H55 平面図・断面図

H56



1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～10mm)少量含む Ⅱc層
2 10YR3/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(5mm)含む Ⅱ<IV
3 10YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス(1～20mm)含む 黄褐色土、黒色土混じる Ⅱ+IV

H57

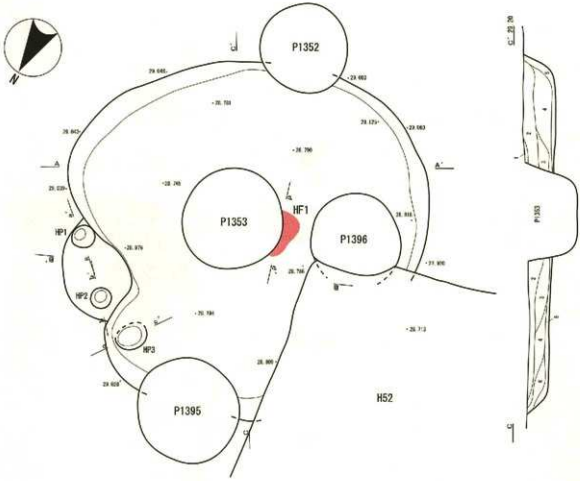


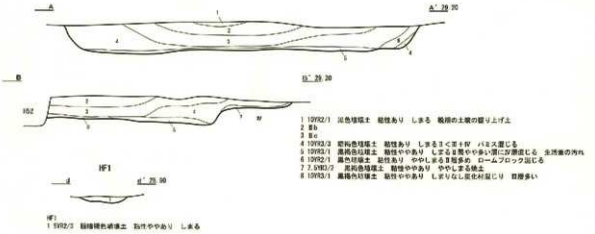
1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる 炭化物を含んでいる Ⅱ>IV
2 10YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 褐色土が混じる Ⅱ>IV

1 10YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる
2 10YR4/2 灰黄褐色埴壌土 粘性あり ややしまる
パミス(3mm)少量含む

図Ⅳ－72 H56・H57 平面図・断面図

H58





1 10YR2/1 黒色埋積土 粘性あり しまる 畝状の土壌の盛り上げ土
2 欠ち
3 欠ち
4 10YR2/3 暗褐色埋積土 粘性あり しまる 3＜III＋IV パミス混じる
5 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性やあり しまる 3 層やや多い 間にIV混じる 生活面の汚れ
6 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる 3 層多め ローム ブロック混じる
7 7.5YR3/2 黒褐色埋積土 粘性やあり ややしまる 硬土
8 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性やあり しまりなし 炭化材混じり 焼層多い

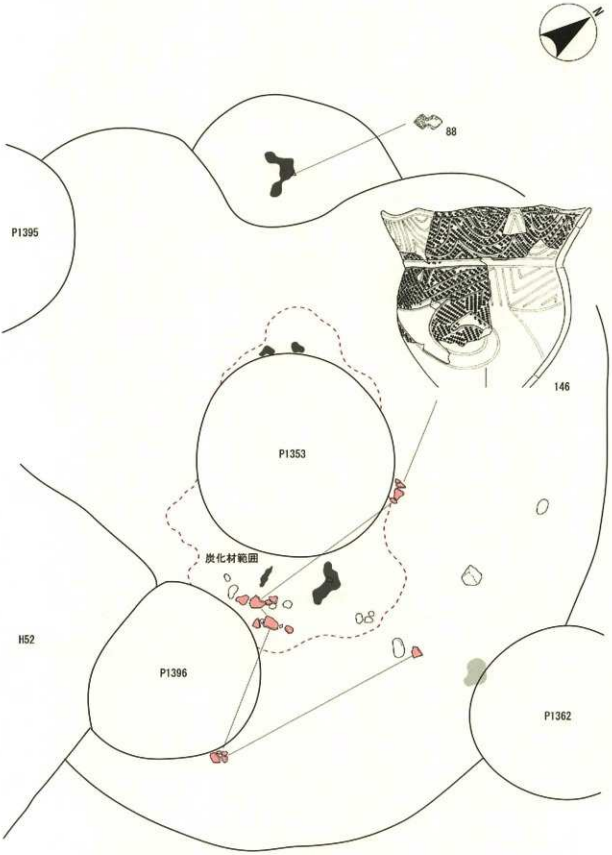
HF1
1 5YR2/3 暗褐色埋積土 粘性ややあり しまる

HP1
1 10YR2/3 黒褐色埋積土 粘性あり ややしまる
II＋III にIV層少量混じる

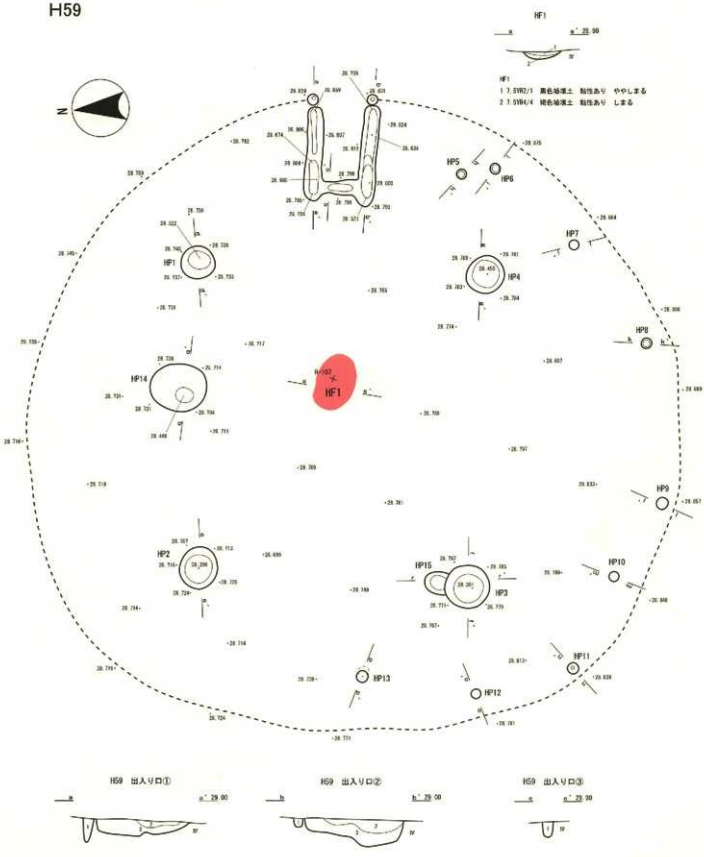
HP2
1 10YR3/3 黒褐色埋積土 粘性あり しまりなし
2 10YR2/2 黒褐色埋積土 粘性ややあり しまりなし
II層多い IV層少量混じる
3 10YR2/2 黒褐色埋積土 粘性あり しまりなし
黒褐にIV層細粒状に混じる

HP3
1 10YR3/1 黒褐色埋積土 粘性あり しまりなし
炭混多め
2 10YR3/3 暗褐色埋積土 粘性ややあり しまりなし
IV混多い パミス混じる

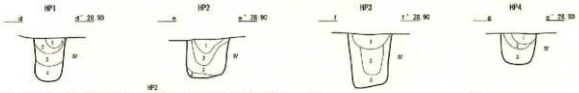
図Ⅳ－73 H58 平面図・断面図



図Ⅳ－74　H58 遺物出土状況図



図Ⅳ－75 H59 平面図・断面図

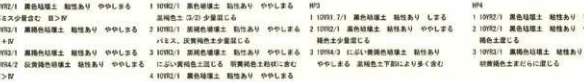


HP1
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる
パミス少量含む 底>Ⅳ
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる
底＋Ⅳ
3 10YR2/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 粘性あり ややしまる
底>Ⅳ

HP2
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる
黒褐色土 (2/2) 少量混じる
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる
パミス、灰黄褐色土少量混じる
3 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる
にぶい黄褐色土混じる 明黄褐色土粒状に含む
4 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる

HP3
1 10YR1.7/1 黒色粘質土 粘性あり しまる
2 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる
褐色土少量混じる
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 粘性あり
ややしまる 黒褐色土下部により多く含む

HP4
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり しまる
2 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる
褐色土混じる
3 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる
明黄褐色土まだらに混じる



HP5
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまる
深さ 10cm 程で住居検出面

HP6
1 10YR3/2 黒褐色粘質土 しまる

HP7
1 10YR2/1 黒褐色粘質土 しまる
深さ 8cm 程で住居検出面

HP8
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまる

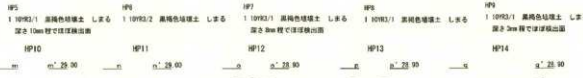
HP9
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまる
深さ 3cm 程でほぼ検出面

HP10
HP11
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまる
深さ 3cm 程でほぼ検出面

HP12
1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 しまる
深さ 3cm 程でほぼ検出面

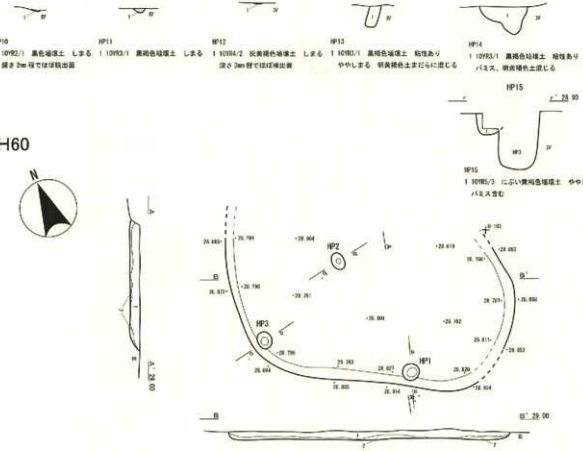
HP13
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり
ややしまる 明黄褐色土まだらに混じる

HP14
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり しまる
パミス、明黄褐色土混じる



HP15
1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 ややしまる
パミス含む

H60



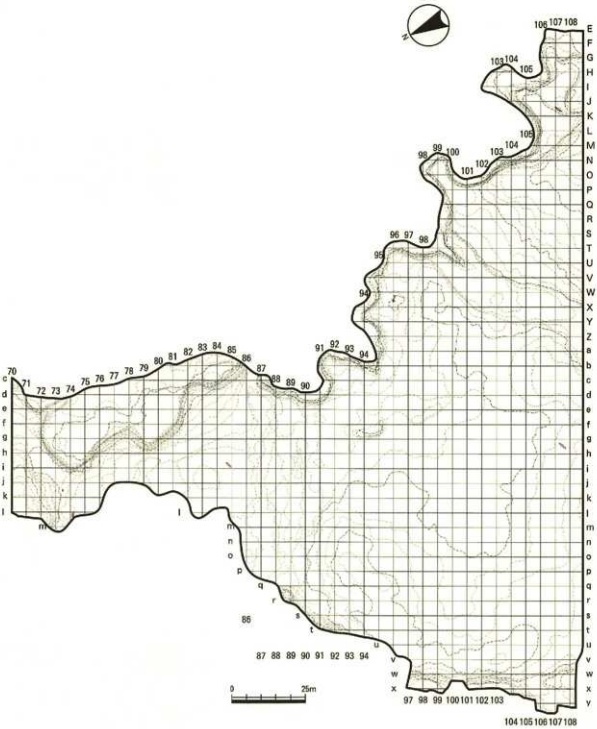
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる Ⅱ層
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる 褐色土混じる Ⅱ>Ⅳ

HP1
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり
ややしまる

HP2
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり
ややしまる

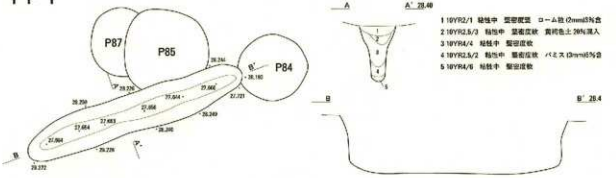
HP3
1 10YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる にぶい黄褐色土粒少量混じる

図Ⅳ－76 H59 断面図/H60 平面図・断面図



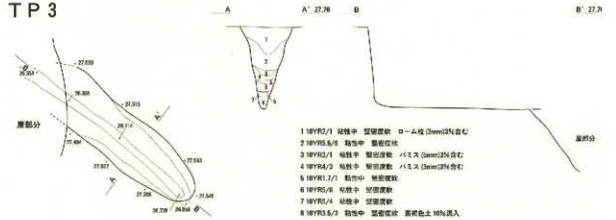
図Ⅳ－77　ＴＰ分布図

TP1

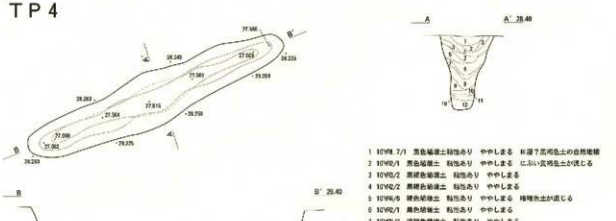


TP2

TP3

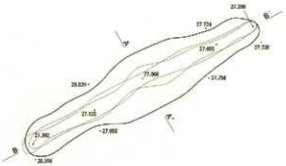


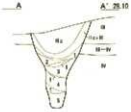
TP4



図Ⅳ－78 ＴＰＨ１～４平面図・断面図

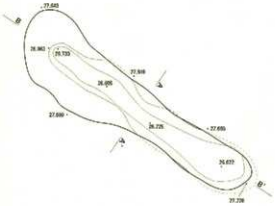
TP5

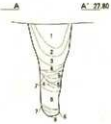




1 7.5YR5/4　粘性色褐色土　粘性あり　しまるサビ混じりのⅣ+Ⅲ
　Ⅳ層上面に赤褐色の流れ込み有り
2 10YR2/2　黒褐色褐色土　粘性あり　ややしまるⅡ+Ⅳ
3 10YR5/4　にぶい黄褐色褐色土　粘性あり　しまるⅣ層　Ⅱ微少混混じる？
4 10YR4/4　褐色褐色土　粘性あり　ややしまるⅣ層（土色？が混じる）
5 10YR2/1　黒色褐色土　粘性やや有り　しまりなししまりがないⅡ+Ⅲ層

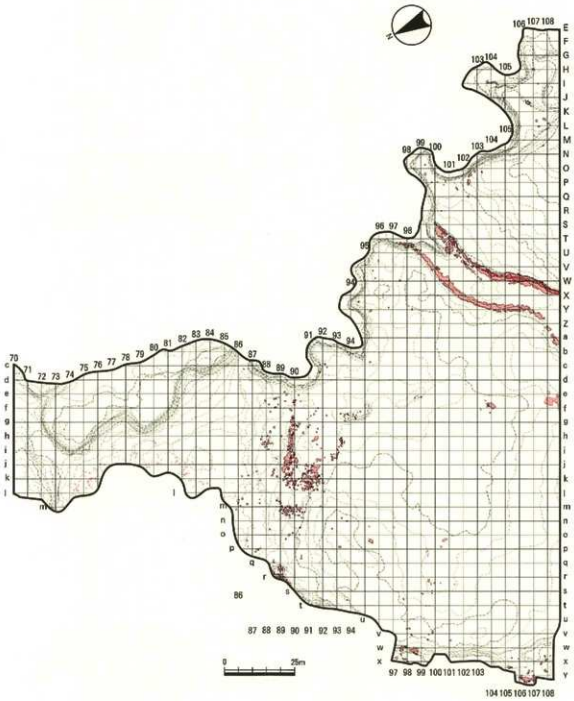
TP6





1 10YR1.7/1　粘性あり　ややしまる　Ⅱ層
2 10YR2/2　粘性あり　しまる　ローム粒、Ⅳ層混じる（Ⅱ+Ⅳ）
3 10YR3/2　粘性あり　ややしまる　パミス、ローム粒多く混じる
4 10YR3/1　粘性なし　しまる　パミス、Ⅳ層少量混じる
5 10YR2/1　粘性なし　しまる　黒褐色土とにぶい黄褐色土の互層
6 10YR4/3　粘性なし　しまる　Ⅳ層
7 10YR3/1　粘性ややあり　ややしまる　パミス多く混じる
8 10YR2/1　粘性ややあり　ややしまる　パミス多く混じる

図Ⅳ－79　ＴＰ５・６平面図・断面図



図Ⅳ－80　焼土分布図

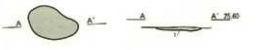
F1

1 10YR6/1　黒褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む（灰放？）
2 7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　Ⅱ層黒褐色土少量混じる

F2

1 7.5YR3/4　暗褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　Ⅱ層黒褐色土・焼骨少量混じる

F3



1 7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　Ⅱ層黒褐色土・焼骨少量混じる

F4

1 7.5YR3/4　暗褐色砂質土　粘性あり　しまる　Ⅱ層黒褐色土・焼骨少量混じる

F5

1 7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　Ⅱ層黒褐色土少量混じる

F6

1 7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む

F7

1 7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性なし　ややしまる　Ⅱ層黒褐色土少量混じる

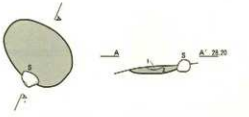
F8

1 7.5YR2/1　黒色砂質土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む
2 10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性あり　しまる　焼骨含む（1<2）
3 7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性あり　しまる　Ⅱ層黒褐色土少量混じる

F9

1 7.5YR2/2　黒褐色砂質土　粘性あり　ややしまる

F10



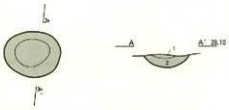
1 7.5YR2/1　黒色砂質土　粘性あり　しまりなし　焼骨少量含む
2 7.5YR2/3　極暗褐色砂質土　粘性あり　しまりなし　焼骨少量含む（1<2）

図Ⅳ－81　F 1～10平面図・断面図

F11

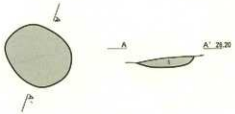
1 7.5YR2/4　暗褐色埴壌土　粘性あり　しまりなし　II層黒褐色土少量混じる

F12



1 7.5YR1.7/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる　暗褐色土が混じる
2 7.5YR2/4　暗褐色埴壌土　粘性あり　しまりなし

F13



1 7.5YR2/3　極暗褐色埴壌土　粘性なし　しまりなし　II層黒褐色土少量混じる

F14・F15

1 7.5YR6/4　黄色埴壌土　粘性あり　しまりなし
2 7.5YR6/6　橙色埴壌土　粘性あり　しまりなし　焼骨少量含む

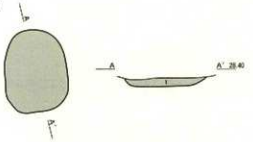
F16

1 7.5YR2/3　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む

F17

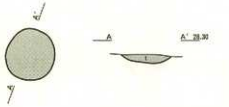
1 7.5YR2/4　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　II層黒褐色土少量混じる

F18



1 7.5YR4/6　黄色粘土　粘性あり　ややしまる

F19

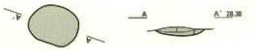


1 7.5YR2/3　暗褐色粘土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む

F20

1 7.5YR4/4　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　Tn-a 微量に混じる

F21



1 7.5YR1.7/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる
2 7.5YR6/3　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

図Ⅳ－82　F11～21平面図・断面図

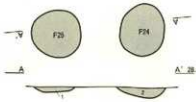
F 22

1 7.5YR2/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 23

1 7.5YR2/3 極暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる Ia-a微量に混じる

F 24・F 25



1 7.5YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり ややしまる
2 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

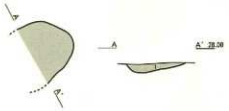
F 26

1 7.5YR2/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨少量含む

F 27

1 7.5YR2/3 極暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる Ⅱ層黒褐色土少量混じる

F 28



1 7.5YR3/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 29

1 7.5YR3/2 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 30

1 7.5YR4/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F 31

1 7.5YR3/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 32

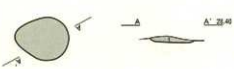
1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる Ⅱ層黒褐色土少量混じる

図Ⅳ－83 F 22～32平面図・断面図

F 33

1 7.5YR4/4　褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる　パミス少量含む

F 34

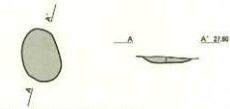


1 7.5YR4/6　褐色埴壌土　粘性あり　しまる　パミス少量含む

F 35

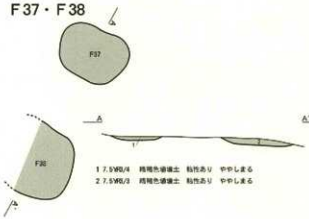
1 7.5YR3/3　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 36



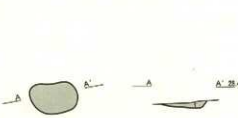
1 7.5YR3/4　暗褐色埴壌土　粘性なし　ややしまる

F 37・F 38



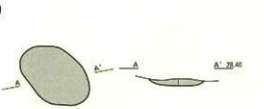
1 7.5YR3/4　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる
2 7.5YR3/3　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 39



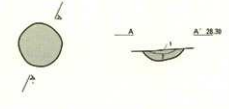
1 7.5YR2/2　黒褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 40



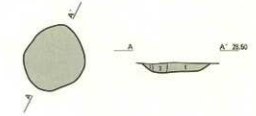
1 7.5YR4/4　褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 41



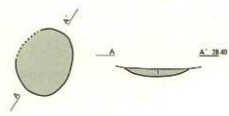
1 7.5YR2.2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる
2 7.5YR3/3　暗褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 42



1 7.5YR4/6　褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる
2 7.5YR2.2/1　黒色埴壌土　粘性あり　ややしまる

F 43



1 7.5YR4/6　褐色埴壌土　粘性あり　ややしまる

図Ⅳ－84　F 33～43平面図・断面図

F 44

1 7.5YR4/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

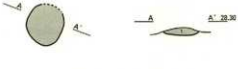
F 45

1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 46

1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性なし ややしまる

F 47



1 7.5YR4/3 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 48

1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 49

1 7.5YR4/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 50

1 7.5YR3/3 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 51

1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり しまる
2 焼骨混じりのII層黒褐色土

F 52

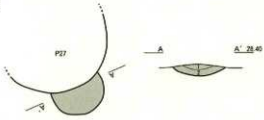
1 7.5YR3/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 53

1 7.5YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

図Ⅳ－85 F 44～53平面図・断面図

F 54



1 10YR 7/1　黒色埋環土　粘性あり　ややしまる　※薄黒色土の自然堆積
2 5YR6/6　赤褐色砂環土　粘性あり　ややしまる

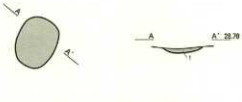
F 55

1 7.5YR6/6　褐色埋環土　粘性あり　ややしまる　※薄黒褐色土少量混じる

F 56

1 7.5YR6/6　褐色埋環土　粘性あり　しまる　暗褐色土が混じる

F 57

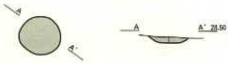


1 7.5YR6/8　褐色砂環土　粘性あり　しまる　暗褐色土が混じる

F 58

1 7.5YR6/8　褐色埋環土　粘性あり　しまる　暗褐色土が混じる

F 59

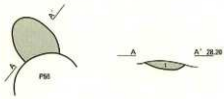


1 7.5YR6/4　褐色埋環土　粘性あり　しまる　パミス少量含む

F 60

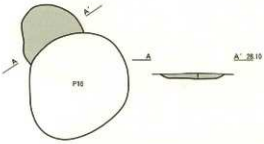
1 7.5YR6/6　褐色埋環土　粘性あり　ややしまる

F 61



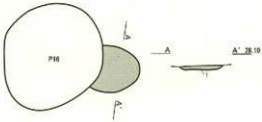
1 7.5YR6/6　褐色埋環土　粘性あり　しまる　パミス少量含む

F 62



1 7.5YR6/4　褐色埋環土　粘性あり　しまる　パミス少量含む

F 63



1 7.5YR6/3　褐色埋環土　粘性あり　しまる

図Ⅳ－86　F 54～63平面図・断面図

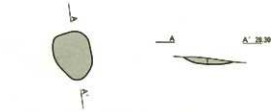
F 64

1 7.5YR4/4 暗褐色砂質土 粘性あり ややしまる

F 65

1 7.5YR4/4 褐色砂質土 粘性あり ややしまる

F 66



1 7.5YR4/4 暗褐色砂質土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 67

1 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 粘性あり しまる

F 68

1 7.5YR3/3 極暗褐色粘質土 粘性あり ややしまる II層黒褐色土少量混じる

F 69

1 7.5YR4/4 褐色埴質土 粘性あり しまる

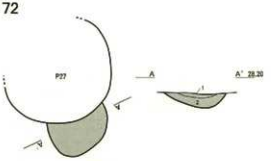
F 70

1 7.5YR4/6 褐色埴質土 粘性あり しまる

F 71

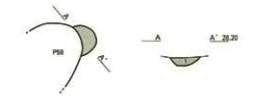
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性あり しまる

F 72



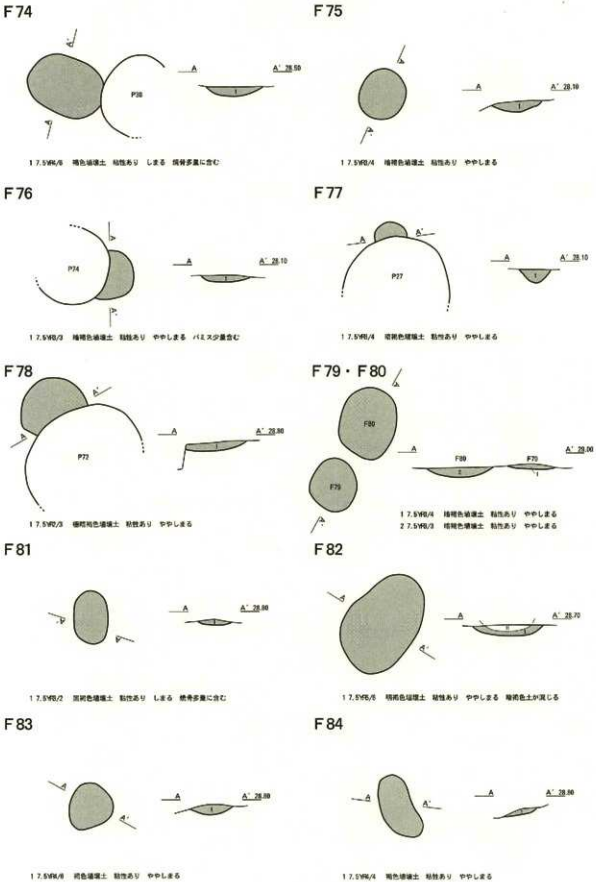
1 10YR2/3 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる II層黒褐色土の自然堆積
2 7.5YR4/4 褐色埴質土 粘性あり ややしまる

F 73

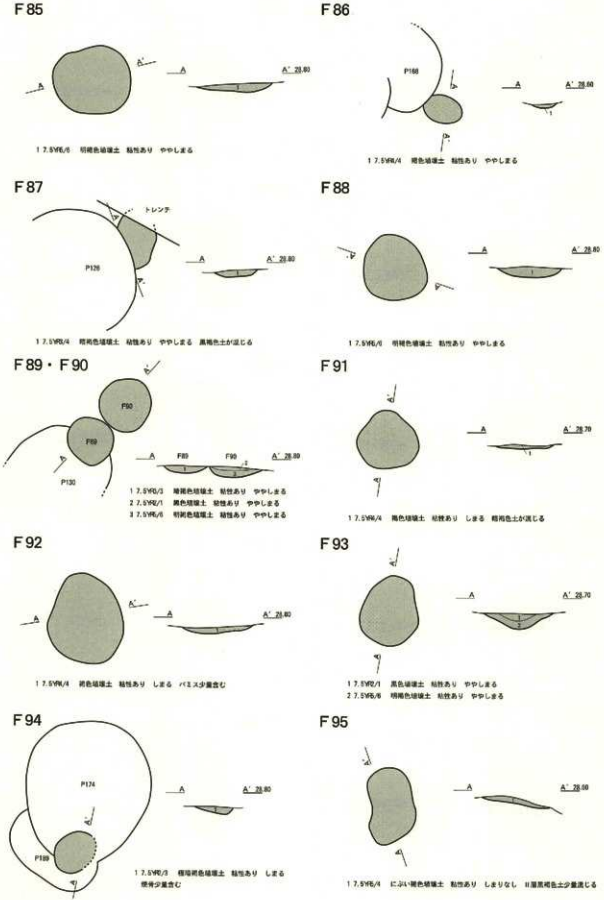


1 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－87 F 64～73 平面図・断面図

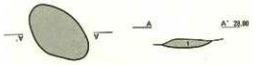


図Ⅳ－88 F 74～84 平面図・断面図



図Ⅳ－89 F85～95平面図・断面図

F96

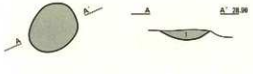


1 7.5YR/3 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F97

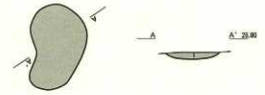
1 7.5YR/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F98



1 7.5YR/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F99

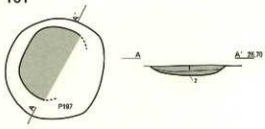


1 7.5YR/6 黄色埴壌土 粘性あり ややしまる ※暗黄褐色土少量混じる

F100

1 7.5YR/6 褐色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨少量含む

F101

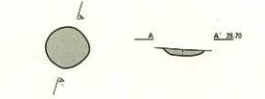


1 7.5YR/1 黒色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨多量に含む
2 7.5YR/4 褐色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨多量に含む (1>2)

F102

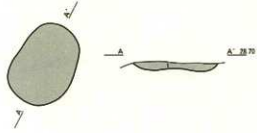
1 7.5YR/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F103



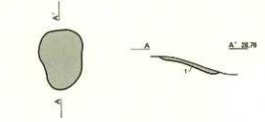
1 7.5YR/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F104



1 7.5YR/6 褐色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨少量含む

F105



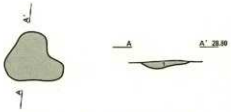
1 7.5YR/6 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－90 F96～105 平面図・断面図

F106

1 2.5YR/4　暗黄色粘質土　粘性あり　ややしまる

F107



1 7.5YR/6　黄色粘質土　粘性あり　ややしまる　暗黄色土が混じる

F108

1 7.5YR2/2　黒褐色埋土　粘性あり　ややしまる

F109

1 7.5YR/4　暗褐色埋土　粘性あり　ややしまる

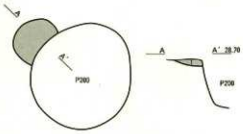
F110

1 2.5YR/6　黄色粘質土　粘性あり　ややしまる

F111

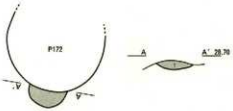
1 7.5YR/3　黒色埋土　粘性あり　ややしまる

F112



1 7.5YR/4　暗褐色粘質土　粘性あり　ややしまる　暗黄色土（ローム）が混じる

F113



1 7.5YR/4　黄色粘質土　粘性あり　ややしまる　焼骨含む

F114

1 2.5YR/3　暗黄色埋土　粘性あり　ややしまる　焼骨含む

F115

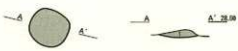
1 7.5YR/6　黄色埋土　粘性あり　ややしまる　焼骨少量含む

図Ⅳ－91　F106～115 平面図・断面図

F116

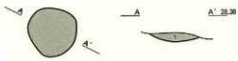
1 7.5YR4/4 褐色砂質土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F117



1 7.5YR4/4 黄色砂質土 粘性あり しまる 焼骨少量含む

F118

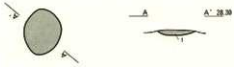


1 7.5YR6/6 明褐色砂質土 粘性あり ややしまる

F119

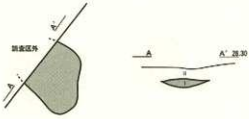
1 2.5YR5/3 暗灰色砂質土 粘性あり ややしまる

F120



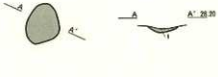
1 7.5YR5/3 褐色砂質土 粘性あり ややしまる

F121



1 2.5YR6/6 明褐色砂質土 粘性あり ややしまる

F122



1 7.5YR4/4 褐色砂質土 粘性あり ややしまる

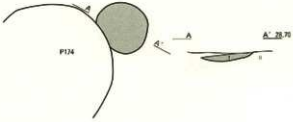
F123

1 7.5YR6/6 明黄色砂質土 粘性あり しまる

F124

1 7.5YR4/4 黄色砂質土 粘性あり ややしまる

F125



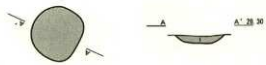
1 7.5YR4/4 褐色砂質土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－92　F116～125 平面図・断面図

F126

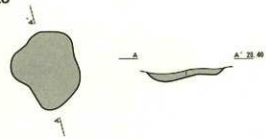
1 7.5YR2/4 暗褐色埴壌土 粘性あり しまる

F127



1 7.5YR2/2 極暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F128

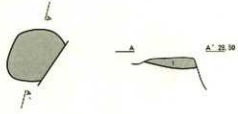


1 7.5YR5/6 明褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F129

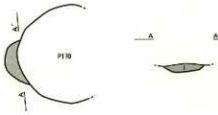
1 7.5YR5/4 にぶい褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F130



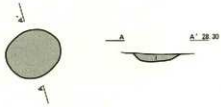
1 7.5YR5/4 にぶい褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 炭素少量含む

F131



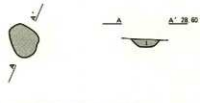
1 7.5YR5/6 明褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F132



1 5YR5/8 明赤褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F133



1 7.5YR5/8 明褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F134

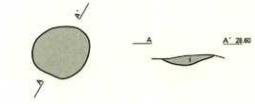
1 7.5YR5/6 明褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F135

1 7.5YR5/4 にぶい褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－93 F126～135 平面図・断面図

F 136

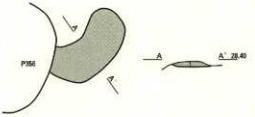


1 7.5YR6/8 明黄色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 137

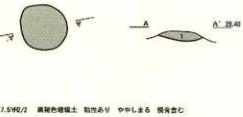
1 7.5YR6/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F 138



1 7.5YR2/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 139

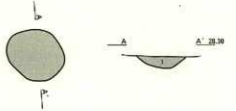


1 7.5YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F 140

1 7.5YR2/4 暗褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 141



1 7.5YR4/6 明色埴壌土 粘性あり ややしまる パミス少量含む

F 142

1 7.5YR3/4 暗褐色埴壌土 粘性あり しまる 暗褐色土が混じる

F 143

1 7.5YR4/6 明色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨含む

F 144

1 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性あり ややしまる

F 145

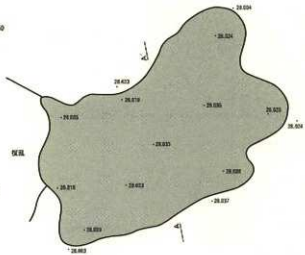
1 5YR5/6 暗赤褐色土 粘性あり しまる

図Ⅳ－94 F 136～145 平面図・断面図

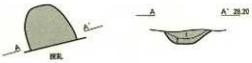
F 146

1 7.5YR6/3 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 149

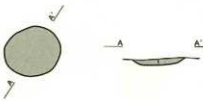


F 147



1 5YR4/8 赤褐色土 粘性あり ややしまる
2 7.5YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性あり しまるパミス 少量混じる

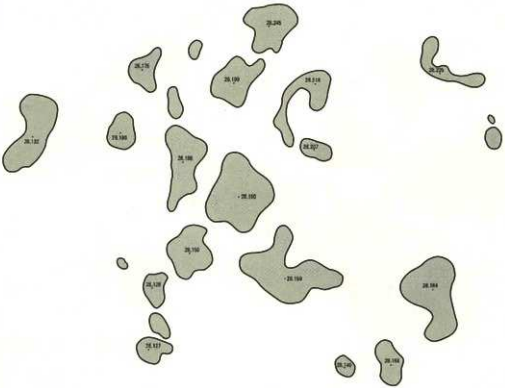
F 148



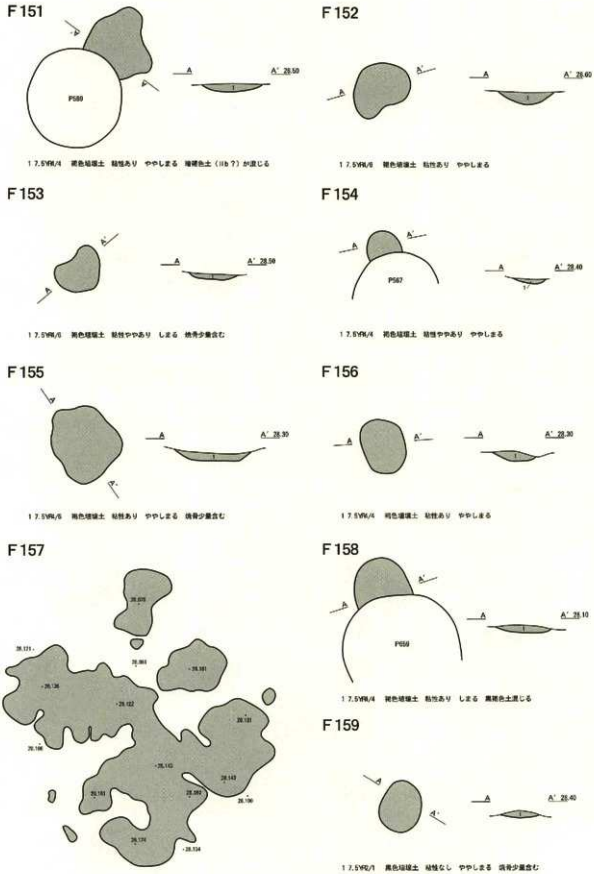
1 5YR4/8 橙赤褐色埴壌土 粘性あり ややしまる 11層混褐色土が混じる

1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨多量に含む

F 150

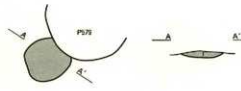


図Ⅳ－95 F 146～149 平面図・断面図



図Ⅳ－96　F151～159平面図・F151～156・F158・F159断面図

F160

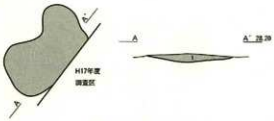


1 5YR/6 暗赤褐色土 粘性あり ややしまる

F161

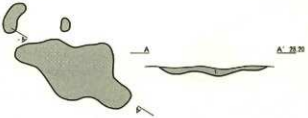
1 7.5YR2/3 極暗褐色埋土 粘性あり ややしまる 1Hに黒褐色土が混じる

F162



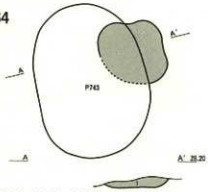
1 5YR5/4 暗赤褐色土 粘性あり ややしまる

F163



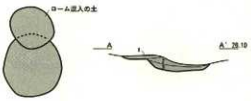
1 7.5YR/6 暗色埋土 粘性あり しまる

F164



1 7.5YR4/6 黄色埋土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F165

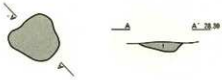


1 10YR/4 黄色埋土 粘性あり ややしまる ローム流入の土
2 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あり ややしまる 焼骨含む
3 7.5YR4/6 暗色埋土 粘性あり しまる

F166

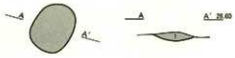
1 7.5YR4/4 黄色埋土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F167



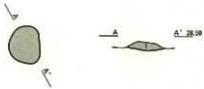
1 7.5YR6/6 暗色埋土 粘性あり ややしまる

F168



1 7.5YR2/2 黒褐色埋土 粘性あり しまる 焼骨少量含む

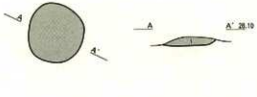
F169



1 7.5YR/3 暗褐色土 粘性あり ややしまる

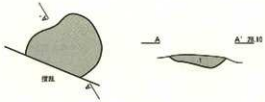
図Ⅳ－97 F160～169平面図・断面図

F170



1 7.5YR4/4 暗黒色土 粘性あり ややしまる

F171



1 10YR4/4 明色褐色土 粘性あり ややしまる

F172

1 7.5YR2/3 極暗黒色粘質土 粘性あり やしまる

F173

1 7.5YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる

F174

1 7.5YR4/4 褐色粘質土 粘性あり ややしまる

F175

1 7.5YR2/2 黒紫色粘質土 粘性あり ややしまる

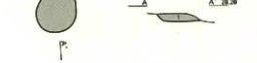
F176

1 7.5YR4/4 褐色粘質土 粘性あり ややしまる

F177

1 7.5YR6/6 明赤黄色粘質土 粘性あり ややしまる

F178



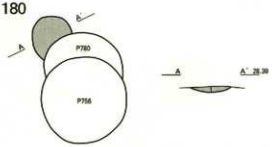
1 7.5YR6/6 明赤黄色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F179

1 7.5YR4/4 明色褐色土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

図Ⅳ－98 F170～179 平面図・断面図

F180



1 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性あり ややしまる

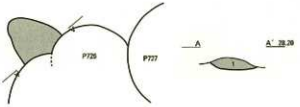
F181

1 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 粘性あり ややしまる

F182

1 7.5YR4/6 褐色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F183

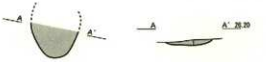


1 7.5YR4/4 褐色埴質土 粘性あり ややしまる 暗褐色土が混じる

F184

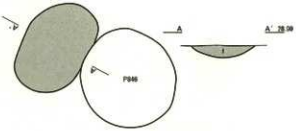
1 7.5YR4/6 褐色粘質土 粘性ややあり しまる 焼骨含む

F185



1 7.5YR4/6 褐色埴質土 粘性あり ややしまる

F186



1 7.5YR5/6 明褐色埴質土 粘性なし しまる

F187

1 7.5YR5/8 明赤褐色埴質土 粘性あり しまる 褐色土が混じる

F188

1 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あり しまる 焼骨含む

F189

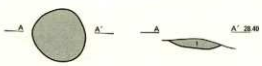
1 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

図Ⅳ－99 F180～189 平面図・断面図

F190

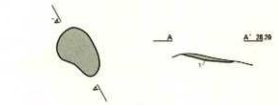
1 7.5YR2/1 黒色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F191



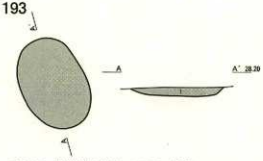
1 7.5YR4/3 黒色粘質土 粘性あり ややしまる

F192



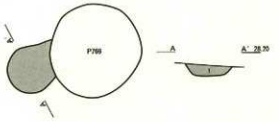
1 7.5YR6/8 明赤褐色粘質土 粘性あり しまる 焼骨含む

F193



1 2.5YR4/6 黒色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨含む

F194



1 7.5YR4/6 暗色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

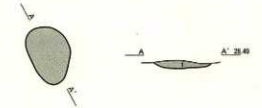
F195

1 7.5YR4/4 黒色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨微量に含む

F196

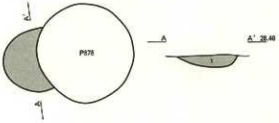
1 7.5YR6/8 明赤褐色粘質土 粘性あり ややしまる 焼骨少量含む

F197



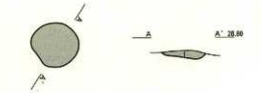
1 7.5YR6/6 明褐黄色粘質土 粘性あり ややしまる

F198



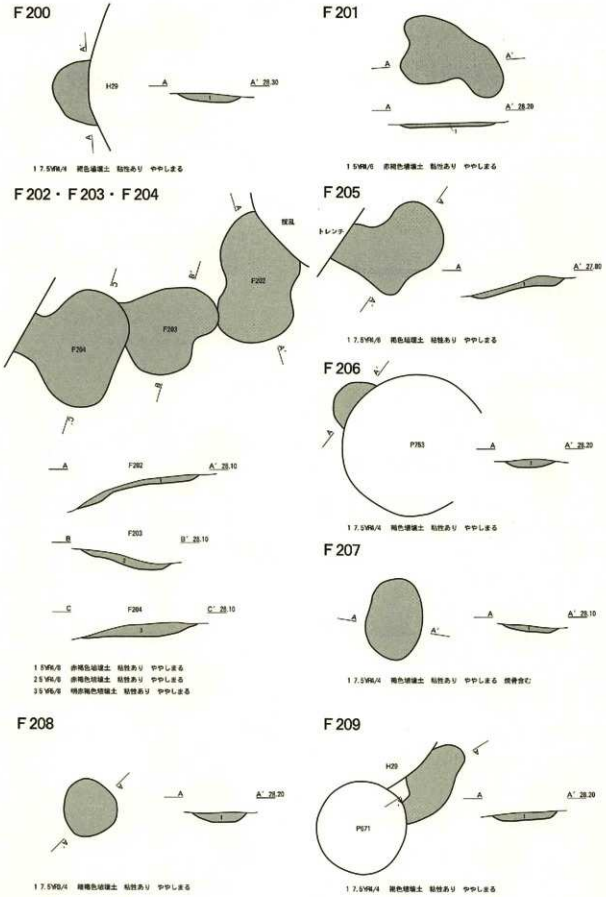
1 2.5YR6/8 明赤黄色粘質土 粘性あり しまる

F199

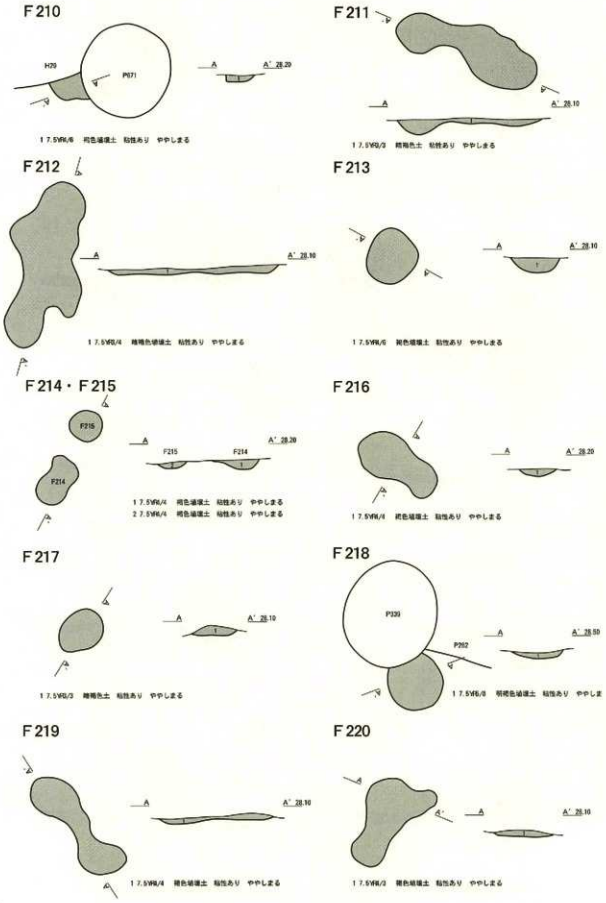


1 7.5YR4/4 黒色粘質土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－100　F190～199 平面図・断面図

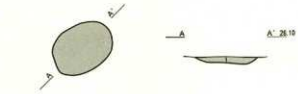


図Ⅳ－101 F 200～209 平面図・断面図



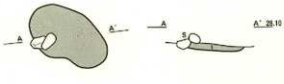
図Ⅳ－102　F210～220 平面図・断面図

F 221



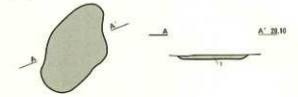
1 7.5YR3/2 暗褐色埋土 粘性あり ややしまる

F 222



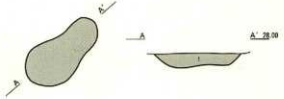
1 7.5YR3/2 黒褐色埋土 粘性あり ややしまる

F 223



1 7.5YR3/2 暗褐色埋土 粘性あり ややしまる

F 224

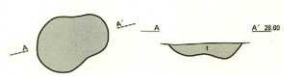


1 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あり ややしまる

F 225

1 7.5YR3/2 暗褐色埋土 粘性あり ややしまる

F 226

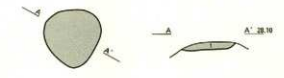


1 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あり ややしまる

F 227

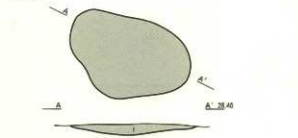
1 7.5YR4/4 黒色埋土 粘性あり ややしまる

F 229



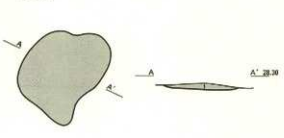
1 7.5YR4/3 褐色埋土 粘性あり しまる

F 235



1 7.5YR6/8 明黄色埋土 粘性あり ややしまる

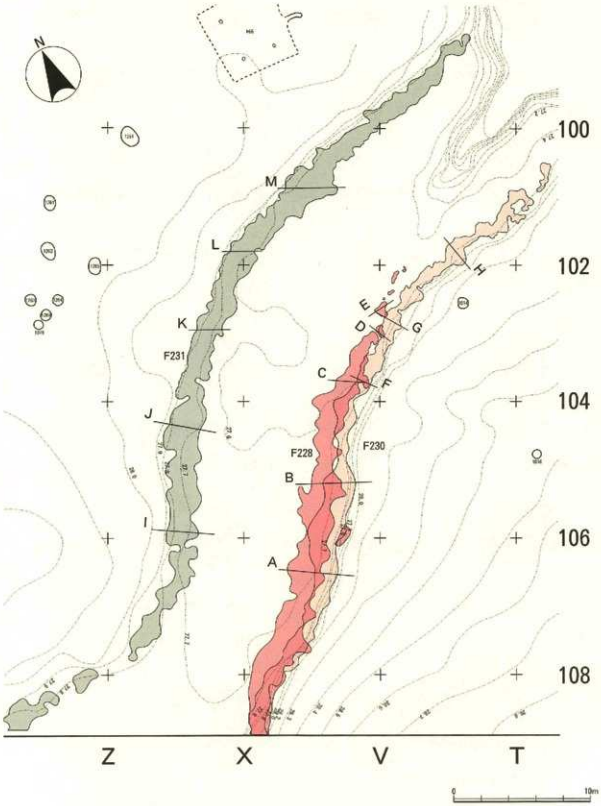
F 236



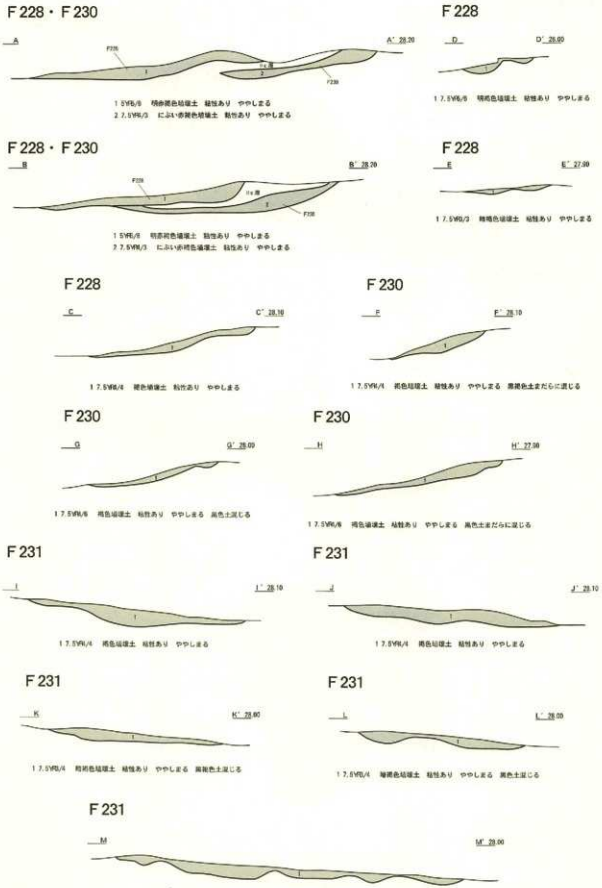
1 7.5YR5/6 明黄色埋土 粘性あり ややしまる

図Ⅳ－103 F 221～227・F 229・F 235・F 236 平面図・断面図

F 228・F 230・F 231

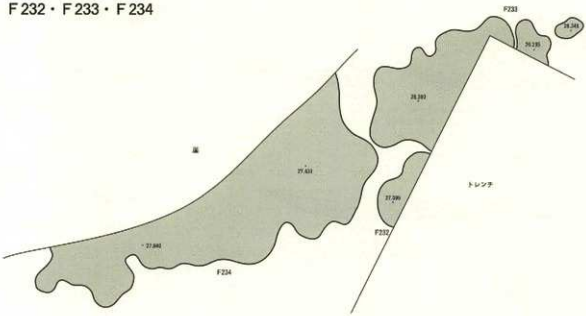


図Ⅳ－104　F 228・F 230・F 231 平面図・断面図

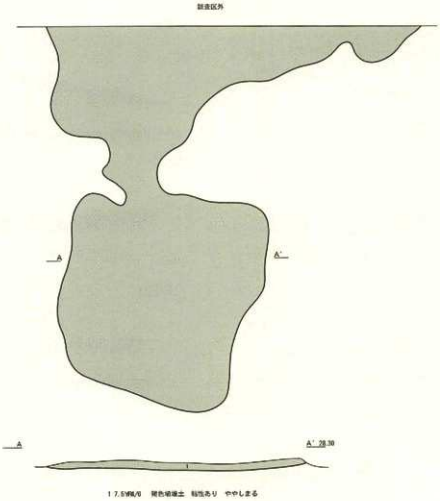


図Ⅳ－105 F 228・F 230・F 231断面図

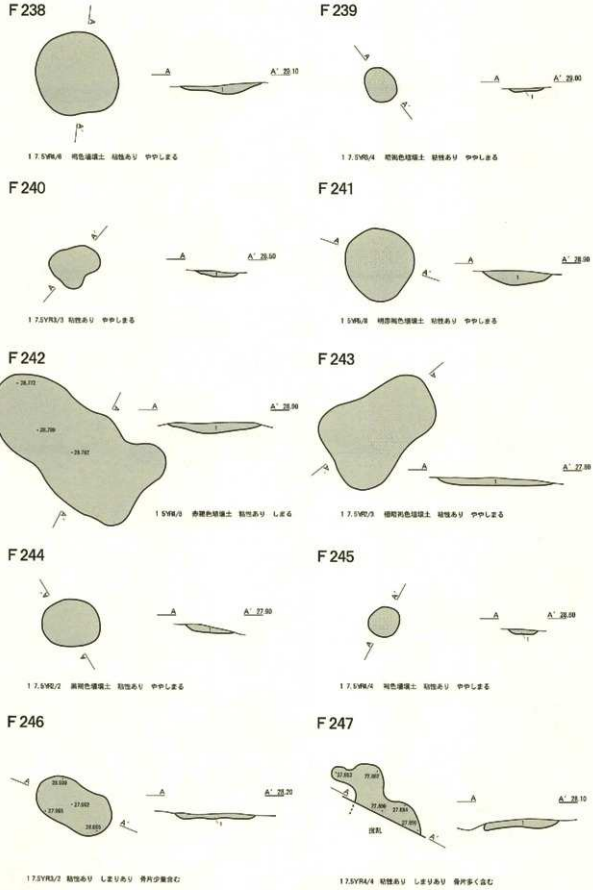
F 232・F 233・F 234



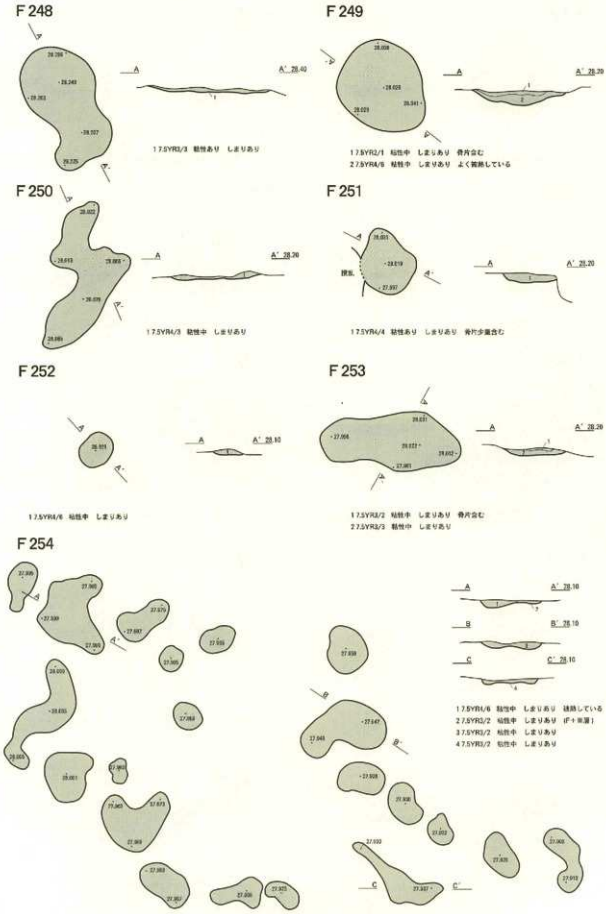
F 237



図Ⅳ－106　F 232・F 233・F 234平面図・F 237 平面図・断面図

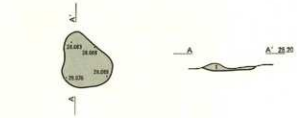


図Ⅳ－107 F 238～247平面図・断面図



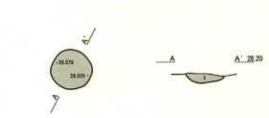
図Ⅳ－108 F 248～254平面図・断面図

F 255



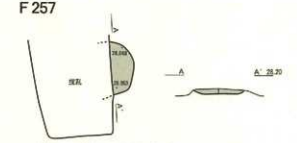
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり

F 256



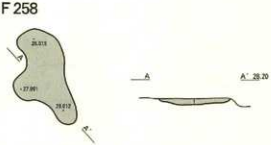
1 7.5YR4/4 粘性あり しまりあり 骨片少量含む

F 257



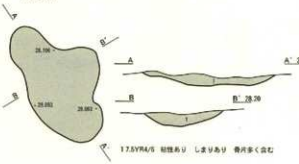
1 7.5YR4/6 粘性あり しまりあり 骨片含む

F 258



1 7.5YR3/3 粘性あり しまりあり 骨片含む

F 259



1 7.5YR4/6 粘性あり しまりあり 骨片多く含む

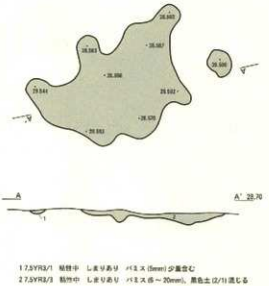
F 260

1 7.5YR3/2 粘性あり しまりあり

F 261

1 7.5YR4/4 粘性あり しまりあり 骨片少量含む

F 263

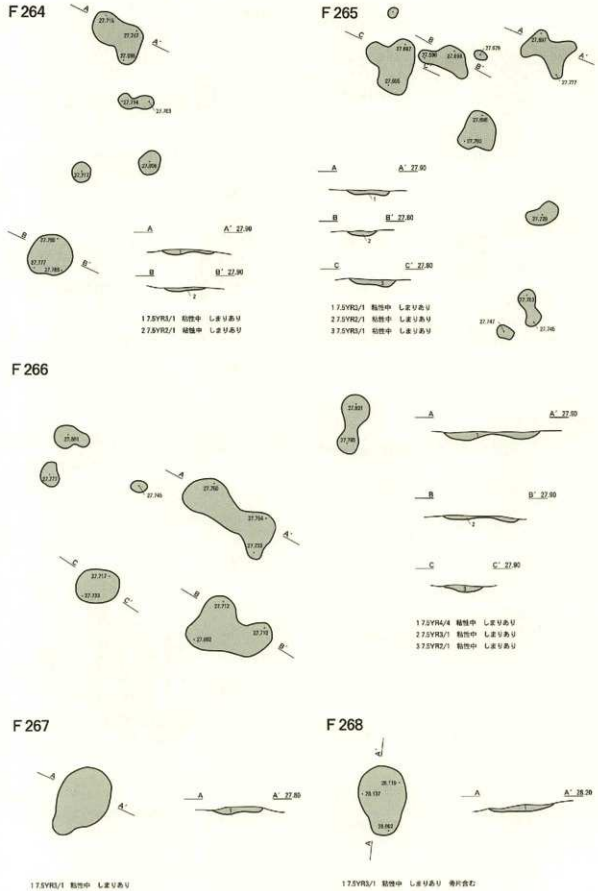


1 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり パミス(Beige)少量含む
2 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり パミス(5～20mm)、黒色土(2/1)混じる

F 262

1 7.5YR3/2 粘性あり しまりあり

図Ⅳ－109 F 255～263平面図・断面図



図Ⅳ－110　F 264～268平面図・断面図

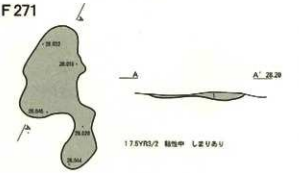
F 269

1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり
2 7.5YR4/6 粘性中 しまりあり
3 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 炭化物含む

F 270

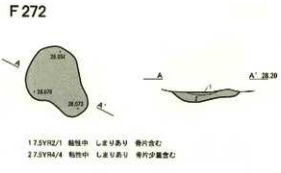
1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

F 271



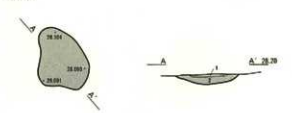
1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

F 272



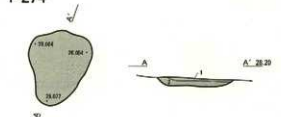
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 骨片含む
2 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり 骨片少量含む

F 273



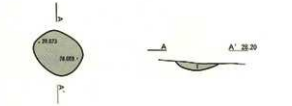
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 骨片少量含む
2 7.5YR4/6 粘性中 骨片少量含む

F 274



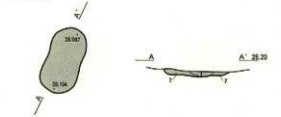
1 7.5YR3/1 粘性あり しまりあり 骨片含む
2 7.5YR3/2 粘性あり しまりあり 骨片含む

F 275



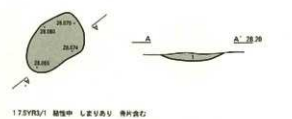
1 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり 骨片ごく少量含む

F 276



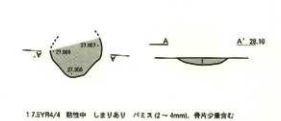
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり
2 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり

F 277



1 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり 骨片含む

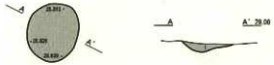
F 278



1 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり パミス(2～4mm). 骨片少量含む

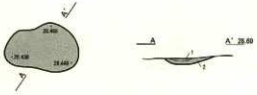
図Ⅳ－111 F 269～278平面図・断面図

F 279



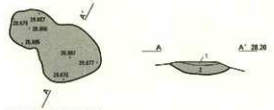
1 7.5YR4/6 粘性中 しまりあり

F 280



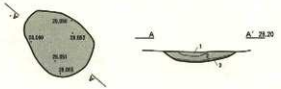
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり
2 7.5YR5/6 粘性中 しまりあり

F 281



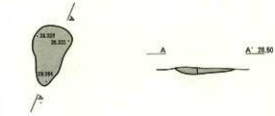
1 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり
2 7.5YR5/6 粘性中 しまりあり

F 282



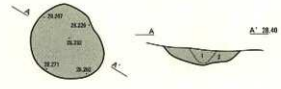
1 7.5YR1.7/1 粘性中 しまりあり パミス、骨片含む
2 7.5YR4/6 粘性中 しまりあり 骨片含む
3 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり

F 283



1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり

F 284

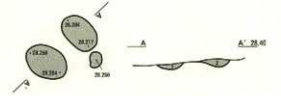


1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり
2 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり パミス(1～2mm)含む

F 285

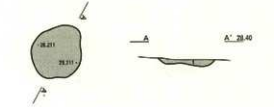
1 7.5YR1/4 粘性中 しまりあり パミス(1mm)含む

F 286



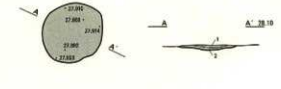
1 7.5YR2/2 粘性中 しまりあり パミス(1～2mm)多く含む
2 7.5YR2/3 粘性中 しまりあり パミス(1mm)少量含む

F 287



1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり パミス(3mm)含む

F 288



1 7.5YR3/4 粘性中 しまりあり
2 7.5YR3/1 粘性中 しまりあり

図Ⅳ－112 F 279～288平面図・断面図

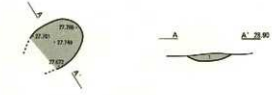
F 289

1 7.5YR4/6 粘性中 しまりあり

F 290

1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり

F 291



1 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり

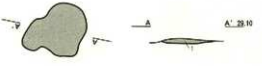
F 292

1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

F 293

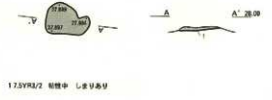
1 7.5YR3/2 粘性ややあり しまる

F 294



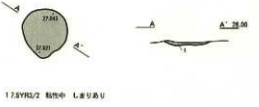
1 7.5YR2/2 粘性ややあり ややしまる

F 295



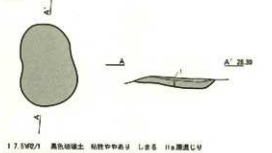
1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

F 296



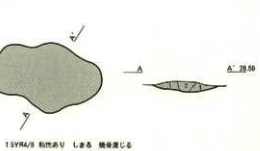
1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

F 297



1 7.5YR2/1 黒色砂礫土 粘性ややあり しまる IIa層混じり
2 5YR5/8 粘性ややあり しまる

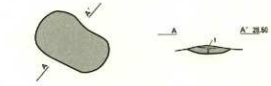
F 298



1 5YR4/8 粘性あり しまる 焼骨混じる
2 10YR2/1 粘性あり しまる

図Ⅳ－113 F 289～298平面図・断面図

F 299



1 10YR2/1 粘性ややあり しまる II層
2 7.5YR4/6 粘性ややあり しまる

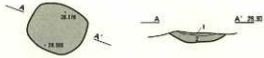
F 300

1 7.5YR4/3 粘性あり しまる 焼土少し混じる

F 301

1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり 骨片含む

F 302



1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 骨片含む
2 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり

F 303

1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 骨片少量含む

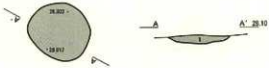
F 304

1 7.5YR4/4 粘性あり しまりあり 骨片少量含む

F 305

1 7.5YR2/2 粘性あり しまりあり 骨片少量含む

F 306



1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり 骨片含む

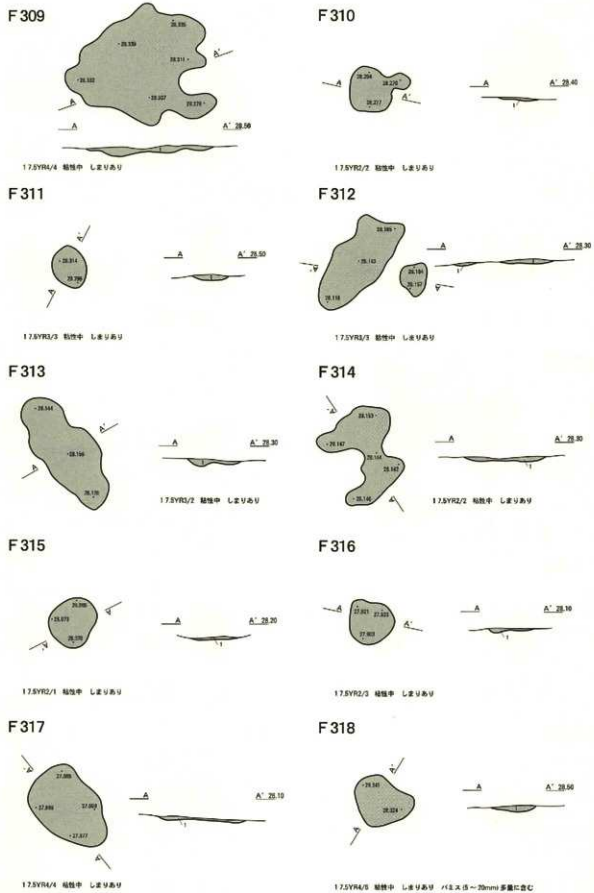
F 307

1 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり 骨片含む

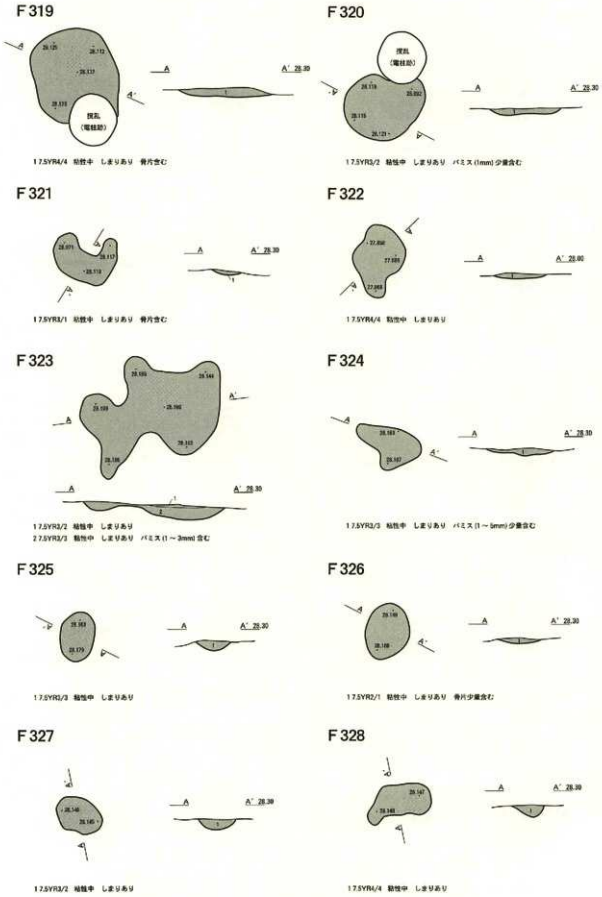
F 308

1 7.5YR2/2 粘性中 しまりあり

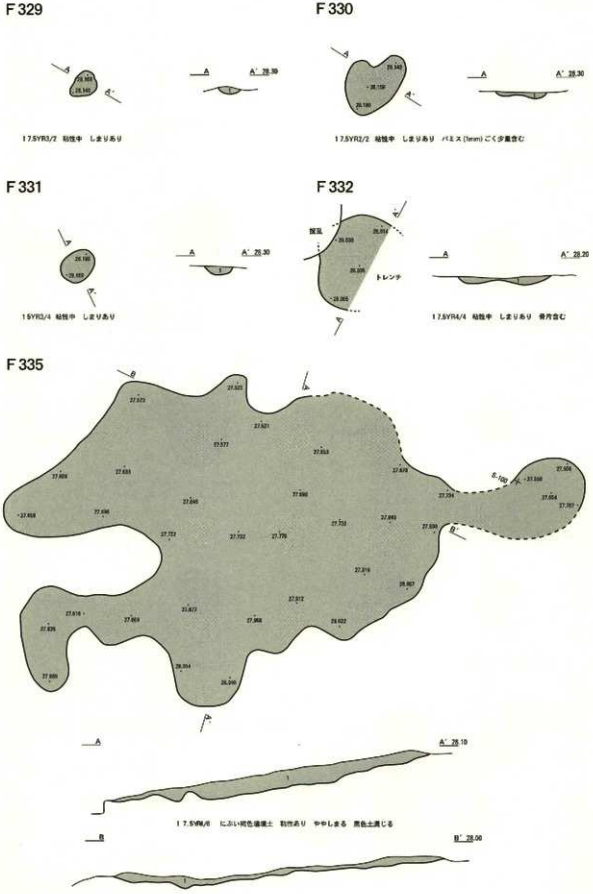
図Ⅳ－114 F 299～308平面図・断面図



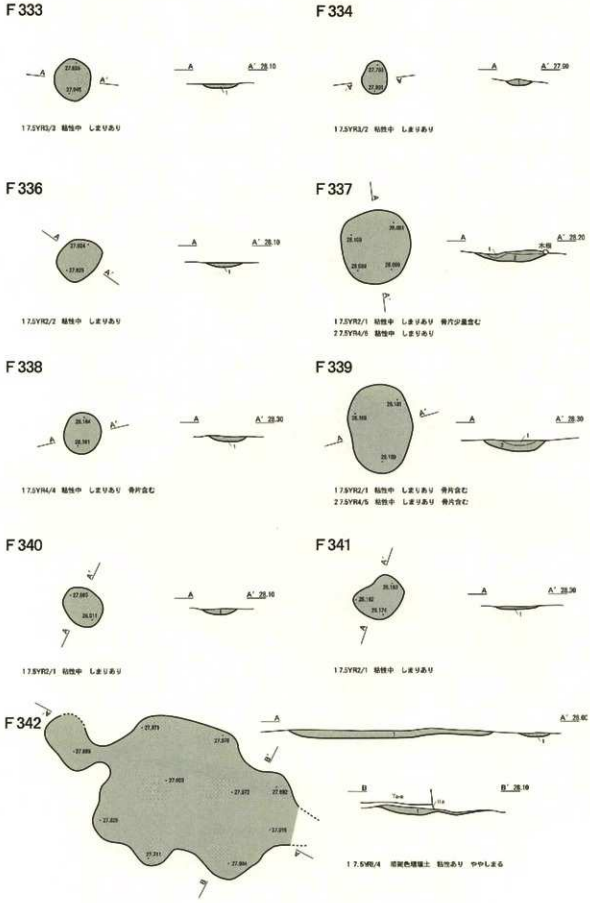
図Ⅳ－115　F309～318平面図・断面図



図Ⅳ－116 F 319～328平面図・断面図

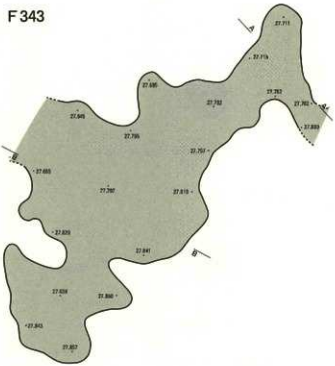


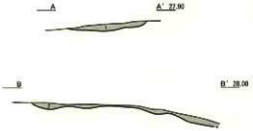
図Ⅳ－117 F 329～332・F 335 平面図・断面図



図Ⅳ－118 F 333・F 334・F 336～342 平面図・断面図

F 343





1 7.5YR5/8 粘性中 ややしまりあり

1 7.5YR6/4 暗褐色埴壌土 粘性ややあり しまる
2 7.5YR3/2 黒褐色粘壌土 粘性ややあり ややしまる

F 344

1 7.5YR5/8 粘性中 ややしまりあり

F 345

1 7.5YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性ややあり しまる
2 7.5YR6/6 明褐色埴壌土 粘性ややあり ややしまる

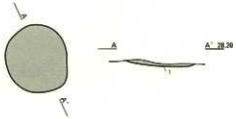
F 346

1 7.5YR6/4 暗褐色埴壌土 粘性ややあり しまる

F 347

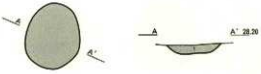
1 7.5YR4/4 褐色粘壌土 粘性あり ややしまる 焼骨混じる

F 348



1 7.5YR5/3 暗褐色土 粘性ややあり しまる 焼骨混じる

F 349



1 7.5YR5/3 褐灰色埴壌土 粘性なし しまりなし

図Ⅳ－119 F 343～349平面図・断面図

F 350

1 7.5YR2/3 褐灰色埴壌土 粘性あり しまりなし

F 351

1 7.5YR3/4 暗褐色砂壌土 粘性ややあり しまる

F 352

1 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまる

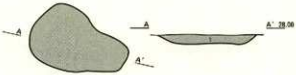
F 353

1 7.5YR2/3 極暗褐色埴壌土 粘性ややあり ややしまる

F 354

1 7.5YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性ややあり しまる

F 355



1 7.5YR5/6 暗褐色埴壌土 粘性ややあり ややしまる

F 356

1 7.5YR4/4 褐色砂壌土 粘性ややあり ややしまる 焼骨少量混じる

F 357

1 7.5YR4/4 暗褐色砂壌土 粘性ややあり しまる 焼骨微量に混じる

F 358

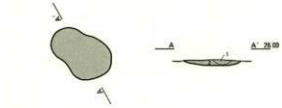
1 7.5YR4/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 359

1 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性ややあり しまる 焼土混じりのII層土
2 7.5YR5/8 明褐色埴壌土 粘性あり しまる 焼骨含む

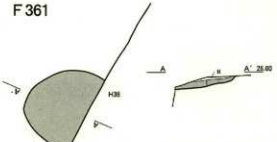
図Ⅳ－120 F 350～359 平面図・断面図

F 360



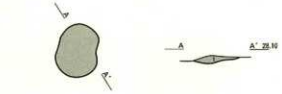
1 10YR5/1 黒褐色埴壌土 粘性あり ややしまる Ⅱ層
2 7.5YR4/4 褐色埴壌土 粘性あり ややしまる

F 361



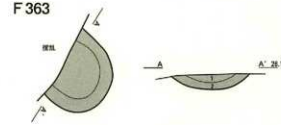
1 7.5YR5/8 明褐色埴壌土 粘性ややあり しまる 焼骨少量混じる

F 362



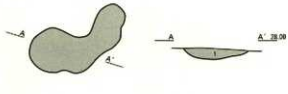
1 7.5YR5/8 明褐色埴壌土 粘性なし しまる

F 363



1 10YR2/2 黒褐色埴壌土 粘性なし しまる Ⅱ層
2 7.5YR5/8 明褐色埴壌土 粘性なし しまる

F 364

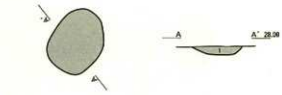


1 7.5YR5/4 暗褐色埴壌土 粘性なし しまる

F 365

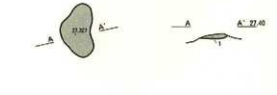
1 7.5YR3/4 赤褐色埴壌土 粘性なし ややしまる

F 366



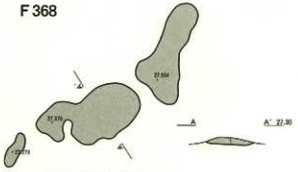
1 7.5YR5.5/4 暗褐色埴壌土 粘性ややあり しまる ローム粒混じる

F 367



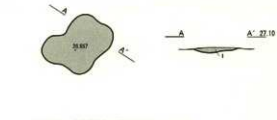
1 7.5YR5.5/3 暗褐色土 粘性なし しまる

F 368



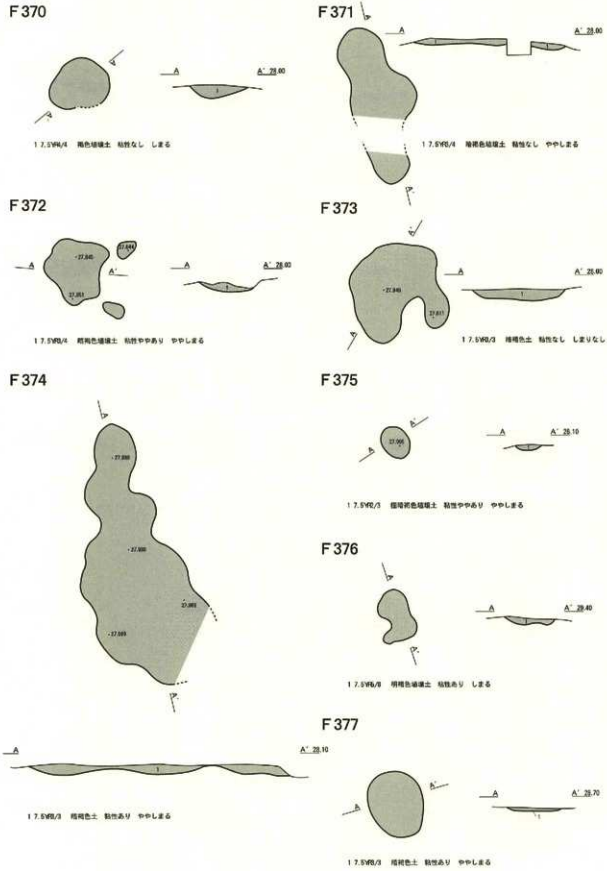
1 7.5YR4/4 褐色埴壌土 粘性あり しまる

F 369



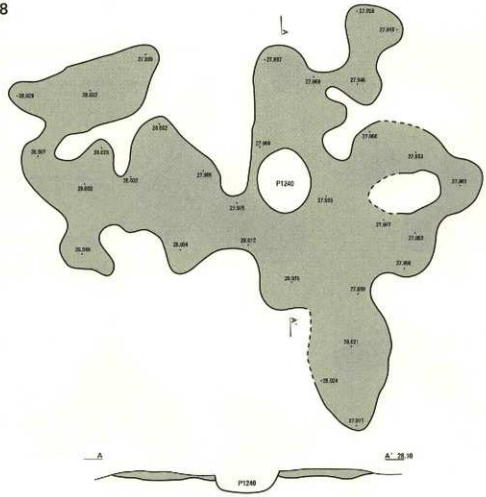
1 7.5YR4/6 褐色埴壌土 粘性ややあり ややしまる

図Ⅳ－121 F 360～369 平面図・断面図



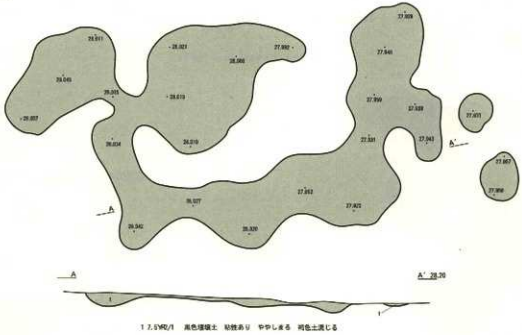
図Ⅳ－122　F 370～377 平面図・断面図

F 378



1 7.5YR4/1 褐色粘質土 植物あり ややしまる 黒色土・パミス少量混じる

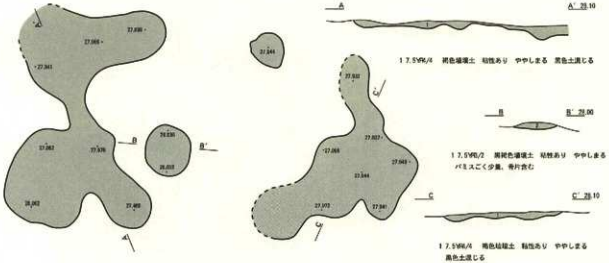
F 379



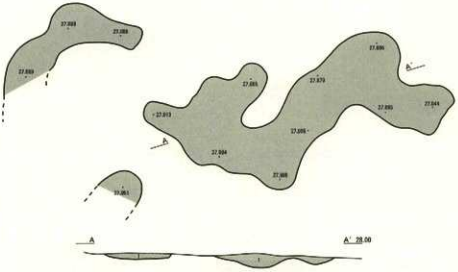
1 7.5YR2/1 黒色環境土 砂粒あり ややしまる 河色土混じる

図Ⅳ－123 F 378・F 379 平面図・断面図

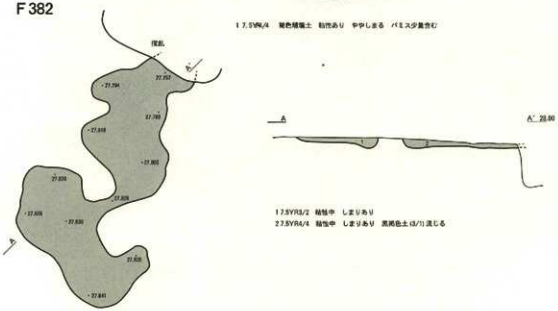
F 380



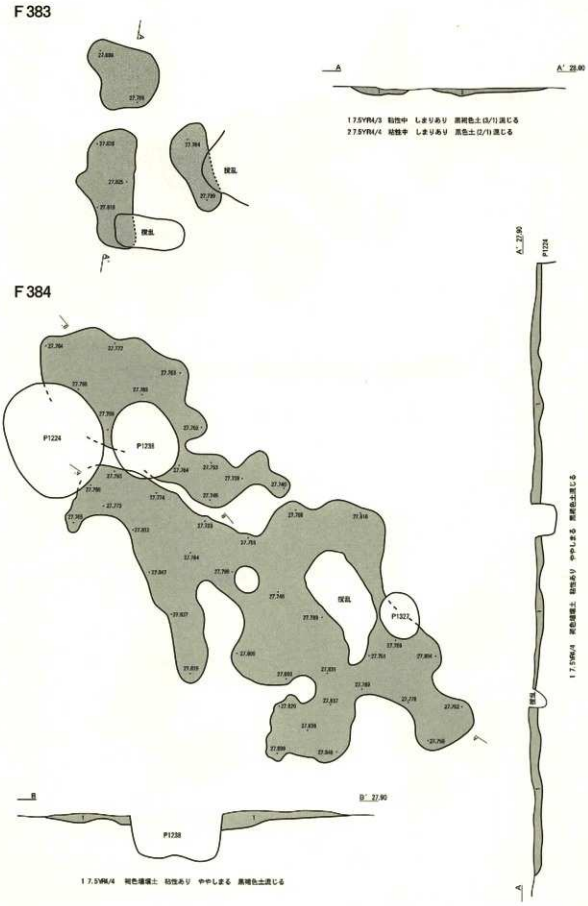
F 381



F 382

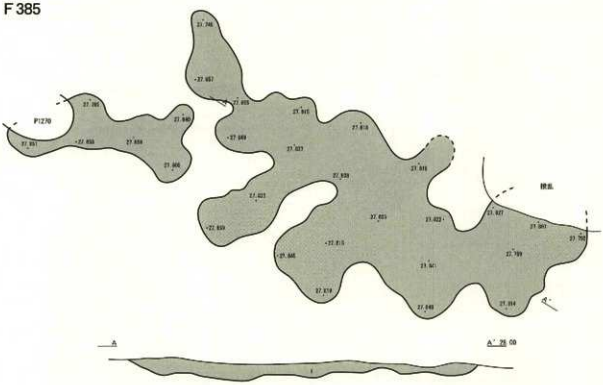


図Ⅳ－124　F 380～382 平面図・断面図



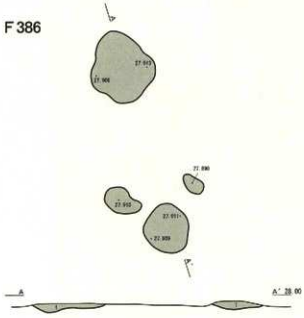
図Ⅳ－125 F 383・F 384 平面図・断面図

F 385



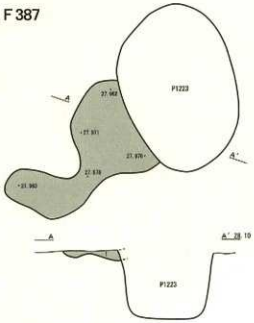
1 7.5YR4/4 褐色埋葬土 粘性あり ややしまる 黒色土混じる

F 386



1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり パミス (1mm) 少量含む

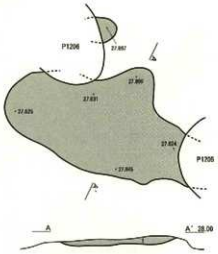
F 387



1 7.5YR4/3 粘性中 しまりあり

図Ⅳ－126 F 385～387 平面図・断面図

F 388

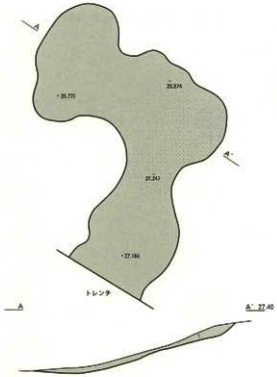


1 7.5YR4/3 粘性中 しまりあり

F 389

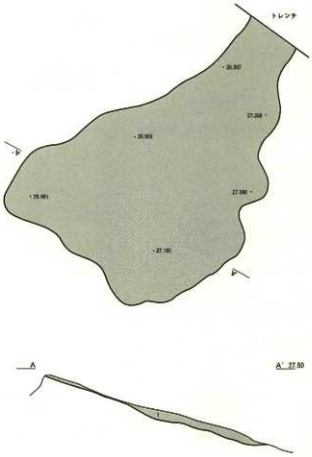
1 7.5YR5/3 橙褐黄色粘質土 粘性あり ややしまる

F 390



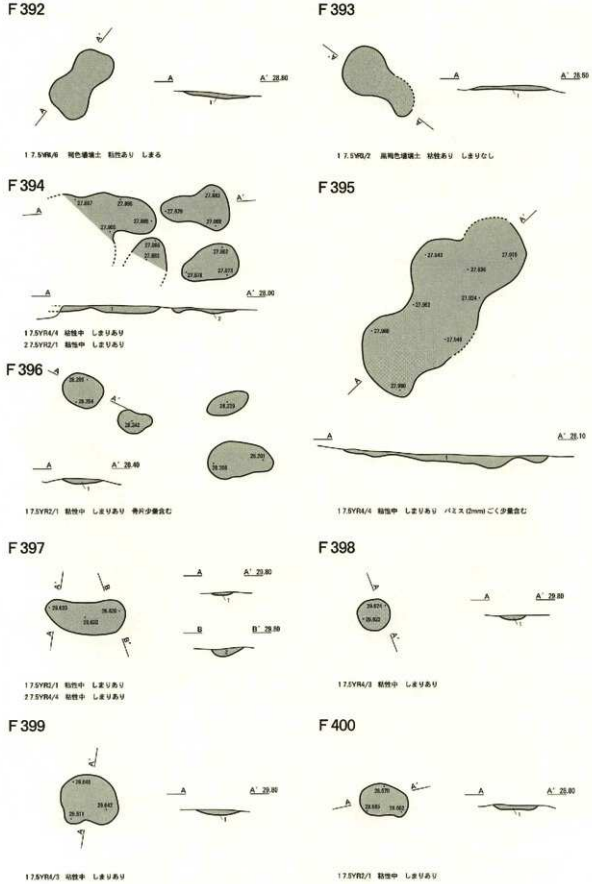
1 7.5YR5/3 暗褐色土 粘性あり しまりなし

F 391

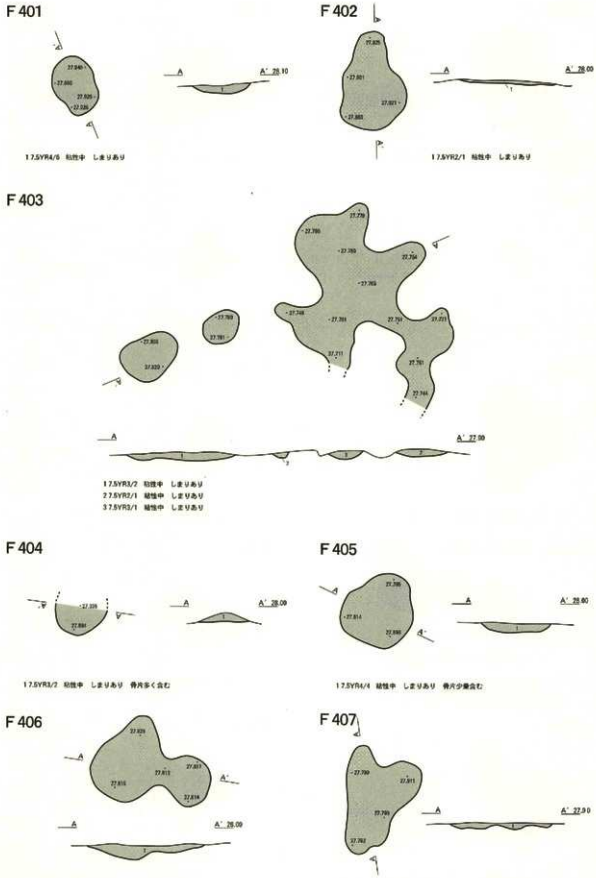


1 7.5YR4/6 褐色粘質土 粘性あり ややしまる

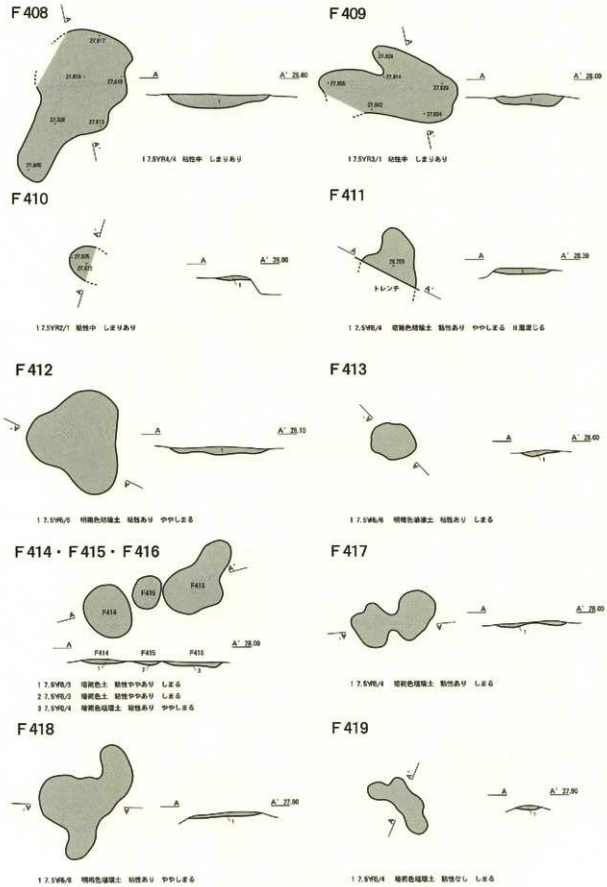
図Ⅳ－127 F 388～391平面図・断面図



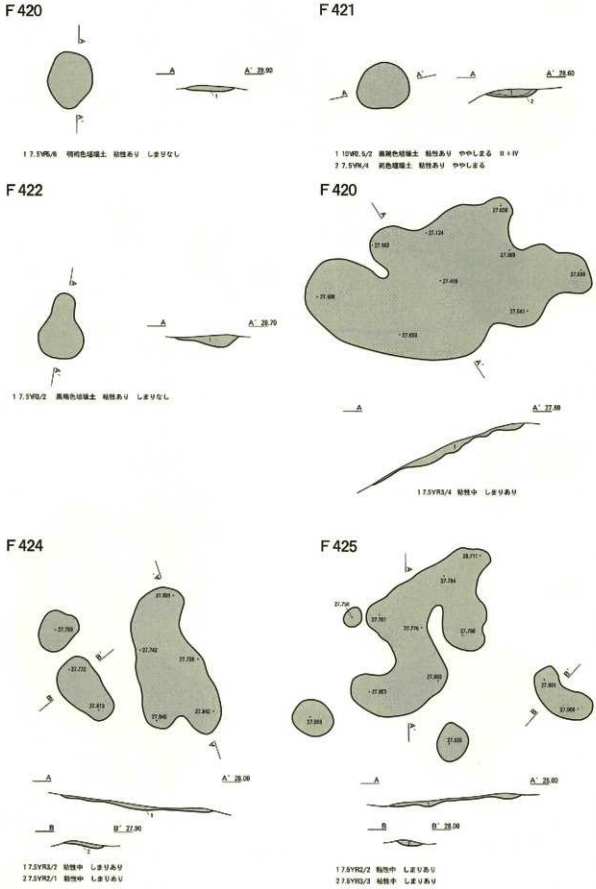
図Ⅳ－128 F 392～400 平面図・断面図



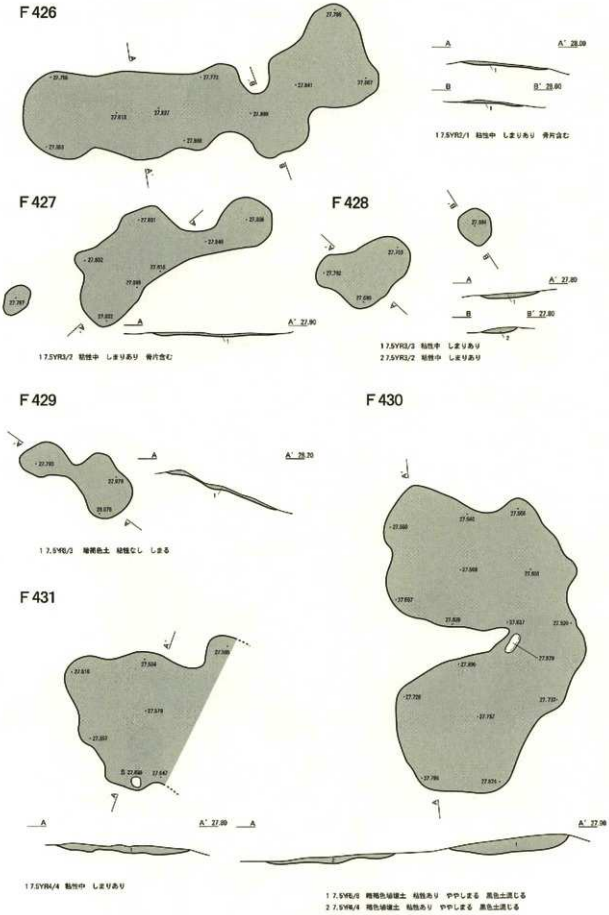
図Ⅳ－129 F 401～407 平面図・断面図



図Ⅳ－130　F 408～419 平面図・断面図



図Ⅳ－131 FH420～425 平面図・断面図



図Ⅳ－132　F 426～431 平面図・断面図

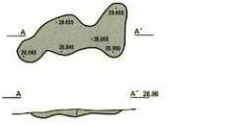
F 432

1 7.5YR4/6 粘性中 しまりあり 骨片少量含む

F 433

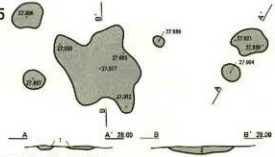
1 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり

F 434



1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり 黒色土(2/1)まだらに混じる

F 435



1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり
2 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

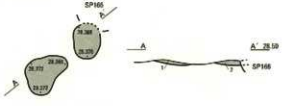
F 436

1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり

F 437

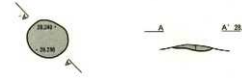
1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり

F 438



1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり
2 7.5YR4/4 粘性中 しまりあり

F 439



1 7.5YR3/2 粘性中 しまりあり

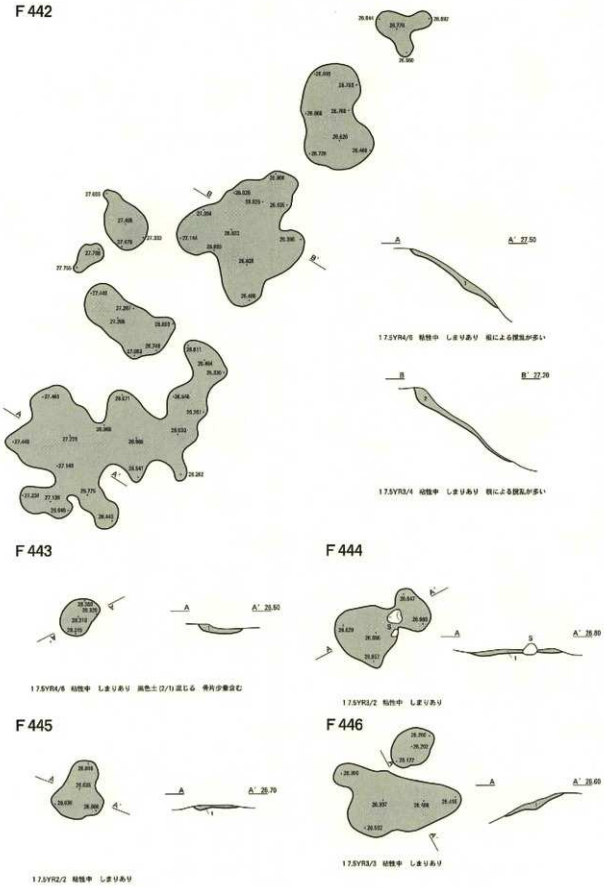
F 440

1 7.5YR2/1 粘性中 しまりあり 骨片含む

F 441

1 7.5YR3/3 粘性中 しまりあり

図Ⅳ－133 F 432～441 平面図・断面図

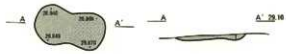


図Ⅳ－134 F 442～446 平面図・断面図

F 447

1 7.5YR4/6 褐強中 しまりあり パミス(lapilli)含む

F 448



1 7.5YR3/2 黒強中 しまりあり

F 449

1 7.5YR2/1 黒強中 しまりあり

F 450

1 7.5YR4/4 褐強中 しまりあり

F 451

1 7.5YR6/4 明色褐強土 粘性あり ややしまる 炭粒混じり

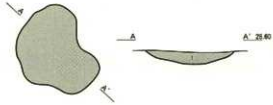
F 452

1 7.5YR2/1 黒強中 しまりあり

F 453

1 7.5YR6/4 暗明色褐強土 粘性あり しまりなし

F 454



1 7.5YR6/6 明褐色褐埴土 粘性あり しまる

図Ⅳ－135 F 447～454平面図・断面図

報告書抄録

ふ り が な	えにわし　にししままつ２いせき
書　　名	恵庭市　西島松２遺跡
副　書　名	柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第265集
編 著 者 名	佐藤和維・土肥研晶・柳瀬由佳
編 集 機 関	財団法人　北海道埋蔵文化財センター（http://www.domaibun.or.jp）
所　在　地	〒069-0832　北海道江別市西野幌685-1　Tel.（011）386-3231
発 行 年 月 日	平成21（西暦2010）年３月26日

収録遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
西島松２遺跡	北海道 恵庭市西島松 306・501番地 先河川敷地	01224	A-04-35	42° 54′ 18″	141° 33′ 54″	20050401 ～20071030	19,904㎡	河川改修工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別		主な遺構	主な遺物	特記事項
西島松２遺跡	遺物包含地	縄文時代前期	住居址× 12軒	土器・石器	
		縄文時代後期	住居址× 14軒	土器・石器	
		縄文時代晩期	墓　× 39基 土　坑×814基	土器・石器	
		続縄文時代	住居址× 1軒 土　坑× 76基	土器・石器	
		擦文時代	住居址× 16軒 土　坑× 1基	土器・金属製品	曲げ物が出土
		近　世	墓　× 3基	刀類・マレック	

要　　約

遺跡は恵庭市の西方の柏木川とその支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約28mの低い台地上に位置する。これまでの調査で住居址60軒、土坑1,406基、Tピット６基、焼土454ヵ所、小ピット266ヵ所などの遺構が検出されている。検出された主な遺構は、縄文時代晩期末葉の土坑群で、墓とは別に密集した状況で検出されている。

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第265集

恵庭市　西島松２遺跡

―柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

〔第１分冊　遺構編（１）〕

発行年月日　2010年３月26日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地１

ＴＥＬ（011）386-3231　ＦＡＸ（011）386-3238

印　刷　柏楊印刷株式会社

〒007-0802　札幌市東区東苗穂２条３丁目４番48号

ＴＥＬ（011）789-2377　ＦＡＸ（011）789-2376